

國立臺灣大學文學院日本語文學系

碩士論文

Department of Japanese Language and Literature

College of Liberal Arts

National Taiwan University

Master Thesis

大岡昇平の作品における戦争批判の意味

——『サンホセの聖母』をめぐって——

The Meaning of War Criticism in Shohei Ooka's Work :
Through "Our Lady of San Jose"

林姿瑩

Tzu-Ying Lin

指導教授：太田 登 博士

Advisor: OTA Noboru, Ph.D.

中華民國 100 年 7 月

July, 2011

國立臺灣大學碩士學位論文
口試委員會審定書

大岡昇平の作品における戦争批判の意味

本論文係林姿瑩君 (R97127007) 在國立臺灣大學日本語文學系、
所完成之碩士學位論文，於民國 100 年 6 月 20 日承下列考試委員審查
通過及口試及格，特此證明

口試委員：

(簽名)

(指導教授)

太田 登

邱 若 山

洪 璿 君

系主任、所長

文學院日文系 徐興慶
系主任

(簽名)

謝辭

「得之於人者太多，出之於己者太少。」一直是我深刻的感觸。此論文的完成，正是得力於師長親友等各方的幫助，藉此篇幅，我想表達無盡的感激之情。

感謝指導教授太田登老師。老師在我碩一下學期時甫任教本系，從那時便跟著老師學習，常常親炙老師的諄諄教誨。碩二由於參加日本御茶水女子大學的研究生發表，發表之前老師每週一次聆聽我們的報告；碩三執筆論文期間，老師也固定每月一次，關心我們的進度。而如此關鍵時刻老師仍鼓勵我赴日交換學生，叮嚀我要多增長見聞；雖然常常因為論文進度比其他同學落後、架構與內容還不成樣子，頗為憂心，但卻仍是耐心地從旁予以建議與鼓勵。我能碩士三年順利畢業，全要感謝老師的指導與督促。

同時也要感謝論文審查委員靜宜大學日文系教授邱若山老師與台灣大學日文系教授洪瑟君老師，於論文口試時提供我嶄新的思考方向，點出論文細部問題等等，讓我的視野大開，也讓此論文更臻完善。

另外特別要向交換學生期間的指導教授、大阪大學文學環境論的清水康次老師致上深深的謝意。不僅是論文，老師還教導我許多學習與研究文學的方法，受益斐淺。感謝老師循循善誘的指導，此論文才得以成型且更富深度；而交換學生這一年更是感恩有老師的引領，才能如此充實又彌足珍貴。

在學習日本文學與研究方法的路上，我何其有幸，除了上述幾位恩師之外，還受到許多老師的教誨、指點與啟發。感謝讓我有機會參加日本御茶水女子大學研究生發表會的台大日文系主任徐興慶老師等各位老師們，以及帶領我們赴日出席發表會的范淑文老師，對第一次到日本的我來說，這不僅是個很好得學習機會，也是個難忘的經驗。同時，在此也想向故管聰子老師表達謝意與哀悼之情，在參加發表會期間承蒙老師照顧，而日後老師也特地來校演講，活潑生動的演講內容，至今仍是難以忘懷。

另外，將我引進日本文學研究這個領域的政大日文系教授黃錦容老師、在戰後日本國際關係的問題上，點出不少關鍵性議題的輔大日文系教授何思慎老師，在期中發表時給予不少建議的阪大文學環境論教授平田由美老師、和田章男老師、石割隆喜老師；等等，好多老師我都想一一表達我由衷的感謝之意。

「獨學而無友，則孤陋而寡聞」，我也何其有幸這一路走來認識許多能互相支持與砥礪的好友們，以及不時給予建議與幫助的學長姐、學弟妹們。其中要特別感謝的是碩班三年跟我一起學習、奮鬥論文的「戰友」——張文聰、顏理謙與曾玉蓉等同學們，大家一起討論問題一起煩惱論文，讓我在埋首論文時也不覺孤單無助；尤其是戴政宇同學，在苦悶的日子仍不忘為大家帶來歡樂。也要謝謝呂佳蓉與莊幃婷等大學時代的好友們，總是在我身旁不時地給予加油聲，也是我最佳的「諮商師」。還要謝謝曾經同窗一年的「戰友」政大日文系碩士班蕭毓親同學，她的任勞任怨、開朗堅毅的人格特質，即使是現在仍一直激勵著我，要學著更正向地面對問題，不能退縮。而在台大圖書館尚未購入大岡昇平全集之前，我常去

輔仁大學圖書館叨擾，感謝當時輔大日文系碩士班林京右同學多方協助。

此外，謝謝總是耐心細心地為我解惑日語相關問題的麻子軒、葉秉杰；給我許多過來人建議的高啟豪、林蕙如等台大、政大日文系的前輩們，以及一直鼎力支持我的盧威辰、董崇驊等學弟妹們。感謝有你們，讓我的碩士三年多采多姿，能快樂地徜徉於學習與研究的生活中。

一年的交換學生生活，雖是匆促短暫，隻身海外，其間得力於許多人的幫助與照顧，在此我也想對他們表達謝意。感謝一同出席清水老師研究室的諸位，張杭萍、曾嶸等比較文學研究室的前輩們，不僅在論文上給予許多建議，也扮演了學術研究優良的學習楷模；而文學環境論的藤本佳弓、李慧珏等學弟妹、比較文學的學妹山本麻紗子，總是給予最大的支持與鼓勵，是我在大阪大學學習的最佳良伴。另外日本文學研究室的莊千慧、田泉等前輩們，文學環境論的大倉嶺宏、Ian Garlington、Rouli Esther、水田博子等同學，感謝他們的照顧。另一方面，要謝謝一起至阪大交換的葉曙萱等台大日文系的學弟妹們，阪大台灣留學生會的陳建志等留學生們，以及半崎智惠美等吹田市國際交流協會、千里國際友好會諸位，多虧他們，我在日本的生活不僅有了照應，也充滿許多難忘的回憶。

提筆至此，深切體會到自己不僅蒙受這麼多老師和友人的照顧與幫助，也很感恩自己身處良好的學習與研究的環境。感謝台大日文系系辦以及台灣大學提供各種資源，讓我能順利在此完成學業。而大阪大學文學動態論事務室、文學環境論研究室、阪大圖書館等各單位，也不吝提供我各種幫助，實是感激不盡。

而最要感恩的是我有家人的支持。即使他們不懂「論文」與「研究」為何、常誤以為「碩士」就像高中大學上課考試交報告，卻仍是默默地在背後支持著我，尤其是我辭去打工赴日交換的那一年，無論是物質上還是心靈上，都讓我無後顧之憂、能安心專心於論文，在此也要感謝二叔叔與奶奶，他們都是我最堅強的後盾、永遠的靠山！

最後，謝謝大學時代的友人張淙哲幫我潤飾中文、阪大文學動態論的 Laura Fumiko Keehn 協助英文摘要的完成、以及佐々木俊之、藤本佳弓、鈴木健史等人對於日文文章方面給予修改和建議。全力以赴想完成一篇好的論文，但我想此論文尚有許多疏漏及未盡完善之處。

我何德何能又何其有幸，能獲得眾多師長親友們的幫助與照顧，多虧有你們，本論文才能順利完成。感激感恩之情，溢於言表，筆墨難容。「因為需要感謝的人太多了」，「感謝之情，無由表達，還是謝天罷。」（陳之藩《謝天》）這雖然已是了無新意的一段話，但卻是我現在心情的最佳寫照。感謝大家，也感謝天。

林姿瑩 於大阪南千里
2011年7月25日

謝辞

本論文の作成にあたって強く実感したのは「得之於人者太多，出之於己者太少。」（人より得たもの太多く、己より出るもの太少なし。）（陳之藩「謝天」）ということです。多くの方々にご指導とご協力を頂き、多くの方々にお世話になっており、この場を借りて皆様に感謝の意を申し上げます。

指導教官であり恩師である台湾大学教授太田登先生には、私が修士一年の後期からずっとご指導ご鞭撻を賜りました。定期的にミーティングが行われ、先生には多く貴重なご意見とご指摘を頂きました。太田先生のお蔭で、一年間日本で大阪大学に交換留学し、資料の収集や論文の執筆に専念することができ、順調に三年間で卒業できるようになりました。未熟な私をいつも励まして親切に暖かく見守って下さり、太田先生に心より感謝と敬意を申し上げます。

論文審査の労をお執り下さった静宜大学副教授邱若山先生と台湾大学助理教授洪瑟君先生には、論文の細部にわたりご指摘を頂き、さらに斬新な視野を示し、多く示唆に富んだご意見賜りました。審査委員の方々に厚く御礼申し上げます。

交換留学の期間において指導教官である大阪大学教授清水康次先生には、論文に関して詳細なご示唆と親切で具体的にご指導を頂き、文学の研究方法を教えて頂きました。先生のお蔭で論文の形ができるようになり、内容もより深くなりました。浅学非才な私をお導き下さり、清水先生に心より深い感謝の意を申し上げます。

また、日本御茶ノ水女子大学で開催された「第4回国際日本学コンソーシアム」に出席する機会を頂きました、徐興慶主任をはじめ台湾大学日本語学科の先生方と引率して下さいました范淑文先生に感謝申し上げます。当時御茶ノ水大学教授を務めておいででした故菅聡子先生には、コンソーシアムから半年後のご来校の折、大変面白い講演とご助言頂きました。厚く感謝の意を申し上げると共にご冥福をお祈り申し上げます。

そして、日本文学に関心を持たせて頂き研究の態度などについて大きな刺激賜りました政治大学教授黄錦容先生、戦後日本の国際関係について貴重なヒントを頂きました輔仁大学教授何思慎先生、中間発表会の時に論文に関して多くご意見を頂きました大阪大学教授平田由美先生、和田章男先生、石割隆喜先生に感謝申し上げます。大学時代以来多くの先生方にご指導賜り、日本文学や文学研究について色々学ばせて頂き、本当に感謝の気持ちあるのみです。

「独学而無友、則孤陋而寡聞」（独学にして友無ければ則ち孤陋にして寡聞なり）とあるように、修士三年間で多く良い仲間達にも恵まれていました。一緒に勉強したり論文に悩んだりしてきた、台湾大学クラスメートで大事な「戦友」である張文聰さん、顔理謙さん、曾玉蓉さん等、常に面白い話を聞かせて頂いた戴政宇さんに感謝申し上げます。また、いつも応援し悩みや文句を聞いて下さった大学時代の親友の呂佳蓉さんと莊幃婷さん、台湾大学が大岡昇平全集を購入する前に輔仁大学図書館をお邪魔致しました時、かなりのご協力を頂いた輔仁大学修士課程の林京右さんに感謝申し上げます。さらに、かつて政治大学で一年間一緒に勉強していた日本語学科修士課程の蕭毓親さんにもこの場で感謝の意を申

上げたいと存じます。蕭さんの辛抱強く前向きで楽観的な性格でいつも私を激励し、お蔭で私はより頑張っていけるようになりました。

そのほか、日本語の文法や表現に関して常に教えて頂きました麻子軒先輩と葉秉杰先輩、研究の先輩として多くのご助言賜りました高啓豪先輩と林蕙如先輩、なおいつも応援して協力下さった後輩の董崇驊さん、盧威辰さん等、台湾大学と政治大学の先輩達と後輩達と友達にこの場で厚く御礼申し上げます。

大阪大学では、清水先生のゼミと一緒に参加していた比較文学研究室先輩の張杭萍さん、曾嶸さん、後輩の山本麻紗子さん等、文学環境論研究室後輩の藤本佳弓さん、李慧珏さん等に感謝申し上げます。発表に関してご意見、ご指摘を頂き、文学や研究をめぐって活発な議論の中で大変勉強させて頂きました。そして、日本文学研究室の莊千慧先輩、田泉先輩等、文学環境論研究室の大倉嶺宏さん、Ian Garlington さん、Rouli Esther さん、水田博子さん等に、この一年間いろいろと大変お世話になっており、ここでも御礼を申し上げたく存じます。一方、葉曙萱さんをはじめ一緒に大阪大学に交換留学した台湾大学の後輩達、陳建志さんをはじめ阪大台湾人留学生会の皆様、半崎智恵美さんをはじめ吹田市国際交流協会と千里国際友好会の皆様に感謝申し上げます。皆様に生活の応援などを多く頂き、お世話になっておりました。皆様のお蔭で良い思い出を残すことができました。

私は本当に大変良い環境に恵まれていると存じております。ここでも台湾大学日本語学科事務室の皆様、豊かな資源を提供してくれた台湾大学側、また今になっても私の「実家」のような政治大学日本語学科の皆様に、感謝の意を申し上げます。さらに、多くの面においてサポートして頂いた大阪大学側及び文学動態論事務室の皆様にも御礼申し上げます。

いつも力強く支えてくれた家族及び叔父と祖母に心からの謝意を申し上げます。「論文」や「研究」とは何かを知らず、「修士課程」とは高校や大学と同じように授業と試験を受けてレポートを提出すれば卒業できると誤解しておりながらも、依然としてわがままな私を暖かく見守って支援して下さいました。特に交換留学の一年間では、安心して論文に専念できる生活を送らせて頂きました。

最後に、中国語の文章の推敲にご協力下さった大学時代友人の張淙哲さん、英語の要旨に関して協力して下さいました阪大文学環境論の Laura Fumiko Keehn さん、日本語の文章をチェックして下さいました佐々木俊之さん、藤本佳弓さん、鈴木健史さんに、感謝申し上げます。良い論文を書き上げようと頑張ってきましたが、まだまだ不備な点が多くあると存じております。

このように大変恵まれている私は実に幸せです。拙論の完成は皆様のお蔭です。台湾では言い古された言葉ですが、「感謝しなければならない人々が多すぎて」、「感謝の気持ちは、言い表しきれないので、天に感謝しよう。」という、誠に陳之藩氏が「謝天」一文で述べられているとおりです。どれだけ感謝しても感謝しきれない気持ちで一杯です。

2011年7月25日 大阪南千里にて

林 姿瑩

大岡昇平作品中的戰爭批判——論《聖荷西的聖母》¹——

摘要

大岡昇平（1909-1988）是日本戰後文學的推手之一，一般歸類為第二次戰後派作家，其二戰時被徵召入伍，駐守菲律賓民都洛島的經驗，成為日後他戰爭小說創作的題材，如《俘虜記》（創元社，1948）《野火》（創元社，1952）《萊特戰記》（中央公論社，1971）等，皆廣為知悉與研究。然而戰爭短篇小說集《聖荷西的聖母》（作品社，1950）至今仍是乏人問津，故本論聚焦於此書，分析其主題與大岡昇平戰爭小說的批判性，以確立《聖荷西的聖母》的文學意義與價值。

首先考察《聖荷西的聖母》的成立與改稿的過程，從中可窺見復員後作家充滿強烈的表現欲望。各個短篇的改稿並非僅止於文句修飾，其中更呈現出大岡對文章表現精確度的追求，以及對於人物心理或人物描寫的執著。對大岡而言，戰爭小說的創作不是因為文人趣味、自我表現、自我滿足或自我慰藉，而是透過小說有意圖地向讀者傳達自己的思想，並字斟句酌地衡量是否準確表達。

另一方面，《聖荷西的聖母》可說是作者發問以及自我解答的場所，每篇的背後都藏有作者對過去戰爭經驗的各種疑問或問題意識，從每一篇都可看出作者尋找答案、嘗試說明與描述的痕跡。正因如此，每篇作品各異其趣，整體呈現多樣性格集合體的風貌，而這些發問正是作家最根本的問題意識，也是作家創作的本質所在。《聖荷西的聖母》還有一特殊之處，即雖被歸類於短篇小說集，其多樣化的小說性格異於長篇小說、系列小說或短篇連環小說，但每篇卻又圍繞著戰爭此大主題以及作家的戰爭經驗，因此也和一般大雜燴式的短篇集迥異。

和大岡其他戰爭小說相比，《俘虜記》以敘述俘虜收容所中俘虜們的生態，與其墮落的樣貌為主，偏紀錄風格；《野火》則是描述戰爭末期潰不成軍的日本軍，一位一等兵戰場徘徊，面臨極度孤獨與飢餓的狀態，屬虛構的作品；晚幾年出版的《萊特戰記》則是在龐大的戰史、作戰資料之上所完成的巨作。各個名作的性質迥然不同，而《聖荷西的聖母》更是卓犖不群，自成一格。

《聖荷西的聖母》中，大岡昇平戰爭批判的內容涵蓋各種層面，如自我批判、自我認識、從「生物學情感」的立場對日本軍部與天皇制的批判等，並非盲目地自我主張，一味地抨擊戰爭之非、國家之錯；同時，也能感受到作者的批判中深藏著某種複雜或一言難盡的心情。據此，《聖荷西的聖母》在大岡的戰爭小說中的重要性自是不言而喻。而復員後的大岡昇平，終其一生對戰爭議題的關心不減，對戰爭批判的態度也絲毫不變，這樣的作家實為稀少，值得給予高度關注。

關鍵詞：戰爭批判、改稿、幸福、發問、心理描寫、戰死與生還、偶然與必然

¹ 《聖荷西的聖母》之書名為筆者翻譯。日文原文為「サンホセの聖母」，「サンホセ」是菲律賓民都洛島的一個城市，叫「San Jose」，中文多譯成「聖荷西」「聖約瑟」「聖何塞」等。

The Meaning of War Criticism in Shohei Ooka's Work :
Through "Our Lady of San Jose"

Abstract

The writer Shohei Ooka's (1909-1988) belonged to a group of postwar writers, and he participated in World War II as a soldier. He was stationed in San Jose, on Mindoro island in the Philippines. Using his war experiences, he created many works on the topic of war. Among them, "Taken captive: A Japanese POW's Story" (1948), "Fires on the Plain" (1952), and "A Record of the Battle of Leyte" (1971) are among his best known. However, his short story, "Our Lady of San Jose" (1950) has, up to now, not been deeply examined. To that end, I have focused this paper on "Our Lady of San Jose," studied common themes throughout Shohei Ooka's war novels, and examined the meaning of his war criticism.

I first considered the completion and drafts of "Our Lady of San Jose." From there, Ooka's desire to strongly express himself as a demobilized soldier is revealed. Ooka's drafts were not simply to polish and improve upon his expression, they also held within them a determination for exacting his expression, as well as psychological and character descriptions. For Ooka, creating war novels was not just for fun, or for his own satisfaction, rather it was a medium for him to convey his way of thinking and what he wanted to say to the reader.

Moreover, "Our Lady of San Jose" is a work in which the author is posing a question, and the 12 short stories within each contain the author's questions and awareness of problems. These many questions give "Our Lady of San Jose" its diverse quality, as well as making it a collection of disparate pieces. These questions are the authors own, as well as the essence of the author's creation. Moreover, while it belongs to the "short story collection" genre, "Our Lady of San Jose" actually occupies a unique position somewhere between a full length novel or a novel series and the so-called short story collection.

Shohei Ooka's war criticism as seen through "Our Lady of San Jose" contains many critical aspects, including introspective self-criticism, raw self-awareness, "biological emotional" criticism of the Emperor, etc. The complex mentality that exists there is difficult to express. It is rare for a writer to maintain this interest in war while also keeping his critical stance of war, and I believe he should be acknowledged for this.

Keywords: War criticism, drafts, happiness, questioning, psychological descriptions, death in battle and survival, coincidence and inevitability

要旨

作家大岡昇平（1909-1988）は第二次戦後派に属され、一兵士として第二次世界大戦に参加した。フィリピンのミンドロ島のサンホセで駐屯して、のち米軍の俘虜となった。そうした戦争の体験を生かし、戦争を主題にした作品を多く創作することになった。その中で『俘虜記』（創元社、1948）『野火』（創元社、1952）『レイテ戦記』（中央公論社、1971）などが従来よく知られているが、短編集である『サンホセの聖母』（作品社、1950.6）については、まだ深く検討されていないのが現状である。そのため本論は、『サンホセの聖母』に注目し、大岡昇平の戦争小説の一貫した創作のモチーフを探り、彼の戦争批判の意味を検討した。さらに『サンホセの聖母』の位置づけについても考えてみた。

まず『サンホセの聖母』の成立と改稿について考察を行った。そこから復員した大岡の強烈な表現の欲求が窺える。そして、大岡の改稿は単なる表現を工夫し洗練しようとするためだけではなく、表現の精確さへの追求と〈人間〉に関わる心理描写や人物描写へのこだわりをも潜んでいる。大岡にとって戦争小説の創作は、単なる遊びや自己満足のためではなく、自分の考え方を読者に理解してもらいたい、自分の言いたいことを読者に正確に伝えたいための媒介だといえよう。

また『サンホセの聖母』という作品は作者の問いかけの世界であり、中の12編短編が各々作者の疑問や問題意識を孕んでいる。このような様々な問いかけは『サンホセの聖母』の多種多様な性格という性質をもたらしたのである。これらの問いかけは作家自身の問題であり、作家の創作の本質ともいえる。それに、短編集のジャンルに属するが、実際には『サンホセの聖母』は長編小説または連作作品集と、所謂一般的な短編集の間に位置づけられるという特殊な短編集である。

『野火』や『俘虜記』と比べてみることによって、同じ創作の素材を同時に違った作品で使うのは大岡の戦争小説の一つの特色だとわかる。『俘虜記』は俘虜収容所において俘虜たちの生態を描いた作品であり、墮落していった囚人の記録とも言える。『野火』はレイテ島の戦場で彷徨って極度の孤独と飢えに遭う兵士が狂人になるという物語であり、フィクションである。同じ戦争体験を生かして似た素材で書かれた作品群とはいえ、作者の創作方法と執筆態度の違いで、作品の内容や性質はかなり異なっている。『サンホセの聖母』は独自の作品世界を呈しており、大岡の創作営為をも明確にしてくれるといえる。

『サンホセの聖母』からみる大岡昇平の戦争批判をいうと、内省的自己批判と非情な自己認識や、「生物学的な感情」という立場から軍部と天皇制の非への批判など、様々な面からなる批判の内実を持っている。そこにはある種の複雑な心情或いは言いがたいものがある。このような戦争に対する関心及び戦争批判の姿勢を生涯崩さずに持ち続けている作家は稀であり、評価されるべきであると思われる。

キーワード：戦争批判、改稿、幸福、問いかけ、心理描写、戦死と生還、偶然と必然

目次

謝辞	i
謝辞	iii
摘要	v
Abstract	vi
要旨	vii
目次	viii
図表目録	x
凡例	xi
序章	1
一、研究動機と目的	1
二、先行研究	2
三、研究の範囲と方法	6
第一章 『サンホセの聖母』の成立	7
一、大岡昇平における<戦後>の意味	7
二、初出から単行本へ	11
1、初出についての経緯	11
2、単行本『サンホセの聖母』の成立	15
2・1、成立経緯	15
2・2、単行本の題名	18
三、改稿について	21
1、作者の編集意識	22
1・1、章の配列と題名	23
1・2、「出征」「比島に着いた補充兵」「海上にて」の冒頭	24
2、記述や表現の工夫	25
2・1、情報の修正	25
2・1・1、日付・時間・数字	25
2・1・2、地理・地名・距離	26
2・1・3、固有名詞とその他	27
2・2、僚友たちの姿	29
2・3、フィリッピンに関する描写	32
2・3・1、戦場の住民の姿	33
2・3・2、兵士と住民との交流	34
2・3・3、フィリピンの風景	34
3、批判性の増強	36

3・1、戦争・国家・軍部への批判.....	36
3・2、軍隊への批判.....	37
3・3、内省的自己批判.....	39
4、感情にかかわる改変.....	40
4・1、欠乏のある現実に対する心理表現.....	40
4・2、死に臨んだ感覚.....	41
4・3、緊張感と恐怖感の描写.....	43
4・4、妻への愛情の表現.....	44
5、幸福の意識.....	45
四、結び.....	47
第二章 『サンホセの聖母』の考察.....	48
一、短編集としての構成.....	48
二、個々の短編の内容の多様性.....	51
1、死地に向っていく「私」の心理変化.....	51
1・1、出征という事実に蔽われる感情——「出征」.....	51
1・2、輸送船上の不安と苦痛——「海上にて」.....	53
1・3、戦地で感じ取った幸福感と淋しさ——「比島に着いた補充兵」.....	55
2、より戦闘に近い状況における心理状態——「襲撃」「西矢隊奮戦」.....	57
3、より戦闘に遠い状況.....	61
3・1、俘虜をめぐる駐屯生活の一面——「俘虜逃亡」.....	61
3・2、増幅される僚友のエゴイズム——「暗号手」「食慾について」.....	62
3・3、事実に決定される「私」の心理——「靴の話」.....	64
4、戦地の風景——「サンホセの聖母」「ミンドロ島誌」.....	66
5、俘虜の敗戦——「八月十日」.....	68
三、全体を一貫するモチーフ.....	71
1、「生還」に対する疑問.....	71
1・1、死の必然性.....	71
1・2、「私」の生還の偶然.....	72
1・3、僚友の死の意味.....	74
2、幸福のあり方.....	78
2・1、幸か不幸かへの関心.....	78
2・2、「倖せ」について.....	79
3、批判の内実.....	80
3・1、反抗しなかった「私」.....	80
3・2、軍部・天皇制への批判.....	82
3・3、戦後社会への視線.....	86
四、結び.....	88

第三章 『野火』との関連性.....	89
一、死の予感と生への執着.....	90
二、孤独な敗兵の矛盾した社会的感情.....	92
1・犬——人間への恐怖と国家への批判.....	92
2・屍体の描写——「人間」と「物体」.....	93
三、神と狂気.....	96
四、『俘虜記』との関連性の考察.....	98
五、結び.....	100
終章.....	101
一、『サンホセの聖母』という作者の問いかけの世界.....	101
1、問いかけの内実.....	101
2、大岡昇平の創作の本質.....	102
二、『サンホセの聖母』の位置づけ——特殊性と重要性.....	103
1、書き手としての大岡昇平の姿.....	103
2、大岡昇平の戦争批判の意味.....	104
三、今後の課題.....	106
参考文献.....	108
付録1 改稿対照表.....	110
付録2 『サンホセの聖母』と『野火』との対照表.....	143

図表目録

表1・『サンホセの聖母』12編の初出.....	11
表2・単行本一覧（1948年～1952年）.....	15
表3・戦記物・戦場物を収録した作品.....	17
表4・『大岡昇平全集』（筑摩書房）の『サンホセの聖母』12編の底本一覧.....	21
表5・『サンホセの聖母』の目次.....	23
表6・「比島に着いた補充兵」の初出と単行本の表記対照表.....	28

凡例

- 1、大岡昇平の本文の引用は特に記さない限り『大岡昇平全集〈全二四巻〉』（筑摩書房、1992－2003年）に拠った。（以下『全集』と略）また、『全集』第二巻からテキストとして引用した文章の後に括弧で出処の頁数を表した。
- 2、初出と単行本、及び文献の引用文は新漢字で表記した。誌名・単行本名・出版社名等には新字を用いた。
- 3、引用部の傍線・波線はすべて引用者が付したものである。引用部の傍点やルビは、特に記さないかぎり、原文のものである。
- 4、敬称略。
- 5、記号の説明：

* 『』 → 書名	* ____ → 強調する箇所。改稿の段落においては改稿された箇所。
* 「」 → 作品名と引用文	* ~~~~~ → 論文中説明の便宜で使う。削除された箇所。
* [] → 作品の中の章名	* / → 引用文中の改行
* <> → キーワード	* (略) → 引用文中の省略
* 傍点 → 原作者	* × → 単行本もしくは全集で長い文章が削除された箇所。
* ママ → 誤植や不自然な文章と思われる箇所	

序章

一、研究動機と目的

大岡昇平（1909-1988）はスダンダリアンとして知られ、一人の会社員として生活を営んでいたが、1944年第二次世界大戦の末期に三ヶ月の教育召集を終え、すぐ臨時召集され補充兵としてフィリピン戦場に送られた。約半年の駐屯生活の後、米軍の来襲で捕えられ俘虜収容所で敗戦を迎えた。1945年12月に復員し、作家として新たに出発した。自らの従軍の経験に基づいて戦争に関する作品を数多く執筆しており、『俘虜記』¹『野火』²『武蔵野夫人』³といった作品が相次いで発表された。『俘虜記』は俘虜収容所において主人公自身をも含めた俘虜たちを観察し、その生態を描いた作品であり、墮落していった囚人の記録とも言える。それに対して『野火』は戦場で彷徨って極度の孤独と飢えに遭う兵士が狂人になるという物語が描かれたフィクションである。『武蔵野夫人』は武蔵野の自然を背景にして一人の婦人とその復員してきた従弟との恋を中心に描いた恋愛小説である。この三作はそれぞれ異なった主題と方法で書かれ、評価の高い作品である。従来の研究もこの三作を中心に盛んに行われてきた。

しかしその三作に対し、発表・創作時間がほぼ同時期である『サンホセの聖母』⁴については、従来の研究ではまだ深く検討されていないのが現状である。『サンホセの聖母』は目次からわかるように「出征」から始まる一連の戦記物であり、兵士にまつわる戦場の出来事を各方面から描いている。短編の戦記物とはいえ、戦争を経験し作家として再び出発した大岡にとって、そこには彼の一貫した創作のモチーフが潜んでいると思われる。それに、『サンホセの聖母』に注目することによって、前述の三作を結びつけるきっかけは、この作品から見つけ出せるのではないかと考えられる。大岡昇平の初期創作活動においてその創作の本質に迫っていくのが本研究の目的の一つである。さらに、『サンホセの聖母』の位置づけについても考えてみたい。

¹ 『俘虜記』（創元社、1948.12）は最初出版した単行本であり、後『続俘虜記』（創元社、1949.12）と『新しき俘虜と古き俘虜』（創元社、1951.4）がある。前記の三冊を纏まって出版されたのは『（合本）俘虜記』（創元社、1952.12）である。

² 『野火』（創元社、1952.2）。

³ 『武蔵野夫人』（大日本雄弁会講談社、1950.11）。

⁴ 『サンホセの聖母』（作品社、1950.6）。収録した短編は「出征」「海上にて」「比島に着いた補充兵」「サンホセの聖母」「ミンドロ島誌」「暗号手」「襲撃」「俘虜逃亡」「西矢隊奮戦」「食欲について」「靴の話」「八月十日」がある。

二、先行研究

『サンホセの聖母』またはその収録している 12 編に関する先行研究は今日までまだ少ない。12 編の中で「出征」一文が比較的によく検討されている。同時代評では河盛好蔵 (1950) の文芸時評がある。

「新人では大岡昇平「出征」(新潮)に感心した。これは戦争の末期に三十男が一兵卒として出征したときの心理と行動を描いたものであるが、その正確で、要所々々をあやまたずおさえてゆく記述は、メチエの高さもさることながら、この作者が人生経験を粗末にせず、常に烈しく、生きてゆく意志の強さを示すもので、そう快な印象を受けた。」⁵

そして、二ヵ月後の中島健蔵⁶ (1950) は短評で、「大岡の記録の特質は、動乱の表現の中における、一種の冷静さにある」ことと、「単なる記録でもなく、もちろん単なる虚構でもなく、文学としての資格を失うことがない」ことを述べ、それが「ストイックな作家」の「独特のもの」であることを指摘している。「出征」の一文において、「記録」と「虚構」の間にある大岡の文体と動乱の描写の中で冷静さを潜んだ表現が見られる。

「もう二度と会えないかもわからないのに、なぜ妻子を呼ぼうとしなかつたか。これは明かに万人共通の心理ではあるまい。主人公の特別な心理である。しかも、その特別な心理の根拠が、作家によつて、十分に描き出されているのである。(中略)このような別離に涙を流すことはふしぎではない。しかし、このような場合の涙を、十分に書くことは、実に困難なのである。」

また、上記の引用文のように、氏は大岡の「心理」描写に着目し、「心理」描写の困難さがあるにも拘らず、大岡はその「心理の根拠」から「十分に描き出されている」ことを評価している。氏の短評は大岡の文体と表現の特色について良いヒントを与えてくれると思われる。しかし、上記の二論はともにより具体的な例証が要求され、論証を深めていく余地がある。

近年佐藤洋一は小説教材の「言語技術教育」の立場から大岡昇平の「靴の話」「暗号手」「出征」「襲撃」を細かく考察した論文がある⁷。氏は大岡の初期作品群を「戦友の肖像＝<鎮魂>型」・「自己の体験記録＝<自己探求>型」・「外部世界(環境)の記録＝<支

⁵ 河盛好蔵「鮮やかな志賀氏の作品・文芸時評」『朝日新聞』1950.1.21、4版。

⁶ 中島健蔵「大岡昇平「出征」——新潮新年号所載〔作品暦〕——」『人間』5-3、1950.3、p.92。

⁷ 佐藤洋一「大岡昇平『靴の話』の言語技術 —メタフィクション構造の文体—」『愛知教育大学大学院国語研究』5、1997.3。「大岡昇平『出征』の文体 —初期作品の系譜と方法—」『愛知教育大学大学院国語研究』6、1998.3。「大岡昇平『暗号手』の方法 —初期作品の系譜・<死者>という分身—」『国語国文学報』7、1999.3。「大岡昇平・初期作品論(上)『襲撃』の構造と文体をめぐって(特集 文学と言葉の間)」『言語と文芸』116、1999.11、「大岡昇平・初期作品論(下)『襲撃』の構造と文体をめぐって」『言語と文芸』117、2000.11。

配する力>探求型」という三つの系列に分けており、さらに方法的な意識や文体の面から、それぞれ以下の三つに分類する。「A…戦争体験の中の『事実』や象徴化による批評」・「B…『国家』に支配される『個人』の真相の真実——狂気や感覚の錯誤、意識と無意識の交錯の文体等——」・「C…個人を動かす『眼に見えない力』の構造的把握と描写」である⁸。こうした作品の分類の上で、教材の立場から作品の場面構成と用いられた創作の技術を分析するという方法は、この四つの論文で一貫している。しかし、「出征」と「襲撃」という二作は三つの分類で例として見られ、こうしたまとめかたが適切であるかどうか、またその意味が果たしてあるかどうかは疑問に思わざるを得ない。小説教材の「言語技術教育」の考察方向を異にし、本修士論文は各作品のモチーフに着目し、『サンホセの聖母』の収録している12編から見られる作者の創作のモチーフを検討する方向にしたい。

また、尹慶一（2010）は「西矢隊始末記」と『サンホセの聖母』の関連に注目し、二作の文体及びエクリチュールを考察した。「公文書の表記方式」⁹をとっている「西矢隊始末記」に対し、「出征」を例として取り上げ、「書き手の『私』の想起のプロセスをとり入れて、書き手の現在の時間と戦場における作中人物の『私』の時間との間を往復させる文体的な特徴が『サンホセの聖母』を「西矢隊始末記」と区別する差異性を生み出したのである」¹⁰と指摘している。さらに『サンホセの聖母』のこうしたテキストの働きについても述べている。

「書き手と作中人物の間を往復する語り手の巧みな語りによって、『サンホセの聖母』というテキストは、「私」の戦場体験の再現だけでなく、「偶然」に満ちた戦中の時間を物語る「私」の想起のプロセスそのものとなって読者に読まれるであろう。そういった語り方によるからこそ、（中略）「私」の経験が再現されると同時に、（中略）大多数の僚友と部隊員は戦地で死んだのに、なぜ「私」は「俘虜」になって「生還」を遂げられたかという問いをはじめ、（中略）様々な問いに対する「私」の思考過程が語られたのではないだろうか。」

「『サンホセの聖母』で「偶然」としてしか語り得なかった作者は、彼らの死を説明すると同時に自分の生を肯定するために、そこから脱却し、必然性を取り戻すことを望んだかもしれない。」¹¹

確かに『サンホセの聖母』において「私」が過去戦場での出来事に対して絶えず問いかけているのはこの作品の特色である。しかし、『サンホセの聖母』は単に「私」の想起のプロセスや思考過程に止まらず、戦場及び生死の狭間に置かれた人間の姿までをも積極的に探究しようとするのではないかと考えられる。

⁸ 同注7の「大岡昇平・初期作品論(上)『襲撃』の構造と文体をめぐって(特集 文学と言葉の間)」一文。

⁹ 尹慶一(ヨンキュンジ)「生還者のエクリチュール—大岡昇平「西矢隊始末記」と『サンホセの聖母』の文体分析」『言語態』10、2010。p.84。

¹⁰ 同注9。p.92。

¹¹ 同注9。pp.92, 93。

一方、大岡昇平の作家・作品全体における＜批判＞や＜批評性＞について、共感できる先行研究として以下の二氏の説を取り上げる。まず大江健三郎（1979）は「戦後の被占領時代の日本を見る眼として、大岡昇平のあり方は根本的に批評的だったということができよう」と指摘している。

「かつて僕（筆者注：大江）は、大岡昇平の文学の同時代に卓越した新しさについて、それがロシア・フォルマリストの用語をもちいれば、ジャンルの「異化」にもとづくということ进行分析した。単純なかたちにしてそれをくりかえせば、大岡昇平は同時代がひとつの小説のジャンルの概念を、すっかり別のものにつくりかえるかたちで、その創作活動のいちいちの時期の小説を書いてきたのである。それは別の角度から見れば、かれが同時代の通念に対してつねに批評的な、根本的姿勢を維持しつづけたことを意味する。」

「大岡昇平は、かれ自身をもふくむあらゆる人間に対しつねに批評的だが、しかもそれは、やはりつねに励ましにみちている批評性なのでもあった。」¹²

大江の説によると、大岡昇平は単なる戦争に対して批判するだけではなく、同時代を見詰めて、「同時代の通念」と「あらゆる人間に対しつねに批評的」であるスタンスを取ることがわかる。しかも、それはシニスムのような批評性ではなく、「励ましにみちている」という人間に対する肯定的で情熱的で前向きな批評性だといえる。

また別の面から大岡の批判性を述べている説として、山城三郎（1997）は以下のように述べている。

「兵士は何を奪われ何がなにかというと、ないものだらけなのです。（中略）

そういう経験をされた方は、そういうことに対する腹立ちがあると同時に、そういうふうになっていかないうような社会にということ、人一倍お感じになると思います。そういう意味では、絶対的な体制とか、絶対的な権威、いずれにしろ権威というものに対してきわめて批判的、否定的になります。それからいろいろな自由をどうしても守りたい、あるいは個性を守りたい、そういう気持ちが非常に強くなってくる。人一倍強くなるということが言えると思います。（中略）

でも、大岡さんは最後の最後まで批判的、変わらない兵士だったと思います。とにかく大岡さんはそういう意味では、失ったもの、奪われたものの巨大さに終生歯噛みをしながら、そういうものを憎みながら生き通した人だ、と私は感じています。」¹³

大江と山城の説は大岡昇平の根本的に批評的なあり方という指摘が同じである。大江の「人

¹² 大江健三郎「特集 戦後世界につらぬく批評性」『解釈と鑑賞』1979.4。pp.34-35, 37。

¹³ 山城三郎「一兵士に徹した生涯——「成城だより」など——」（中野孝次編『大岡昇平の仕事』岩波書店、1997.3）pp.75-76。

間に対しつねに批評的」ということに対し、山城は自由や個性を奪う国家や組織や体制と
いったあらゆる権威を有しているものに反することという大岡昇平の批判的なところで
具体的に指摘している。それだけではなく、「最後の最後まで批判的、変らない兵士」とあ
るように、戦争を忘れた健忘症の人々と対照的に、大岡は自分が兵士であったことを忘れ
ず、戦争体験を忘れずに、戦争を再び起こさないように、時代を見詰めて批判し続けると
わかる。

しかし、これらの説は『サンホセの聖母』や当時の大岡の創作活動についての具体的な
解明にはなっていない。そのためこの二説に従いながら、『サンホセの聖母』を探求してい
きたい。



三、研究の範囲と方法

まず第一章では、復員直後大岡昇平の『俘虜記』『野火』『武蔵野夫人』といった初期創作の流れの中で、『サンホセの聖母』の初出から単行本までの成立経緯をまとめる。それに各作品の初出と単行本と『全集』を相互に対照し、改稿の内容をまとめることを通して、大岡の創作意図と方法を検討したい。そこで同じ時期に書かれた作品群にも拘らず、『サンホセの聖母』が重視されなかった原因を追究していきたい。

続いて第二章で、先行研究で検討してきたように『サンホセの聖母』における作者の心理描写や問いかけや大岡の批評性といった点を考えながら、第一章で検討した『サンホセの聖母』の創作意図や方法を踏まえて、その作品の特色と全体像及びそれを貫いたモチーフを考察したい。『サンホセの聖母』という作品の世界で何がいえるのかを問うて試みる。

それを押さえた上で、第三章で同じ戦場の出来事を主題にして描いた『野火』を取り入れて、『サンホセの聖母』と対照してみる。そこで、作者の創作意図や主題がどのような相違点があるのかについて検討する。こうして、『サンホセの聖母』という作品は作家の初期創作系譜における位置付けを考えてみたい。



第一章 『サンホセの聖母』の成立

一、大岡昇平における〈戦後〉の意味

戦後、戦争から帰還した大岡昇平の思想や行動を追究する前に、まず戦前の大岡について基礎的に考察したい。以下のように大岡の言説を引用して説明する。

「門司で輸送船の上に乗っちゃったら、戦争についていろいろ考えたこと、戦争とは何か、それまでいろんな戦史なんか読んで考えたことなどが、とにかく自分が死ぬという、このひとつの事実の前に、なんの意味もなくなってしまったということ、これに基づいてぼくは自分の体験を書いてきたわけなんですけどね。」

「何度もいいましたように、ぼくの経歴は、戦争中、軍部が非常に強力な思想統制、刑罰をもつてのぞんできたので、自分としては国内亡命というような形で神戸へ行ってサラリーマンになった。軍部のやり方を冷眼視しながら戦争に関する知識を蓄積することで自分を慰めながらきたんですけど、いざ自分が死地へ積み出されようという時になったら、そんなものはなんにもならなかった。自分でそれを防ぐという行動に出なければならなかったということが、その瞬間になって、実感として出てきたんです。」¹⁴

引用文によると、戦前大岡は実は軍備中の国をずっと見詰めて関心をもっていたとわかる。ところが、「軍部が非常に強力な思想統制、刑罰」が強まってきたため、大岡は国民新聞社を退社し、「国内亡命というような形で神戸へ行ってサラリーマンになった」。つまり、1938年に帝国酸素株式会社に入社すること¹⁵は、従来の文壇・文学の環境と東京を離れることと「国内亡命」を意味するのである。戦争や軍部の思想統制の影響から避けようとする一方、「戦争に関する知識を蓄積することで自分を慰め」ただけで、「自分でそれを防ぐという行動」などはしなかった。そして徴兵された瞬間に、何をしたといってもすべて無意味で、すべて何の役にも立たないことを実感したであろう。こうして大岡は〈すべて無意味〉〈すべて何の役にも立たない〉という認識を抱えて戦争に行ったわけである。ところが、こういう認識と覚悟をしたにもかかわらず、結局生還できたのである。言い換えれば、生還によって、この認識と覚悟がまた翻されたといえる。そのため、この認識も恐らく戦中の大岡と戦後の大岡に大きな影響を与えていたと考えられる。

そして戦場から帰ってきた大岡の状態について、彼の書いた「疎開日記」から窺える。

「「生きている俘虜」を書きあぐみ、私は初めて自分の才能を疑った。今までは、いつ

¹⁴ 大岡昇平『戦争』（岩波文庫、2007.7）。pp.211, 228-229。

¹⁵ 「十月、加藤英倫から日仏合弁の帝国酸素株式会社（中略）への入社を勧められる。（中略）翻訳係として採用される。」「年譜」『全集』第二十三巻。p.631。

も書くことが「出て来ない」のだと思っていた。今は書くことは山ほどあるのに、書けないのである。」（四月二十九日）

「バルザックの「スタンダール論」につけた解説を書き直すつもりだったが、面倒臭くなった。僕の今の状態は他人のことを書くに適していない。告白したい思いで一杯だ。／「狂人日記」を書き出した所以。」（六月二十七日）¹⁶

これは1946年の記事である。当時の発言として「告白したい思いで一杯だ」とあるように、大岡の表現欲求は明白に提示されている。疑いなくそれは自分の戦争体験を書きその体験を告白しようとするところである。ところが、この時期に「私は文体を持っていない」（四月二十七日）¹⁷と述べているように、書きたいしかも書くことが多いのに、自分の「文体」を持っていないことで書けなかった。この時期は大岡が文体を研究する時期であり、書くことを蓄積する時期でもある。そして1948年1月東京に転居して疎開の生活が終わってから、1948年2月「俘虜記」が『文学界』に掲載されることを皮切りに、大岡は活発な文筆生活を営むようになった。即ち、こうした表現欲求で一気に『俘虜記』『野火』『サンホセの聖母』『武蔵野夫人』が相次いで発表された。

「告白したい思い出」をいうと、「疎開日記」の書いてある「狂人日記」で「告白したい」だけではないと思われる。「わが文学を語る」¹⁸という文章で、大岡は「ただ僕が一兵士として経験した比島の敗軍と俘虜生活の記録を書いているだけです。自分の経てきたものが何であったか、その間自分が何者であったか、を確かめるために書いているだけです。」と述べている。つまり、書くことによって戦争に参加した自分を確かめながら、そういう自分をも「告白したい」と考えられる。

一方大岡は「わが主人公——『武蔵野夫人』の「勉」——」という文章で、自分が帰還したばかりの状態を述べている。

「(前略) ぼくは二年兵隊に行つて、社会的な苦勞から解放された生活を送り、すっかり子供にかえつて帰還して来たのでした。(中略)

敗軍の混乱では組織の圧力はこわれぬわけにはゆかないが、その中での個人の身の処し方は、やはり常軌を失している。つまり暴力というものを使い慣れた非人間です。ぼくは敗軍から助かろうとして、どんなバカな工夫しかこらせなかったか、考えてみて、自分でもおかしくなります。」¹⁹

『武蔵野夫人』の勉という人物像について、戦争に行ったことで人間性などが解体された

¹⁶ 大岡昇平「疎開日記」（初出『群像』九月号、1953年9月1日、「私の文学手帖」の題で）『全集』第十四巻。pp.4-5。

¹⁷ 同注16。p.3。

¹⁸ 大岡昇平「わが文学を語る」（初出『夕刊新大阪』第1029号(1948.12.6)から第1030号(1948.12.7)まで。『全集』第十四巻。p.24。

¹⁹ 大岡昇平「わが主人公——『武蔵野夫人』の「勉」——」（初出『読売新聞（朝刊）』第二七五七七号、1953年9月12日、読売新聞社）『全集』第十四巻。pp.166-167。

人間の様子を、この文章で大岡は自分の経験を重なって語っている。それは「常軌を失して」「すっかり子供にかえっ」た「非人間」である。この時の大岡の状態をいうと、「帰還」というよりもむしろまた別の世界に投げ出されたことの感じであろう。

こういう感覚と状態について、大岡はまた「帰還直後の私に、何となく周囲になじめない「乖離感」があった」²⁰と述べている。こういう感じを後にも大岡は何回も繰り返して述べているのである。

「ぼくは、最初から戦争についての、『俘虜記』に書いたようなある程度の主張を持ってましたから、敗けてもヤケになるということはなかったわけけれども、まあ、帰ってきていろんな友達と話していると、やっぱり戦争にいなかった人とはどっか話が合わないところがあるんですね。なんか違和感がある。」²¹

「何となく周囲になじめない「乖離感」と「戦争にいなかった人とはどっか話が合わない」というある種の「違和感」である。大橋巨泉との対談の中で、大岡はさらに死んだ僚友に対するある後ろめたさを述べている。

(大岡)「(前略) 死んじゃった人がいて自分が生きてる。人が死んでわたしが生きてたって、なんの関係もないことですよ。」

(巨泉)「ないですね。」

(大岡)「これがそうじゃないんだなあ。」

(巨泉)「そのへんがわからないんです。たとえば船が沈没して、みんな死んで、ぼくだけ助かったとしても、助かったぼくが悪いんでもない。うしろめたさを感じる必要はないんですね。」

(大岡)「ないはずなんだけれども、実際は何かがある。死んだ人に対する理屈にあわない感情は、日常生活でもあるんじゃないですか。(中略)私はフィリピンのミンドロ島で、マラリアでフラフラになってるところをつかまって俘虜になった。これも偶然だけど、やはり死んだ人に、あるうしろめたさみたいなものがある。

戦後、生残った人たちが、レイテの戦跡慰問団でいく。ぼくもいったんだけれども、その理由は仲間が死んで、自分は生きてる。ふだん一緒にめしを食って、つきあってた人間が、なにかの運の岐れ目でレイテへ行って死んでしまった。運だけれども割切れない感じが残る。自分の仲間がどういうところで死んだのか、それが見たい、そういう気持でいくんです。」²²

²⁰ 大岡昇平『『野火』の意図』（初出『文学界』第七卷十月号、1953年10月1日、文芸春秋新社。）『全集』第十四巻。p.176。

²¹ 同注14。p.188。

²² 大岡昇平・大橋巨泉（対談）「「死地へ向寄せたもの」への怒り」（『週刊朝日』77-6、1972.2.11。「原題は「事実」にうた寄せた兵隊の戦史」）大橋巨泉、週刊朝日編『巨泉の真言勝負 大橋巨泉対談集』1973.5、朝日新聞社。pp.153-154。

こうした<すべて無意味><すべて何の役にも立たない>という認識と、「すっかり子供にかえっ」た感じと、「乖離感」という人と「合わない」感じや「周囲になじめない」感じ、また死んだ僚友に対する「あるうしろめたさみたい」な感じ、「割切れない感じ」を、帰還後の大岡はしみじみ感じていといえる。

そのため、「思い出」を「告白したい」という表現欲求の具体的内容は、単に「思い出」や戦争体験を書きたいだけでなく、過去の自己確認の行為でもある。さらに先述べたように帰還後の自分でもはっきりいえない複雑な感じをも「告白したい」ともいえる。戦争体験者である大岡昇平は一旦文壇から離れたが、戦争を経験したあと完全に一文学者・小説家として生涯を生きていた。それに、「告白したい」とあるように『俘虜記』（1948）から『レイテ戦記』（1971）まで多くの戦争物を書いていた。このように一生涯をもって戦争体験を語り続け、語りつくしていく姿は文学者としての使命感や責任感を強く持ち続けているのみならず、<戦争責任><戦後責任>について大岡なりに反省し或いは批判して考えていたともいえよう。



二、初出から単行本へ

1、初出についての経緯

『サンホセの聖母』は1950年6月作品社により出版され、『俘虜記』（1948.12、創元社）と『続俘虜記』（1949.12、創元社）につぐ大岡昇平の三番目の単独著書である。それは「出征」「海上にて」「比島に着いた補充兵」「サンホセの聖母」「ミンドロ島誌」「暗号手」「襲撃」「俘虜逃亡」「西矢隊奮戦」「食慾について」「靴の話」「八月十日」という12編の短編から成る。表1は12編の初出である。

表1・『サンホセの聖母』12編の初出

題名（発表順）	初出誌	執筆時間 ²³	頁数 ²⁴	枚数 ²⁵
「靴と食慾」	『小説界』一・二月合併号(2-1、1949.2.1) (単行本二編に分割。) pp.70-79	一九四八、十、	06	13
		三十	06	13
「俘虜逃亡」	『週刊朝日』「夏季増刊小説と読物」 (1949.7.1) pp.80-84		08	20
「西矢隊奮戦」	『文学界』八月号(1949.8.1) pp.16-23	四九、六、二〇	11	25
「ミンドロ島誌」	『東北文学』十月号(1949.10.1) pp.10-12		04	09
「比島に着いた 補充兵」	『世界の動き』十月第二号(1949.10.15) pp.38-43		13	28
「海上にて」	『文芸』十二月号(1949.12.1) pp.1-8	四九、九、十	12	27
「サンホセの聖 母」 ²⁶	『文学会議』第8輯(1949.12.30) pp.39-47		13	29
「出征」	『新潮』一月号(1950.1.1) pp.102-116	四九、十、十九	22	49
「暗号手」	『風雪』二月号(1950.2.1) pp.21-30	四九、十二、二	14	31
「八月十日」	『文学界』三月号(1950.3.1) pp.50-59		17	33
「襲撃」	『新小説』五月号(1950.5.1) pp.40-47		10	22

注：太字は枚数のトップ六を表す。

²³ 各初出の文末による。斜線の箇所は初出に書いてないため、未詳である。

²⁴ 『全集』第二巻による。

²⁵ 概略計算である。計算方法：(初出の行数×一行の字数+一行足らずの字数の和)÷400(原稿)=総計。会話文と地の文が同じ計算方法。何行あけの場合なら、「行」を単位として数え、総計を修正する。

²⁶ 「サンホセの聖母」の執筆時間について、『大岡昇平集』第二巻(岩波書店)の解題には「初出末尾に日付記載はないが、『東北文学』の一九四九年十月号に発表の「ミンドロ島誌」より前に書かれた。つまり八月以前の執筆になる。」(池田純溢、p.647)と書いてあるが、詳しく説明されていない。また『大岡昇平全集』第二巻(筑摩書房)によると、「初出誌より先行して、『サンホセの聖母』という同名の作品が『フェニックス』第六号(一九四七年十二月一日、開明社)に発表された。これは、現行「サンホセの聖母」中の章「サンホセの聖母」の異文に当たる。」(吉田瀬生・岩崎努、p.652)とあり、岩波全集の解題がこれを指しているのではないかと考えられる。

まず各短編の内容を簡単に紹介すると、「出征」「海上にて」「比島に着いた補充兵」は主人公が戦地に赴いている時の行軍紀行文であり、「八月十日」は俘虜収容所に入って玉音放送前の八月十日から十五日までの出来事が書かれるものである。その他の作品は主にサンホセでの駐屯生活に関する物語である。「俘虜逃亡」「西矢隊奮戦」「襲撃」は駐屯している時の出来事、「靴の話」「食慾について」「暗号手」は主に僚友を中心として書かれたものである。また、駐屯地の風土と住民に関しては「ミンドロ島誌」「サンホセの聖母」に書かれている。『サンホセの聖母』が出版される前に、その12編は1949年から1950年にかけて初出としてすでに各雑誌に掲載されており、発表誌はそれぞれ異なり、計十誌もある。【表1参照】

初出が発表された当時の雑誌の様相や投稿していた作家の姿といった背景について、初出誌十誌を検討しながら考察する。

「食慾について」と「靴の話」の初出である「靴と食慾」の掲載されている『小説界』（1948.6~1949.12 確認）は『海光』を改題した文芸雑誌である。1948年6月に第1巻第1号「復刊号」として小説界社より発行され、今確認した巻号は1949年12月（2巻6号）までである。2年で計11冊が確認される。裸婦の表紙と挿絵が非常に多い。当時時代風潮として雑誌の裸婦挿絵がブームとなっていたが、この十誌の中で『小説界』は表紙がほぼ裸婦絵のため目立っている。小説、批評、対談、翻訳、読者欄からなる。「靴と食慾」は1949年2巻1号で掲載され、同誌唯一の大岡の作品である。同号に丹羽文雄「部屋」、大仏次郎「火花」、中村八郎「桑門の街」、鈴木信太郎と渡辺一夫の翻訳などがある。

「俘虜逃亡」の掲載されている雑誌は『週刊朝日』（1922.2~）である。総合雑誌、週刊誌であり、1922年2月25日から「旬刊朝日」として創刊され、同年4月2日から週刊となり、今日に至る。大阪朝日新聞社、のち朝日新聞社刊行。「夏季増刊小説と読物」は『週刊朝日』の「別冊特別号」であり、ほぼ年に四冊刊行され、主に小説を掲載する。『週刊朝日』の特色をいうと、総合的・大衆的な性格が強いところである。国内外のニュースを中心に、そのほか文化や文芸の紹介や評論があり、他の九誌と比べて漫画・連載漫画・挿画家の作品が多い。同号に「グラビヤ特集泰西裸体名画集」（福島繁太郎解説）、田村泰次郎「崩れゆく青春」、中村八朗「冷い焰」などがある。

『文学界』、文芸雑誌。1933年10月に創刊され、1944年までは通算119冊。戦後1947年6月に第10巻復刊号として文学界社より再刊（第10巻は恐らく11巻の誤り）、今日に至る。次の号は第1巻第2号となる。評論（書評、座談会）、雑記（随筆）、創作欄（小説、詩歌）、読者欄（時事）からなる。大岡昇平は戦前既にこの雑誌に評論を寄せており、戦後になって評論はもちろん、「西矢隊奮戦」と「八月十日」のほか、「俘虜記」（のち「捉まるまで」改題。2-2、1948.2.1）、「戦友」（3-1、1949.3.1）、「酸素」（1952~1953連載）など、多くの作品を投稿する。戦後五年という期間に限定してみれば、『文学界』は大岡昇平の最も活躍していた舞台だといえるのであろう。

「ミンドロ島誌」を載せた『東北文学』（1946.1~1950.5）は地方の文芸雑誌である。全53

冊、新聞社の河北新報社より発行。1946年1月の創刊号を見ると、船山信一の評論「東北的性格」、「東北文芸協会」の会則と会費に関する記事、宮城・福島・岩手を示している「住所録」という箇所がある。極めて地方の色の濃い雑誌という点が特色である。しかも、創刊号「編集後記」(久坂栄三郎)によると、本誌は「純文学の香り高い雑誌」を目指し、「従来の文学の中央偏在を打破し、東北性格を反映しつつ」という方針が立たれ、かなり中心・東京に対抗する気負いが窺える。大岡が『東北文学』に投稿したのはこの「ミンドロ島誌」一文だけである。このとき1949年10月頃大岡は鎌倉に住んでいた。『東北文学』まで原稿を寄せたのは、大岡の発表の舞台が幅広いと考えられよう。同号には田宮虎彦「自殺未遂」、山沢種樹「虫籠」などがある。

「比島に着いた補充兵」は総合雑誌及び旬刊誌の『世界の動き』(1946.4~1950.8)に掲載される。毎日新聞社より発刊され、1950年9月から継続後誌の『毎日情報』にかわり、月刊として1951年12月まで続く。雑誌内容としては、世界各地のニュースが主であり、殊に政治・経済・社会方面が注目され、それに関する統計表や図や人物写真などが多い。そのほか文化文芸の紹介、文学評論、小説などもある。海外のニュースが圧倒的であることや世界情勢についての細かい解説といった点は、同じ総合雑誌である『週刊朝日』と異なり、最も特色のあるところであろう。同号は「世界の旋風チトイズム」特集号で、「東欧の肅清工作」「金融会談とボンド切下」などの記事がある一方、「アメリカの新戯曲」「日本学界新風景=国文学」などの紹介文もある。

「海上にて」を掲載した『文芸』は文芸雑誌で、「戦時中唯一の文芸雑誌として敗戦を迎えた」²⁷という。1933年11月から1944年7月までは改造社発行。全129冊。1944年11月に復刊、今日に至る。河出書房(現河出書房新社)発行。創作(小説、戯曲、詩歌)評論が雑誌の内容の中心である。大岡の「歩哨の眼について」(1950.11)という短編と評論も掲載され、頻繁に寄稿する雑誌の一つである。同号に中村真一郎「苦しみの河(三幕)」、伊藤永之介「調停室」のほか、評論が多い。

「サンホセの聖母」を掲載した『文学会議』(1947.4~1950.7)は不定期刊の文芸雑誌である。全九冊、毎号特集形式を取る。大日本雄辯会講談社により発行。評論、座談会、小説、詩歌からなる。「サンホセの聖母」の掲載された第8輯は何の特集か表紙には書いてないが、目次を見ると「正宗白鳥論」の特集であろう。大岡が『文学会議』に寄稿したのは「サンホセの聖母」一編だけである。裸婦の挿絵は少なくないが、ドガ、ルノワール、ボナール、ミレー、マチス、ピカソ、ゴッゲン、デュフィ、マルケ、ロオランサンなどの絵も載せてある。同号に火野葦平「厭世加留多 友人T・Hに」、藤原審爾「ふゆつぼみ」、石塚喜久三「雲雀鳴く臥所」などの小説がある。

「出征」を掲載したのは『新潮』である。文芸雑誌(1904.5~)。「新声」の後身として創刊され、今日に至る。発行所は新潮社。1945年11月復刊号『島木健作追悼号』。戦後の『新潮』はいわゆる新戯作派との関係が密接であった。評論、小説、翻訳などからなる。他の九誌と比べて翻訳の作品が多い点は特色である。これも大岡昇平のよく小説や評論を寄稿していた雑誌である。例えば「姉(帰郷)」(1950.11)、「再会」(1951.11)などである。同号

²⁷ 和田芳恵「文芸」項(『日本近代文学大事典 第五巻』日本近代文学館、1977.11)。p.372。

は「新鋭作家十人集」特集であり、椎名麟三「真実」、榛葉英治「女子学生」、藤原審爾「久我の闇祭」、田宮虎彦「前夜」、三島由紀夫「果実」梅崎春生「ピンポンと日蝕」などの小説が掲載している。

「暗号手」を掲載した『風雪』（1947.1~1950.7）は文芸雑誌である。1947年1月から1950年8月まで、計43冊。発行人小笠原貴雄はかつて『辛巳』の同人で、この雑誌仲間の参加を請い、『風雪』を同人雑誌として刊行したが、1947年12月（1巻11号）以降、六興出版社の手に移り、一般文芸誌となる。評論（書評、座談会）、雑記（随筆）、創作欄（小説、詩歌）、翻訳などからなる。めぼしい作品として、火野葦平『青春と泥濘』、林芙美子『浮雲』、正宗白鳥『自然主義盛衰史』、荷風『断腸亭日乗』などがあげられる。「暗号手」のほか大岡も評論を寄せたことがある。同号に林芙美子「浮雲」連載、船山馨「夜間軌道」などの小説があり、亀井勝一郎「痴愚の言」、青野季吉「文学者の生活と運命」などの評論がある。

「襲撃」を掲載した『新小説』は文芸雑誌で、春陽堂発行。1889年に創刊され、休刊したこともあるが、歴史のある雑誌である。昭和時代に入って一度姿を消すことになり、戦後1946年1月に復刊され、1950年6月まで続いた。評論や雑記などもあるが、小説は際立って雑誌の中心とされる。挿絵なども少ない。それに同じ号で同時に連載している小説が他の九誌と比べて比較的が多い。例えば「襲撃」が掲載された5巻5号（1950.5.1）には火野葦平「魔女裁判」、青山光二「旅行者」、藤森成吉「新八犬伝」、林房雄「鐘楼の影」四編が連載されている。大岡が『新小説』に投稿した作品は「襲撃」一編だけである。

まとめてみると、大岡昇平は雑誌の類別やジャンルを問わず、総合雑誌（『週刊朝日』『世界の動き』）や地方の文芸雑誌（『東北文学』）や不定期刊の雑誌（『文学会議』）、或いは歴史のある古い雑誌（『新小説』『新潮』）や戦後新しく創刊された雑誌（『東北文学』『文学会議』『風雪』『世界の動き』）といった種々の雑誌に投稿した。その中に今日に至っても発行されている所謂主流の雑誌（『文学界』『新潮』『文芸』『週刊朝日』）があり、また戦後五六年くらい短命の雑誌（『東北文学』『文学会議』『風雪』『小説界』『新小説』『世界の動き』）もある。

実際に大岡昇平の戦後の著作目録²⁸を見ると、大岡が主な活躍している雑誌は『文学界』『新潮』『文芸』であることがわかる。もし五年区切りで、「俘虜記」を発表した1948年から1952までの大岡の雑誌投稿の状況を見ると、一回しか寄稿しなかった雑誌は、『小説界』『文学会議』『東北文学』『新小説』『週刊朝日』である。以上の考察から、雑誌問わずに手当たり次第に書いて投稿していく大岡の姿が見られる。これも先述した大岡の「告白したい」という表現欲求と繋がっていると考えられる。

ちなみに帰還した大岡が雑誌に投稿し始めたのは1947年からである。そして1947年から1952年まで、または『(合本) 俘虜記』（1952年、創元社）が刊行されるまでの六年間、大岡の小説や随筆や評論などを掲載した新聞や雑誌は、なんと70誌もあり、約110編があ

²⁸ 岩崎努「著作目録」『全集』第二十三巻。pp.769-774。

る（連載小説²⁹は1編で数える）。平均としては一雑誌の掲載した数は2編足らずだといえる。その中で最も頻繁に投稿した雑誌は『文学界』『新潮』『文芸』のほか、『群像』『別冊文芸春秋』などもある。数多くの新聞や雑誌に寄稿するのは別におかしいと思われぬが、ここからも大岡の幅広く寄稿するという姿勢が窺える。

もし各12編の枚数に注目すると、中心になるものがわかる。「出征」は遥かに枚数が多く、12編の中で大岡は「出征」に最も力を入れたのである。同時代評では「出征」に関する評論も比較的が多い。「出征」に次いで巻末に置かれた「八月十日」と「暗号手」、さらに「サンホセの聖母」「比島に着いた補充兵」「海上にて」である。主流雑誌に投稿したことにはほぼ符合している。ここからみると、『サンホセの聖母』では、主人公の「出征」「海上にて」「比島に着いた補充兵」で書かれた戦地に赴く経緯と、俘虜収容所で敗戦を迎える経緯と、主人公の「暗号手」という勤務をめぐる話と、サンホセという駐屯地におけるフィリピン住民との交流は、大岡昇平の創作の重点であろう。

また、これらの作品はほぼ1949年後半から1950年初頭にかけて書いたものである。この時期において「建設」と「外業」二編の俘虜物が発表され、「野火」の『文体』第一稿は1949年7月に掲載されたが、このような発表状況からみると、この時期では大岡は戦場物を中心に創作していたことといえる。

2、単行本『サンホセの聖母』の成立

2・1、成立経緯

まず雑誌に投稿して、それから単行本としてまとめるというのは、1947年から1952年まで大岡昇平の一貫したやり方だといえる。『野火』『武蔵野夫人』は連載小説で、一雑誌に掲載されているのがもちろんのことであるが、『俘虜記』や『サンホセの聖母』は明らかに最初は短編として書かれ、違った雑誌で発表して、それから各短編を単行本でまとめるという成立経緯にある。表2は1948年から1952年まで刊行された大岡昇平の単独創作著書である。

表2・単行本一覧（1948年～1952年）³⁰

題名	出版事項	目次
『俘虜記』	1948.12.20 創元社	「俘虜記」（捉まるまで）「サンホセ野戦病院」「レイテの雨」（タクロバンの雨とパロの陽）「西矢隊始末記」
『続俘虜記』	1949.12.20 創元社	「生きている俘虜」「戦友」「俘虜の季節」（季節）「 俘虜逃亡 」「 西矢隊奮戦 」

²⁹ 連載小説とは、「野火」（『文体』二回、1948.12&1949.7）、「武蔵野夫人」（『群像』八回、1950.1~9）、「野火」「展望」（八回、1951.1~8）、「酸素」（『文学界』十二回、1952.1~12と六回、1953.1~7）である。

³⁰ 「著書種類別一覧」『全集』第二十三巻による。pp.877-880。

『サンホセの聖母』	1950.6.15 作品社	「出征」「海上にて」「比島に着いた補充兵」「サンホセの聖母」「ミンドロ島誌」「暗号手」「襲撃」「俘虜逃亡」「西矢隊奮戦」「靴の話」「食欲について」「八月十日」
『武蔵野夫人』	1950.11.25 大日本雄弁会講談社	第一章～第十四章
『新しき俘虜と古き俘虜』	1951.4.15 創元社	「建設」「外業」（二編合併「労働」）「八月十日」「新しき俘虜と古き俘虜」「俘虜演芸大会」（演芸大会）「帰還」
『来宮心中』	1951.5.31 新潮社	「来宮心中」「シナリオ静かなる雪」「敗走紀行」「山中露營」「女中の子」「歩哨の眼について」「お艶殺し」
『妻』	1951.6.30 池田書店	「出征」「海上にて」「暗号手」「山中露營」「帰還」「わが復員」「妻」「家」「女相続人」
『野火』	1952.2.5 創元社	一～三九
『母』	1952.6.15、 文芸春秋新社	「母」「父」「一寸法師後日譚」「動物」「鷹」「停電の夜」「愉快的連中」「再会」「神経さん」
『(合本) 俘虜記』	1952.12.30 創元社	「捉まるまで」「サンホセ野戦病院」「タクロバンの雨」「パロの陽」「生きている俘虜」「戦友」「季節」「労働」「八月十日」「新しき俘虜と古き俘虜」「演芸大会」「帰還」「附西矢隊始末記」「あとがき」

注：太字は重複の作品を表す。括弧は単行本で収録した時の題名。

『俘虜記』『続俘虜記』『新しき俘虜と古き俘虜』、そして最後の『(合本) 俘虜記』という成立について、大岡自身は以下のように述べている。

「初出には文末に《この一編は前に発表した「新しき俘虜と古き俘虜」と「帰還」の間に入ります。そして僕の俘虜の小説はこれでおしまひであります。——作者》とある。」（「演芸大会」の項目）³¹

つまり、『俘虜記』の全体像とその時間の流れを相当に意識して、俘虜物を書き続けていたとわかる。作者は「俘虜の小説」を書くという創作の目的が非常に強い。それに、その作品内の時間の流れをかなり意識し、「時間の流れと合致して、正確に、順序正しく」³²発表するようにしていた。『俘虜記』13編と対照的に、『サンホセの聖母』は「順序正しく」発表されていない。それに従い、『俘虜記』の成立を考察した先行研究もある。

³¹ 吉田瀬生・岩崎努「解題」『全集』第二巻。p.649。

³² 池田純溢「大岡昇平研究—『野火』と初期作品—」（初出上智大学『国文学論集』1971.12）『日本文学研究資料叢書 大岡昇平・福永武彦』（有精堂、1990）p.133。

「(前略) 改作と言ってよいほどの手直しをし、更に全体に互って相当量の加筆修正を施し、また全体の釣り合いを考えて、いくつかの作品の題名を変更するなどの改変を行なっており、それらを考え合わせると、そこに、既刊短編集の単なる再編集と違ってすますわけにはいかぬ作者の意気込みを、私たちは感じないではいられない。(中略) 個々の短編は自立しているながら、全体で一つの主題を表現する一冊の短編集に再編集するという以上の、もともとそういう性格を持っていた三冊の、というよりもむしろ三部作をなす短編集を、一編の長編小説に再構成しようとする意図があったのではないかと思われるのである。」³³

つまり、『俘虜記』を短編集から長編小説にアレンジしようとし、極めて工夫を施した大岡昇平の姿勢が窺える。と同時に、『俘虜記』はこれらの初期の作品の中で重要視される作品の一つであることがわかる。ところがそれに対して、同じように短編を集めた『サンホセの聖母』はどうであろう。大岡はそれを一つの長編小説にアレンジしようとする意図がなかったのではないかと思われる。「俘虜逃亡」と「西矢隊奮戦」の二編は、最初は『続俘虜記』に収録されているが、『(合本)俘虜記』が出版されて以来、「俘虜逃亡」と「西矢隊奮戦」の二編は除かれている。逆に「八月十日」は最初は『サンホセの聖母』に収録されていたが、その後『(合本)俘虜記』に収められている。

下の表は俘虜物と違って戦記物・戦場物を収録した単行本または文庫本の一覧表である。

表3・戦記物・戦場物を収録した作品

題名	出版事項	目次
『サンホセの聖母』	1950.6.15 作品社	「出征」「海上にて」「比島に着いた補充兵」「サンホセの聖母」 「ミンドロ島誌」「暗号手」「襲撃」「俘虜逃亡」「西矢隊奮戦」 「靴の話」「食欲について」「八月十日」
『来宮心中』	1951.5.31 新潮社	「来宮心中」「シナリオ静かなる雪」「敗走紀行」「山中露營」 「女中の子」「歩哨の眼について」「お艶殺し」
『妻』	1951.6.30 池田書店	「出征」「海上にて」「暗号手」「山中露營」「帰還」「わが復員」 「妻」「家」「女相続人」
『サンホセの聖母』(角川文庫)	1953.3.10 角川書店	「出征」「海上にて」「サンホセの聖母」「ミンドロ島誌」「暗号手」 「俘虜逃亡」「襲撃」「食欲について」「歩哨の眼について」 「西矢隊奮戦」「山中露營」「女中の子」
『ミンドロ島ふたたび』	1969.12.25 中央公論社	「ミンドロ島ふたたび」「比島に着いた補充兵」「忘れ得ぬ人々」 「ユー・アー・ヘヴィ」「改訂西矢隊始末記」「あとがき」
『ミンドロ島ふたたび』(中)	1976.6.10、中 央公論社	(同上)

³³ 松元寛『小説家 大岡昇平—敗戦という十字架を背負って—』(東京創元社、1994.10)。p.45。

公文庫)		
『ある補充兵の戦い』	1977.12.30 現代史出版会	「出征」「海上にて」「比島に着いた補充兵」「サンホセの聖母」「暗号手」「俘虜逃亡」「襲撃」「敗走紀行」「西矢隊奮戦」「山中露營」「捉まるまで」「ユー・アー・ヘヴィ」「忘れ得ぬ人々」「女中の子」「わが復員」
『ある補充兵の戦い』(徳間文庫)	1984.8.15 徳間書店	(同上)

注：太字は『ある補充兵の戦い』が出版される前に、重複に収録された作品を表す。

『来宮心中』『妻』の目次から見ると、戦争物と関係ない作品をも収めるため、二冊はただその時期に発表された短編小説を集めた短編集であることが疑われないであろう。そして『ミンドロ島ふたたび』は重なっている作品があるが、題名の示しているように、それは「ミンドロ島ふたたび」という戦跡訪問団の感想文が中心とされ、他の作品はただ対照的な役割を果たしていると思われる。結局戦記物・戦場物を中心に収録したのは『サンホセの聖母』と『ある補充兵の戦い』二冊しかないといえよう。

『サンホセの聖母』の単行本と文庫本が多少違っており、20年以上をも経てから(『ミンドロ島ふたたび』、『レイテ戦記』(中央公論社、1971.9.30)をも経て)、『ある補充兵の戦い』が新しくまとめられ出版されるようになったのである。調べる限り『サンホセの聖母』は1950年に単行本、1953年に文庫本が出版されて以来、再版などが見当たらない。つまり、『サンホセの聖母』は短編集として扱われていたのみならず、出版事業側から見ると、大岡昇平の戦争小説の中で、比較的に関心されていなかったといえよう。

1948年12月出版された『俘虜記』は、翌年1月改造社の第一回横光利一賞選考委員会で全会一致で受賞がきまる。同年4月横光賞授賞式である。1950年11月講談社から刊行された『武蔵野夫人』は同年のベストセラーとなる。さらに1952年『野火』で読売文学賞を受けた。こうして大岡昇平が脚光を浴びて始め、『武蔵野夫人』と同じ1950年に出版された『サンホセの聖母』はより注目されるはずではないかと思われるが、実際にはそうではなかったようである。逆に『俘虜記』『武蔵野夫人』の輝かしい存在のため、『サンホセの聖母』の存在は忘れてしまったのではないかと推測される。以上のような原因で同短編集は従来比較的に関心されなかったといえよう。

2・2、単行本の題名

<サンホセの聖母>という本の題名を見ると、まず聖母マリア或いは宗教的なイメージが浮かんで来て、作品が戦争に関する物語だとは思えないであろう。実際に本の内容を見ると、<サンホセの聖母>とは中身12編の短編の「サンホセの聖母」から単行本の題名として使われていることがわかる。そして、「サンホセの聖母」はさらに〔麻逸国〕〔サンホセの聖母〕〔ドクトル〕〔音楽会〕〔ルイザとイザベラ〕〔ゲリラの妻〕という六章に分けられる。従ってより正確に言うと、単行本の題名は〔サンホセの聖母〕一章と深く結びつい

ているのである。

「サンホセの聖母」はフィリピンの歴史風土とサンホセの住民たちを中心に描いた作品である。作者の戦争経歴からわかるように、＜サンホセ＞とはミンドロ島西南の海に近い町であり、作者が約半年警備していた駐屯地である。各章名の示しているように文中で紹介されているのは、住民のドクトル、音楽家、美人姉妹のルイザとイザベラ、ゲリラの妻と噂されたフロラのほか、司祭、「マラリヤを全癒せしめた」(p.411) 或る家の主婦、上流に属していた少年、砂糖会社の社長秘書、などの人物が描かれている。それに、単なる人物の紹介ではなく、日本兵との関わりまたは交流の仕方を中心として描写されるのである。日本兵とフィリピン住民との関わりについて、詳しくは第二章で検討する。ここで単行本の題名と深く関連している〔サンホセの聖母〕一章に重点を置き、題名の意味を探求したい。

〔サンホセの聖母〕ではフィリピンの教会や司祭といった宗教に関する内容が描かれている。「教会」はサンホセの町で砂糖工場に次ぐ二番目大きく「立派」な建物である。そして、司祭は「住民の出生、命名、死亡、その他あらゆる身の上相談に応じて」おり、住民は「信心深い」(同)。主人公「私」は教会に入ったことがある。教会の内部は「気持ちいい静けさが漂って」おり、「私が内地を出て以来、初めて見る整頓されて「室内」」(同)である。以上の描写から見れば、サンホセでの宗教的な雰囲気（霧）の濃さと教会の与えた快さに、「私」は一種の穏やかな感じ或いは安心感を得たことがわかる。ところが、「会堂」での「キリストの像」や「キリストの受難を描いた油絵」を見て、「私」が「感心したことはない」どころか、一種の不気味さが感じ取られると思われる。

「正面の仕切りの奥には十字架にかけられたキリストの像がある。私はこれまで二、三度日本の旧教の教会に入ったことがあるが、この種の像に感心したことはない。蠟細工らしい蒼白い肌が屍の色を、黒ずんだ赤が凝固した血を表わすとすれば、これは甚だ悪い写実主義である。

三方の壁にはキリストの受難を描いた油絵が懸け並べられてあり、やはり夥しい血潮が、画面の主調をなしていた。(中略) こうした血の色の氾濫の中で礼拝し得た西欧の中世人とフィリピン人は、明らかに生死について我々とはよほど異った観念を抱いていた。

そして私がこうして特に血に感じたのは、この時前線へ来た兵士であったためである。」(「サンホセの聖母」〔サンホセの聖母〕 p.411)

兵士である「私」にとって、「キリストの像」や「キリストの受難を描いた油絵」にはただ「屍の色」と「血の色の氾濫」しか見えず、少しも「感心」できないし、甚だ気味が悪い。つまり、「私」は宗教に対する興味を持っているというよりも、教会という環境の与えた静かな整えた雰囲気（霧）に惹かれるだけである。こうした「私」の相反する二つの感情は、兵士の眼で見たからであることに繋がっている。

イエス像や受難図には感心できないが、「聖母子像」を背に「子供を抱いて坐」(p.412)

っている主婦の幸福な顔には感動する。「私」はその主婦に「マラリヤを全癒せしめた」が、彼女は「私」の訪ねに対して少しも「私」を相手にしておらず、「主人が留守なのでお構い出来ない、といて悠然と坐り続け」(同)る。にもかかわらず「私」はまた彼女を訪ね、子供の命名式で子供を抱いて母親的な「幸福」な顔に打たれる。

「板の壁には特に聖母子像がはってあった。凧絵のような拙悪な木版で、キリストの頬は撫子色であり、後光は菜の花色であった。画像を背に主婦は子供を抱いて坐り、黙って私を見凝めた。

その顔に溢れた幸福に私は打たれた。彼女の表情の構成する細部の描写から、その幸福の種類を実証する筆を私は持たないが、要するにそこには私の兵士の意識では眼を蔽いたくなるような幸福の表出があった。私は日本の女にこういう表情を見たことがない。

(中略)

その後或る日私はこの主婦と町の通りで逢った。(中略) その歩き振りは病後らしい倦怠の中に落ちついた節度あり、ダンスの好きな雑貨店の売子など足許にも及ばぬ威厳があった。私は満足した。」(同 p.412)

兵士であり死を控えている「私」は戦地の住民の顔に、「兵士の意識では眼を蔽いたくなるような幸福の表出」を発見するのみならず、そういう「幸福」を否定せずに却って肯定的に、その主婦と「聖母子像」を結び付ける。こうしてこの章の題名である「聖母」とは、板の壁に掛けられた「凧絵のような拙悪な木版」の聖母子像というのではなく、主婦とその子供のことを指しているのだとわかる。「顔に溢れた幸福」と「節度あり」「威厳」あった歩き振りの持ち主のそのフィリピン人主婦は、即ち<サンホセの聖母>であろう。聖母子像やイエス像といった宗教的なものより、死を控えている兵士が感じ取って感動したのはこの素朴で単純で人間的な幸福である。同時に、こういう「幸福」は実は存在しており、戦地の住民や兵士でもそれを見出すことができると強調される。

兵士の<幸福>の発見を象徴する〔サンホセの聖母〕という点から見れば、作者がそれを題名にしたのは、悲惨で非情な戦争においても戦地の住民は<幸福>を見せることができるのみならず、死を控えている兵士でもそういう人間的な<幸福>を見出すことができる、という戦争に曝されている人間に対して積極的肯定的な態度を持っているからだと思われる。「サンホセの聖母」において様々なフィリピン人が登場しているが、この名前もない「主婦」を描く章は却って作品名となり、さらに単行本の題名になったのである。「サンホセの聖母」だけではなく『サンホセの聖母』全体で、作者は<幸福>というキーワードで一貫しようとするのではないかと考えられる。

三、改稿について

『サンホセの聖母』12編は1949年2月から1950年5月にかけて、各々違った雑誌で発表されてから、1950年6月15日に単行本でまとめられた。初出と単行本を対照すると、多かれ少なかれ12編はすべて改稿が施された。この間作者は12編を訂正或いは改稿を行い、改稿された箇所を見ると、文章の表現や語彙のみならず句読点や改行などの箇所も多く、作者はかなり力を入れて作品一つ一つを収めていった姿勢が窺える。

単行本の段階にとどまらず、のち全集が出版された時にも改稿の跡が見られる。大岡昇平の生時『大岡昇平全集〈全一五巻〉』（中央公論社、1973-1975）と『大岡昇平集〈全一八巻〉』（岩波書店、1982-1984）、没後『大岡昇平全集〈全二四巻〉』（筑摩書房、1992-2003）が出版された。一人の作家として三度目も全集が出版されたのである。『サンホセの聖母』の成立過程を検討するため、初出と単行本に重点を置くが、現在最も新しく出版された全集として、しかも本論のテキストとして、筑摩書房刊行の全集とも対照したい。『全集』の底本一覧と解説は以下である。

表4・『大岡昇平全集』（筑摩書房）の『サンホセの聖母』12編の底本一覧

題名（発表順）	底本
「靴の話」	『大岡昇平集』第二巻（岩波書店、1982.8.25）
「食慾について」	同
「俘虜逃亡」	同
「西矢隊奮戦」	同
「ミンドロ島誌」	『わが復員わが戦後』（徳間書店、徳間文庫、1985.8.15）
「比島に着いた補充兵」	『大岡昇平集』第二巻（岩波書店、1982.8.25）
「海上にて」	同
「サンホセの聖母」	同
「出征」	同
「暗号手」	同
「八月十日」	『大岡昇平集』第一巻（岩波書店、1983.1.25）
「襲撃」	『大岡昇平集』第二巻（岩波書店、1982.8.25）

『俘虜記』は、実質的に作者生前の最後単行本である岩波書店版『大岡昇平集1』（一九八三年）を底本とした。（中略）短編群のうち、「ミンドロ島誌」以外は岩波版『大岡昇平集2』（一九八二年）を底本としている。これも原則に従えば、『ある補充兵の戦い』（一九八四年、徳間文庫）を選ぶべきであるが、この本は文庫化するためにであろうか、漢字を開き過ぎているので、底本としては不相当と判断せざるを得なかった。」

34

³⁴ 吉田瀬生「解題」『全集』第二巻。pp.641-642。

「解説」によると、筑摩書房版『全集』の『サンホセの聖母』の12編は「ミンドロ島誌」を除いて、全部岩波書店版『大岡昇平集』（1982－1983）を底本としていることがわかる。そして、岩波版『大岡昇平集』の「解題」は以下のような記述がある。

「各作品は、最初に収録の作品集を底本としたが、「俘虜逃亡」「西矢隊奮戦」は『サンホセの聖母』を底本としている。各作品は異本と校合し、明らかな誤記、誤植、脱落と思われるものは著者の校訂を受け加筆訂正されている。なお、作品によって年月日や人数など、一致しないところがあるが、書かれた時点での情報、資料の状態を示すために、そのままにした。」³⁵

岩波書店版『大岡昇平集』は初収録の単行本を底本としていることがわかる。『サンホセの聖母』の12短編は初出から同短編集への段階では改稿が行われたのは言うまでもないが、その後でも改稿が施された。つまり、「ミンドロ島誌」は『わが復員わが戦後』（徳間文庫、1985）の内容として出版された段階で、他の11編は波書店版『大岡昇平集』（1982－1983）で収録された段階で加筆訂正の作業が行われたことが推測できる。

本論は主に文章の表現にかかわる改稿に重点を置き、【付録1】のように改稿の対照表をまとめた。『全集』を作品の決定版として取り扱い、初出から単行本へ、さらに単行本から『全集』へという二つの段階で改稿の箇所を通して、その12編はどのように形成していくのかを検討し、その上改稿を行った作者の意識や考え方をも辿ってみたい。

ちなみに、各作品はほぼ初出から単行本への段階において改稿が多いのにひきかえ、「襲撃」は初出から単行本への段階における改稿が非常に少なく、逆に単行本から『全集』への段階における改稿が多いのである。5月1日に初出が発表されて、6月15日にすぐ単行本が発行されたため、時間的な余裕があまりなかったのではないかと推測される。

1、作者の編集意識

『サンホセの聖母』の目次は次のページの表のとおりである。目次から見ると、12編の作品は発表順に従って配列されていないことがわかる。そして、『サンホセの聖母』文庫本の解説は以下のように説明している。

「ここに『サンホセの聖母』と名づけて収録したものは、『戦場記』と名づくべき部分の大半である。作品の配列順序も、作者の指定によつたもので、事件の進行に沿つてゐる。」³⁶

³⁵ 池田純溢「解題」『大岡昇平集』第二巻（岩波書店、1982）。p.646。

³⁶ 山本健吉「解説」『サンホセの聖母』（角川文庫、角川書店、1953.3）。p.201。

単行本の内容は文庫本との異同があるが、両者の配列の順が同じ「作者の指定によったもので、事件の進行に沿っている」と断定できる。つまり、『サンホセの聖母』12編は時系列で並べられ、「出征」から始まり「八月十日」で終るという〈主人公の戦争〉の起点と終点を内包している戦争体験の系譜が見られる。短編を集めて単行本にする際、作者の編集意識が窺える。

表5・『サンホセの聖母』の目次

	題名（目次順）	初出誌
1	「出征」	『新潮』一月号（1950.1.1）
2	「海上にて」	『文芸』十二月号（1949.12.1）
3	「比島に着いた補充兵」	『世界の動き』十月第二号（1949.10.15）
4	「サンホセの聖母」	『文学会議』第8輯（1949.12.30）
5	「ミンドロ島誌」	『東北文学』十月号（1949.10.1）
6	「暗号手」	『風雪』二月号（1950.2.1）
7	「襲撃」	『新小説』五月号（1950.5.1）
8	「俘虜逃亡」	『週刊朝日』「夏季増刊小説と読物」（1949.7.1）
9	「西矢隊奮戦」	『文学界』八月号（1949.8.1）
10	「食慾について」	『小説界』一・二月合併号（2-1、1949.2.1）（原題「靴と食慾」。 単行本に収録される時二編に分割される。）
11	「靴の話」	
12	「八月十日」	『文学界』三月号（1950.3.1）

1・1、章の配列と題名

12編の短編が単行本に収録されたとき、改題や作品の章の配列が改められた箇所は【資料1-1】でまとめる。「靴と食慾」は本来〔靴の話〕〔食慾の話〕という二章から成っている。単行本ではこの二章は各々一つの短編として独立され、題名が「靴の話」「食慾について」となる。また六章からなる「サンホセの聖母」は初出時一番目の章〔サンホセの聖母〕と二番目の章〔麻逸国〕という順番であるが、単行本では前後換えられた。〔サンホセの聖母〕章はフィリピンの教会と、「私」とフィリピン人との交流が描かれ、〔麻逸国〕章はフィリピンの歴史や人文地理を中心に紹介されている。初出時〔サンホセの聖母〕章を取り立て巻頭に置くのに対して、単行本では全作品集の流れを配慮して、フィリピンの紹介文である〔麻逸国〕を第一章に、〔サンホセの聖母〕章を二番目に回した、というのが作者の編集意図であろう。

改題について検討すると、「ミンドロ島誌」の二章の題名が三回も変わった。〔「麻逸国」〕、〔砂糖会社と教会と〕（初出）→〔再び「麻逸国」について〕、〔再び砂糖会社と教会について〕（単行本）→〔「麻逸国」について〕、〔砂糖会社と教会について〕（全集）の改変があり、単行本だけでは「再び」という言葉が付け加えられるのは注目される。初出發表時間といえば、「ミンドロ島誌」は「サンホセの聖母」より二ヶ月早く雑誌で発表されたが、執筆時

間が書いてないため、どれが先が確定できない。「サンホセの聖母」は「八月以前の執筆」³⁷という見方もある。しかし、単行本の配列の順番を見ると、「サンホセの聖母」は「ミンドロ島誌」の前に配置される。二編の内容とえば、「ミンドロ島誌」と「サンホセの聖母」の〔麻逸国〕は重なっている内容があり、フィリピンの歴史についての紹介は「ミンドロ島誌」のほうが詳しい。「ミンドロ島誌」を濃縮して「サンホセの聖母」の〔麻逸国〕にする可能性がないとはいえず、或いは「ミンドロ島誌」を「サンホセの聖母」の補遺として扱う可能性もある。或いは人物紹介のほうが、歴史や人文地理の紹介より重要であるという作者の意図が潜まれているかもしれない。

そして、恐らく二編の内容が重なっている箇所があるからこそ、単行本を編集する時、二回目言及したフィリピンの歴史や人文地理の紹介を「再び」という題名を付け加え、『全集』では「再び」の必要性がなくなったためまた削ったのであろう。上述のように、章の配列や題名の変更から作者の編集意図があるといえる。

さらに、「サンホセの聖母」四番目の章〔音楽家〕が単行本では〔音楽会〕に変えられた。「サンホセの聖母」のほかの章と対照してみれば、〔ドクトル〕〔ルイザとイザベラ〕〔ゲリラの妻〕という人物を章の題名にするのが多いが、ここであえて〔音楽家〕を〔音楽会〕に変えたのである。内容を見ると前半は日本兵と音楽家との付き合いが紹介され、後半は「比島独立記念日」を祝う「舞踏会」が描かれている³⁸。題名を〔音楽会〕に変えたのは、音楽家の紹介よりも兵士たちがこの音楽家に「色々弾かせて楽しんだ」ことと舞踏会に参加した体験に重点を置いたためと考えられ、つまりこの章のテーマは変えられるといえるのであろう。

1・2、「出征」「比島に着いた補充兵」「海上にて」の冒頭

「比島に着いた補充兵」の冒頭部は12編の中で最も大幅に改稿された作品である【資料1-2】。初出の一段落目と三段落目の前半が全部削られた。前者は輸送船が海に疾駆している場面が描かれ、後者は日付を明示して、何故今この輸送船に乗っているかという主人公「私」の背景の紹介である。これほど多く削られたのは、恐らく作者は単行本の全体像、少なくとも「出征」「海上にて」「比島に着いた補充兵」という出征の出発経緯に対する意識が潜んでいるためだと推測できる。つまり、「比島に着いた補充兵」の輸送船上と海の描写、即ち「海上にて」に属するはずの記述を省き、「比島に着いた」からの記述から描き始めるのであろう。

一方、「比島に着いた補充兵」の初出を「出征」と「海上にて」のとを対照してみると、冒頭部の書き方が意外に似ているのである。それは、まず周りの環境や風景の描写、それから昭和何年何月何日であったと日付の明示、続いて主人公の背景の紹介という書き方である。改稿された単行本また『全集』ではこの類似性が感じ取りにくくなる。これも作者の編集意識に関わっていると考えられる。逆に言えば、初出時の作者は「比島に着いた補

³⁷ 同注 26。

³⁸ 『全集』第二巻。p.415。

充兵」「海上にて」「出征」三つの短編を同じ基調で創作したことがわかる。

作者の編集意識に関わる改稿を見てきた。『サンホセの聖母』はただ単に発表した12編の短編を気まぐれに集めたものではなく、単行本の全体像を配慮した上で編集された短編集であることがわかる。

2、記述や表現の工夫

2・1、情報の修正

数多く改稿された箇所の中で、情報に関する改稿がほぼ全部の作品から見られる。唯一このような改稿の箇所が見られないのは「出征」である。それは「出征」に関する経緯の記憶が鮮明であるからか、作者が書くときだいたい力を入れるからと推測できる。

2・1・1、日付・時間・数字

【資料 2-1-1-1】「サンホセの聖母」では宋の趙汝适の『諸蕃志』の書かれた年代について、「一二四五年」（初出・単行本）→「一二二五年」（全集）の改変がある。調べてみたら、『諸蕃志』は確かに1225年に書かれた本であるため、後に『全集』で訂正されたのだとわかる。そして「約五日」（初出）→「五日」（単行本）、「二、三日」（初出・単行本）→「二日」（全集）に改めたのは、それほど差が大きいと思われるが、「二日」をもって定着した作者の選択がある。

「西矢隊奮戦」では何時まで警戒したかについて、「午前を過ごした後」（初出）→「午前九時まで待った後」（単行本）→「午後三時まで待った後」（全集）という時間の改稿がある。また「比島に着いた補充兵」では出発日について、「廿五日」と「廿七日」（初出・単行本）→「二十七日」と「二十八日」（全集）のように変わった。この二つの時間について大岡昇平は「西矢隊始末記」で既に言及していた。

「翌日も遊撃隊到着せず。午後三時捕へたる住民を伴つて帰途に就く。」³⁹

「二十八日雨の中を小型発動機船（内地漁船を乗員と共に徴用せるもの）をもつて、一ヶ小隊づゝ分散、ミンドロ島の三つの任地に向つた。」⁴⁰

「比島に着いた補充兵」と異なり、「西矢隊始末記」は主人公の小隊とパルアン警備の小隊の出発日は特に明記しておらず、文中の「三つの任地」があるため、同じ日に出発したと思われるがちである。「西矢隊奮戦」と「比島に着いた補充兵」より早く発表された「西矢隊始末記」では、すでに「二十八日」と「午後三時」を用いたが、「西矢隊奮戦」「比島に着

³⁹ 「西矢隊始末記」『芸術』十二月号、1948.12。p.61。

⁴⁰ 同注 39。p.52。

いた補充兵」ではそれに従わなかった。恐らく当時の1948年、1949年にこれらの作品を書いていた作者は、それほど日付に気を遣っていなかったか、或いは正確な時間を確定できないか、或いは各作品の関連のある日付を統一しようとする意図が強くないかも知れないと思われる。そして、最後の『全集』で「西矢隊始末記」の時間をもって統一したといえよう。

日付や時間のほか、数字に関する改稿もある。【資料2-1-1-2】数字を変えて、内容を強調するレトリックがあるが、「比島について補充兵」ではルソン島の生還している人数について、「五名中三名」（初出・単行本）→「五名中二名」（全集）という比率が減った。それに対してミンドロ島の生還の人数は三百五十名のうちに、「約廿名」（初出・単行本）→「六十名」（全集）のように増えた。これは実際の生還の人数に従って変えたからだと考えられる。そのほか、「八月十日」において原子爆弾の威力に関する記述とその単位の換算は、『全集』で改められた跡が見られる。これらの数字に関する改稿はほぼ『全集』の段階で行われたことがわかる。

「食慾について」において「私」が「支給されていた」「甘味品」を「わが子」へ送ったことに関する記述⁴¹で、「十日分」（初出）→「二十日分」（単行本）に変えられる。同じ「甘味品」について「出征」でも言及されており、「目的地に着くまで二十日分の由で、キャラメル、羊羹、飴玉などが多量に支給された。」⁴²とある。そのため、単行本を刊行するとき作者は「出征」の記述を変えずに、「食慾について」の「十日分」を「二十日分」に変え、情報を正しくするといえる。

面白く思われるのは、「比島について補充兵」では「都合三隻」（初出）→「都合四隻」（単行本）→「都合三隻」（全集）と、「海上にて」では輸送船に乗った兵隊の人数も「約千名のほか」と「約五千」（初出）→「約千名など」と「約五千」（単行本）→「約千名のほか」と「約四千」（全集）のような改変がある。細かい箇所であるが、前述した「二十八日」と「午後三時」に関する改稿と同じように、ここからも作者は自分の記憶に対する不確定さ或いはゆれがあり、反復といえるほど何回も改めたと見られる。

2・1・2、地理・地名・距離

【資料2-1-2-1】「俘虜逃亡」において俘虜が中隊長に米分遣隊の所在の位置を告げる筋があり、「サンタクルーズ南方より約四キロ」（初出）→「サンタクルーズより東南へ約四キロ」（単行本）のように、より正確な方向と位置が示されている。「襲撃」では同じように「西方を限つた」（初出・単行本）→×（全集）、「東側」（初出・単行本）→「西側」（全集）という方向を改稿した箇所がある。それは、「私」が兵舎でゲリラを警戒しているとき、敵がどこからやってくるかについて、兵舎のまわりを検討する場面である。

「西矢隊奮戦」において「五一七高地」と「五一三高地」（初出・単行本）→「七二一高地」「五一七高地」（全集）、山中駐屯地より「十五軒西方の五一三高地」（初出・単行本）

⁴¹ 同注38。pp.356-357。

⁴² 同注38。p.452。

→「西南方四軒」(全集)に変えられた。

他の例としては、例えば「比島に着いた補充兵」において港から駐屯地サンホセまでの距離は「四キロ」を『全集』で「十キロ」に改めた。「襲撃」において二本の鉄路「各四軒」が同じく全集で「各々十軒、八軒」に変わった。以上のように地理や距離にかかわる改稿はほぼ『全集』の段階で行われた。

また、地名や場所をより詳しくにするために改稿された箇所がある。【資料 2-1-2-2】「比島に着いた補充兵」では広場に「ルネタ・パーク」という地名が単行本で付け加えられ、海の反対側に現れた「水」は「ラグナ湖」であったことも『全集』で明かされた。「海上にて」では「コレヒドール島」とは「マニラ湾口」に位置する島である。「マニラ湾口」という広い範囲を縮小して、単行本で「コレヒドール島」というより明確な地点に改めた作者の改稿動機が見られる。そして、「サンホセの聖母」ではミンドロ島の紹介も初出の大まかな説明から、単行本で「幅最も広いところで七十軒」と『全集』で「パナイに次ぐ七番目の大島」のようにより精確な説明にされている。

以上まとめた改稿の中で、単行本から『全集』への段階において、改稿は頻繁に行われたことがわかる。新しい資料や情報が現れてきて、さらに 1967 年 3 月に作者は再びミンドロ島に行ったため、不明瞭な物事が次第に明確されてくるのである。

2・1・3、固有名詞とその他

【資料 2-1-3-1】「食慾について」では輸送船上での兵士の配置について、初出は「もう一つどう呼んだか忘れてしまつたが、戦闘準備をして甲板へ出る班があつた」と明白に詳しく主人公の忘れた様子が記されているが、単行本はその箇所が「戦闘班」に変えられた。実際には「海上にて」においてもすでに「整理班、消火班、戦闘班等々」と書いてある。作者がその班を思い出したため改めたのだと考えられる。

そのほか、中隊長の紹介において「織物屋の息子」が『全集』で「農家の息子」に変えられた。大岡の『戦争』という本の中で中隊長の実家を訪れたという内容がある。

「ぼくは今、ここに、河口湖にきてるんで、この間勝沼まで行って隊長のお父さんに会ってきました。ブドウ園をやってるんですが、(後略)」⁴³

つまり「農家の息子」である正確な情報に改められたのである。また、例えば「機外艇」(初出) → 「内火艇」(単行本)、「日新丸」(初出・単行本) → 「日蘭丸」(全集)、「一個小隊」(初出・単行本) → 「一個大隊」(全集)に変えられた。

ちなみに、新旧仮名や漢字の表記の問題については本論の考察には至っていないが、今の段階でまとめたものを記しておきたい。「比島に着いた補充兵」一編の改稿された箇所の中で、初出と単行本の表記は違っている語彙が多いという点が目立っている。表記の違っ

⁴³ 同注 14。p.84。

ているい語彙を以下の表でまとめる。難しい漢字或いはあまり使われていない漢字が平仮名で表わされている。「さうだ」「やうだ」「ある」などの古い表記のしかたも一部現代仮名遣いに変えられた。これらの語彙を他の初出の表記と比べてみると、例えば「飯盒一杯の飯」（「食慾の話」）、「十日ぶりの碇泊の安堵」（「海上にて」）、「欄に並んだ兵」（「出征」）、「比島に着いた補充兵」初出の表記はかなり異色であることがわかる。それに、単行本でこれらの字が全部漢字に改められたところから見ると、恐らくこれは作者の原稿に従った結果ではなく、初出誌『世界の動き』の編集方針或いは読者層の想定のためであろう。簡略に下の表で示す。

表6・「比島に着いた補充兵」の初出と単行本の表記対照表

初出	単行本	初出	単行本
飯ごう	飯盒	風ろ敷	風呂敷
らん干	欄干	しゃく熱	灼熱
さん橋	栈橋	はなはだ	甚だ
こうこうたる	煌々たる	手りゅう弾	手榴弾
飯ごうすいさん	飯盒炊爨	てい泊	碇泊
とうもろこし	玉蜀黍	よみがえる	甦へる
ほえていた	吠えていた	昏倒している	昏倒してゐる
ゆられて来た	揺られて来た	我々のような弱兵	我々のやうな弱兵
わん	碗	こういう幸福の瞬間	かういう幸福の瞬間
石けん	石鹼	脅威におびえつつ	脅威におびえつゝ
バラ窓	薔薇窓	一口にいえば	一口にいへば
アメ売り	飴売り	死を控えた	死を控へた

「比島に着いた補充兵」のほか「俘虜逃亡」も仮名遣いにおいて変化が見られる。初出と単行本の違いは、例えば「いわば」→「いはゞ」、「いた」→「ゐた」、「添えない」→「添へない」、「寛大に扱うように」→「寛大に扱ふやうに」などが見られる。

このように、1949、50年において新旧仮名と漢字という表記の使い方はまだ統一していない状態が見られる。これは作者自身の表記のゆれというより、むしろ出版社側の方針が原因だと推測できよう。前節の考察では「比島に着いた補充兵」を掲載した『世界の動き』と「俘虜逃亡」を掲載した『週刊朝日』「夏季増刊小説と読物」は総合雑誌に属され、大衆向けの雑誌だといえる。そのため表記も簡単なほうや新しいほうに変えられたであろう。

以上検討したように、初出から単行本まで約一年の間に作者は作品で書かれたことを、新しく得たより事実に近い正しい情報に改めていくことがわかる。それだけではなく、『全集』において同じ情報の修正の跡はさらに多くあると見られる。これは正しい情報或いは事実を絶えず吸収して更新して、煩を厭わず作品を改めていく作者の姿勢だといえよう。

また、【資料2-1-3-2】の改稿はこれを裏づけるものとして考えられるのであろう。僚友の

最後の状況について「私」がわからないため、戦争記録を調べるという記述がある。「西矢隊奮戦」の初出では「一人も生存者がいないから、米軍側の記録でも調べないと状況はわからない。しかし仮にその手段ありとして、歴大な米参謀本部の書類の中からかゝる小戦闘に関する記録を探し出すのは大変であらう。」とあるが、単行本では波線部が全部削られた。或いは「ミンドロ島誌」では「現地で比島を研究する手段はなかつた」（初出・単行本）が「現地で比島に関する知識を得る手段はなかつた」（全集）に変えられた箇所もある。削除であれ改稿であれ、特に初出と単行本の段階において、作者の戦争記録や戦地に関する資料への渴望がここからは窺えるのであろう。

2・2、僚友たちの姿

【資料 2-2-1】「食慾について」は僚友の池田の食慾について描かれている。池田をめぐる改稿をみると、まず池田の食慾行為に関する改稿がある。「貧慾^{アス}な行為」は『全集』で一般論的な「食慾行為」に変えられた。それは後の「彼の示した行為」即ち「自分の慾望を露骨に主張」することに対して区別をつけるため改めた。また、池田が「残飯屋」と呼ばれた原因は、単行本で「班内の残飯を一手に引き受け」が付け加えられより詳しく説明されている。このことについて、「彼の方でも自らを卑しめる申し出をしなくてもよかつたと思ふ」（初出）という「私」の考え方が、単行本で「自らを卑しめて余計な代行の申し出をしなくてもよかつたと思ふ」に変わった。「余計」という言葉によって異常な食慾が強調された。

もう一つのエピソードとして、銃声で敵襲と思われて全員銃を取って床に伏せたが、池田は変な振る舞いをした。池田の変な姿の描写について、「異変」（初出）→「異様」（単行本）→×（全集）の改稿がある。「異変」であれ「異様」であれ、初出と単行本の段階では作者は池田の行為の異常さを強調する意図があるに違いない。また、この「行動」は後も「だらしのない」（初出）→「奇妙」（単行本）のように、「奇妙」で描かれた。後に『全集』において「異様」が削られた。恐らく作者はやや皮肉的に誇張した描写を控えめに描いたほうが良いと考えていたかもしれない。因みに、「だらしのない」という言葉が、後の木下少尉のことを物語る場所にまた現れるが、改稿されなかった。⁴⁴木下少尉の「だらしのない」とは、彼が将校であるのに、おきてを無視する行為を指している。この二つを比較すると、前者はいざという時における食慾行為の異常さ・不思議さを強調するために「奇妙」に改めたが、後者は単に人間の貪欲や利己心を強調するためにそのまま使ったといえよう。

以上の箇所から見ると、作者は池田の食慾の異常さと「異様」な姿と行動の「奇妙」さに描写の重点を置いたことがわかる。

池田の行為に対して「私」の反応に関する改稿もいくつかある。初出では「私」と池田のやりとりが描かれ、初出では「私はあきらさまに「君はいゝ人だが食事だけは君とはつき合はない」といつた。彼は「ふん、どうもねえ」と淋しさうに笑つた。その様子はやはり憎めない。」とあるが、単行本では波線部つまり池田の返事とその返事に対する「私」の

⁴⁴ 原文を引用すると、「しかし山へ入って事態が絶望的になっても、私はこのだらしのない将校の態度が、平穏な駐屯中と全然変わらないのに気が附いた。」（『全集』第二巻）。p.360。

感想が全部削られてしまった。この削除によって、作品全編では池田が沈黙になったといえるほどその発言が見られず⁴⁵、地の文の基調で一貫している。初出では「淋しさに笑った」池田は自分の異常な食慾を自覚していながらも改められない無力感が感じ取られ、「憎めない」という「私」の彼への理解も見られる。単行本で削除したのは、異常な食慾の行為そのものを中心に描く意図があるのではないかと推測される。

そのほか、「彼の美しい人柄」に「感銘した」(初出) → 「感じ入った」(単行本) に変えられた。「感銘」とは「心に刻みつけて忘れないこと。また、忘れられないほど深く感動すること」という意味であるが、「感じ入る」とは「深く感じる。すっかり感心する」⁴⁶ という意味である。池田の美しい人柄に「私」はただ忘れられないほど深く感動しただけではなく、感動して感心したという敬服の感も含まれる。また、輸送船で「重大な危険の裡」に警備して彼が甘納豆を食べていることについて、「私は感歎した」(初出) → × (単行本)、「以来私は彼を尊敬した」(初出) → 「私は感服してしまつた」(単行本)、のように変わった。池田の輸送船上のこの行為に対する私の考え方は「感服してしまつた」に締めくくつた。一方、食糧が足りない時、池田の振る舞いに対する「私」の態度は「尊敬すべきものではなかつた」(初出) → 「感服すべきものではなかつた」(単行本) に変わった。「尊敬」という言葉は相手の行動に対して表面的な捉え方であるが、「感服」は心から敬服し感心する意味を含んでいると感じられる。即ち、「感服」のほうがその異常な行動の与えた衝撃の強さをより強めることになる。これらの細かい言葉遣いの改変によって、池田の行為の異常さをより強調したり、皮肉ったりした作者の意図が窺えよう。

【資料 2-2-2】「靴の話」では軍靴をめぐって主人公「私」と僚友の松本との関わりが描かれている。松本に関する描写の中で、「注意力と結びついた激しい肉体的エネルギーを現はしてみた」(初出) → 「注意力と強い肉体的エネルギーの結合を示してみた」(単行本)、また眼が「ぎらぎら」という言葉は、初出では「強い日光の中」で「見開いてみた」眼を描いているが、単行本では「死と闘つてゐる」時の眼を描くことになった。これらの改稿は、松本の「肉体的エネルギー」が「激しい」より「強い」の面を提示し、彼の「強い生命力」を「そのぎらぎらした眼」によって強調することが読み取られる。これは後にマラリアに罹って早く死んだことと対照的であり、松本の「強い肉体的エネルギー」と「ぎらぎらした眼」で現れた「強い生命力」を通して彼が病と闘っている姿を呈している。

【資料 2-2-3】「西矢隊奮戦」において、僚友の山口正太郎に関する描写がいくつか変えられた箇所がある。「ゲリラ射殺の殊勲を立て」勤務も勤勉である山口正太郎は、上官の受けはよくなかつた。「米国映画」の「カウボーイ」のようで、単行本ではさらに「ダンディズム」という描写が付け加えられた。「彼の最後は敗軍の混乱の裡に確認出来なかつた。」(初出) という一句が単行本で削除されたのは、恐らく山口の結末について「遂に帰還してい

⁴⁵ 「私」と池田とのやりとりの場面がもう一つある。「「池田、伏せろ」と私は低声で注意した。／「うう」と彼は答えたが、その声は何か口中に含んだ様な変な声であつた。」(『全集』第二巻)。p.359。

⁴⁶ 新村出編『広辞苑 第六版』(岩波書店、2008.1.11)。pp.650, 630。

ない」というはっきりした印象を与えるためであろう。

【資料 2-2-4】「暗号手」では第二の主人公ともいえる中山に関する描写が改稿された箇所がいくつかある。「丈は低く」「傲慢」という中山のイメージが単行本で消された。そして中山の台詞は「そりやなんていつたつて」（初出）→「そんなわけぢやない」（単行本）のように、彼の不自然な「真面目に答えた」態度を強調する。単行本で「彼が軍人共に印象させたいと思っていたのは自分が課長であつたといふ一事だけだつたのである」という書き方へ変わったところで、中山の言動はよりわかりやすく描かれている。

一方、主人公の「私」が中山に対する批評は改められた箇所もある。彼の「陰性なエネルギー」は彼自身に対して「何の益するはずはない」（初出）→「何も益するものではない」（単行本）、彼は「何かの犠牲者あることはかほりない」（単行本）という下線部が付け加えられ、また末尾に「状勢が絶望的になつて出世の条件がなくなると」（初出）→「状勢が絶望的になると」（単行本）、「軍隊で出世しようなぞと思つたのも、単なる防禦にすぎなかつた。」（単行本）という説明が付け加えられ、改稿が行われた。つまり、中山のイメージを逆転するため、より詳しく解釈を下したという作者の意図が読み取られる。中山その人を批判しているというより、彼の「陰性なエネルギー」や「悪知恵」といった性格を批判し、その悪さを強調しているといえる。

他には僚友に関する描写が改稿された箇所もあるが、上記の例と比べてそれほど大幅に改稿されたものではない。【資料 2-2-5】例えば、「西矢隊奮戦」で「門柱につかまって出撃を停顿させた」⁴⁷田中の話しに対して、「私の見たところを少しも説明しない」（初出）→「私の見たところとあまり符合しない」（単行本）、「嘘をいふ」（初出）→「嘘を披露する」（単行本）のように、田中の「嘘を言う」「虚談症」をやや戯画化して描くと感じられる。

「比島に着いた補充兵」では「夜中発する兵の中一名が行方不明になった」⁴⁸ということに関して、「原因は不明」（初出・単行本）→「原因は不明であるが、出発の場に居合さなければ、死に向つて積み出されずにすむと速断したものであろう」（全集）のように、この事件に対する「私」の推論が付け加えられた。多くの可能性の中で「死」を恐れているのではないかという原因が、まず提示され方向付けられるのである。「死」から逃れようとした兵士として描かれていると考えられる。また、「慎重なる僚友」も取り上げられる。初出では「私」が有金残らず使ってしまったのは、「輸送船が無事比島に着くとは思つていなかった」（初出）からであるが、単行本ではこの原因が削られた。一方、「私」と対照的の有金を残した僚友が、「用意周到なる僚友」（初出）→「周到なる僚友」（単行本）→「慎重なる僚友」（全集）のように改稿された。用意が行き届いているというより、慎重な（「注意深く、軽々しく行動しない」⁴⁹）僚友が描写され、「私」の不謹慎と軽々しい行動という面が強調されるのであろう。

⁴⁷ 同注 38。p.384。

⁴⁸ 同注 38。p.397。

⁴⁹ 同注 46。p.1458。

「海上にて」では「或る下町の下駄屋」の僚友は、「俺は朝まらが立つから絶対に死なない」という「奇妙な兆候を信じていた」⁵⁰。「人を笑はせる」（初出）→「我々を笑はせてくれる」（単行本）の改稿によって、視点は彼の談義から聞き手の方へ移り、客観的な描写から「笑はせてくれる」というむしろ主観的に彼の行為に対して評価することに変化したと考えられる。

一人一人の兵士を取り上げるだけでなく、兵隊全員のイメージに関する描写もある。

【資料 2-2-6】「比島に着いた補充兵」では「我々のような弱兵が到着したこと」（初出）→「到着したのが我々のやうな弱兵であること」（単行本）、「劣つた兵隊」（初出）→「劣等な兵隊」（単行本）の改稿がある。「劣つた」という言葉はある比較対象があり、それに比べて程度が低いという意味があるが、「劣等」とは水準より程度が低いという意味である。この二箇所の改稿には特に「弱兵」を強調する意図が潜んでいるといえる。

「サンホセの聖母」では兵士たちがキニーネ剤を貯えていることについて、〔サンホセの聖母〕章で単行本は「キニーネ剤を秘かに貯へて」とあり、貯える行為に「秘かに」が付け加えられた。この改変に呼応して、〔ドクトル〕章で秘かに貯えている結果、その病で死んだ「患者」が出たという描写がある。「患者」という言葉が病人を指して普通の言葉であるが、単行本ではそれが「犠牲者」に変えられ、兵士たちの自業自得がやや皮肉に書かれた。

同じ「サンホセの聖母」で「子供」のような兵隊の一面について述べられている。初出に兵隊である「我々は、戦闘においても軍隊の日常においても、殆んど子供であつた」という記述があるが、単行本で下線の部分が削られた。「軍隊の日常」によって日常を定義づけた初出であると考えられるが、結局作者はこの意味を限定する描写を改めた。物語は戦場記であり軍隊の話であるため、特に「日常」を「軍隊の日常」で限定しなくてもいいという考慮があるかもしれない。しかし、逆に考えてみれば、戦場・軍隊をいうとすでに「非日常」的な世界で、「日常」とはいえないのではないかという疑問が生じてくる。ここで作者があえて広義の「日常」をそのまま用いたのは、軍隊にとって「非日常」であれ「日常」であれ、全部「日常」としか考えるほかはなく、「戦闘」と対照的状态を指しているのではないかと思われる。

僚友たちの姿にかかわる改稿は対照表から見るとわかるように、初出から単行本への段階のほうが中心的に行われた。僚友の姿をよりリアルに呈しているように、作者は僚友に関する描写を推敲して描いていくと思われる。

2・3、フィリピンに関する描写

『サンホセの聖母』においてフィリピンの風土や人民に関する描写は、主に「ミンドロ島誌」「比島に着いた補充兵」「サンホセの聖母」三編にある。フィリピンの風土や人民を

⁵⁰ 同注 38。p.426。

めぐる改稿をこの節で検討してみる。

2・3・1、戦場の住民の姿

【資料 2-3-1】まず「土民」が「住民」に変えられた箇所が二つある。「サンホセの聖母」では「土民の使う呼称」（初出）→「この現地の呼称」（単行本）、「ミンドロ島誌」では「比島の土民」（初出・単行本）→「比島の住民」（全集）、また「暗号手」では「土民の訊問」（初出・単行本）→「住民の訊問」（全集）のように、『全集』ではとりわけ差別語を変えたのであろう。

住民の信仰について、「かうした血の色の氾濫の中で礼拝し得た古人」（初出・単行本）の下線部が『全集』で「西欧の中世人とフィリピン人」に改稿された箇所を見ると、作者は「我々」とフィリピン人との生死の観念が異なっていることを取り立てるのみならず、兵士である「我々」をも強調しようとしている。ここでフィリピン人と兵士との違い或いは隔たりも見られる。

さらに、フィリピン人のある主婦の「不快」な顔の描写で、「蒼黒い皮膚は顔の彫刻的細部に到るところ不快な影」という下線部は単行本で付け加えられたのである。フィリピン人の顔立ちとその主婦の「不快」をより細かく呈している。一方、この主婦の「節度」ある「歩き振り」について、「ゆつくり落ちついて」（初出）→「病後らしい倦怠の中に落ちついた」（単行本）のようにより詳しく描かれた。兵士の「私」を見て「不快」な表情と犯しがたい「威厳」という主婦のイメージが取り立てられることがわかる。住民の不快な感情は同作品においてまたある。フロラという女性が「使った **excuse me** は私が英語で聞いた最も侮辱的な調子を含んでいた。」という箇所で、文の前後の順序が変えられた。作者は兵士に対してフィリピン人の不快な顔と侮辱的な態度や不機嫌を正確に捉えようとするといえる。

そのほか、フィリピン人全体のイメージについて、「比島に着いた補充兵」では単行本で「黄と橙を主調とした建物や荷の間を、赤と空色の衣服を着た比島人」という具体的な「雑色」の描写を付け加えることによって、色の鮮明と多様を有しているイメージを作り上げる。

住民の個性や習慣について、「ミンドロ島誌」では「住民は終日賭博に耽つてみたが、信心深かつた」（初出）という波線部が単行本で削られた。しかし、下記の引用文のように他の作品から住民が麻雀に耽っていることがわかる。この削除は恐らく他の作品との重複を避け、ここで住民の信心深かい面を強調するためであろう。

「見たところ比島人はみな一日麻雀をしているように見えた。」（「比島に着いた補充兵」〔バタンガス〕 p.402）

「サンホセの町の上流階級は麻雀に耽り、下層民は鬪鶏に耽る。」（「サンホセの聖母」〔ドクトル〕 p.414）

或いは、フロラがスパイであるかどうかの疑問について、『全集』ではより詳しく推測の

描写が付け加えられ、単行本では「専らキニーネ剤」を要求したドクトルや、「汚い家」に住んでいる美人の姉妹や、妹を「かばつて家をおさめて行く」姉ルイザなどの人物が、改稿を通して描き出されていることがわかる。以上のように、改稿はほぼ単行本の段階で行われ、フィリピン人の姿をより正確に描いているため、表現が工夫されていることが窺える。

2・3・2、兵士と住民との交流

兵士が住民との関わり方をめぐる改稿は【資料 2-3-2】でまとめる。例えば、「ミンドロ島誌」では日本兵と住民の違った砂糖の供給の方法をめぐる改稿がある。「比島に着いた補充兵」では、子供たちとものを交換する時、単行本で「子供は嘲るやうに「グッド・ジャパニーズ」と叫んで」の下線部が付け加えられた。同じように単行本で、日本兵に対してマニラやバタンガスの住民の眼に満ちた悪意をめぐる記述の改稿がある。

それに対して、「サンホセの聖母」では兵士は住民に「饗応を強制することが 慚い」（初出）→「饗応を強制する習慣がなかつた」（単行本）のように、兵士の乱暴や不合理な振る舞いが控えめに描かれた。「私」の所属している軍隊は住民に対して不合理な振る舞いをしないが、住民にとって兵隊そのものはすでに嫌な存在であり、住民の日本兵に対するそういう「悪意」や反感を作者は省かずにリアルに呈しているのである。

それだけではなく、同作品において作者はさらに兵士と住民との関わり方の根底にあるものを見詰めて、それを捉えようとする意図が改稿からも窺える。「政治は万物を支配する」（初出・単行本）→「政治は万事を決定する」（全集）のように、「政治」の「万事」に対する決定的な影響力を強調する。「政治」をめぐる「我々は政治は語らなかつた」（初出・単行本）→「我々はあまり政治を語らなかつた」（全集）のように、『全集』の段階において作者は「政治」に関する記述に気を遣っていたとわかる。そのほか、「確信してみたが、女の心は実ははかり難い」（初出・単行本）→「確信し、希望していた」（全集）のように、「女」という一般の対象が用いられるが、範囲を縮小してフィリピン人の女性や住民に対する不理解の感が作者に意識されていることが窺えるであろう。

要するに、これらの改稿から見てわかるように、フィリピン人が兵士に対する悪意の眼や反感と兵士が彼らに対する不理解の感じ、という両者の関わり方がよりリアルに描き出され、その根底をなした「政治」をも指摘されているといえる。改稿の傾向をいうと、単行本の段階では比較的が多いが、「政治」の描写にかかわる改稿は『全集』の段階では中心となっている。

2・3・3、フィリピンの風景

フィリピンの風景描写に関する改稿は【資料 2-3-3-1】でまとめ、主に単行本の段階で行われたとわかる。「比島に着いた補充兵」ではフィリピンの建物について、初出では「東京郊外洋風住宅とはどこか違い、整つたものがあつた」と描いてあるが、単行本では波線部が削除された。この「ブルジョアの居住」の「玩具のような美しさ」というイメージだけ

を呈している。或いは「サンホセの聖母」では工場の「怪しげな鉄階」という記述が単行本で付け加えられ、また至るところ見かける赤い建物について単行本では「例の赤」「要するに」という言葉が付け加えられることによって、フィリピンの殖民されてきたことが一層強調されると思われる。さらに、「私」が教会ばかりを見ているのは、「比島に着いた補充兵」ではまた「比島に移植されてみた視覚的「西欧」が主として教会であつたといふ事実」(単行本)という説明が付け加えた。以上のように、単行本の段階でフィリピンの建物をめぐった改稿から見れば、この土地が長年植民地であることを作者は常に意識していると思われる。

建物のほか、フィリピンの自然描写をめぐる改稿もある。「サンホセの聖母」では〔サンホセの聖母〕章の冒頭、つまり初出の冒頭の段落は単行本で削除された。この段落は「サンホセ」という町を詳しく説明しているが、何故削られたかをいうと、この章の前半においてのサンホセの建物の紹介を中心にする意図があるのではないかと推測される。また、葉むらの円い街路樹を単行本では細かい改稿によって捉えられ、熱帯の木の成長と「私」の空想を表現する。つまり、これはフィリピンの熱帯風物の印象、或いは熱帯風物を見た「私」の感じをより正確に捉えようとするのであろう。

「海上にて」ではフィリピンの海岸を見て、「孤立した小屋が(中略)二つだけある」(初出) → 「小屋が(中略)二つ孤立してゐる」(単行本)という改稿のように、孤立無援の戦争末期の敗勢に対して兵士の心細い孤立感を暗示しているのではないかとと思われる。こういう風景描写を通して兵士の心情を表す描写は「比島に着いて補充兵」からも見られ、特に「灯」をめぐる改稿が最も目立っている。【資料 2-3-3-2】サンホセの建物(兵舎に当てられた小学校)の「灯」について「電気」(初出) → 「気灯」(単行本) → 「ヤシ油灯」(全集)、と三回も改めた。この段落に次ぐ段落においても改稿は行われぬが、「灯」の描写がある。

「少し行って別の一屋に着く。個人の住宅らしい造りである。中は電灯が、まぶしいほど明るい。バタンガスの巡警隊の二階で、一週間蠟燭の光で暮して来た我々にとって夢のような明るさである(一体に比島では電灯はやたらに明るい)。」(「比島に着いて補充兵」〔サンホセまで〕 p.406)

「まぶしいほど明るい」「やたらに明るい」フィリピンのイメージが呈されている。同作品において、「灯」に関する改稿は他にもある。例えば、「海岸の方向に無数のあかりのついた建物」(初出) → 「海岸の方に無数のあかりをつけた建物」(単行本)、「街灯の光が芝を斜めに照らしていた」(初出) → 「街灯の光が芝に斜めにとゞいてゐた」(単行本)のように、作者はかなり「灯」に関心を持っていることといえるのであろう。そして、「灯」をめぐる改稿でなくても、「灯」に関係している風景の明るさと暗さについての描写があり、改稿の跡も見られる。例えば、「煌々たる灯火」を背景に「休んでゐた」(単行本)街路電車や、「どんより岸の低い家の灯を反射していた」川の水などの風景をめぐる改稿がある。これらの改稿を見れば、こうした風景の描写を通して戦地に赴かせた兵士の心細い物寂し

い感情を表しているといえる。

一般的にいうとより洗練された表現にするのは、改稿の作業の大半を占めている目的である。『サンホセの聖母』の場合は、まず情報や戦場における固有名詞の訂正と加筆が挙げられる。これらの改稿は単行本から『全集』への段階で多く行われた。作者はより正確な記述や表現、或いはより事実に近い内容にする姿勢が窺える。また、僚友とフィリピの人事の描写をめぐる改稿も多くあり、単行本の段階を中心に施された。この点から見ると、作者はそういう描写に対してかなり気を遣っていることがわかる。作者は表現を洗練したのみならず、人物像をよりリアルに描き出しているともいえる。

3、批判性の増強

3・1、戦争・国家・軍部への批判

『サンホセの聖母』において戦争に対する批判をめぐる改稿は【資料 3-1-1】の通りである。「八月十日」では「戦争の悲惨は人間が不自然に死なねばならぬといふことであり、その方法は問題ではない」（初出）→「（前略）といふ一事に尽き、その死に方は問題ではない」（単行本）、また「襲撃」では「戦争といふ行為を止めることを考へればよい」（初出・単行本）→「（前略）止めるほかはない」（全集）のように、「という一事に尽き」と「ほかはない」という表現で、戦争の悲惨さと戦争をやめる重要性を増す効果があると思われる。

国家や軍部や軍隊に関する批判的な記述をめぐる改稿は【資料 3-1-2】でまとめる。「出征」では「学生だけを腐敗から守らうとするのは出来ない」（初出）の下線部は、単行本で「守らうとしても」に変えられ、社会の腐敗と「学生の集团的腐敗」を強調しているといえる。また、「襲撃」では「政府の欺瞞」（初出・単行本）→「政治の欺瞞」（全集）のように、作者は不透明で恣意的な「政治」の操作を取り立てて批判する。

同じ「出征」では軍部に対する批判も書かれてある。「軍が合法的に反抗者を粉砕する」（初出）→「軍が思ふまゝに反抗者を処理する」（単行本）に改められた。それに「八月十日」において、日本の投降を待っている時、「一日も早く」（単行本）投降してほしいという下線の箇所が付け加えられ、時間の緊迫性を強調される。また投降の日を延期している軍部について、「彼等の自己保存といふ生物学的本能のさせるわざである」（初出・単行本）→「彼等の自己保存という生物学的本能のほかはない」（全集）のように、「生物学的本能」という最大な理由が取り立てられた。また軍部の「虚栄心の怪我の功名」（初出）→「負け惜しみの怪我の功名」（単行本）のように、強い権力と自己利益の「生物学的本能」と「負け惜しみ」を有している軍部に対する指摘が描かれる。さらに、天皇の「生物学上の業績」（初出）→「天皇制の経済的基礎」（単行本）に変えられ、たとえ「天皇制の経済的基礎」があるとしても、投降のタイミングを延期するという点から見れば、「天皇の存在は有害」である批判を主張している。

これらの国家や軍部の非を精確に指摘して批判を深めるといふ改稿の意図があると思わ

れ、「八月十日」では「十五日」（初出・単行本）をあえて「翌日」（全集）に改めたのもこの意図を基にしたのでであると推測される。簡略にその文脈を引用すると、

「十三日の『星条旗』は……（中略）

十四日の報道は……（中略）

天皇制の経済的基礎とか、人間天皇の笑顔とか……八月十一日から十四日まで四日間に、無意味に死んだ人達の霊にかけても、天皇の存在は有害である。

その夜おそく大隊書記の中川は日本が遂にポツダム宣言を受諾したことを触れて廻った。……（中略）

俘虜の反応は皆無であった。我々にとって日本降伏の日付は八月十五日ではなく、八月十日であった。

翌日の正午イマモロとオラは玉音放送を聞くために米軍の事務所へ行ったが、ちっとも聞き取れなかったといていた。……（後略）」（「八月十日」 pp.257-258）

「十三日」「十四日」という書き方に従えば、次は初出の書いてあるように「十五日」であるのが考えられる。従って、『全集』では「翌日」に改めたのは文章の簡潔を求めるとかというレトリックの原因ではなく、降伏を延期している軍部の行為に対する一種の批判を示すからだといえるのであろう。

3・2、軍隊への批判

『サンホセの聖母』12編の作品の中で多くの兵士が描かれている。当然なことだが、同僚である同じ階級の低い兵士たちは名前や背景について詳しく紹介された傾向があるのにひきかえ、階級の高い下士官や将校などは常にその階級や職名で呼ばれている。例えば、下士官、軍曹、分隊長、小隊長、中隊長などが挙げられる。この節では主人公「私」の所属している軍隊及びその中で階級の高い長官をめぐる改稿について検討する。

【資料 3-2-1】「暗号手」では「軍隊の性質上出来ない」（初出）→「日本の軍隊の組織では出来ない」（単行本）、「比島に着いた補充兵」では日本軍の残虐について、マニラ市民「悪意に満ちていた」原因の説明にかかわる記述が少し改稿された。改稿によって日本の軍隊の組織の欠点を明らかにし、軍隊や日本兵に対する批判の意識をも抱えていると窺える。

【資料 3-2-2】「靴の話」では下士官である分隊長が兵隊を罵ったり追い帰したりする行為について、「ここに記すに忍びない」（初出）→「いふまでもない」（単行本）のように、語り手の個人的な感情表現が下士官の行為の必然性に変ったというニュアンスが読み取られる。さらに「老練な下士官」（単行本）という一句が付け加えられたのも、兵隊が対抗できない老練な下士官像が呈してある。

また、「俘虜逃亡」では「まつさきに」（単行本）という副詞が付け加えられ、兵器係の下士官の逃げる速さが強調され、「襲撃」では「甚だ出来が悪い」（初出・単行本）→「臆病な」（全集）のように、「出来が悪い」よりも「臆病な」下士官像を取り立てられている。

ところが、「食慾について」では、「我々の小隊長」である木下少尉は名前や生い立ちが

描かれているのである。木下は「市川の方の或る町の袋物屋の主人」であり、「大正の志願兵上りの少尉で」「今度初めての召集である」⁵¹。【資料 3-2-3】「何かの調子で残った場合も蓄へて夜食等とした」(初出) → 「何かの加減で残った場合も夜食のために蓄へた」(単行本)、「彼にバナナを与へる余裕がなくなつた」(初出) → 「彼にバナナを振舞ふ余裕がなくなつた」(単行本) のような改稿がある。引用文の「彼」とは木下少尉のことを指している。「夜食のために」という描写は木下少尉の食慾をより顕在化させる。そして、「振舞ふ」という言葉はただ「与へる」のではなく木下少尉に「ご馳走する」「もてなす」という意味であるため、このような食慾の持ち主である木下少尉を知っている兵士たちと木下少尉との関わり方が示され、異常な食慾を持っている木下少尉と少尉を阿諛する兵士たちのイメージが描かれる。こうした木下少尉に対してやや批判的な描写の一方、彼の長所をも描かれている。「下士官達が、蔽ひ難い焦燥と不機嫌を示す中で、彼は平気であつた。」という記述では、「達」が付け加えられ、作者は木下少尉を他の下士官と区別しようとした意図が見られる。それに、「祖国の観念が素朴で軍隊のシニスムで毒されてゐない」が単行本で語彙のレベルで「愛国の観念が軍隊のシニスムで毒されてゐない」に改められ、「愛国」の観念が明らかにされ、また「素朴」が除かれたことで「軍隊のシニスム」が強調される。木下少尉を再評価する作者の意図も改稿から見られる。

【資料 3-2-4】 応召将校と師団長に関する記述で、「鄭寧」(単行本) と「下賜」(全集) が付け加えられた。応召将校の優しいイメージを与え、師団長の高貴で高い身分を表したのである。下士官の描写と異なり、この二箇所から下士官より身分高い長官に対する好意があると感じられる。

以上のように、軍隊における比較的階級の高い下士官や将校のイメージをめぐる改稿を検討した。同じ上官といつても醜い下士官とそうでもない下士官がおり、両者の対比を通して醜い下士官像と取り立てると思われる。さらに改稿によって、その批判を深めていくといえる。

「俘虜逃亡」では日本兵がフィリピン人の俘虜を扱うことに関する改稿が【資料 3-2-5】の通りいくつかある。俘虜に対する下士官の虐待の行為について、「確実であつた」(初出) が推量の表現である「らしい」(単行本) に変えられた。ここでの「らしい」の用法をいうと、恐らく「確かな伝聞などに基づく推定を表す」⁵² 意味であろう。何故なら、「或る日私は彼が「飢しい。飢しい」と連呼しているのを聞」き、「衛兵司令の下士官は「黙れ」といつて俘虜の頬を打つた」⁵³ という下士官が俘虜に対する虐待の行為は描かれており、しかも「私」に目撃されるのである。「らしい」に改めたのは恐らく「私」は目撃せずに聞いた話を指しているのではないかと推測する。

また「良心を咎めない」(初出) → 「気の毒とは思はない」(単行本) とあるように、フオークを添えるかどうかのことであるが、この段落を書いた時に作者が「良心」の問題を

⁵¹ 同注 38。p.360。

⁵² 同注 46。p.2926。

⁵³ 同注 38。p.372。

意識していたことがいえるのであろう。或いは「知らない」のに「それは私はいうことが出来ない」⁵⁴と言った「私」の行為について、「圧制者として、多少の思わせぶりを楽しんだわけである。」(初出) → 「私も多少圧制者の思はせぶりを楽しまずにゐられない」(単行本) という、「圧制者」であることを楽しんでいると見えるように改稿され、「圧制者」である「私」の行動を捉えようとする。また、「私」が俘虜に残飯の量を増やしてやろうとする時、炊事兵に皮肉に質問され、初出では「私」がその原因について詳しく説明されているが、単行本では「しかしそれとこれとは全然別の問題である。」という一句でまとめられ、原因の説明が却って不明確になってしまった。この場面の改稿から見ると、「私」を含めた日本兵が俘虜に対する扱いは、殺さずに「漫然抑留」したり残飯の量を増やしたりするといういい面と、「圧制者の思わせぶり」を示したり、自己弁護的な姿勢でありすぎることを避けたりして、公平的な描き方を取っていると思われる。作者は極めて気をつけて日本兵の俘虜に対する扱い方を描いているといえる。

3・3、内省的自己批判

『サンホセの聖母』の中で日本兵の俘虜に関する描写は「靴の話」と「八月十日」二編がある。【資料 3-3-1】「靴の話」では「現役が多いレイテの俘虜は鮫皮の靴を珍しがり」という記述において、下線部の「現役が多い」が単行本で付け加えられ、日本兵俘虜に対しても「現役」であるかどうか、言い換えれば「補充兵」であるかどうかという作者の意識をかなり強いと思われる。俘虜収容所で「原則として自分の意見を主張しない」(初出) → 「原則として自分の本当の意見はいはない」(単行本) のように、「私」はただ自己主張をしないだけでなく、「本当の意見」を言わず、言い換えれば建前や嘘までも言い、俘虜収容所の自分の姿を隠せず呈している。

また「八月十日」では「俘虜事務所から入った」(初出・単行本) のではなく「俘虜事務所で得た」(全集) 情報を「友軍のそれを誇るような調子で語」⁵⁵り、「自慢」して言い廻っている大隊書記中川の姿が描かれている。また、日本が降伏したことを知って、米軍に外業を免除してもらいたい広田小隊長の言葉について、単行本では「これは本音らしい」と加筆される。英語に翻訳された玉音放送の内容を聞く場面についても、「頭を下げずに聞く者」(初出・単行本) という描写は俘虜達が意識的に頭を下げないというニュアンスが感じられるが、改稿された「下げるのを忘れる者」(全集) は意識的に故意のためではなく、自分のすべき振る舞いを忘れてしまったというニュアンスを含んでいるのではないかと思われる。

以上の三つの箇所から、米軍を友軍と見なしている俘虜と、国の存亡より労働が免除されるかどうか気にしている俘虜と、天皇の玉音放送を聞くとき頭を下げることを忘れた俘虜達という、自己利益中心或いは日本人である自己を喪失し墮落した俘虜像が強調される。

⁵⁴ 同注 38。p.367。

⁵⁵ 同注 38。p.242。

同じ「八月十日」において、戦争準備中を反省する箇所は三回も改稿された。【資料 3-3-2】「そのため生活上の恩恵を受けてみたもの」（初出）→「そのため生活の恩恵を受けてみたもの」（単行本）→「喜んで恩恵を受けていたもの」（全集）のように、『全集』で「喜んで」を用いるのは後の「身から出た錆」という箇所と対照をしている。「喜んで」「戦争準備中」の「恩恵を受けていた」ため、或る意味で戦争の協力者・共犯者であり、戦争を負って被害を受けた今は「身から出た錆」とあるように、文句を言ったり自分を被害者と思ったりすることが禁じられている。それに、俘虜の立場で敗戦を迎えることについて、単行本では「しかもそれさえ俘虜だからこそ泣く余裕があったのである。」という一文が付け加えられた。「身から出た錆」と「俘虜だからこそ泣く余裕があった」の描写によって、「私」はいかに非情に自己を反省しているのかがわかるであろう。

以上のように戦争、国家、軍部、軍隊の上官への批判に関わる改稿があり、「私」及び「私」を含めた兵隊や日本兵俘虜への反省と批評をめぐる改稿もある。作者は改稿によって批判の内容をより正確に捉えるようにしている一方、批判性をも深めていくとわかる。

ちなみに、前述したように、この節で考察した「襲撃」の改稿は『全集』の段階で中心に行われた。それに、「八月十日」の改稿の内容を見ると、初出から単行本へ、さらに『全集』への過程において、国家・軍部への批判と自己批判にかかわる改稿を通して、批判性を次第に深めていくという作者の意図が窺える。

4、感情にかかわる改変

4・1、欠乏のある現実に対する心理表現

「靴の話」で最も多く改稿されたのは、「私」が「新品の靴」を入手した後、「松本の分隊の兵士が（中略）交渉に来た」時に、「私」の心理に関する描写のところである。「私」の靴もぼろぼろな状態にあるが、或る日松本という僚友が死んだ直後、彼の盗んだ「新品の靴」はまだ「返納」されていないうちに外に放置され、「私」に持ち帰られる。

しかしまもなく松本の分隊の兵士が交渉に来る。その時「私」が病床についているので、分隊長は彼らをからかって罵って追い帰してくれる。「五分とはかからなかった」この間、「私」の心理を描く方法は「幾通り」もあると作者は述べ、その「幾通り」の方法を紹介する。⁵⁶【資料 4-1】

最初の段落は靴を所有したい自己のために弁解する内容で、言いわけが二つ取り上げている。初出の「靴は火の塊となつて」という箇所が削除されたのは、恐らく靴によって自分の当時の状態を比喻しながらも、「弁解」とはならなくて、削られたからであろう。

同じように、次の心理描写は松本の分隊の兵士が罵られる時に、自分の態度を「シニズム」として表現するために、「一種陰惨な快感を感じていた」と「人並みでいられる」と

⁵⁶ 同注 38。pp.350-351。

し、後に『全集』で「冷酷でいられる」という表現で十分に表す。ところが、初出誌でその直後に続く「死ぬ」「懼れ」、「靴を穿く希望」という句は、前二句と比べて「シニシズム」的なイメージが弱くなってしまっているので、削除された。最後の「僚友は私に悪くはしない」箇所は、最初の段落の「分隊の支持」と結びつけることができるので、そこに移されたわけである。

第三段落は自分の本当の心理を「誇張」せずに「正確」に描写すべき段落として、「何も考えていなかった」、時間が「早くすぎ去つてくれればいい」という内容で構成する。ところが、「病人の悲哀」という句が削除された。恐らくそれは通俗的な感情だと思われやすく、より正確さに徹するためであろう。

そして「かういふ情緒だけ（後略）」という段落は前段の「正確に描いたとは感じない」に理由を説明する役割であるが、単行本で完全に削られてしまった。この段落を削ることによって、次の「結局靴だけが事実」という段落を強調する働きを持たせるのではないか。何故なら、いくら説明しても「心理」を正確に捉えて表現するのは困難であり、現実に存在する「事実」が心理を左右するキーポイントであるので、それを描くしか正確に表現できないからである。このような大幅な改稿を通して作者はその一瞬の心理を正確に捉えようとする意識が見られる。

引用文の最後の段落は初出の段階において作者の文学観を示しているといえよう。全部削られたのは作者の文学観が変わったからではなく、文章が説明的にならないように、しかもその箇所が戦場における事実とは殆ど関係ないので、省いたからであろう。

以上のように、単行本において作者は執拗に細かい改稿を通して、心理の描き方を重視し、誇張せずシニシズムにならず、正確にその「五分とはかからなかった」間における「私」の心理を描き出そうとする。その上、心理描写の困難さを提起し、それを規定している「事実」の決定性を一層強調する意図が感じられる。

4・2、死に臨んだ感覚

【資料 4-2-1】「出征」では<出征>という事実を決められる前に「私」と僚友の危惧が描かれ、単行本では「不安を感じた一人の兵」の下線部が付け加えられ、その事実をまだ知らされていない僚友の姿を見て「彼等の様子を見て、朝の事件はやはり私の喉につかへたまゝであつた」という「私」の反応も付け加えられた。出征の可能性が高いという事実に対して、兵士の不安や口を利けないほどの恐れが描かれている。そして、出征に強いられた「私」の苦痛と辛さを表現しようとする作者の意識は改稿からも見られる。例えば、「出征」では「我々」（初出）→「残留者」（単行本）、「我々もまた彼等と同じ服を着るつもりだつた」（初出）→「我々だつてその服を着るつもりだつた」（単行本）のような改稿がある。また「海上にて」では単行本の段階で「孤独な囚人、兵士たる私」の下線部が付け加えられ、「行楽の人を輸送船上から見る我々の胸は痛んだ。」（初出）→「（前略）見るのは辛い。」（単行本）に変えられた。出征に強制されていない人を見て、出征者である「私」の心の感覚は種々の面で捉えられて表現されているのである。他には、例えば「海上にて」

では「戦闘の必要で固めたような」「護衛駆逐艦」と「水兵」⁵⁷を自分の乗っている「輸送船」と対比する記述がある。三つの改稿の段階において、「頼もしく感ぜられる」護衛駆逐艦と「不安」な輸送船との落差が強調され、出征者の＜不安＞な姿の描写も工夫されている。

【資料 4-2-2】死に臨んでいる「私」自身の感覚や状態がいくつかの作品で描かれ、それをめぐった改稿がある。「出征」では「死の予感」にかかわる単行本の段階で改稿された箇所が多い。「欲望の感じる余裕を与へない」（初出）→「欲望の生じる余裕を与へない」（単行本）、「遁れられないことを観念した」（初出）→「どうしても遁れられないと観念した」（単行本）、「私には死と戯れるほか、生きる道はなかつた」（初出）→「私には死と戯れるほかすることがなかつた」（単行本）などのように、＜死＞の近づきを強く実感している「私」の感覚と＜死＞と向き合わなければならぬ状態が取り立てて描き出される。

「死の予感」を強く感じている一方、「自分の無意味な死を甘受する」（初出）→「死ぬとは限らない」といふ一縷の望みにすべてを賭ける」（単行本）のように完全に改められたところから見ると、「私」はなおも＜生＞への「一縷の望み」を抱えていることがわかる。

「海上にて」では死の危機をあまり感じ取られない順調な航海に対して、「前途にかなりの覚悟をしてみた我々として、少しあつけない」（初出）→「（前略）我々としては、むしろあつけない」（単行本）、また「お蚕棚」と呼ばれ狭い門を有している輸送船の船倉に関する描写が改稿される。「比較的運のいい方」（単行本）を付け加えることによって、「絶対に助かる見込みはない」⁵⁸比較的運の悪い方がさらにこの「お蚕棚」の下の船倉にあることを暗示している。「ふと目前の危険に対して少しでも有利に身を処するのを避けることは出来なかつた」（初出）→「やはり目前の危険に対して、少しでも有利に身を処する気になつた」（単行本）、「あと一晩といふところを迂闊にすごして、無意味に死んではつまらない」（初出）→「あと一晩といふところで迂闊に死んではつまらない」（単行本）のように、＜生＞への「一縷の望み」を抱えているだけではなく、実際にどのように＜死＞から逃れるかという兵士の心理や振る舞いも細かく描かれている。こうした＜死＞への強い予感と＜生＞への「一縷の望み」とを有している兵士の姿に関する描写は作者の強調しようとする主題でもあるといえよう。

さらに、戦地に着いた後「比島に着いて補充兵」では「私」が「宗教的事物に感銘を受ける」原因について単行本で文と文を順番的に改められた。「無神論」である「私」は「死を控えた兵士という状況」にあるため、「戦闘に関しない」外界に対する「無関心」が「却って、普段私の意識の見棄てていたものを拾い上げるかも知れぬ」という自己分析の段落である。「宗教的事物に感銘を受ける」のほか、「サンホセの聖母」では僚友の死について「感動したことはない」（初出）→「動かされたことはない」（単行本）、それは「同然の結果が一つ起つたにすぎぬといふ判断が私の心を凍らせた」（初出）→「自分と同じ原因で死ぬ者に対して同情を失つた」（単行本）とあるように、実は原因追求と分析の内実について

⁵⁷ 同注 38。p.432。

⁵⁸ 同注 38。p.425。

それほど変わりはないが、死を控えている兵士の外界の物事の受け止め方が形成された原因を、より論理的に解釈し描き出そうとしていることが読み取られよう。

因みに、「海上にて」では「私があたりの眺望を賞し、「こんな綺麗な景色を見た以上、死んでも本望だ」といふと」という一文は、単行本で下線部が変えられ、波線部が削られた。「綺麗な景色を見た」時の感じは前述した<歓喜>と<幸福>に呼応でき、幸福感と死の覚悟を矛盾した二つの感じを抱えている「私」の内面についても明白に説明されている。単行本以降あえて削除するのは、恐らく読者に景色を賞する「私」のイメージを与えるだけで、「死んでも本望だ」という考え方を隠したためであろう。

4・3、緊張感と恐怖感の描写

【資料 4-3-1】「海上にて」では水柱が突然上がって立ち続けることについて、「無論潜水艦を探知して（後略）」という状況の説明は単行本では順序が変わり、「かういふ空想が浮ぶのが、そもそも潜水艦恐怖症の一症状であるが、実は水平線下に敵がゐる方がどれだけこわいかわからない」（単行本）とあるように、潜水艦に対する恐怖が明示されている。

また、「襲撃」では警戒して敵を見張っている「私」の緊張感や恐怖感が描かれている。同じく『全集』の段階では改稿が多く、「現はれるべき」（初出・単行本）→「いつ現われるかわからない」（全集）、「対象なぞ誤知する必要もない」（初出・単行本）→「対象なぞ誤認する暇もない」（全集）、また「怪しく動くものがあつたらすぐ射つ」（初出・単行本）の「怪しく」を取ったところで、敵の出現の不確定さと直ちに敵を認知しなければならない反応が描き出され、緊張感や恐怖感がより強められると思われる。また、「一瞬敵を予期しながら、私の眼に実際映った映像はまさに日本兵」（初出・単行本）→「敵を予期した私の眼に実際映った映像が、実は日本兵」（全集）のように、「予期しながら」→「予期した」、「まさに」→「実は」という改稿の内容は細微と思われるかもしれないが、「私」の「幽霊を見たような無気味さ」、「無気味」な感覚の真の原因をより近づけようとする作者の意図が窺えるのであろう。

感覚の描写のほか、そういう緊張や恐怖の感覚を漂わせる場面の描写をめぐった改稿は「西矢隊奮戦」一文で見られる。【資料 4-3-2】ゲリラを討伐する場面で、兵隊の行動に対して中隊長の苛立たしい様子について、「振り返り、焦立たしげに手を振って兵を急がした」（全集）という箇所が改められたことがあり、「呼んだ」（初出）→「叫んだ」（単行本）、「到頭自分で」（初出）→「我慢出来ず自分で」（単行本）などの改稿もある。また兵隊を促している発話者の「下士官」が付け加えられた。中隊長と下士官の焦燥が兵隊の動作の鈍さと訓練の不足と対比されている。ところが、中隊長の後姿を見て、「我々の危惧を踏みにじるやうな歩度であつた」（初出）という描写が単行本で削られた。中隊長の恐れないように見える姿と兵隊の「危惧」が明白に描かれているこの記述を削る必要がないと思われるが、場面全体のイメージを築くため、「危惧」という言葉を用いないことにしたのであろう。この場面における改稿は長官たちの焦燥と兵隊の危惧をより明確に描き出し、緊張な討伐の場面を呈していると思われる。

この場面に次ぐ「屍体」の描写があり、改稿され特に削除された記述がある。【資料 4-3-3】屍体を見て「辛うじてそこに眼を返してはまたそらしながら見た」（初出）、「とまれこの屍体を見た私は二度と「海行かば」を歌はないであらう。」（同）という箇所が単行本で全部削られた。また、屍体を食うためこずえにとまっている多数の鳥を発見し、「私」は銃をあげ鳥を覗く時、中隊長に「撃つな」と叱られた場面で、「私とても撃つつもりはない」（初出）という銃を上げる動機を説明する記述と思われ、つまり、銃で鳥を撃つのではなくただ脅かして追い払うつもりであろう。しかし、この記述は『全集』で削られた。そして、屍体を埋める描写について、「彼等の或者は屍毒に当らずにはいなかったであろう」（初出）の記述は、単行本で下線部が「或る者は」に変えられたが、『全集』ではこの一文は全部削られた。「屍体」に関して比較的初出のほうが多く描写されている。これら「私」の「屍体」に対する行動や感想が削除された箇所を見ると、「人間が三十秒しか眺め得ない映像について、読者に数分の注意力を強いるのは間違いではあるまいか」⁵⁹とあるように、作者は「私」の感情や考えを返って抑えるという改稿の動機があるのではないかと思われる。

4・4、妻への愛情の表現

「出征」一文で兵士になった「私」と妻との別れは一つ重要な場面として描かれ、改稿の跡も見られる。【資料 4-4】妻が「ぢつとこつちを見てみた」（初出）→「ぢつとこつちを見詰めてみた」（単行本）、「こゝへ来た」（初出）→「やつとこゝまで来た」（単行本）、また別れた後「妻は最早私を見ず、少々仰向き」（初出）→「妻は最早私を見ず、渴く人が水を飲むやうに仰向き」（単行本）のように、妻の行動をより細かく描かれて、妻が「私」への愛情が深まれていると感ぜられる。

それに対して、「私」の沈黙に関する描写が工夫されている。「小説にあるやうな優しい言葉をかける必要を認めない」（初出）→「（前略）必要を感じない」（単行本）、「私の愛情の種類について彼女に納得の行く言葉」（初出）→「或ひは嘘でもいゝから、彼女の納得の行く小説の言葉」（単行本）の改稿がある。さらにほぼ全面的に改められた箇所は、「きつと帰って来るから、心配しないでもいいよ」と「私」がいった時、夫婦両方の異なっている受け止め方である。単行本では「私の愛情の最後の表現」という一句が付け加えられ、それは前に描かれた「私」の無言と対照的であろう。妻への愛情をどうしても言葉で表現できない「私」の内面が描かれ、それを表現しようとしても表現できなかった辛さが現れている。そしてそれは、<出征>のため別れなければならない現実の残酷さ或いは「悲惨」⁶⁰さを強調しようとするからだと考えられる。

夫婦の間の愛情は「千人針」の場面の改稿からも窺える。あまり綺麗に出来ていない「千人針」に対して、単行本で「それでもよくこれだけ集められたものだと感心したが、彼女は上京の満員列車の女客を尽く煩はしたのである」という記述が付け加えられる。「かねてかういふ迷信を好かなかつた」「私」の「感心」と「女客を尽く煩はした」妻の行動が書か

⁵⁹ 同注 38。p.380。

⁶⁰ 同注 38。p.450。

れており、ここでお互いに対する深い感情が感じられる。

また、「我々が会へたのは殆ど偶然であつた。」(初出)の「殆ど」は単行本で「全く」に変えられ、思いがけない出会いの「偶然」を強調する。そして、出会った瞬間の場面では、辛うじてここへ辿り着いた妻の姿は「十間以上離れたこゝからもよく見てとれた」(初出)→「十間以上離れてもよく見てとれた」(単行本)、「私の姿に「死」を見た」(初出)→「變り果てた私の姿に、「死」を見た」(単行本)の改稿がある。初出ではそれに次ぐ文が、即ち「私は機械的に立ち上り近づいた」という「私」が妻を見た時に妻へ近づく様子が削られた。次の段落は「私」と妻とのやり取りの場面になり、前述のこれらの改変によって、不意に夢を見るように妻と出会った瞬間が取り立てて描いているのではないかと推測される。

考察してきたように、感情にかかわる改変は大岡昇平の改稿において重点の一つであることがわかる。それに、ほぼ初出から単行本への段階で中心に加筆訂正された。その中で心理表現、死に臨んだ感覚、戦闘状況における緊張感と恐怖感、妻への愛情の心理表現などのように、「私」の内部に関わる改稿が多い。心理描写の困難さを提起しているにもかかわらず、作者は執拗に細かい改稿を通してリアルに「私」の心理を描き出そうとしている。

5、幸福の意識

<出征>という現実から現れてくる問題の一つとして、幸福や不幸という問題が提示されているとわかる。【資料 5-1】は他人の幸福と不幸に関する記述で、改稿された箇所がある。「出征」では「私」は出征のため、子供が学校教育の学資を失ったことについて、「学生の集団的腐敗より免かれ得るだけでも利益であらう」(初出)とと思っているのに対して、単行本では「学資を失ふのはたしかに一種の不幸であるが、そのため却つて学生の集団的腐敗より免かれ得るならば、これは望外の俸せかも知れない」と思っていることになる。注目したいのは両方とも「社会の腐敗」「学生の集団的腐敗」に対する批判を一貫している一方、初出の段階では「利益」という<損><得>の観点から、子供の教育を捉えるが、単行本の段階では「不幸」「俸せ」の観点から捉えることである。また「比島に着いて補充兵」では「説教するイエスの像」(初出・単行本)→「祝福するイエスの像」(全集)のように、前者は原罪や罪の赦しなどの教義的な面で戦地でのイエスの像を描写しているが、後者は幸福を祈るという面でイエスの像を解釈する。これらの改稿から作者が他人を「不幸」や「俸せ」という立場で見ているのではないかと思われる。

この立場に立っている描写にかかわる改稿もある。「食慾について」の結びとして、すでに死んでしまった僚友たちが生きていた時に幸せであればいいという願望が表される記述がある。改稿された部分は一層と考えられよう。「ただ私が彼等の幸福を願つてゐるから」(初出)はやや客観的に描き僚友と距離を置くという感じがあるのに対し、「私が彼等が幸福であつてくれればいゝと思つてゐるから」は主観的に「私」の願いを強く表現するとい

う感じがある。また「サンホセの聖母」では一人フィリピン人の女性の顔に幸福を見たという場面がある。「それは私の兵士の意識では眼を蔽ひたくなるやうな、日常的幸福の表出があつた。/かうした露骨な感情的表出の習慣はクリスチャニズムの結果であらう。」(初出)という描写の中で、その女性の表している幸福な表情を「日常的幸福の表出」(初出)→「幸福の表」(単行本)→「幸福の表出」(全集)に改めた。そういう表情をリアルに呈しようとすると思われる。そして、波線部は単行本で全部削られた。「私」が「眼を蔽ひたくなるやうな」「見たことがない」「幸福の表出」について、作者は本来の理性的客観的な分析と解釈を諦め、それを見て「私」が感動したことを呈しているといえよう。

「私」自身に関する幸福と不幸についての改稿は【資料 5-2】の通りである。「比島に着いて補充兵」では潜水艦の脅威に脅かされていた「私」はフィリピンに着いてから「歓喜」と「幸福」を感じているという場面が描かれている。「安堵と喜びの甘い感覚」(初出)→「甘い安堵と喜びの感覚」(単行本)、フィリピンの風物が「体の条件と相まって、私を歓喜に近い状態に導いた」(初出)→「私の体を歓喜に近い状態においた」(単行本)の改稿がある。無事に平地に着いた<歓喜>と美しい風物のもたらした<歓喜>の表現が工夫されている。そしてこの<歓喜>の感覚は次に描かれる<幸福>の感じと繋がっている。「私の生涯の最も幸福な瞬間」(初出)→「私の生涯の最も幸福な瞬間の一つ」(単行本)、「一種の幸福感」(初出)→「幸福の波」(単行本)のように、数多くの「幸福な瞬間の一つ」を提示し、「幸福の波」というメタファーでより具体的に表現されている。

一方、兵士である「私」の<幸福>感の裏に<不幸>が潜んでおり、この作品においてそういう感覚についても描かれている。「最大の不幸」(初出)→「遂に決定的な不幸」(単行本)、死の前に幸福を感じたことは「それもいいかも知れない」(初出)→「それによかったかも知れない」(単行本)→「それでよかったかも知れない」(全集)に改稿された。<幸福>感と<不幸>感が拮抗して矛盾して並立している「私」の内面を、作者は表現しようとしているであろう。

「八月十日」では敗戦を知り祖国の滅亡を痛感している「私」の内面について、「身を不幸としみじみと感じた」(初出)→「身の不幸をしみじみと感じた」(単行本)の改稿がある。フィリピンに着いてから<幸福>感と<不幸>感を感じた「私」は、最後祖国の滅亡に遇う「身の不幸」だけ描かれ、<幸福>感と<不幸>感の変化がこの二編から読み取られるのではないと思われる。さらに言えば、『サンホセの聖母』は「幸福」や「不幸」の基調で一貫していることといえるのであろう。

以上のように、幸福の記述にかかわる改稿も多くあるとわかる。ほぼ単行本の段階で改稿された。幸福や不幸に対する考え方を新しく付け加えたり、それに関する描写を加筆修正を施したりして、作者は幸福や不幸に対する感覚や観念をより忠実に捉えようといえる。

四、結び

戦場から帰還した大岡昇平は強い表現欲求と様々な複雑な感情を抱えていた。そういう内的動機のため戦争小説を数多く創作したのみならず、戦争への関心や批判をもって生涯を終えたのである。初出から単行本への『サンホセの聖母』の成立を考察してみたら、作者は長編小説として創作する意図がなかったとわかる。それに、『俘虜記』『武蔵野夫人』という同時期の作品と比べて、出版側や購読側や評論家側は『サンホセの聖母』を重視していなかったと推測される。にもかかわらず、『サンホセの聖母』の改稿と編集経緯からみると、作者はこの短編集をかなり重んじていたといえる。

『サンホセの聖母』12編は時系列で並べられ、「出征」から始まり「八月十日」で終るという＜主人公の戦争＞の起点と終点を内包している戦争体験の系譜が見られ、主人公の戦争体験を一つまとまりの形で呈している作品といえる。つまり『サンホセの聖母』は『俘虜記』のような一つの長編小説や連作作品集でなく、単なるその時期に発表した12編の短編を集めた短編集でもない。むしろその両者の間に位置づけられる＜短編集＞である。この点はむしろ異色だといえる。

12編の改稿からも、作者は主人公「私」の心理の描写と人物像の構築に関して、非常に執拗に工夫していることが見られる。また、情報と批判の内容の正確への追求も窺える。さらに、＜幸福＞の象徴を持っている＜サンホセの聖母＞という題名がつけられたように、『サンホセの聖母』が編集された時点において、幸福の観点は確立されたともいえよう。出版された当時に重視されえなかったが、同短編集は大岡昇平の初期の創作活動において決して粗末にできない作品ではないかと思われる。つまり、『サンホセの聖母』は大岡にとって初期の作品群の中でそれなりの特殊性と重要性をも持っている短編集だといえる。

第二章 『サンホセの聖母』の考察

一、短編集としての構成

改稿の考察からわかるように、その12編作品を短編集『サンホセの聖母』でまとめた時、大岡昇平はかなりの編集意識を持っていた。「作品の配列順序も、作者の指定によつたもので、事件の進行に沿つてゐる。」⁶¹という解説を参照すれば、単行本の『サンホセの聖母』の作品は事件の進行に沿い時系列で配列されているとわかる。重複しているが、単行本の目次は「出征」「海上にて」「比島に着いた補充兵」「サンホセの聖母」「ミンドロ島誌」「暗号手」「襲撃」「俘虜逃亡」「西矢隊奮戦」「食慾について」「靴の話」「八月十日」という順番になっている。【表5参照】

これらの作品はさらにいくつかのグループに分けられる。最初「出征」「海上にて」「比島に着いた補充兵」は主人公「私」の戦地へ出征した経緯であり、続いて「サンホセの聖母」「ミンドロ島誌」は戦地の人文地理の紹介である。次の「暗号手」「襲撃」「俘虜逃亡」「西矢隊奮戦」「食慾について」「靴の話」六編は駐屯地と山中の露营地での兵士たちにまつわる話である。最後の「八月十日」は俘虜収容所で敗戦を迎えた顛末である。

より詳しく検討して行くと、「出征」「海上にて」「比島に着いた補充兵」三編は主人公が戦場・駐屯地に赴むしていくプロセスを描いたものである。「私」の出征することが告げられた時の心情と、家族との別れの経緯と、輸送船に乗って死の予感を覚えることは「出征」の主題である。そして船が戦地に向って航行している時、潜水艦の脅威に対する不安や恐怖と「私」の苦痛、及び二回の潜水艦攻撃事件が「海上にて」で描かれている。続いてフィリピンに上陸してから駐屯地のサンホセまでの移動は「比島に着いた補充兵」で綴られる。上陸した「私」の安堵や幸福感、また辺鄙な駐屯地に行く寂しい感情と、異国の風景の描写が中心となっている。部隊の進行と共に、＜出征＞という死に強いられた「私」の感覚がこの三編で一貫しているのである。

四番目の「サンホセの聖母」と五番目の「ミンドロ島誌」は、「比島に着いた補充兵」を継いで戦地の歴史と地理、また戦地における住民の姿と、兵士と住民との交流、言い換えれば戦場での＜日常＞が描かれている。そこで圧制者である日本兵士と住民の間に、「政治」のため見えぬ越えられぬ壁は存在していることが指摘されるにもかかわらず、人間の＜幸福＞をも強調される。

続いてそういう＜日常＞の描写から一転して、軍隊中の出来事が物語の中心となる。「私」の暗号手として部隊での勤務と戦闘配置につく経験は「暗号手」「襲撃」で描写されている。同時に暗号手代理の中山と、勤勉な衛生兵小林という僚友も描かれている。前者は、社員の悪知恵を用いないため軍隊で極めて不利な状況に陥ってしまう「私」と異なり、それを使って軍隊で出世した。ところが結局彼はそういう知恵の犠牲者であったと指摘される。後者は、戦闘配置について「非人間的な状態」になってしまう「私」と対照的で、死ぬ直

⁶¹ 同注36。p.201。

前に「天皇陛下万歳」といった。一つのテーマを元に「私」と僚友を両方取り上げて、対照しながら描いていくのがこの二編の共通点であろう。

そして「襲撃」とその次の「俘虜逃亡」を対照してみると、前者は小林が衛生兵として配属されてきたところから物語り始めるが、後者は一回目のゲリラ討伐の八月上旬から始める。一方、もし中心となる事件の発生時間を見れば、「襲撃」されたのは「十一月中旬」⁶²で、「俘虜」が「逃亡」したのは「十月二十六日夜」⁶³であるため、事件の時間は実は目次と逆である。こうした配列は作者の編集意図、さらに言うところ創作意図が潜んでいると考えられる。それは、創作時期に近い「暗号手」と「襲撃」は作者の創作意図も近く、「私」の体験のほかに二人の僚友をも軸にして描いていくことである。一方、同じように創作時期も近い「俘虜逃亡」とその次の「西矢隊奮戦」は各々「サンホセ駐屯中二度ゲリラ討伐」⁶⁴と米軍上陸後の敵情偵察や潜伏斥候やゲリラ討伐という、米軍上陸の前後の部隊行動を物語りの中心にしている。まず部隊行動を時系列で全体的概要的に紹介して、その中で代表的なエピソードを取り上げて描いている。こうした初出の時の作者の創作意図は十分に考えられ、そのまま単行本の編集においても反映しているといえる。

「俘虜逃亡」は二回目のゲリラ討伐の経緯と、その討伐で捕まった三人の俘虜をまつわる出来事を描いている。特に部隊の俘虜に対する扱い方と俘虜の逃亡と俘虜の釈放である。そこで「私」の部隊は一般に知られた日本軍のやり方とは違っていることが読み取られ、「その年初めて召集された補充兵」⁶⁵の緊急時の対応ぶりも窺える。「西矢隊奮戦」では「我々のような兵隊をまかせられた中隊長は全く気の毒であった」⁶⁶とあるように、兵隊の戦闘ぶりは一層リアルに描かれている。そこで、緊張と恐怖を抱えていた感じと、屍体を見たり奇妙な事件と会ったりするというような異常な体験が述べられている。

そして「食慾について」と「靴の話」は各々<異常な食慾>と<軍靴>というキーワードで物語を一貫している。人物の描写や時間の流れに対する意識をもとにするというより、そのキーワードを軸にして、それにまつわる話を中心である。キーワードの一貫性は他の11作より強いと思われる。そのため、六編の戦場物で最後に置かれたわけであろう。食糧の供給の状況に関わらず、戦争・戦場という異常な環境に置かれて、異常な食慾を有している二人の僚友が「食慾について」で描かれている。「靴の話」では粗雑な靴であり不足している靴のもたらした軍隊の「事実」が強調され、そういう「事実」が兵士の心理を決定していることを指摘される。

特に「靴の話」は物語の内容を出征から俘虜収容所までの長い時間に渡っている。それに次ぐ「八月十日」は主に俘虜収容所での話しである。初出の時「靴と食慾」という題名のように、「靴の話」は本来「食慾の話」の前に置かれたが、単行本の時には逆になった。恐らくこれも作者の編集意識である。「靴の話」は俘虜収容所の話が現れるため、「八月十日」と結びつくことができる。「八月十日」は昭和二十年八月六日から十五日にかけて原爆

⁶² 同注 38。p.480。

⁶³ 同注 38。p.368。

⁶⁴ 同注 38。p.364。

⁶⁵ 同注 38。p.369。

⁶⁶ 同注 38。p.381。

や降伏といった出来事を描いており、そこで「生物学的な感情」をもって投降を延期している軍部の「自己保存」を批判している。巻末に置かれた「八月十日」は、「日本が敗けたってことは、我々が帰れるってこと」とあるように、一つの帰結であると同時に一つの始まりである。また巻頭の「出征」と呼応している。「出征」の「私」は「感傷の涙」を流して「死の予感」と戯れ、戦争の起こった原因と祖国について考えている場面がある。一方、「八月十日」の「私」は「祖国の滅亡に遇わなければならない身の不幸をしみじみと感じ」ながら、「快かった」「涙」を流している。同じように敗戦した祖国を考え、また降服を延期している軍部を批判するに至る。

以上のように、『サンホセの聖母』という単行本の構成を分析した。これはただの短編集ではなく、初出の時も単行本を編集した時も、ある程度計算されて発表された作品と作品集だと推測される。同時期の他の単行本と対照してみると、前述したように『俘虜記』は最初の成立において三回の刊行を経て、現在目にする『(合本) 俘虜記』になり、やや複雑な成立経緯を持っている。しかし、1952年『(合本) 俘虜記』が出版されて以来そのまま定着した。連作というよりすでに一つの長編小説になっているといえる。『俘虜記』は全部13章があり、中の11章が俘虜収容所における日本人俘虜の生活や姿を中心に描いている。それに対して、巻頭文「捉まるまで」は「私」の戦争体験及び捉まった経緯であり、巻末文「附西矢隊始末記」は記録風で部隊の行動を書いた作品である。この二編は作品内容の性質上『サンホセの聖母』に近い。

『野火』は雑誌『展望』の連載が終わったら、長編小説として単行本が刊行される。レイテ戦を背景に孤独な敗兵の彷徨と主人公「私」の狂気を描いている。作品の主題からみれば、もちろん「私」の出征とサンホセでの駐屯生活を中心とした『サンホセの聖母』と異なっている。また戦後日本社会を背景にした恋愛小説の『武蔵野夫人』は、『サンホセの聖母』と作品の内容の性質を異にしていることは言うまでもない。

次は単行本『サンホセの聖母』の世界をより詳しく検討していきたい。

二、個々の短編の内容の多様性

1、死地に向っていく「私」の心理変化

改稿において検討したように作者は死に臨んでいる「私」の感覚と心理を様々な面で捉えている。出征の兵士の不安や死への強い予感と意識にかかわる改稿がある。しかもそれはほぼ「出征」「海上にて」「比島に着いた補充兵」三編の共通した改稿の傾向である。この節でさらに死地に向っていき、死と向き合わなければならない「私」の心理について、この三編ずつ検討していきたい。

1・1、出征という事実には蔽われる感情——「出征」

古兵の不謹慎で洩らした話から、「私」は前もって出征の現実を知る。後に教官の知らせではさらにこの事実を確認する。この時「私」の心理に関する描写は以下の引用文である。

「衝撃は例えば我々の体を通り抜けたようであった。それは我々が除隊の喜びの底に漠然と感じていた危惧で、全然不意を突かれたものではなかったが、膝に力が抜けたように感じ、口を利くことは出来なかった。」（「出征」 p.438）

「それから起床まで不寝番の短い残りの時間、我々は互いに口を利かなかった。口にするのが恐ろしい問題だったのである。／古兵の間違いであればいい、きっと間違いに相違ない、というのがやはり我々の唯一の希望であった。（中略）彼等の様子を見て、朝の事件はやはり私の喉につかえたままであった。」（同 p.439）

「信じられないことが起ったのである。聞き洩らしたのではないかと、私はもう一度ゆっくり教官の呼んだ名前を頭の中で繰り返そうとした。しかしそんなことが出来るはずはなく、ただたしかに私が呼ばれなかったという感じだけがはっきりして来た。」（同 p.440）

「私」の衝撃を感じた心理の描写である。衝撃の強さは「口を利くことは出来」ず、「信じられない」状態を通して伝わっている。続いて面会の日があり、その前に家族を呼ぶかどうかを迷っている「私」の姿も描かれている。

「私は妻を呼ぶまいと思った。一時間ぐらい会っても仕方がない。そのため旅馴れぬ彼女に困難な旅をさせ、不案内な東京をうろうろさすには当るまい。会っても会わなくても、私が前線に送られ、敗軍の中に死ぬのは同じことである。未練だ。」（同 p.441）

「会っても仕方がない」、「会っても会わなくても、私が前線に送られ、敗軍の中に死ぬのは同じこと」とあるように、出征という確実な死の前に何にも無意味になる。ところが、僚友の話によって「私」は「妻に電報を打つ口実」を得、「やはり一種安堵に似た甘い感情が私を浸し」、「妻子と会う場面を色々空想」（pp.443-444）する。妻を呼びたがっている「私」

の真の気持が見られる。会いたいと思っているにもかかわらず、あえて自らの感情を抑える。ここから「私」の心の中には激しい葛藤が潜んでいると窺える。

しかし、面会の日には妻の姿がない。「私」の「一種安堵に似た甘い感情」は「激しい焦燥」に変わってしまう。それは「妻に会えなかったため」ではなく、「自分の弱気に負けて」(p.446)妻を呼ぶことを後悔し自責しているからだと言われている。

劇的なことに、出発の汽車に乗る前に思いがけなく妻と出会うのである。この場面において改稿によって「私」と妻はお互いに対する愛情がより深められていくとわかる。ところが、こうした深い愛情を持って「我々が会えたのは全く偶然であった」にもかかわらず、「一杯いうことがあるようであるが、何をいっていいのかわからぬ」(p.449) ずに、「私」は却って無言となってしまう。

「我々が会えたのは全く偶然であった。しかし我々はもっと別に話すことがあるはずである。(中略)

妻は子供用の小さな水筒を出した。除隊する私を待って彼女が貯えてあった配給の酒が入っていた。私は黙ってそれを飲んだ。一杯いうことがあるようであるが、何をいっていいのかわからなかったからである。(中略)

この最後の別れの時に、私が小説の言葉をいわないからといって、彼女を愛していないわけではない、とやってやりたかった。或いは嘘でもいいから、彼女の納得の行く小説の言葉をひと言いってやりたかった。しかしその言葉は、この瞬間にも、どうしても私の口から出て来ないのである。

先に涙を流したのは私である。涙は汗と一緒に流れたので、私はそれを手拭で顔ごと抜き取ることが出来た。妻もやがて顔を左右に反けながら黙って泣き続けた。そして我々はやはり何もいわなかった。」(同 pp.449-450)

死に赴くという事実の前に何の言葉も「無意味」であり、無言の涙でしか心情が表せないことを強く表現していると思われる。駅に入る時とき「振り返ろうかと思ったが、何故か自分を抑えてしまった」にも拘らず、発車の後「僚友の眠る暗い車内で」「妻と別れる時も十分流し得なかった涙を、私は顔を窓に凭たせて、心行くまで流すことが出来たのである。」(pp.451, 452) ここからみれば、「私」の妻に対する感情表現は、非常に抑圧的で矛盾적であるとわかる。言い換えれば、出征と死の事実に向している「私」のどうしようもない、言いようのない内面が強調され、出征そのものの悲惨さと出征に対する無力を反映しているといえる。

抑圧的で矛盾的な感情のほか、出征という事実の前に、「私」はまた「死の予感」を覚えている。

「他人はよく知らないが、私一個としては明瞭であった。いつもある死の予感がそういう欲望の生じる余裕を与えないのである。死の予感には既に東京の部隊で残留を命ぜられた時から私を襲っていた。しかしそれはまだ漠然たる蓋然性の感じを出せず、そ

の後私には色々とすることがあった。しかし今こうして出港地で無為に過ごすうちに、だんだんはっきりした輪郭を取るようになった。

(中略)

死の予感が、どういう感覚であるかをいうのはむずかしい。内臓を抜かれたような、一種の虚脱した圧迫感とでもいうほかはない。無論一日の大半は日常の関心事にかまけている。ふと何かの動作の間に、ああしかし自分はもうすぐ死ぬんだという考えが浮ぶ。外界はその時すべて特別な色合を帯びて来る。例えば光るものは一層光り、影は一層暗く、物音が遠くなったように感じる。しかしこの感覚はそれほど不快ではない。

この快い予感の結末はしかし、比島の山中でマラリヤのため敵前で落伍して、死と直面した時の強い圧迫感であった。何かまわりからどうともならないものにしめつけられるような感覚である。殺される者が殺人者に直面して、どうしても遁れられないと観念した時、或いはこういう感覚を味うかも知れない。」(同 pp.454-455)

「死の予感」は「漠然たる蓋然性の感じ」から「だんだんはっきりした輪郭を取るようになり」、「一種の虚脱した圧迫感」である。平時には「ふと何かの動作の間に、ああしかし自分はもうすぐ死ぬんだという考えが浮ぶ」が、敵と直面する時には「強い圧迫感」になってくる。抽象的な「死の予感」はリアルに表現されているとわかる。

上述のような「私」の内部における複雑で言い難い感情は、しかし文末にまた抑えられてしまう。

「私に何か感慨があったかどうか、わからなかった。しかしその時の私の中の感情は、私が出征によって、祖国の外へ、死へ向って積み出されて行くという事実を蔽うに足りない、と私は感じた。」(同 p.460)

いつも「事実」を意識している「私」の姿である。「事実」を意識するため、感情を訴えることの無意味さを知っている。作者は「事実」と「感情」という両者の力関係を用いて、出征に強いられた兵士の心理を表しているとわかる。

1・2、輸送船上の不安と苦痛——「海上にて」

「海上にて」では「何時何処から現れるかわからない敵」の潜水艦がより迫ってきて、「不確定な死」の現場に臨むとき、「私」の「死を覚悟」する行為と「不安」の感覚は取り立てられて描かれている。

「門司で船を待ってる間私は死を覚悟していた。(中略) しかしいよいよ船が出てしまうと、やはり目の前の危険に対して、少しでも有利に身を処する気になった。覚悟というものは、或る瞬間の行為を決定し得ても、日々の生活を導く原理とはなり得ないように思われる。」(「海上にて」 p.426)

「事實は我々を覗う米潜水艦が、数ある輸送船の中からわが船を標的に選ぶか選ばないかの偶然に懸っており、こういう偶然に対処する正しい態度というものは、元来ないものである。 惧れる惧れないは、結局それを予期する我々の想像力の度合に依る。

私の船上の不安が私の想像力の過多のためであったのは、不確定な死を予め覚悟してしまっただけが、私の臆病を裏返したものにすぎなかったのと同じ原理による。

しかし人は不安にも馴れるものである。(中略)「止むを得ない」ということは人を怠惰にする。昨日も無事にすぎたという事實は、今日もまた無事にすぎたのではないかという希望を起させる。それに他人もみなそうしているのではないか。」(同 pp.428-429)

すでに「死を覚悟していた」とはいえ、船上でまた「不確定な死を予め覚悟してしまっただけ」。「日々の生活を導く原理とはなり得ない」「覚悟」という行為は何回も繰り返されている。危険に曝されても、やはり「少しでも有利に身を処する気」になる。さらに、敵に狙われるかどうかという「偶然に対処する正しい態度」は「元来ないもの」であるため、こうして死に臨んでいる「私」の感覚は、ただ「不確定な死を予め覚悟してしまっただけ」と、「不安にも馴れる」と、また無事に過ごす「希望」を抱えることの繰り返しだけである。いつ来るかわからない「死」に対して、人間は突然に張り切ったり、気が緩んだりしているという精神状態にあるともいえる。

こういう不安定な精神状態において海の「単調」さは、さらに「私」の精神を締め付ける。

「船は単調なディーゼル・エンジンの音を立て、単調な水の上を進んで行った。(中略)眼を水面に落としても眩暈が残り、水も廻っている。(中略)

こういう単調な海の音楽は私の胸をしめつける。「自由なる人は海を愛する」とボードレルは歌ったが、孤独な囚人、兵士たる私にとって、海の無限の運動はむしろ苦痛である。」(同 p.429)

「不確定な死」に臨んでいる「私」は覚悟や不安や恐怖を繰り返している虚脱状態に陥るのみならず、海の単調な風景と音と「無限の運動」にも敏感している。そういう風景は自由や広大とは無縁で、ただ輸送船に乗っている「私」に「孤独な囚人、兵士」であることを繰り返して意識させる。作者は単調な風景と海の無限の運動によって、出征の兵士である「私」の苦痛を表している。このような海から「私」は昔見た「波ばかりの絵」を思い出す。

「しかしあの波ばかりの絵の平凡な正確さはあの時悲しく、今無限に繰り返す波の運動を見る私の心も悲しい。多分これは奴隷の忍耐というものにほかならないが、して見ればあの絵を神戸で見た時も、私は何かに忍耐していたのかも知れない。その時私は孤独な月給取りであった。そしてその平凡な市民生活の延長として今こうして死に向って送られている。

私が今忍耐することを知っているのは、あの時私が忍耐していたからである。」(同 p.430)

「今無限に繰り返す波の運動」がその「絵の平凡な正確さ」と同じような平凡で単調な風景であり、それを見た「私」は戦時の戦争準備中の国家を忍耐し、今は軍隊の生活と確実な死を忍耐していることを実感している。そのため「奴隷の忍耐」と「悲しい」心情を感じられずにはいられないのである。

死に対する「覚悟」や「不安」や「恐怖」などが繰り返している虚脱の状態と、戦争に強制される兵士の「苦痛」「忍耐」「悲し」みといった感じを、作者は極めて工夫を尽くして捉えており、輸送船上の兵士の心理を呈している。

1・3、戦地で感じ取った幸福感と淋しさ——「比島に着いた補充兵」

上記の「死の予感」や「不安」といった負の感覚に反して、「比島に着いた補充兵」はまず「幸福感」が描かれている。死を控えながら外界が「すべて特別な色合を帯びて来」(「出征」p.455)で、物事の見方も変わってくるように、「私」はフィリピンに上陸し、その熱帯的な自然を見て、「幸福感」を感じている。

「遂に船がとまった。この時の甘い安堵と喜びの感覚は、戦争末期潜水艦の脅威におびえつつ航海したものでないとわからない。」(「比島に着いた補充兵」〔マニラ〕p.394)
「すべてこれらの風物は、長い船旅に疲れた私の体を歓喜に近い状態においた。私はこれが私の生涯の最も幸福な瞬間の一つであると感じた。私は死ぬ前にこういう幸福の時を与えてくれた運命に感謝した。

私の三十五年の生涯は必ずしも常に幸福ではなかったが、不幸も堪え忍び得る程度のものにすぎなかった。これから比島の敗軍の中に死に果てねばならぬのは、たしかに遂に決定的な不幸であるが、その避け難い死の前にこういう幸福の瞬間があるならば、それでよかったかも知れない。前途に死がなかったなら、今私にこの幸福感があるかどうか疑問である。」(同 p.395)

「広場の街灯の光が芝に斜めにとどいていた。身内に溢れる幸福感は続いていた。」
(同)

戦地のフィリピンに着いたにも拘らず、「私」は「甘い安堵と喜びの感覚」を持ち、「死」を控えているからこそ戦地の風物に「幸福」を認める。と同時に「前途に死がなかったなら」、こういう「幸福感」があるかどうかという「疑問」が発せられ、果して「幸福」が感じ取れる場合、或いは幸・不幸の価値観はどのようなものであろうか、が問いかけられる。

それだけではなく、改稿において考察したように、風景の描写は兵士である「私」の心細く淋しい感情を表している。即ちこの「幸福感」はやや感傷的な色彩を帯びている。「幾年か内地の遮光した電灯を見馴れた眼に、この水に映る美しい灯火の列は、何か郷愁めいた気持を起こさせ」(p.394)、「消灯ラップ」は「何となく前線の兵士の淋しい心をしのばす

ような、感傷的な吹き方」(p.395)をしている。「郷愁」の起きる場合はまた以下の箇所から見られる。「内地の兵営で聞いた音とは違い」(同)、「附近は東京の郊外のような」(p.396)、「東京郊外の洋風住宅とはどこか違う」(p.398)、「子供の時日本の私鉄でよく見た型」(p.406)などのように、「私」は常に祖国のことを意識し、フィリピンの物事を日本のと比較したり喩えたりしている。こういう意識も一種の「郷愁」の表現と考えられる。

そして、マラリヤのよく発生する僻地または駐屯地のサンホセに近づくにつれ、「私」の「淋しい心」は「消灯ラッパ」の「感傷的な吹き方」に起こされるという受動的な立場から、能動的に自分の眼で「淋しい」風景を見取る立場に変わる。

「樹が岸まで迫った海岸が単調に続く。(中略)波は椰子の列の前に白い線を描く。版画や映画に見る南洋風景なり。(中略)椰子は間もなく切れ、再び単調なる雑木林の続く岸に沿って行く。」(「比島に着いた補充兵」[サンホセまで] p.404-405)

「湿原に遠くアカシヤが孤立して月に照らされている。水たまりが線路に沿って光る。傾いた家が灯を消したまますぎる。兵は黙って運ばれて行く。」(同 p.406)

「単調」を言うと、「海上にて」で描かれた「苦痛」や「忍耐」を連想させる。ここで使われる「単調」もその意味を継続していると思われる。ただ、「明くれば雨止む。」や「……見ゆ。」や「ピナマラヤンなりと。」(pp.404, 405)という簡潔で古語的な文によって、風景の「単調」さは物寂しい感じが加わっているであろう。月夜の広漠な湿原を列車が通って、その中に「兵は黙って運ばれて行」き、サンホセの駐屯地に着いたら、我々と交替に「こんな淋しいところを去る」部隊の、「うれしい」や「放歌の声」(p.406)という箇所も、風景から兵士の運命や淋しさやを克明に現わしていることが感じられる。

「身内に溢れる幸福感」と「淋しい心」は底流をなしているのは「死」に対する意識である。「教会」に対する関心を分析することによって、以下の引用文のようにより明白に「死」の意識と外界との関係を説明している。

「私は中学を東京の或るメソジストのミッション・スクールに過し、多少この宗教に馴れていた。私の現在の思想は無神論であるが、私がこうして宗教的事物に感銘を受けるのは、死を控えた兵士という状況の結果であつたろう。

一兵士として「戦争の籌」にあなたこなた追いやられる私に現われる外界は、戦闘に関しないかぎり、すべて任意の外観を呈している。この無関心は却って、普段私の意識の見棄てていたものを拾い上げるのかも知れない。

会堂の前の芝生に坐って、私は安らかであった。」(「比島に着いた補充兵」[バタンガス] p.401)

兵士にとって「戦闘に関しないかぎり」、外界はただ「無関心」で「任意」のものであるはずである。ところが「死を控えた兵士という状況の結果」、却って「関心」を持つようになるのである。このように、絶えぬ「死」の観念から出た矛盾した異常な「幸福感」や「感

銘」は描き出される。ここから、作者は過去の自己の感覚を反芻して捉えていく姿勢が見られる。

「出征」「海上にて」「比島についた補充兵」は違った面から「死」に臨んでいるときの心理と感覚を捉えているとわかる。「出征」では出征と死という事実が強いられた「私」の抑圧的な感情表現を通して、すべて無意味であることが指摘されている。「死の予感」も次第に明瞭になってくる。出発してより死に近づいている「海上にて」では、死の覚悟や無事に過ごす「希望」の繰り返しで、虚脱して何かを忍耐している精神状態が描かれている。一旦戦地に上陸して、「比島についた補充兵」では「死」の観念から出た異常な「幸福感」のような矛盾した感覚を取り立てられる。こうした矛盾した感覚はこの三編で一貫しており、戦争に強いられた死を控えなければならない一兵士の内部における種々の感覚を提示しているのである。

2、より戦闘に近い状況における心理状態——「襲撃」「西矢隊奮戦」

改稿の考察において「私」の緊張感や恐怖感といった感覚はより強められ、「私」でない場合緊張感や恐怖感や無気味な感じを漂わせる場面の描写も工夫されているとわかる。そういう心理状態はほぼ「襲撃」「西矢隊奮戦」で描かれている。『サンホセの聖母』では主人公「私」は敵と直接に戦っている生々しい戦闘場面が見られないが、警戒につく戦闘状況に置かれた兵士のぎりぎりな精神状態が「襲撃」では見られる。小林衛生兵の場合と「私」の場合を挙げている。小林を含んだ出張している兵士達は途中でゲリラに襲撃される。本部まで知らせてきたら、中隊長は兵を率いて出動する。まもなく「約百五十名のゲリラ」(p.480)が接近中という情報が入ったため、「私」を含めた留守を守る十人余りは戦闘配置につく。

「しかし何となく危険の感じはぴんと来ない。怖くもなかった。異常事はそれが実際に来るまでは、とても起こり得ないような気がするものである。そして来てからでは間に合わない。

それでも私は緊張していた。銃を壕の前の土面に構え、敵が現われれば、すぐ撃つつもりであった。

(中略)

私の隣人は遠く十間以上離れて同じような壕に蹲り、やはり前方を監視している。私は時々ちらとそっちを見るが、すぐ忙しく眼を前方に返さねばならぬ。何か声をかけたいと思うが、戦闘中話なぞしては上官に叱られそうだ。」(「襲撃」 pp.481-482)

敵の来るのを待つという警戒状況における兵士の緊張感がリアルに描かれる。長い時間の警戒でそういう緊張している精神状態は耐えられるものではないであろう。この時に「私」

はまたかつて「敵襲」をかけて二重の演習を行う段取り」のことを思い出される。戦闘配置について「私」が眼に見えたのは「日本兵」にも拘らず、「私の恐怖の反映」としてその人影を「敵」と思ってしまい、「幽霊を見たような無気味さがあったのを覚えている」(p.482)。

「こういう感覚的錯誤は「敵」というものと何の関係もない。兵は少し馴れば対象を見誤ることなぞあるまい。或いは対象なぞ誤認する暇もないかも知れない。目前で動くものがあつたらすぐ射つ、恐らくこれが正しい戦闘の方法であろう。それでなければこっちがやられてしまう。

(中略) 完全に非人間的な状態であるが、それが戦争なのである。この状態を廃止するためには、心理的ヒューマニズムを説いても無駄である。ただ戦争という行為を止めるほかはない。」(同 pp.482-483)

作者はこのような警戒状態とかつての演習の無気味な体験を通して、恐怖と緊張きわまりない「完全に非人間的な状態」を表している。

一方、出張する途中でゲリラに襲撃された小林は、「天皇陛下万歳」と三度叫んで死んでしまう。これについて「私」は、小林が「政治の欺瞞」を信じたり、天皇を崇拝したりしているのではなく、彼の心の中にただ自分の「道徳律」が「天皇崇拝という頂点を必要とした」からだと分析している。

「聞いていてくれ」という以上これは一つの演技であるが、それだからといって真実でないということにはならない。演じなければならない真実というものはある。

天皇陛下万歳は恐らく明治以来の御真影教育の結果であろう。教育に政治が介入すれば必ず欺瞞になるが、人民は実はそうやすやすと欺かされるものではない。小林衛生兵の中で政治の欺瞞が真実となったについては、この若者は別に孝行とか勤勉とかいう道徳律があつて、それが天皇崇拝という頂点を必要としたのであろう。日本人が神を持たないからだ。

政治は尽く嘘であるが、嘘から出たまことが重って生活と歴史を作るのである。」(同 p.486)

「欺瞞」や「嘘」が「真実」「まこと」に取って代わるというのは、死に際で咄嗟に出た結果である。或いは普段「大袈裟な文句」と「常套句」の欺瞞性や無意味さを知りながらも、一旦戦闘の現場やぎりぎりな状況に臨むと、却って用いてしまう。「私」の「完全に非人間的な状態」と呼応して、同じ異常な状況において小林は演技や政治の欺瞞性の体現や不条理な反応を示している。これについて、作者は論理的にその原因を検討し、必ずしも「欺瞞」や「嘘」を信じたからではないということを証明しており、さらに戦争の非人間的な面を暴きだしているといえる。

「西矢隊奮戦」では上述の警戒の状況とやや異なる、「私」は「ゲリラ討伐隊」の一員と

してゲリラを掃蕩する体験が描かれる。ところが、目的地に着くと、「沖を渡る米内火艇の音」、犬の「吠える声」、水道栓の進んでいる水の音、時々隊長の「馬鹿」という怒鳴り声が聞えるだけであり、ゲリラが見られず、現場は極めて「静か」である。(pp.377-381)

「兵士が銃を下げ、腰をかがめ、おずおずと一列に開いた庭に行くのは異様な眺めであった。自分を棚に上げるようであるが、私はこの時わが同僚たる補充兵をつくづく滑稽と思わざるを得なかった。中隊長は振り返り、焦立たしげに手を振って兵を急がした。(中略)中隊長に続いて分隊長が「散れ」と叫びつつ飛び出した。しかし二、三人出ると次の兵士は門柱にしがみついで止ってしまった。その又次の兵士も前者を迂回することをせず止ったので、以下ずっと一列に止ってしました。」(「西矢隊奮戦」p.377)

「「こら、そこの二人何しとるか」(中略)「はいっ、前方の敵状を偵察しております」／「馬鹿野郎」と中隊長は笑いながら怒鳴った。「そんな散歩みたいな格好で偵察が出来るのか、何故伏せないか」／二人はすぐその場に伏せた。／「軒下へ入れ」と分隊長が怒鳴った。(中略)「田中、そこで何しとるか」(中略)「はいっ、歩哨であります」／「馬鹿、そんなとこで前が見えるか。中へ入るんだ」(同 pp.380-381)

引用文のように、「おずおず」と進撃したり、「門柱にしがみついで止ってしまった」りする兵隊の姿が見られる。また戦闘に慣れていない経験不足の兵士の振る舞いもわかる。予測に反する異常な静けさを背景にして、兵士たちの滑稽な進撃の様子を描かれており、彼等の恐怖感と緊張感が表している。この恐怖感と緊張感の上、さらに「屍体」を見た体験も描かれている。

「両腕は少々屈げて頭上に伸ばし、片足だけ直角に曲げていた。この姿勢は家を迂回しようとする彼の最後の意志を示すように思えたが、或いは単なる死の痙攣の結果であったかも知れない。

眼を転じると、道の反対側の一家の垣内にも同じような屍体があった。頭の傍に大きな薪割りが投げ出されてあった。その不動の横顔は何か考え込んでいるように見えた。

(中略)

この臭気が山で殺した野牛の残骸から発するものと寸分違わなかった事実には、何か胸を衝くものがあった。甘いような辛いような、不愉快に鼻孔を刺戟する臭いである。」(同 p.379)

「屍体」の様子について、人間の「最後の意志」や「考え込んでいる」表情が描かれながら、その臭気は「野牛の残骸から発するものと寸分違わ」と指摘している。この認識はいかにも「傷まし」くて無気味なものであろう。

それだけではなく、さらに夜中に「女の歌声」と「何か獣の吼えるような声」と「銃声」

が現われた「奇妙な事件」(p.383)も起こる。「私は事態を全く理解することが出来なかった」「私はますます分からなくなった」(同)とあるように、歩哨の勤務をしている「私」の不安と「奇妙」な体験が描かれている。

以上のように討伐隊の「奇妙」な討伐経験と、その状況に置かれた兵隊の異様な体験が呈している。敵と実戦のない「最大の戦闘」「奮戦」という描き方は兵隊の「滑稽」さと弱さを暴いていることがわかるが、一方このような「滑稽」で弱い兵士だからこそ、戦場に臨むと皆各自の恐怖や緊張、不気味な感情や不安と戦って「奮戦」しなければならないのではないかと思われる。

ちなみに、こうした戦闘現場に臨むときのぎりぎりな状態に関する描写は「海上にて」でも見られる。潜水艦の攻撃事件が二回も起る。

「正午頃、左舷水平線の護衛駆逐艦の傍に白い水柱が上った。少し間をおいて爆音が聞える。水柱はなかなか落ちず、駆逐艦からほぼ等距離に左右に立ち続ける。無論潜水艦を探知して爆雷を投じているに違いないのだが、水平線下の見知らぬ敵から砲撃されているのかも知れぬ、という考えがふと私を捉える。明らかに海戦の常識に反したこういう空想が浮ぶのが、そもそも潜水艦恐怖症の一症状であるが、実は水平線下に敵がいる方がどれだけこわいかわからないのである。」(「海上にて」p.431)

「そのきらきらした空を背景に、日蘭丸の船体が舳を高くあげていた。半ばを水平線の下に隠した形全体が、青く霞むほど遠かった。影絵は引き込まれるように、するすると水平線下に消えて行った。」(同 p.434)

一回目の事件では突然「傍に白い水柱が上り」「爆音が聞え」、あまり遠くないところで水柱が「立ち続ける」と動的に描かれている。このような切迫感のある描写に対して、二回目の事件は却って「影絵」のように静かに起る。魚雷に当たった僚船が最初は煙が上がり、三十分も経たないうちに遠くの水平線に速いスピードで沈んでいく。「我々はこの時重大な危険の裡にあった。冗談ではない。正確に死の十五分前にいたかも知れないのである」(「食慾について」という箇所と対照してみると、作者はこうした静的な描写によって、危機に臨んでいる息が詰るほどの恐怖感を強調しようとするといえる。

兵士のより戦闘に近い状態について「襲撃」と「西矢隊奮戦」、また「海上にて」では描かれている。作者は極度の恐怖と緊張に襲われる人間の抽象的な精神状態、つまり「非人間的な状態」を、襲撃や警戒や討伐といった各状況から表現しようとしていることがわかる。『野火』でもこのような兵士の恐怖感と緊張感の表現が見られる。

3、より戦闘に遠い状況

3・1、俘虜をめぐる駐屯生活の一面——「俘虜逃亡」

「俘虜逃亡」は米軍が上陸する前に「私」の部隊のゲリラ討伐の経過と、捕まってきたフィリピン人の俘虜の扱い方を描いている。ゲリラ討伐の時にも「異変が見られなかった」ため「一同乱酔」して、結局当夜「銃撃を受けて、兵四名が負傷した（後一名死亡）」(p.364)ことになる。「我々の駐屯生活は実に下らなく退屈であった。しかもいつ優勢な米軍があがって来るかわからない」(p.368)とあるように、敵がいつ来るかわからないにも拘らず、わが隊は退屈で呑気な駐屯生活を送っている様子が見られる。特に物語のクライマックスといえる俘虜逃亡の場面は、兵隊の呑気さか軍人らしくないところが描かれている。例えば、演芸大会を「見物し、俘虜の監視を怠った」(同)り、逃げた俘虜を捜索する時も「逃げた奴は見付からないものさ」とある「要領のいい」(p.370)下士官が言って皆窪地で眠ったり、河の傍で休んだりしてから引揚げて来る。

こういう駐屯生活の中で、「わが隊」と他の日本軍との違いも指摘されている。

「訊問は続けられたが、俘虜達は多くは語らなかった。拷問は行われなかった。彼等がゲリラを誘導したしないを今更明らかにしたところで、死んだ戦友が生き返るものでもない。討伐現地の状況は一度討伐の命令を遂げてしまえば、二十里以上を隔てた我々部隊にとってはいわばどっちでもいいことであった。日本軍はこういう場合、よく俘虜を殺したらしいが、わが中隊長は漫然抑留していた。」(「俘虜逃亡」 p.366)

「敵前で俘虜を逃した罪は軽くない。しかし二人の不寝番は一応の訓戒をもって許された。中隊長は単に「俘虜一逃亡ヲ企テタルニヨリ射殺セリ」とのみ報告した。」(同 p.371)

「数日の後俘虜は釈放された。彼は日本軍の与えた比島独立の歌を歌い、涙を流して営門を出て行った。」(同 p.372)

「日本軍はこういう場合、よく俘虜を殺したらしい」のに対して、「我が中隊長」はただ「漫然抑留し」、「拷問」を行わないのみならず、最後まで「釈放」するのである。

とはいえ、俘虜に対する扱いは必ずしもいい待遇ではない。例えば、彼等の食糧が運ばれる途中で「俘虜の上前をはねるとはひどい野郎」(p.366)に食われることもある。また、一人の俘虜が逃げたあと、残った俘虜に対する扱いが厳しくなってくる。

「意地の悪い下士官が衛兵司令の時、二度の食事の一度はわざと忘れられた。(中略)しかし寛大に扱うようにという隊長の特別の命令があったにも拘らず衛兵の取扱いは変わらなかった。(中略)衛兵司令の下士官は「黙れ」といって俘虜の頬を打ったが、彼は依然として呪文のように「飢じい。飢じい」と叫び続けた。(中略)下士官は隊長の処置を不満として、殊更に彼を虐待しているらしい。私はこの司令が交替するのを待って隊長に注意した。早速食事が与えられた。」(同 pp.371-372)

引用文のように、「意地の悪い下士官」の行為は「寛大」な中隊長のと対比されている。そして、その中で「私」の振る舞いもやや特異なところがある。例えば、俘虜の食糧を運んだ時、「炊事兵が盛った皿に私が少し余分を加えようと」(p.366)したり、「菓を一人一人の口に挿し、マッチをすってやった」(p.367)り、俘虜が「下士官」に虐待される時「私はこの司令が交替するのを待って隊長に注意した」(p.372)りすることがある。比較的に人道的で「いい兵隊」(p.367)に見える。しかし「私も多少压制者の思わせぶりを楽しまずにいられない」、「君達は虎のかわりに獅子を呼んだことになったとは思わないか」(同)とあるように、「私」は日本軍の有様と自分の立場を認識している。

公平的に見えるように、作者は「わが隊」の俘虜との関わり方を捉えている。それは、よりいい取り扱いもあるし、虐待もある。そして、その背後にあるのは依然として「压制者」の立場である。一般的な認識における日本軍のイメージと異なり、この作品から「わが隊」の退屈で呑気で軍隊らしくない駐屯生活が窺える一方、日本軍の俘虜の取り扱いをも見られる。

3・2、増幅される僚友のエゴイズム——「暗号手」「食慾について」

「暗号手」「食慾について」と次の節で述べる「靴の話」の三編は軍隊という特殊な集団組織において「私」や僚友といった兵士たちの姿が描かれている。所謂戦争小説における軍隊と兵士の影響関係がここで窺える。

「暗号手」では「暗号手」である「私」をめぐる軍隊内部の権力構造と人間関係の様相を明示している。

「暗号手は隊長に直属し、電報の内容は人事を含んでいたりするので秘密である。下士官はその内容が何となく気になると見え、(中略)後で私は仕返しを受けた。(中略)下士官の一人は私を兵舎の後ろへ連れて行って脅かした。」(「暗号手」 pp.464-465)

「こうして隊長と私の間には一種の共感があった。(中略)私の経験では日本の軍隊で、補充兵の位置に最も近かったのは応召将校である。」(同 p.466)

「前線の将校は下士官に色々気兼ねしなければならないものである。」(同 p.465)

「私が部隊でかけがえのない兵士であることはたしかであった。その兵士がこれほど憎まれねばならぬのは、日本軍の一般兵士の勤務があまりに辛かったからである。」(同 p.467)

「私」は「部隊唯一の暗号手」で「かけがえのない」重要な存在のはずにも拘らず、下士官に「脅か」され兵士達に「嫉妬」(p.467)される。「私」の部隊では下士官の実権が隊長より多く、また暗号手という「特業」(p.463)の立場が最も難しいものということがわかる。ところが、「私」の推薦で新しくできた代理暗号手の「中山」は「私」のような目に遭わない。それは会社員の「悪智慧」が働いているためである。改稿において考察したように、中山の不自然な態度と「悪智慧」の悪さが強調される。「悪智慧」の内実について、以下の

引用文からわかる。

「私が工業会社内の錯綜した利害の中に処して来た悪智慧を使えば、軍隊内で無邪気な上官に阿諛して、多少とも快適な地位を得ることは容易と思われた。しかし既に死が目の前に控えている現在、身すぎ世すぎのため身につけざるを得なかった、不幸な智慧を働かせたくなかった。たとえ上官には気に入られなくとも、生れついたままの一夢想家として死のうと決心していた。」（同 p.467）

「私」は「上官に阿諛して」出世しようとする「悪智慧」を捨てることにしているのに対し、中山はそれを用い、「私」に「不自然な謙遜な態度」をとったり、「上官の注意を惹く機会を捉えた」（p.469）り、上官に「大金」や入社の「斡旋」といった「利益を提供」（p.470）したりして、「会社員のマキャベリズム」（p.469）で出世する。「彼の出世に引き替え」、「私の地位は転落し」、彼は「私」に「事毎に抗弁し」「何処か私を押しよける風」があるというように、もとの関係が「逆転」して「だんだん気まづくな」る（pp.470-472）。

こうした会社員の「悪智慧」によって中山は部隊での暗号手という難しい立場から離脱することができ、階級も昇級できると同時に、他人に対する態度や振る舞いなどの変化をも遂げている。「私」の惨めさと中山の変化が描かれている一方、その原因として「阿諛」や「悪智慧」や「マキャベリズム」を用いなければならない軍隊の権力構造が指摘され、さらに批判されることがわかる。

「食慾について」は二人の中年兵士の「餓鬼的行為」（p.356）を描いている。改稿の考察からわかるように、理解できないほどの異常な食慾が強調されている。池田という兵士は普段は「頗る温和実直な男」だが、「食物のこととなると人が変わったように誅斂苛酷になり、自分の慾望を露骨に主張して恥じない」（同）。のみならず、「食物の為ならどんな事でもするという気になっていたらしい」（p.358）。そして、いざという時にまず食物を取って食べ、「重大な危険の裡」にある時も、「その死の瞬間まで、心残りなく甘納豆を喰べたいという慾望を起す余裕を持ってい」（p.357）る。つまり、数多くの例が取り上げられ、池田の「異常な食慾」（p.359）が紹介されている。

池田のほか、木下少尉という小隊長も紹介され、彼は「食いしんぼう」である。「料理を三分の一は残すのが将校の心懸け」という軍隊のおきてを無視し、「単にその料理を全部食べるばかりではなく、何かの加減で残った場合も夜食のために蓄え」（p.360）たり、「巡視と称して」（p.361）各分隊の集めているバナナを食べまわったりしている。つまり、食糧が欠乏しているときは勿論、食糧が十分になっても、彼らは依然として食糧に異常に執着しており、その食慾の異常性が強調されるとわかる。

ところが、「暗号手」と「食慾について」は単に軍隊・軍人の現実を暴くに止まらない。それよりむしろそういう現実に置かれた兵士の人間的な一面を探し出そうとし、異常の中でも「人間の真実」という不易な人間の本質を見詰めているという作者の意図が窺えよう。

「彼が愚劣に戦った日本陸軍の犠牲者であることはいうまでもないが、仮に生還していたとして、彼がやはりあの陰惨な会社員の政治学を押し進める他はないとすると、彼はやはり不幸である。彼は依然として何かの犠牲者であることはかわりない。

彼は結局その皮膚が女のように柔らかいように、心も優しかったのであろう。状況が絶望的になると、不意に私に優しくなったのがその証拠である。軍隊で出世しようと思ったのも、単なる防禦にすぎなかった。要するにこれは一個のおとなしい男であった。」（「暗号手」 p.475）

「三十九度以上の熱があり、既に肺炎を起していた彼が、自分の水筒ばかりではなく、僚友の分全部を下げて来た。とにかくこれは死の数日前までも、欠乏がない限り他に厚い優しい心であった。彼が肩からかけた数本の水筒を、蛸の足の様に地面に広げて、火の傍にうずくまった姿が思い出される。」（「食慾について」 p.360）

「病兵を慰めた彼の言葉を私は今は憶えていないが、しかしその声音に含まれた真実な同情の響きを憶えている。そこには何等形式的なものも軍人風の空虚な激励もなかった。ただ一般社会におけると同じ礼儀と思いやりしか含んでいなかった。山の中ではこの調子が却って異常であった。

私は彼に対して考え方を換えねばならぬと思った。滑稽のヴェールは、その下にある人間の真実を蔽う最も厚いヴェールである。」（同 p.361）

例えば、暗号手の中山の「悪智慧」は人間の本能から見れば「単なる防禦にすぎ」ず、実は彼は心が優しく「一個のおとなしい男」である。或いは池田は「欠乏がない限り他に厚い優しい心」を持っており、木下少尉は病兵を慰めたときその言葉に「真実な同情」が含まれている。戦争という異常な環境に置かれた僚友たちは、手段を選ばない「自己防禦」或いは異常な行為が描かれている。しかし、戦争の現実に変形された人間でも、その中に影響されえない「人間の真実」があると強調されるとわかる。作者は単に戦争や軍隊を一方的に批判しているのではなく、行為の背後にある動機や原因を見極めることによって、そういう状況に追い込まれた人間を暖かい視線を向けていると思われる。

3・3、事実に決定される「私」の心理——「靴の話」

前述の軍隊内部の権力構造や異常な環境のほか、「靴の話」は軍隊ではまた「深刻な事実」（p.348）が存在していることを指摘している。改稿においてもすでに検討しており、作者は「私」の心理について正確に捉えようとするとうわかる。この節でさらにその心理とその心理に影響を与える「事実」との関係を検討する。

「靴の話」は「欠乏」する靴の盗難事件を中心に描き、「靴」をめぐる兵士間との関係と人間の心理を示している。「機敏」な僚友の松本は、「鮫皮」の粗雑で「予備新品の靴」（p.349）を争って取ったが、まもなくマラリヤで死んでしまう。彼の死んだ翌日、「私はさり気なく彼の寝ていた病室へ行って、彼の靴を見て「それを手に取らずにいられ」ずに「心臓は高鳴」り、その靴を入手すると、心が「一種邪悪な喜びに溢れてい」（pp.350-351）るとい

うように、僚友の新しい靴を狙っている「私」の心理が細かく描かれる。僚友の死を完全に無視し、「私」の眼と心を占めているのはただ欠乏している「靴」だけである。「靴」を代表した「欠乏」の事実がもたらした現実に関する描写はほかにもある。

「彼等の分隊長は既にマラリヤで死んでいたもので、要するに兵隊ばかりでは老練な下士官に対抗出来なかった。盗られるのは盗られる方が悪いという日本の軍隊の原則があるため、彼等はどこにも訴えるところがなかった。」（「靴の話」 p.351）

「足腰の立たない病人として、私は分隊の支持を失うのを、何よりも怖れなければならなかったからである。こうして私が靴を持ち続ける以上、僚友は私に悪くはしないであろう」（同）

「互いに人のことはかまっていられないぎりぎりの生活の中で、私も人並みに冷酷でいられることを私はむしろ喜んでいた」（同 p.351-352）

「欠乏」のある生活、「お互いに人のことはかまっていられないぎりぎりの生活の中で」、自己の利益が第一義にされるようになるのみならず、人間関係もその「欠乏」のものの上で成り立たされる。分隊長は交渉しにきた松本の僚友たちを追い帰すのも、病で倒れた「私」のためではなく、その新しい靴を確保するためである。こうした歪曲された関係のほか、自分の心理を正しく捉えるのが不可能であることも指摘されている。

「結局靴だけが「事実」である。こういう脆い靴で兵士に戦うことを強いた国家の弱点だけが「事実」である。それは必ずしもその兵士の心理に、私はこう思った、ああ感じたという風に働きはしないが、根本においてそれを決定している。」（同 p.352）

「収容所でも戦場と同じく「事実」だけが「正しく且重要であった」のである。欠乏のあるところ常に「事実」がある。」（同 p.353）

「欠乏のあるところ常に「事実」があり、その「事実」は人間関係と人間の心理を「根本においてそれを決定している」。心理的な説明や解釈はただの自己弁解や自己正当化といったエゴイズムにすぎないのである。ここで「事実」の絶対性と決定性が指摘され、その「事実」を前にして兵士たちはただエゴイズムがむき出されるだけで、人間的な心理や感情に訴えるのが無駄であるといえる。

『サンホセの聖母』は戦闘準備に入る場面を描いているのみならず、より戦闘に遠い状況である軍隊内部についても、「俘虜逃亡」「暗号手」「食慾について」「靴の話」四編で描写しているとわかる。「俘虜逃亡」は部隊のゲリラ討伐を言及するが、描写の重点は駐屯中で部隊と俘虜との関わり方である。「暗号手」と「食慾について」は僚友の自己防禦や異常な食慾を代表するエゴイズムの有様が描かれている。靴を所有したいという自己利益を掲げている「靴の話」は同じのエゴイズムの話だが、この文章でさらに欠乏のある事実を前にして、いくら説明や解釈は無用であることを強調していると思われる。

要するに、作者はまず軍隊の上下関係と「欠乏」のある「事実」を暴き、異常な環境に影響された兵士たちの姿を描くことによって、軍隊という環境と兵士との関わり方を着目していることがわかる。

4、戦地の風景——「サンホセの聖母」「ミンドロ島誌」

『サンホセの聖母』では戦時でない駐屯生活が多く描かれ、住民の日常生活も見られる点が特色の一つである。12編の中の「サンホセの聖母」と「ミンドロ島誌」を中心に、「俘虜逃亡」や「比島に着いた補充兵」にも住民に関する描写がある。フィリピンの植民地的な色彩や熱帯風物のイメージは改稿の考察からわかる。「私」の属している西矢隊は八月初めミンドロ島のサンホセで警備につく。それは「未開の山野で悪質のマラリヤが発生する」（「比島に着いた補充兵」 p.397）ところである。駐屯生活は「下らなく退屈」（「俘虜逃亡」 p.368）なものである。こうした軍隊の制度も比較的緩んで「退屈」な駐屯生活において、兵士たちは却って住民と接触する機会が多くなる。

住民との交流を言うと、例えば、住医者ドクトルと医療上で協力し合うことや、日曜の午後音楽家の家で集まって彼に色々弾かせて楽しんでいること、住民の家に行ってキニーネ剤で饗応との交換やタガログ語の練習などがある。また、フィリピン人の女性をめぐる兵士達の恋の争いというエピソードもある。戦地での民間人の姿がここで見られるのみならず、戦場の雰囲気は少しも感じ取れないのである。

「司祭は長身のドイツ人で、住民の出生、命名、死亡、その他あらゆる身の上相談に応じている。（中略）住民は信心深い。」（「サンホセの聖母」〔サンホセの聖母〕 p.410）

「サンホセの町の上流階級は麻雀に耽り、下層民は鬪鶏に耽る。」（同〔ドクトル〕 p.414）

「マンティラをつけた老若の男女が、比島の奇妙な踊りを踊った。踊りはあまり活発には到らなかった。」（同〔音楽会〕 p.415）

「比島美人は一般に痩せて眼ばかり大きく、私はあまり感心したことがない。（中略）中でただ一人鼻が低く髪が漆黒で、口が一字に突き出たゴーギャン型の女がいるのが珍しく思われた。」（同 pp.415-416）

「比島の恋人に所謂熱帯的灼熱の恋を求めても無駄である。マニラやバタンガスで夕涼みに出た彼等の様子は、むしろ甚だ感傷的に見えた。北緯十五度の恋と赤道直下の恋との間には、かなり逕庭があると見て差支えない。」（同 p.416）

「住民は信心深かった。（中略）独逸人の司祭は住民により畏敬され、出生から命名、葬式その他あらゆる身の上相談にも応じていた。」（「ミンドロ島誌」〔砂糖会社と教会について〕 p.390）

「見たところ比島人はみな一日麻雀をしているように見えた。」（「比島に着いた補充兵」〔バタンガス〕 p.402）

「夕方我々の宿舎の前を幾組かの比島の男女が、歌を口ずさみながら川の方へ行くの

が見られた。熱帯の灼熱の恋は屢々映画の主題となるが、比島の恋人達はむしろ甚だ感傷的に見えた。彼等はそれに痩せている。」(同 pp.402-403)

引用文のように、フィリピン人の趣味や踊りや恋などは取り上げられて描かれている。重なっている描写があり、恐らくそれは「私」が異文化の衝撃を感じたところであろう。「二等兵になったお蔭で、生れて初めて外国を見る」(「比島に着いた補充兵」 p.398)とあるように、「私」は初めて外国人を認識するときに現われてきた「奇妙」感や不思議な感じがここで見られる。これらの描写は作者の外国人・異文化に対する他者認識を確認するところともいえよう。

ところが、改稿において考察したように、フィリピン人と兵士との違い或いは隔たりが見られ、フィリピン人が兵士に対する悪意が取り立てられ描かれているとわかる。住民と盛んに交流を行っているかのように見えるが、「占領下の住民の生活は占領軍にはわからない」(「サンホセの聖母 p.416」)とあるように、実はお互いの間に大きな隔りがある。

「マンガリン湾口のカミナウエ分哨では、町の少年の一人を残飯を報酬に炊事を手伝わせたが、兵士等と彼との間の愛情は随分感傷的になった。」

しかし或る日は突然イリン島に逃げて行ってしまった。一週間の後米軍が上陸した。政治は万事を決定する。人間の感情さえも。」(「サンホセの聖母」〔麻逸国〕 p.410)

「政治は万事を決定する。人間の感情さえも」とあるように、人間的な関係が求め難いのは戦争という「政治」の介入があるからである。作者はフィリピン人を認識すると同時に、自己の立場をも認識し、さらに自己と他者との関わり方を規定している「政治」の働きを指摘しようとする。さらに言えば「サンホセの聖母」一文では、作者は兵士と住民との関わり方を、こうした「政治」の働きの面で捉えていることがわかる。

「太平洋戦争初期日本軍はかなり早くここに到達した。砲撃の跡は町にまだ残っていた。会堂の一翼が破壊されたのもこの時である。住民の眼がマニラ市民のそれよりも悪意に満ちていたのは、町がかつて砲撃を受けたからであろう。戦争末期日本軍はここを米軍の上陸可能の地点と考えていた。事実米軍は二月初め小部隊をもって上陸したが、撤退するに際して行った日本兵の残虐は、マニラのそれと劣らぬものだったという。」(「比島に着いた補充兵」〔バタンガス〕 p.403)

「画像を背に主婦は子供を抱いて坐り、黙って私を見凝めた。(中略)眼は大きく顔立は少々整っているが、蒼黒い皮膚は顔の彫刻的細部に到るところ不快な影を作っている。」(「サンホセの聖母」〔サンホセの聖母〕 p.412)

「女は明らかに迷惑そうであった。小柄な鼻の尖った冷い女である。会話は途切れ勝であったが、(中略)この時彼女が使った excuse me は私が英語で聞いた最も侮辱的な調子を含んでいた。」(同〔ゲリラの妻〕 p.419)

わが部隊は「饗応を強制する習慣がなかったので評判がよかった」(「サンホセの聖母」p.410)にも拘らず、引用文から見ると、駐屯地でないマニラやバタンガスでは日本兵の「砲撃」や「残虐」が行われたことがあり、サンホセでは日本兵を歓迎していない住民もいることがわかる。結局日本兵はフィリピン人に「独立を与えた」(「俘虜逃亡」 p.367) 解放軍ではなく、「圧制者」(同)「占領軍」(「サンホセの聖母」 p.416) でしかない。

「私」は自分が兵士である立場をよく認識しており、「住民はすべて、圧制者として来たという後めたさを持つ私にとって、気の毒なほど親切であった」(同 p.409) というように、住民との距離感があるのみならず、一般住民に対する兵士の「後めたさ」をも感じていることが見られる。

一方、フィリピン人が「ゲリラ」や「スパイ」の可能性が高いである。例えば音楽家の家に行くことは下士官に「彼はスパイらしいから、あまり彼の家へ行くな」(「サンホセの聖母」 p.415) といわれることもある。或いは、あるフィリピン人の町長と書記のように「偽れる楽観的情報によって我々を欺い」て、「我々を奇襲したゲリラを誘導した嫌疑」(「俘虜逃亡」 p.364) のあるフィリピン人や、「附近の農場主が来て、約百五十名のゲリラがマンガリン湾底部をサンホセに向い前進中と伝えた」(「襲撃」 p.480) という偽情報を流すフィリピン人が存在する可能性は高い。

この意味では日本兵にとってフィリピン人はむしろ敵である。日本兵に「気の毒なほど親切」な住民のほか、「迷惑そう」なフィリピン人と敵のフィリピン人もいる。「後めたさを持つ私」は彼らとどう付き合えばいいかがわからずに戸惑っており、戦場においてこういう立場の違いから人間同士であっても人間的な関係は求め難いものである。

「サンホセの聖母」「ミンドロ島誌」また「比島に着いた補充兵」では、戦闘のない軍隊の外部の世界が描かれている。それだけではなく、部隊における<日常>と異なり、兵士と戦地住民との交流のなしている戦地住民との<日常>の風景も呈している。数多くのフィリピン人が登場され、彼らの生活ぶりや表情が窺えるのは、『サンホセの聖母』の一大特徴であろう。さらに、作者は戦地風景の描写において、南洋風景や異国情緒のほか、赤トタン葺や小学校といったフィリピンの植民地的な要素をも目に付く。フィリピン人と「私」を含めた日本兵との関係を規定している<政治>を見抜いており、「圧制者」「占領軍」である日本兵を都合よく隠さずに述べているのも『サンホセの聖母』の特色だといえる。

5、俘虜の敗戦——「八月十日」

「八月十日」は俘虜収容所で日本人俘虜が敗戦を迎えた有様を描いている。祖国観念や軍部への批判をも言及しているが、この部分は次の節に譲る。

「十日の夜の九時頃」日本は「ポツダム宣言を受諾してもいいと申し込んだだけ」(p.252) であるが、俘虜収容所では米軍は「抱き合って踊った」り、台湾人地区の俘虜は「歓声」(p.248) をあげたりして、戦争の終わりを告げる。そういうにぎやかで歓喜な雰囲気に対して、日本人の俘虜たちは、「小隊小屋にどよめきが起り、中に号泣の声が響き渡」り、「多くの泣

く人影が小屋の内外で抱き合い、もつれ」(p.249)る。日本が負けたと知った俘虜たちは極めて悲しい状態に陥っていることがわかる。

ところが、「とにかく明日の外業は免除して貰わなあかん。とても働く気がせん」という「本音」(p.252)を漏らした第三小隊長広田兵曹のように、俘虜たちは本当に敗戦を悲しんでいるかどうかは疑問になってくる。そして、「労役を免がれ」た俘虜たちは、国の敗戦を知って絶望しているというよりも、「感情的理由を楯に、日常の義務を怠るのに喜んでいる」(p.256)と、「私」はやや皮肉に説明している。こうした敗戦を知った俘虜たちの反応を皮肉に述べる箇所もまたいくつかある。

「小屋は静まり返っていた。(中略)俘虜はただ長々と横たわり黙って天井を見凝めていた。(中略)しかし私はほぼ彼等が何も考えていなかったと信じている。例えば私は彼等の中で泣いた者が、極く少数の感傷家にすぎなかったのを知っている。しかもそれさえ俘虜だからこそ泣く余裕があったのである。

日本降伏一時間後の、これら旧日本兵士の状態は要するに無関心の一語に尽きる。
「祖国」も「偉大」もこの黙って横たわった人々の群に比べれば、幻想に過ぎない。
私はこれが人民の自然の反応であるか、一年の俘虜生活の結果であるかも決定出来ない。ただ後者と信じている方が気が楽だ。

(中略)遅く帰った中隊長は、大隊本部の注意事項として、次の三項を伝えた。(中略)三、自殺すべからず。

最後の項について我々は大いに笑った。」(「八月十日」pp.254-255)

「(筆者注：玉音放送の内容)やがて英文の原稿から翻訳したものをオラが各中隊で読んで廻った。集まる者は必ずしも全員ではなく、中に頭を下げるのを忘れる者もいる。この反応だけはたしかに俘虜の生活の結果である。」(同 p.258)

引用文のように、俘虜たちの反応は次第に「無関心」で「何も考えていな」い状態に転じていく。遠い「祖国」や「自殺」は、すでにこれらの俘虜とは無縁になっている。「俘虜だからこそ泣く余裕があった」とあるように、前述の「号泣」と「私」の「涙」はすべて、生を得て「ましな生活をしている」「俘虜」という立場から流しえたものである。「私」はいつも「俘虜の生活の結果」を意識し、俘虜の反応や行動を説明していると窺える。言い換えれば、作者は俘虜の反応と生活の本質を見極め、ときにそれを批判するとわかる。

一方、米軍の姿も描かれている。戦争が終わった後、「米軍のサージャント達もゆったりとした平和気分になり、「巡視も行われず」「所内をぶらぶらして」「近い除隊を語り合った」(p.256)とある。また、米軍のサージャントの間にある「感情的な蟠り」(p.257)についても述べられている。必ずしも神秘的なイメージ、或いは訓練や素質のいい完璧な軍隊のイメージばかりではないとわかる。その中で特に中隊長サージャントの「善良なウェンディ」(p.245)が取り上げられている。

「あまりにも破壊的だ。我々はこれを使用したことについて、将来自責を感ぜずにい

られまい」とウェンディは憂鬱にいった。」(同 p.244)

「(ウェンディ)「今日は仕方がないだろう。彼等は絶望しているんだ」／私は赤面した。阿諛を却けられた羞恥よりも、この敵国人が俘虜の絶望にこれほど同情してくれるのが心苦しかったからである。」(同 pp.255-256)

敵であるにもかかわらず、原子爆弾の使用について「自責」を感じ、「俘虜の絶望」を「同情して」いるというヒューマニティの面が描かれている。こうした描写からみると、敵に阿諛するというより、双方が対立している必然性は元来ないものであることを指摘していると思われる。殊に文末に「気違い」(p.256)と思われる尾高とウェンディと握手する場面は極めて象徴的である。

「尾高は寝ていたが、起き上り、ウェンディの差し出す手をうれしそうに握った。／「これから日本とアメリカは仲良くやって行こう、といてくれ」と、ウェンディは私にいった。／私はその意味を伝えると、尾高はウェンディに直接「サンキュー」といい、私に向って、「(中略) あたしもこれから家へ帰って、静かに女房と子供と暮します、っていっとくれ」といった。」(同 pp.258-259)

同じようにこの箇所もアメリカに阿諛していると思われず、恐らく敵対の双方は対立の原因が消え「仲良く」できるという意味であろう。日本が正式的に降伏したあと、「気違い」と思われる尾高は「なかなか気違いじゃない」(p.259)に転じる。そして、彼がウェンディとの握手は平和の象徴のみならず、「家へ帰って、静かに女房と子供と暮す」という願望が実現されることをも意味する。

以上のように、俘虜収容所におけるかつて日本兵であった日本人俘虜の姿が見られる。敗戦のニュースを知った経緯の描写によって、それは「号泣」して悲しい俘虜のイメージと無関心になった俘虜のイメージである。さらに、より人間同士の立場で敵の米軍を描いている。

この「二」の節では『サンホセの聖母』における12編を検討してきた。同じ戦場物であるが、各編の物語は各々異なっており、主題も多様である。それは、「死」の意識及び死から出てくる矛盾した感覚と感情というテーマ、戦闘に近い状況におけるぎりぎりした精神と心理の状態というテーマ、駐屯生活である軍隊の内部と外部の様相というテーマ、異常な環境に影響された人間のエゴイズムとありえない人間関係というテーマ、敗戦をめぐって俘虜収容所の人々というテーマなどが挙げられる。戦争小説といっても内容が豊かで多彩である一冊ともいえよう。こうした多種多様の単行本は恐らく『俘虜記』や『野火』でも見られないであろう。

三、全体を一貫するモチーフ

1、「生還」に対する疑問

1・1、死の必然性

「出征」の一文では召集される前に「平凡な俸給生活者」(p.456)である主人公は既に「日本が敗けつつあること、近い将来に私のような三十代の補充兵も前線で死なねばならぬ時が来るのを覚悟」(p.441)する。中年補充兵とは体力や旺盛な精力も比較的弱く、「三ヶ月の教育召集」(「出征」p.438)を受けるだけで戦場に送られる「未熟な兵士」(「食慾について」p.358)である。戦争に関する訓練や経験が不足して質や程度が悪いのみならず、「玩具の兵隊」(「出征」p.440)のように軍隊の設備などもかなり劣っている。出征とは死であることが明らかである。

戦場に赴くとさらに「確実な死」(同 p.456)が遍在している。「海上にて」では、「潜水艦がやはり我々の最大の関心事」であり、「何時何処から現われるかわからない敵というものはいやな感じのものである」(p.425)というように、「私」は見えない敵の潜水艦の脅威に曝されている。

そして無事に目的地に着いたとはいえ、「未開の山野で悪質のマラリヤが発生する」地である「ミンドロ島の警備に廻されることにな」(「比島に着いた補充兵」p.397)る。『サンホセの聖母』ではマラリヤの脅威は「戦争末期潜水艦」のそれと比べて少しも劣らないと示されている。

「ミンドロは比島群島中最も悪質のマラリヤの発生する島である。(中略)我々も山へ入ってから大部分マラリヤで死んだ。」(「サンホセの聖母」〔サンホセの聖母〕p.411)

「町にはマラリヤ患者が多かったが、薬がないので患者は瘡が来ると日向に出た。熱帯の陽に照らされながら、ブルブル慄えている彼等の姿はかなり奇妙なものであった」(同〔ドクトル〕p.413)

「我々はこの島のマラリアに悩まされる異邦人が我々のみではないのを知った。」(筆者注：米軍も)(「俘虜逃亡」p.365)

引用文のように米軍というよりマラリヤはむしろ最大の敵だといえる。マラリヤのほか駐屯地において米軍やゲリラという敵も存在している。「いつ優勢な米軍があがって来るかわからない」(「俘虜逃亡」p.368)が、フィリピン人のゲリラはわが部隊を取り巻くように周りに潜んでいる。

「比島のゲリラには色々種類があるそうである。(中略)彼等の間にも将校下士官があり、独立隊長は大抵中尉であるという。」(「サンホセの聖母」〔ゲリラの妻〕p.419)

「その後或る日私が隊長室で雑談してこの事件に及んだ時、彼は幾枚かのゲリラ将校の写真を出した。(中略) みな若く精悍な顔であった。」(同 p.420)

制度が完備されていて、「みな若く精悍な顔」をしているゲリラに対して、素人の中年補充兵のわが部隊は全然相手にはならないに違いない。

「二十二日遙かに三隻の米船がブララカオ湾に入るのが、山上から望まれた。二十四日約二個中隊の米歩兵は我々の宿営地を襲った。この間に我々の間にはマラリヤが蔓延し、立って戦い得る者は二十日前ブララカオに出撃した兵力よりさらに少なかった。我々はただ迫撃砲で撃たれるに任せただけであり、中隊長が戦死すると残員をまとめて抵抗させる下士官はいなかった。」（「西矢隊奮戦」 p.385）

引用文は敗軍の直前の部隊の状況である。米軍の襲撃を受け、兵士達は死に或いは逃げまわり、部隊は潰れてしまう。『サンホセの聖母』において戦場に赴くことはつまり死ぬことだと示している。

『サンホセの聖母』では「出征」という事実の内包している「確実な死」が明示され、またその事実潜んでいる死の偏在をも確認している。死を意識している「私」の心理については前述したが、両者を関連してみると、「生還し、今こんな文章を書いている」（「出征」 p.451）「私」は、依然として戦場で実感した「死」に執着しているとわかる。「死」に対する執着の表裏として、「私」はまた「生還」の事実にこだわっていることが見られる。

1・2、「私」の生還の偶然

こうした必然的な死を控えていた「私」はしかし、「戦場の偶然」（「八月十日」）によって生還できるのである。『サンホセの聖母』では「私」がすでに生還したという事実は何回も示されている。

「そして事実その運の連続として生還し、今こんな文章を書いているわけであるが、マニラから先私の越えなければならなかった細い偶然の数は無数であって、とても昇り運などという条の通ったものではなかった。」（「出征」 p.451）

「（前略）私のように命拾いした者もある中に、敵襲を受ける前に確実に死んでしまったのは、やはり不運であったと、少なくとも遺族は考えるであろう。」（「海上にて」p.428）

「このいずれに属した方がよかったかという設問は、現在私がミンドロより生還しているという事実によって無意味となったが、その時はかなり深刻な問題であった。」

（「比島に着いた補充兵」〔バタンガス〕 p.404）

「すべて完全に「外国」であった。命を全うして帰った今日、出征が私にとって、官費による一種の「洋行」であったことは疑いない。」（同 p.401）

「とにかく、こうして中年の会社員の智慧によって軍隊で出世した彼は、そのため死期を早めた。しかし今私が生還しているのは別に出世しなかったためでもなければ、山中で楽観的であったためでもない。Sも死んでいる。」（「暗号手」 p.475）

引用文のように「私」は最初から自分が生還したという事実を明らかにするだけでなく、その事実を常に意識している。『野火』と比較してみれば、同じように必然的で無意味な「死」を掲げているが、『野火』は『サンホセの聖母』の12編のように、いつも自分が「生還している」、「命を全うして帰る」ことを繰り返していないと感じられる。この点から見ると、恐らく大岡は『サンホセの聖母』において自分の生還した事実には拘っていることが考えられる。そして、この生還の事実を意識しながら、過去の戦場における「死」と「生」の論理を探っていこうとする姿勢が窺える。

「出征」では「出征とは、いよいよ悪運つきたかね」と友人に言われたとおりの、「六対四の四の方へ入るなんて貧乏籤引いたことは一度もねえ」(p.445)と「私」は言う。しかし、面会の日に妻と会えなかったが、出発の時駅前まで妻と会ったのである。

「我々が会えたのは全く偶然であった。」(「出征」 p.449)

「妻と会ったことはしかし私の心に、かすかに明るいものを伝えて来た。六対四の四の方に入ったことが、或いは私の運のどん底であって、これからは昇り運になるのではないか、(後略)」(同 p.451)

妻との再会が「私」のいい「運」のはじめとすることができる。そして、「海上にて」では潜水艦の脅威に対して、「事實は我々を覗う米潜水艦が、数ある輸送船の中からわが船を標的に選ぶか選ばないかの偶然に懸かって」(pp.428-429) いるのである。

「しかしこの後比島へ着いた日本兵は概ねこの状況であつたらしい。わが船団は九隻中この一隻を失っただけであつたが、半月後に出た十五隻の船団は四隻しか着かなかつたという話であつた。わが輸送指揮官は現地参謀から「お前は運がいい」と賞められた？ そうである。」(「海上にて」 p.434)

運がよくて潜水艦の攻撃を避け、死から逃れる。また、ゲリラ討伐隊に参加した「私」も敵に会わずに戦わずにすむことがあり、一種の好運ともいえる。

ところが、米軍上陸して山に入ってから「私」は結局マラリヤの脅威を避けられず、病で発熱している。

「連日四十度の熱が続き、私もまた死ぬかも知れなかつた。」(「靴の話」 p.351)

「その時はしかし弥次さんたる私の方でも発熱していて、足が立たず、見舞うことは出来なかつた。」(「暗号手」 p.475)

引用文のように、「私」の病状はかなり深刻であり、死の間際である。そして、米軍が来襲するとき、「比島の山中でマラリヤのため敵前で落伍して、死と直面した」(「出征」 p.455)にも拘らず、「マラリヤで伏していた」「私」は僚友の「倒れた地点より一秆」の「わずかな差」で、運が良くて「米軍に見出され」(「海上にて」 p.432)、生還できるのである。

前に引用した「マニラから先私の越えなければならなかった細い偶然の数は無数であって、とても昇り運などという条の通ったものではなかった。」（「出征」p.451）とあるように、「私」は自分の「運」を見つめているといえる。こうして「私」はいい運と悪い運を含んでいる自分の「運」のありかたを見て、死の必然を認識する一方、生還である偶然の条理を辿りつこうとする意図があるといえよう。そこで作者の何故自分が生還できたのかという疑問が潜んでいるとわかる。こういう問いかけは『野火』と異なり、『サンホセの聖母』の一つ重要なモチーフではないかと思われる。

1・3、僚友の死の意味

『サンホセの聖母』の中で主人公は多くの僚友達の死について述べている。僚友の死の原因について「私」が最も詳しく分析しているのは「襲撃」の「小林衛生兵」であろう。出張する途中でゲリラに襲撃され、その場で死んでしまう。襲撃の現場にいなかったにも拘らず、「私」は各方面から彼の死因を追究している。「乏しくなった中隊の衛生材料を補おうと」（p.480）自ら出張を申し出て、彼は「ゲリラに射たれて死んだのも、要するに勤務に熱心であったため」（p.479）だと「私」は考えている。そして、襲撃された際、「小林だけ胸に二発受けたのは、やはり彼が衛生兵で、退避の動作がのろかったため」であり、「補充兵上りの軍曹」や「比較的優秀」な兵隊も皆野を走り、「中で一人小林の傍に伏せて応射したのは却って序列の極く低い、芝本という吃りの兵隊」（p.485）だけである。また、「ゲリラが列車を襲撃したのは後にも先にもこの時だけである」という疑点から考えれば、あいにくその時「修理兵」（p.487）は毎日ある海辺へ行って船の修理を行う。あそこは「やはりこの町もゲリラの巣窟であった」（p.488）ため、わが隊を襲撃し警告しようとするのではないかという可能性がある。このように「私」は襲撃の起因と小林の死の理由を探そうとする意図がわかる。

また、「運」がいいか悪いかという立場から僚友の死を見ている箇所もある。「海上にて」では「水泳に自信がある」一人の僚友は、珍しい「膂力」で「上官に重宝がられ」（p.428）る。しかし、「過重の労働」とされたため、「彼の優点は山へ入ってから、却ってその命を縮める結果になったようである」（同）と「私」は考えている。

「彼もやがて病いに倒れたが、彼より弱い病兵がぐずぐず生き永らえている間に、寝つくとも五日で死んでしまった。わが中隊はいずれ全滅に近い打撃を受けたのでこれは別に不運というほどではないかも知れないが、私のように命拾いした者もある中に、敵襲を受ける前に確実に死んでしまったのは、やはり不運であったと、少なくとも遺族は考えるであろう。」（「海上にて」 p.428）

「中隊はいずれ全滅に近い打撃を受けた」という面から見れば、彼の死は「別に不運」ではないが、「彼より弱い病兵がぐずぐず生き永らえている間に」、さらに「私のように命拾いした者もある中に」、敵襲の前「確実に死んでしまった」のは「やはり不運」である。彼の死について「私」は「不運」をもって結論を下す。同じ「不運」の場合「食慾について」

においてもある。

「しかし彼は死においては不運であった。といっても我々の大部分より二十日早く死んだというだけの不運であるが。」

米軍が上陸し山へ入ってから、彼は第一回の潜伏斥候に選ばれて風邪を得て帰り、五日で死んだ。(後略)」「食慾について」 pp.359-360)

「異常な食慾によって」「生死につき我々と違った平静な観念を持っている」(p.359) ように見える僚友の池田は、「我々の大部分」死んだ敵襲の前に風邪で早く亡くなってしまう。ここで「私」は「敵襲を受ける前に確実死んでしま」うことと「私のように命拾いした者もある」(p.428) という点から、彼等の死を「不運」と見なしていることがわかる。

そのほか、以下引用文のように、僚友の死因を探求することが不可能であり、結局それはその死の背後にある説明できない「運」が潜んでいるという結論しか下さざるを得ない例も挙げられている。

「最後に敵襲を受けた時、彼は私と同じくマラリヤで伏していた。彼が落伍したのは私の倒れた地点より一軒遠かっただけであったが、そのわずかな差が米軍に見出されるか否かの境目であった。」（「海上にて」 p.432)

「やがて焼餅やきの伍長の後任の学徒出の伍長が到着した。同じ便船で前任者はマニラに帰るはずであったが、その翌日米軍が上陸した。一日違いで死地に着いた兵士と、一日違いで死地を脱する機会を失った兵士は一緒に山に入り、一緒に死んだ。」（「サンホセの聖母」 p.421)

「彼がやがてマラリヤで倒れ、一月二十四日の敵襲に先立って死んだのも、過労からであることは間違いない。」（中略)

とにかく、こうして中年の会社員の智慧によって軍隊で出世した彼は、そのため死期を早めた。しかし今私が生還しているのは別に出世しなかったためでもなければ、山中で楽観的であったためでもない。Sも死んでいる。」（「暗号手」 p.475)

「海上にて」では、一人の「若い僚友」は輸送船上で「私」にその「淡い恋」を語り、任地に着いても「私に親切」であり、ある日「私の顔をじっと見て」、「この人だけは帰してあげたいがね」(p.432) とでも言ったのである。そして、彼の言葉が現実になり「私」は本当に運がよく生還できたが、「私と同じくマラリヤで伏していた」彼は結局運が悪くて「わずかな差」(同) で米軍に見出せなかった。同じマラリヤに罹り、同じ襲撃を受けたにも拘らず、「私」は「偶然」に米兵に救われたのに対し、僚友達は「偶然」に恵まれなかった。このような「わずかな差」が生死の境目となる例が「サンホセの聖母」でも見られ、ただ「一日違い」で二人の伍長は一緒に死んでしまうことになる。

或いは、「暗号手」では「出世」せずに「楽観的」であった「Sも死んでいる」事実が挙げられ、「過労」や「出世した」ことなどは中山の「死期を早めた」だけで決定的な死因で

はない。「私」はこれらの僚友達の死に関する描写ことによって、中山とSの断言できない死因と「わずかな差」や「一日違い」という説明できない「運」を指摘する。

一方、自分の生還の事実を繰り返すように、前線で僚友の死に対して無感動や無感覚であったということをも何回繰り返して強調している。

「私は前線にあって僚友の死に動かされたことはない。自分もまた死ぬ身であるという判断から、自分と同じ原因で死ぬ者に対して同情を失った。他人も私と同じであったかどうかは知らない。」（「サンホセの聖母」 p.414）

「兵士となって以来、私はすべて自分と同じ原因によって死ぬ人間に同情を失っている。」（「八月十日」 p.246）

「私が感動したなどと思わないで貰いたい。私は兵士となって以来、自分と同じ原因によって死ぬ人に動かされたことはない。私は衛兵勤務を楯に通夜にも告別式にも出なかった。」（「襲撃」 p.488）

「私」は「前線にあって」「兵士となって以来」、必ず戦場で死ぬに決まっているという判断から、「自分と同じ原因で死ぬ」僚友の死に対して実は少しも「感動」せず、「同情」をも失っている。ところが、僚友と「同じ原因で死ぬ」はずだった「私」は今は却って命を全うして帰った（「比島に着いた補充兵」 p.401）のである。自分の生還は自分の予測を裏切り、さらに言えばこの「生還」は「私」にとって死んだ僚友達をも裏切ったであろう。こうした裏切りともいえる予想外れの感情は「私」が僚友の死について語るきっかけになると思われる。

こうして「私」は僚友の死についてかつては無関心や無感動を抱えていたが、「命を全うして帰った今日」（同）はその原因を分析したり、説明できない「運」を描いたりしている。彼等の「運」を見きわめて、「不運」であるかどうかについても検討している。何故自分が生還できるのか、また何故僚友たちが死んだのかを、作者は問いかけていると思われる。

それに、「私」は僚友の死について描いているのではなく、彼等の死を運命や「不運」といった消極的な立場から見ているのでもない。僚友を描く時、その名前を必ずしも紹介するのではないが、「或る下町の下駄屋」（「海上にて」 p.426）や「東京近郊の某警察署の巡查」（「靴の話」 p.349）などのようにその人の背景を必ず紹介する。それだけではなく、僚友の死を語る前に「私」は常に彼等の良いところを紹介する。

「襲撃」一文で描かれた小林衛生兵は「勤勉で親切で」、「乏しい医療品から色々工夫をし」、「給与の改善に貢献した」（p.478）。また彼の「号令は甚だ立派で」、「全部間違えずにやってのけた」（p.479）という、かなり優秀な兵士であることがわかる。また「海上にて」では、「膂力」のある僚友の「やくざ風の厚顔とシニスムは軍隊では最も頼もしがられる性質のものである」（p.428）る。「一軒」の差で「米軍に見出され」なかった若い僚友は、「隊の模範兵の一人」（p.432）である。

また、「西矢隊奮戦」一文で「遂に帰還していない」「元ムーラン・ルージュ俳優山口正太郎君」は、「ゲリラ射殺の殊勲を立て」、「無論中隊一の美男子で、勤務もその職業に似合

わず勤勉正確」(p.376)である。「靴の話」でマラリヤで死んだ松本は「我々同様三十すぎの老兵であるが、職掌柄依然として力士的膂力を残し、且几帳面な事務的才能を持って」おり、「中隊幹部の下士官から重宝がられ」(p.349)る。

また、「私の経験では日本の軍隊で、補充兵の位置に最も近かったのは応召将校」とあるように、「私」は戦死した中隊長との間には「共感」(「暗号手」p.466)がある。「西矢隊奮戦」において、「我々のような兵隊をまかせられた中隊長は全く気の毒であった」(p.381)というところから見ると、「わが中隊長」は戦争経験があり、素人の我々補充兵を率いてきたのに対し、「中隊長が戦死すると残員をまとめて抵抗させる下士官はいない」(p.385)い。中隊長の役割と重要性を示している。玄人の上官でない「食慾について」の木下少尉も「頗る軍人らしく死んだのを疑わない」(p.361)と描かれている。

「米軍の討伐隊が附近海岸に上った日、彼は下士官一兵二と共に、将校斥候に出て帰らなかった。私は彼が拳銃を乱射しながら頗る軍人らしく死んだのを疑わない。素人は戦場において職業軍人より軍人らしいことがよくある。愛国の観念が軍隊のシニスムで毒されていないからである。」(「食慾について」p.361)

要するに、「素人は戦場において職業軍人より軍事らしいことがよくある」という一文は、まさに前述した僚友達の死に対する評価ではないかと考えられよう。死んだ僚友の功績を挙げる一方、以下の引用文のように「私」の彼等の魂を鎮魂する姿勢も窺える。

「中山の霊よ安かれ。」(「暗号手」p.475)

「私は彼等が食慾のために他より幸福であったと推測するのは、私が彼等が幸福であってくればよいと思うからである。」(「食慾について」p.362)

<出征>という「確実な死」と「無意味な死」と「馬鹿げていた」「犠牲」(「出征」p.456)を指摘すると共に、「出征」で本当に死んでしまった僚友たちに対して、「私」は彼等の死を分析したり描いたりしている。さらに彼等の長所、或いは功績と思われる成果を取り上げることによって、彼等の生の意義を認める一方、死の意味をも付与しようとするのが窺える。

すでに前述していたように、『サンホセの聖母』では戦闘の素人で増幅されるエゴイズムを抱えている僚友たちの姿が描かれている。にもかかわらず、ここでは彼らの醜い姿は却って逆転されるのである。こうしたプラスとマイナスという両面を描くことを通して、作者は死んだ兵士たちを褒めようとするというより、むしろ彼らが確実に生きていた姿を記して伝えようとすると思われる。

死を常に強く意識し、死の偏在することをも確認している。にもかかわらず、解釈しにくい「運」の条理が潜んでいるため、「私」は生還できる、僚友の大多数は死んでしまう。『俘虜記』に「彼等は死に、私は生きた。この確然たる事実の受け取り方に二様あるわけ

はない。(中略) 心情の問題ではない。事実の結果である。」⁶⁷とある。生還した「私」はどのように僚友が死んだという事実を対処すべきかは、恐らく作者大岡の問いかけであろう。ここで一つの解釈がありうる。それは、死んだ僚友の一人一人が彼らなりに確実にまじめに生きていた姿を呈していることである。そして、それも運がよくて生還できた元兵士の仕事であろう。「生還し、今こんな文章を書いている」(「出征」 p.451)「私」にく書かせる>という僚友の死の意味だといえよう。

2、幸福のあり方

2・1、幸か不幸かへの関心

前述したように『サンホセの聖母』における「幸福」について検討した。<サンホセの聖母>という短編と単行本の題名の考察から、戦地の無辜の住民及び死を控えている兵士は「幸福」が存在しているとわかる。そして、改稿の考察からも、作者は極めて意識的に「幸福」や「不幸」の観点をもって、物事を考える傾向があると見られる。さらに「比島に着いた補充兵」でこうした幸か不幸かという問題意識はより明確に提示されていると思われる。それは、「死」を控えているからこそ「幸福」を感じ、「前途に死がなかったなら、今私にこの幸福感があるかどうか疑問である」(p.395)という「幸福」のあり方に対する疑問である。それに対して「八月十日」では生を得て戦争が終わり、確実に帰還できるにもかかわらず、「私」は却って「人生の道の半ばで祖国の滅亡に遇わなければならない身の不幸」(p.253)を感じる。「八月十日」に「幸福」に関する描写がないのは、或いは「前途に死がなかった」から「幸福感」がないということに関連しているかも知れない。このとき「私」の問題にしたのは、そういう国に「生きねばならぬ」ことである。

「では祖国は敗けてしまったのだ。(中略) あの狂人共がもういない日本ではすべてが合理的に、望めれば民主的に行われるだろうが、我々は何事につけ、小さく小さくなるだろう。偉大、豪華、崇高等の形容詞は我々とは縁がなくなるだろう。

(中略)

しかし慌てるのはよそう。五十年以来わが国が専ら戦争によって繁栄に赴いたのは疑いを容れぬ。して見れば軍人は我々に与えたものを取り上げただけの話である。明治十年代の偉人達は我々と比較にならぬ低い文化水準の中で、刻苦して自己を鍛えていた。これから我々がそこへ戻るのに何の差支えがあろう。」(「八月十日」 pp.253-254)

つまり、「私」の関心は敗戦後の日本社会である。「幸福」を感じる代わりに、「私」は「快く」涙を流し、現実的にこれから向き合わなければならない生活を考えている。そうしたら、「幸福」の問題は戦争に置かれるという前提があるのではないと思われる。

⁶⁷ 同注 38。『俘虜記』 p.147。

「彼が愚劣に戦った日本陸軍の犠牲者であることはいうまでもないが、仮に生還していたとして、彼がやはりあの陰惨な会社員の政治学を押し進める他はないとすると、彼はやはり不幸である。彼は依然として何かの犠牲者であることはかわりない。」（「暗号手」 p.475）

「私は彼等が食慾のために他より幸福であったと推測するのは、私が彼等が幸福であってくれればいいと思うからである。」（「食慾について」 p.362）

「暗号手」と「食慾について」では僚友の「幸福」か「不幸」かについて検討される箇所がある。死んだ中山は不幸であるが、仮に生還して依然として「悪智慧」を用いるとすると、「彼はやはり不幸」である。また、悲惨な戦争に強いられても、異常な食慾によって「平静な観念」を得て戦場の異常に対処することができることは、彼等が「幸福であった」という「私」の推測もある。戦争の「深刻な事実」に曝されても、人間の求めている「幸福」はどのように実現できるのか、という作者の疑問や関心が考えられよう。

2・2、「倅せ」について

もう一つ注目すべきところは、戦争の被害を受けた家族の「倅せ」のことである。これについて関塚誠の考察がある。

「この遺書を読む全ての読者の目に残るのは<倅せ>の漢字である。違和感の感じないのは、漢字が「にんべん」であって、「人の幸せ」とすぐ解釈できるからであるが、国語問題にとっても厳格であった大岡には何らかの意図を見いださなくてはなるまい。

（中略）大岡特有のシニカルな面を想像するならば、様々の解釈ができよう。しかし、ここではこの「にんべん」にはそのまま「人」の意味を持ったものとしたい。将来の妻の人としての心の幸せだけに限定させた、夫としての立場を示したものである。仮に物質的な幸せや状況的な事情には身を任せるべきではないが、妻の心の幸せが見つかるのであるならば祝福を贈ろうという態度である。」⁶⁸

つまり、「幸」という表記をあえて「倅」に書き換えた作者の意図が潜んでいるとわかる。それは、「人の幸せ」また「人としての心の幸せ」を意味していると指摘している。しかし、「倅せ」という字についての考察はここに止まっているのが残念である。「出征」では「倅」が三回も用いられる。

「生きて還るつもりであるが、死ぬかもわからない。あなたは多分ひとりで子供を育てるつもりになるだろうが、それは必ずしも私の望みではない。倅せがあると思つたら迷ってはいけない。」（「出征」 p.442）

⁶⁸ 関塚誠「大岡昇平『出征』論——戦争、共犯の意識——」『群系』11、1998.9。p.74。

「私の子供が私の死によって学資を失うのはたしかに一種の不幸であるが、そのため却って学生の集団的腐敗より免かれ得るならば、これは望外の倖せかも知れない。

こういうことも私がいなくなっても、必ずしも子供の発展を扼することにはならないと考えた根拠であった。現代の親の扶養の義務は子供を甘やかすだけのものである」
(同 p.443)

「しかし最も幸福な瞬間が何の思い出を残さないことは、スタンダードが注意している。思い出によって構成された過去は、必ずしも真実を尽していないかも知れない。

妻と私の間にもこうした記憶に残らない時間があったかも知れない。もし妻と品川で別れる時、私に言葉がなかったのが、そういう原理によるのなら倖せである。」

(p.457)

「倖せ」という言葉遣いは『サンホセの聖母』において極めて異色である。他の 11 編はおおむね「幸福」を用いるのに対し、「出征」一編は「先発の幸福なる人々」のように「幸福」という言葉が見られるのみならず、「倖せ」を使っているのである。関塚の指摘しているように、「倖せ」は「人の幸せ」また「人としての心の幸せ」を意味していると考えられるが、さらに言えばそれは「家族」に限定しているのではないかと思われる。言いつぎるかもしれないが、もし文字遊びの面を考えてみれば、人偏になるのは夫や親という「人」を失ったから故意に付け加えた可能性もあろう。とにかく、戦争によってもぎ離されなければならない夫婦と親子の場合、作者は「倖せ」をもってとりわけ戦争における家族的な幸福を示しているといえる。

3、批判の内実

3・1、反抗しなかった「私」

改稿の考察から作者は自分を棚に上げずに、非情に自己を反省する傾向があるとわかる。また日本兵とフィリピン住民との交流についても検討した。つまり、フィリピン住民にとって日本兵である「私」は自らの存在を、「圧制者」「占領軍」として認識している。「善良な日本兵は彼等と仲好くなり、「住民からものを取りあげたり、饗応を強制する習慣がなかったので評判がよかった」(『サンホセの聖母』 p.410) といいながらも、「日本兵の残虐」(『比島に着いた補充兵』p.403) や砂糖を「随時公定価格で巻き上げ」(『ミンドロ島誌』p.392) する日本軍の悪行なども述べている。弁解せずに誇張せずにただ事実を言うだけであり、都合よく自分を「日本兵」「日本軍」から切り離そうとする意識がないといえるであろう。これらの批判のほか、『サンホセの聖母』において戦争或いは戦争を起こした日本に対する批判は巻頭文「出征」と巻末文「八月十日」二編が非常に詳しく述べられている。以下まず「出征」における批判性を検討する。

「出征」では出征に強いられた兵士の心理と感覚が描かれているのみならず、そうした内省的自己批判も窺える。ここで戦争に参加することになった自分を反省する場面が主と

されている。「私」はこの戦争が起った原因として「貧しい日本の資本家の自暴自棄」と「旧弊な軍人の虚栄心」(p.456)を考えている。そして、「資本家と軍人に反抗することに賭けることは出来なかったか、と反省した」(同)とあるように、彼等の起こした戦争に、或る意味で参加して協力した自分が何故反抗しなかったのかを自ら問うている。以下の引用文はやや長いが、「私」の反省のプロセスを詳しく物語っている。

「私はこの負け戦が貧しい日本の資本家の自暴自棄と、旧弊な軍人の虚栄心から始められたと思っていた。そのために私が犠牲になるのは馬鹿げていたが、非力な私が彼等を止めるため何もすることが出来なかった以上止むを得ない。当時私の自棄っぱちの気持では、敗れた祖国はどうせ生き永らえるに値しないのであった。

(中略)

平凡な俸給生活者は所謂反戦運動と縁はなかったし、昭和初期の転向時代に大人となった私は、権力がいかに強いものであるか、どんなに強い思想家も動揺させずにはおかないものであるかを知っていた。そして私は自分の中に少しも反抗の欲望を感じなかった。

反抗はしかし半年前、神戸で最初に召集を覚悟した時、私の脳裡をかすめた。かすめたのはたしかにそれが一個の可能性にすぎなかったからであるが、その時それが正に可能性に終わった理由を検討して、私は次のことを発見した。即ちその時軍に抗うことは確実に殺されるのに反し、じっとしていれば、必ずしも召集されとは限らない、召集されても前線に送られるとは限らない、送られても死ぬとは限らないということである。

確実な死に向って歩み寄る必然性は当時私の生活のどこにもなかった。しかし今殺される寸前の私にはそれがある。」(「出征」p.456)

まず「非力な私」「平凡な俸給生活者」「昭和初期の転向時代に大人となった」国家の権威の強さを知っている「私」、というように「私」自身の立場を検討する。そうした立場で「何もすることが出来なかった」し、「反戦運動と縁はなかった」と認識することに至る。そのため、当時の「私」は「自棄っぱちの気持」を抱えて、「少しも反抗の欲望を感じなかった」ことを明言するのである。つまり、ある種の戦争協力者として自分を批判すると考えられよう。一方、「反抗の欲望」は全く感じられなかったわけではなく、一時的に「私の脳裡をかすめた」こともあると述べられている。しかしそれは結局「一縷の望み」(p.457)によって単に「かすめた」だけで、実行なぞまでは行かなかったことになってしまう。

「しかし同時に今はもう遅い、とも感じた。民間で権力に抗うのが民衆が欺かされている以上無意味であるのにもまして、軍隊内で軍に反抗するのは、軍が思うままに反抗者を処理することが出来る以上、無意味であった。私はやはり「死ぬとは限らない」という一縷の望みにすべてを賭けるほかはないのを納得しなければならなかった。

私はいかにも自分が愚劣であることを痛感したが、これが理想を持たない私の生活

の必然の結果であった以上、止むを得なかった。現在とても私が理想を持っていないのは同じである。ただこの愚劣は一個の生涯の中で繰り返され得ない、それは屈辱であると私は思う。」（同 pp.456-457）

こうして反省した「私」は「確実な死に向って歩み寄る必然性」を切実に感じながらも、この現状から脱するために「当時」も「今」も方法がなく、何もできないことを認めざるを得ない。それだけではなく、ある種の戦争協力者のため、軍部の非を責めたり、文句を言ったりする資格がないことをも認めざるを得ない。「私」の内省的自己批判は自分が「愚劣」で「屈辱」を感じたことしか思わざるを得ないのである。それゆえ「この死は既に私の甘受することにきめていた死ではあるが、いかにも無意味である」（p.456）とあるように、「無意味」や「やむを得ない」という言葉がこの一文で多く見られるわけである。実際には戦争協力者にはなりたくないし、戦争をもしたくないという意味合いもこの引用文の裏に潜んでいるであろう。そして、「私」の「戦争」に対する複雑な内面も窺えるのであろう。

「いかにも無意味」「止むを得ない」という考え方は一見戦争に対して消極的に見えるが、上述した反省のプロセスを通して自分の「愚劣」と「屈辱」を認めるというところからみると、「私」はむしろすべきこととしなかったことという自己の責任や立場を多方面から積極的に認識しようとしている。こうした自己反省と自己の立場の認識によって、作者は一方的に自己を被害者として見なしているのではなく、より正確に社会における自己の責任を捉える。また、作者はこのような経緯を辿って、戦争を批判したい、しかし批判する資格がないという複雑な心理と思考をも呈していると思われる。

3・2、軍部・天皇制への批判

改稿を検討してきたように、改稿によって醜い上官をはじめ、軍隊の組織の不完全や日本軍の行った残虐行為が指摘されている。さらに、戦争の悲惨さと戦争をやめる重要性も強調され、「政治」の不透明で恣意的な操作も批判されている。以下は『サンホセの聖母』において各編から見られる軍部や軍隊に対する批判をいくつか取り上げてみる。

「すべて新品であったが、帯革が布製なら靴は鮫皮という風に、みな今まで教育用に使っていた、古いが堅牢なものに比べて、著しくちやちであった。全部身につけて見ると我ながら間が抜けて、玩具の兵隊のように感じられた。」（「出征」 p.446）

「こういう脆い靴で兵士に戦うことを強いた国家の弱点だけが「事実」である。」（「靴の話」 p.352）

「船内はしかし噂に聞いていたほどの地獄船ではない。（中略）船員の話によると、船は現在輸送船として最優秀船の一つで、一発や二発の魚雷では沈まない由である。／船艙はしかし隔壁一つなく、外壁も戦標型通有のボール紙のような鉄板で、どうもそれほど沈艦とは思われない。」（「海上にて」 p.425）

以上のように物質的に貧弱している軍隊のイメージが描かれている。

「(前略) 近代国家の軍の首脳部にこういう善良な低能が存在し得るのは驚異である。」
〔「出征」 p.454〕

「我々が受けた退船訓練は滑稽なものであった。傾く船の反対側から降りろとか、潮流の方向を見きわめて下の方から飛び込めとか、実際に当たるとても実行出来そうもないことばかりであった。」(同)

「外出が許されないのは、到着したのが我々のような弱兵であることを、マニラ市民に知られたくないためだそうである。我々の二等兵の階級章も下船に際してはずさされた。(中略) 着くには着いたが現地参謀には我々を予定通り使用する意志がなかった(彼等は我々のような装備訓練の劣等な兵隊は要らないといった由である)。」〔「比島に着いた補充兵」 p.397〕

「住民の訊問などのため、部隊に一人タガログ語を知っている者が要るのは事実であった。しかしそれを兵士の間から養成するということは日本の軍隊の組織では出来ないのである。」〔「暗号手」 p.465〕

「それでも兵士達は私を嫉妬していた。(中略) 私が部隊でかけがえのない兵士であることはたしかであった。その兵士がこれほど憎まれねばならぬのは、日本軍の一般兵士の勤務があまりに辛かったからである。」(同 p.467)

また軍隊訓練の滑稽さや健全でない日本の軍隊の組織や低能の上官や弱兵も指摘されている。

こうした軍隊内部への批判のほか、「八月十日」は軍隊の首脳部である軍部についての批判も見られる。「出征」の掲げている〈何故反抗しなかったのか〉という問いに対して、「八月十日」は恐らく〈どのように批判を可能にするのか〉という問題意識であろう。まず「私」は広島原爆のニュースを知った自分の反応を語っている。現代理論物理学のファンである「私」は「最初の反応が一種の歓喜」(p.243)で、次の瞬間に「わが国民がその最初の犠牲となったことを思ってぞっとし」、「複雑な苦しみの後に死亡する沢山の同胞を思って慄然と」(p.244)する。そして、「不安にそこらを歩き廻」(p.245)っている。これについて「私」は種々の面から分析して、自分が不安を感じた原因を突き詰めている。「小市民根性」を有している「俸給生活者」である「私」は死んだ人々とは実は「何の関係もない」(同)。また「祖国という観念も私にあってはいたって漠然として」おり、今俘虜収容所で「ましな生活をしている」自分にとって、「憂国はどうしても感傷としてしかあり得ない」(同)というような自分の反応に対する非情な認識をしているのである。

「(前略) こういう戦場の光景を凄惨と感じるのは観者の眼の感傷である。戦争の悲惨は人間が不自然に死なねばならぬという一事に尽き、その死に方は問題ではない。

しかもその人間は多く戦時或いは国家が戦争準備中、喜んで恩恵を受けていたものであり、正しくいえば、すべて身から出た錆なのである。

広島市民とても私と同じ身から出た錆で死ぬのである。兵士となって以来、私はすべて自分と同じ原因によって死ぬ人間に同情を失っている。」（「八月十日」 p.246）

「私」のこういう非情な認識は上記の引用文のようにさらに述べられている。不安を感じたのはただ「観者の眼の感傷」にすぎず、死んだ人々も自分も「正しくいえば、すべて身から出た錆なのである」。或る意味で死んだ人々も自分も戦争の被害者と思われるが、ここで「私」はあえてそういう感傷や意識を排して、「すべて身から出た錆」だと明言するのである。

こうした非情な認識と自己批判をしてから、「私」は「純粹に生物学的な感情」（p.246）という原因を指摘する。と同時に、「私」も「純粹に生物学的な感情」という面から、戦争を起こした軍部に対する批判の論理を見つけるのである。

「生物学的な感情から私は真剣に軍部を憎んだ。専門家である彼等が戦局の絶望を知らぬはずがない。（中略）その彼等が原子爆弾の威力を見ながら、なお降伏を延期しているのは、一重に自ら戦争犯罪人として処刑されたくないからであろう。彼等がこの戦争を始めた原因は色々あり、彼等の意のままにならぬものがあつたのはわかっているが、この際無為に日を送っているのは、彼等の自己保存という生物学的本能のほかはない。従つて私は彼等を生物学的に憎む権利がある。」（同 p.247）

前の節で検討したように、内省的自己批判を通して、自分が或る意味で戦争協力者・戦争参加者であることを認めざるを得ない。しかし「八月十日」ではそうした内省的自己批判と非情な認識を通した上で批判を可能にするのではないか。自己保存などといった「生物学的な感情」のため、「私」は不安を感じ、軍部は降伏を延期する。この地平において「私」は軍部を批判する資格があると考えている。

このように複雑な分析と論述から、作者は戦争批判の困難さをしみじみと自覚しているのみならず、なおかつ批判しようとしても批判できないという自分の現実を苦しんでいるといえよう。

同じ論理で天皇制の存在をも批判している。「八月十日」では日付を明示することによって降伏の延期のもたらした無意味な死を強調されているとわかる。「十日」には日本は「ポツダム宣言を受諾してもいいと申し込んだ」（p.252）が、「国体護持」（p.255）という条件をつけたため、戦争が正式的に終わっていない。

「私は憤慨してしまった。名目上の国体のために、満州で無意味に死なねばならぬ兵士と、本国で無意味に家を焼かれる同胞のために焦立つたのは、再び私の生物学的感情であつた。」

天皇制の経済的基礎とか、人間天皇の笑顔とかいう高遠な問題は私にはわからないが、俘虜の生物学的感情から推せば、八月十一日から十四日まで四日間に、無意味に死んだ人達の霊にかけても、天皇の存在は有害である。」（同 p.258）

今度は「私」の批判は軍部への憎みから天皇制に対する憤慨として現われている。同じ論理で「天皇制」という「名目上の国体のため」、却って人々を無意味な死を強制させるのは、「生物学的な感情」の立場からまた「天皇制」「天皇の存在」を批判することが出来るのである。

軍部と天皇制の批判のほか、「祖国」と国民との関係も言及されている。

「祖国という言葉は一つでも、我々がそれに附する内容はまちまちのはずである。私は大体「わが偶然生を享けたる土地を何故祖国と呼ぶ必要があるろう」といった明治の基督者と同意見であるが、兎に角私は自分の生涯の思い出の繋がる土地の最後の一片から眼を離すことは出来なかった。」（「出征」p.460）

「祖国という観念も私にあってはいたって漠然としている。それはまず第一に私の勤労に対して幾分かを報いる雇傭主の事業に、彼が私を馘首しないで済む程度の繁栄を許してくれる政府を意味する。戦時中これは当然戦争を続行する政府である。その代償として私は俸給の消費のかなり大なる一部の納税の義務と、一兵士として前線に死ぬ可能性を提供する。戦時下の私の幸福は、専ら兵士に取られずに済むという偶然にかかっていた。他は私の知ったことではない。」（「八月十日」p.245）

「私は人生の道の半ばで祖国の滅亡に遇わなければならない身の不幸をしみじみと感じた。国を出る時私は死を覚悟し、敗けた日本はどうせ生き永らえるに値しないと信じていた。しかし私は今虜囚として生を得、どうしてもその日本に生きねばならぬ。」（同 p.254）

「日本降伏一時間後の、これら旧日本兵士の状態は要するに無関心の一語に尽きる。「祖国」も「偉大」もこの黙って横たわった人々の群に比べれば、幻想に過ぎない。／私はこれが人民の自然の反応であるか、一年の俘虜生活の結果であるかも決定出来ない。ただ後者と信じている方が気が楽だ。」（同）

「私」にとって「祖国」は「わが偶然生を享けたる土地」であり、「自分の生涯の思い出の繋がる土地」という意味だけを持っている。「祖国という観念」も「漠然として」おり、俘虜たちからみれば「祖国」は「幻想に過ぎない」。これは「私」が愛国心がない「非国民」（「八月十日」p.243）であることを示しているというより、「私」がナショナリズムや国家主義の味方をしないことを物語っているであろう。それに、「どうしてもその日本に生きねばならぬ」、「ただ後者と信じている方が気が楽だ」という箇所から見れば、「私」は必ずしも「祖国」に対して無関心で、愛国心がないとはいえないと思われる。国家と国民の関係、国家に戦争に強いられた国民という両者の関係について、作者はより事実即して捉えようとするのわかる。

以上検討してきたように、『サンホセの聖母』の現れている＜戦争批判＞は大まかに三つに分けられる。「出征」一文を代表としている内省的自己批判と非情な自己認識は一つである。二つ目は「八月十日」で提示されている「生物学的な感情」という立場から軍部と天

皇制の非への批判である。最後はほかの 10 編或いは『サンホセの聖母』全体から随所に見られる軍隊内部への批判である。このように執拗でやや複雑と思われる批判の形を取っている作者大岡昇平の姿勢と精神がここから窺える。

3・3、戦後社会への視線

『サンホセの聖母』の現れた批判は前述したような内容にとどまらない。作者の批判は過去の参加した戦争をめぐるもののみならず、より開放的に開かれた批判性を持っているように思われる。言い換えれば、単にひたすら従軍経験を描き、戦争の非や軍部の愚劣を指摘するのではない。作者は常に「現在」を意識して作品外部である戦後社会にも眼を向け、従軍経験や戦争批判を通して、現実社会についても批評をするのである。こういう姿勢は『サンホセの聖母』から読み取られると思われる。

例えば「社会が腐敗している以上、学生だけを腐敗から守ろうとしても出来ない相談である」（「出征」 p.443）、「教育に政治が介入すれば必ず欺瞞になる」（「襲撃」 p.486）とあるように、これらの教育と社会と政治に関する記述は戦時中のことを指しているが、この問題は必ずしも戦時中しか現れえない問題ではないであろう。また手段を選ばずに出世しようとする「陰惨な会社員の政治学」（「暗号手」 p.475）も指摘される。「仮に生還していたとして」「依然として何かの犠牲者」（同）である。そういう「陰惨な会社員の政治学」を使っている或いは使おうとしている現在を生きている人々に警告を与えるように思われる。

「食慾について」では「私」は「戦時戦後の食糧難」で「老人の食意地」を議論している「中年男」（p.356）に反対するところから物語を始める。「靴の話」においても「欠乏のあるところ常に「事実」がある」（p.353）と指摘し、そういう「欠乏」と「事実」の関係を提示している。或いは「俘虜逃亡」の冒頭に、「俘虜といっても日本人ではない。わが中隊で抑留していた比島人の俘虜が逃げた話である」（p.364）と書いてあるように、俘虜といったら日本人であるという当時の既定概念を意識した上で小説を書いたと考えられる。「占領下の住民の生活は占領軍にはわからない」（『サンホセの聖母』 p.416）というように、かつて日本兵がフィリピンを占領したことを指摘しているだけでなく、今米軍が日本を占領しているのも意味しているであろう。

或いは、「西矢隊奮戦」で描かれている「奮戦」の内実も、戦後一時的に続出していた英雄的感傷的な戦記物・戦争物に対する作者の批判的な意識が潜んでいるといえよう。

「我々はこの種のもをよく見得るものではない。私は絶えず眼をそらし、眼を帰してはまたそらしながら見たと記憶する。こうして私がこの傷ましい観物を見た時間は合計三十秒を出ないであろう。描いて数百字を並べることも可能であるが、人間が三十秒しか眺め得ない映像について、読者に数分の注意力を強いるのは間違いではあるまいか。」（「西矢隊奮戦」 p.380）

「レマルクは砲弾によって頭を飛ばされ、首から血を噴きながら三歩歩いた人間を物珍らし気に描き、メイラーもなお首なし死体を克明に写しているが、こういう戦場の光景を凄惨と感じるのは観者の眼の感傷である。」（「八月十日」 p.246）

上記の引用文のように作者が戦争の描き方にもかなり気を使っているとわかる。ノーマン・メイラーの『裸者と死者』（“The Naked and the Dead”、1948年）の示しているように、作者のこの意識も当時の風潮や流行に対する反発であろう。

以上のような点からみると、大岡は『サンホセの聖母』の各短編を書いたとき、ただ自分の戦争体験の記憶を思い出しながら創作するのみならず、創作当時の社会への関心や意識をも持っていた。言い換えれば『サンホセの聖母』は大岡が戦後社会に対する考え方や批判或いは反動の姿勢をも潜めた作品だといえる。

「二」の節では各短編の特色を取り上げて、テーマが多彩な『サンホセの聖母』を確認した。続いてこの「三」の節では「二」の節では考察できない部分を集めて検討してみた。『サンホセの聖母』に渡って「生」と「死」、「偶然」と「必然」、「運」と「不運」、「幸福」と「不幸」などのキーワードが多くある。それに、そこに作者の疑問と関心が潜んでいるのである。前述した作者の問いかけの内容をここでまとめてみると、〈何故自分が生還できるのか、また何故僚友たちが死んだのか〉、〈生還した「私」はどのように僚友の死という事実を対処すべきか〉、〈戦争に曝されても、人間の求めている「幸福」はどのように実現できるのか〉、〈何故自分が反抗しなかったのか〉〈どのように批判を可能にするのか〉などの設問が挙げられよう。さらに言えば「自分の生還」と「人間の幸福」と「戦争批判」は『サンホセの聖母』を一貫したモチーフではないかと思われる。

四、結び

『サンホセの聖母』は主題が多種多様の作品であり、作者の問いかけが多い作品でもある。戦争においても兵士であっても、そこにあるはずの人間の真実と幸福のありかを問い続ける。また、絶対的決定的な事実・現実という外部環境におかれた人間の姿も注目される。一方、創作の重点からみると、人間の内部における抽象的で言葉で表現しにくい感覚や精神状態を捉えて確認するということを試みた作品だと思われる。逆に言えば、これも作者の<その時の自分の感覚はどのようなものなのか>、さらに言えば<その時の自分はどのような者なのか>という問いかけにもなりうる。従って作者は死に対する感覚や恐怖・不安・緊張というぎりぎりな感情に関する表現に力を注いで描こうとしている。さらに、戦場における幸福はあるとしても、戦争を前にしてやはり「異常」なものである。「戦争」を描いた「サンホセの聖母」という矛盾した二項のように、戦争における幸福は人間の求めている幸福とは異なっている。そこから、作者の人間に対して絶えず暖かい視線と批判は生じてくる原因だといえる。

そして、同じ無意味な死を強制され出征したにも拘らず、作者は自己の偶然的な生還の条理を検討すると同時に、僚友の生い立ちや功績及びその死を描いている。『サンホセの聖母』も生と死の論理を究めていく作品であろう。死んだ僚友を評価したり鎮魂したりすることによって、あえてその強制された無意味な死を反転し、兵士たちを一人一人歴史のある人間として見なしているといえよう。一方、作者の自己の立場を認識するスタンスと取っている。自分が戦争の被害者である偏った立場に陥らず、より正確に戦争と自己のありかたを認識し、その上戦争批判を可能にしようとすると思われる。

第三章 『野火』との関連性

第一章の単行本一覧表で示しているように、『サンホセの聖母』12編を先立って『俘虜記』が刊行され、12編が発表する間に『続俘虜記』も刊行された。そして、この時期に連載していたのは「野火」(『文体』第三号、1948.12.15と第四号、1949.7.10)と「武蔵野夫人」(『群像』第一回～第六回、1950.1～6)である。つまり、多くの作品はほぼ同じ時期に交錯しながら書かれたのである。『サンホセの聖母』はこのような発表の環境に置かれ、他の作品とどのようなかかわりがあるのかが興味深く思われる。この章で『サンホセの聖母』と他の作品との関連性について検討してみる。考察対象として、同じ戦記物である『野火』を取り上げる。

『サンホセの聖母』と『野火』は第一人称「私」で語られている。同じ「兵士」として設定されるが、状況の設定が違っている。前者はフィリピンのミンドロ島のサンホセで駐屯していた「私」である。第一章で検討したように、『サンホセの聖母』は短編集であるが、各短編の「私」の性質が同じのため、同一人として扱うことができる。「出征」から始まり「八月十日」で終わるという＜主人公の戦争＞が描かれている。物語の舞台を見ると、最初は日本からサンホセまでの移動の過程であり、そして大半はサンホセという町及び山中を中心とされる。最後の「八月十日」は俘虜収容所を舞台とされる。部隊と一緒に行動している点もまた『野火』と違っている。

『野火』は一つの長編小説として、主人公「私」がもちろん同一人である。しかし、主人公の状況の設定は、レイテ島でのレイテ戦で敗れた敗軍・敗兵のみならず、食糧の欠乏のため部隊と野戦病院に追い出された不要物とされた状況である。しかも分隊長に「死ね」といわれ、食糧なし所属なし死しかないという最悪で悲惨な状態にある。物語の舞台はレイテの山野で孤独な彷徨が主である。食糧の不足と孤独な彷徨は『サンホセの聖母』と大きな違いであろう。

こうした主人公「私」の設定の違いは二作の戦争の世界を全く異なった面を呈しているといえよう。ところが、物語を形成する取材や素材という面からいえば、二作は類似している箇所がある。そのため、ここでまず素材の重複から『サンホセの聖母』と『野火』のモチーフの関連性を考察したい。

二作において重なっている素材は大まかに三つに分けられる。一つ目は海上の風景とフィリピンの熱帯風景を見て、主人公「私」の感じ取った感覚の差異である。「海上にて」と「比島に着いた補充兵」が『野火』「二道」と比較できる。二つ目は海辺の町に行く途中の描写と町の描写の差異である。「西矢隊奮戦」と『野火』「一四 降路」から「一九 塩」までが対比できる。最後は教会内部の描写の差異である。「サンホセの聖母」と『野火』「一八 デ・プロフンディス」が挙げられる。以下はこの三つのテーマに従い、検討する。【付録2】

一、死の予感と生への執着

輸送船の単調なディーゼル・エンジンの音や雲の形などの航海の場面に関する描写は、「海上にて」と『野火』においては似たような箇所がある。【資料A】「海上にて」は航海と風景の「単調」を示し、そういう単調さに胸をしめつけられる「孤独な囚人」のような「私」の「苦痛」の感覚を描き出している⁶⁹。それに対し、『野火』はそういう「単調」と「規則正しい風景」を描き出したが、風景の「単調」さに止まらない。「奇怪に思われた」とあるように、そこですぐ「私」の「奇怪」な感覚を示し、「昂奮」と「一種快い苦痛のニュアンス」という感覚を呈している⁷⁰。「奇怪」と「昂奮」が取り立てられ、『野火』の主人公の次の感覚に繋がっていると思われる。以下の図式のようにまとめる。

<風景の単調⇒囚人のような苦痛感>（「海上にて」）

<風景の単調⇒奇怪、昂奮と苦痛、一種快い苦痛のニュアンス>（『野火』「二 道」）

海の風景の描写に次いで、「死の予感」が提示されており、その後はフィリピンの熱帯風景に関する描写があり、「死の予感」もまたもう一度掲げられる。つまり、この二つの風景描写は「死の予感」と関係している、さらに言えば、「死の予感」そのものの描写であると思われる。こうした「死の予感」にかかわる描写がもう一つある。それは末期の眼で熱帯風景を見て歓喜を感じた箇所である。「私」に歓喜な状態を与えたという場面は「比島に着いた補充兵」と『野火』が共通している箇所がある。【資料B】

「比島に着いた補充兵」は「幸福の時」「幸福の瞬間」「幸福感」を強調し、「死」という「決定的な不幸」と対照させる。「前途に死がなかったなら、今私にこの幸福感があるかどうか疑問である」とあるように、戦地に着き死ぬ前に、自分の感覚を「幸福」と「不幸」の面で検討して捉えている。

ところが、『野火』は「比島に着いた補充兵」の書かれている「私の体」の代わりに「私の心」を用い、さらに「歓喜な状態」一文の前に「恍惚に近い」という感覚の描写が付け加えられた。しかもこの段落では「幸福」や「不幸」という言葉が見られないのである。調べてみると、『野火』では幸運と不幸という言葉はいくつかの箇所で用いられているが、「幸福」は一箇所しか表れていない。

「臓腑を抜かれたような絶望と共に、一種陰性の幸福感が身内に溢れるのを私は感じた。行く先がないというはかない自由ではあるが、私はとにかく生涯の最後の幾日かを、軍人の思うままではなく、私自身の思うままに使うことができるのである。」（『野火』「二 道」 p.11）

「比島に着いた補充兵」は一人の兵士が美しいフィリピン戦地・死地の風景を前にして、「幸

⁶⁹ 同注 38。p.429。

⁷⁰ 大岡昇平『野火』（新潮文庫、新潮社、2005）。pp.13-14。

福の時」を感じていることの代わりに、『野火』ではその美しい風景から「生の氾濫」を見ているのである。何故同じ風景の描写から主人公の感覚の描写が違っているかをいうと、作者は二つの作品で表現しようとする主題を異にしているといえる。既に前に二章で検討してきたように、＜幸福＞は『サンホセの聖母』のキーワードの一つである。戦争に強制された一兵士や住民はどのようにそういう最悪な状況から＜幸福＞を見出すのかという作者の問いかけを含んでいる。

『野火』では＜幸福＞に関する記述が少なく、一方「生の氾濫」とあるように、「死」が確実に迫ってくることと対照しているのみならず、後の主人公の「生への執着」（「九月」⁷¹）に結びついていると思われる。死を覚悟し、或いは生を諦めていた「比島に着いた補充兵」の「私」のイメージと異なり、『野火』の「私」は死にたくない、生きていきたいというイメージが作られたのではないと思われる。

さらに、この段落では「比島に着いた補充兵」の「私」はただ「運命に感謝した」が、『野火』の「私」は「偶然に感謝し」、続いて「運命に恵まれていたのではなかったか」、「運命」という言葉は（中略）容易に「神」とおき替え得るものであった」と考えている。つまり、作者は『野火』では＜偶然→運命→神＞という比較的複雑な一連の思考過程を示している。まず「偶然」を提示し、「運命に恵まれていたのではなかったか」という疑問句が次いで、二者の間に一種の皮肉な感じが潜んでいると思われる。「比島に着いた補充兵」と『野火』の主人公は共に戦争に送られた兵士であるが、前者は潜水艦の脅威を免れ平地に着いたばかりまだ敵と戦っていない兵士であるが、後者は敵に攻撃され敗軍の現実で曝され戦場で「死ね」といわれて所属から追い出された兵士である。より死を実感している兵士である。『野火』の主人公にとって実際に「運命」に恵まれておらず、こういう敗軍の現実がなかったら「生の氾濫」も感じたことはないのである。さらに「運命」という言葉は、もし私が拒まないならば、容易に「神」とおき替え得るもの」という描写では、「神」を登場させる。それは物語の後半で描かれている主人公と神との関わりと繋がり、一つの伏線であるともいえる。

ここで、幸福や不幸を一つのキーワードとしている『サンホセの聖母』は、自然の風物から感じ取った幸福より、「生の氾濫」や＜偶然→運命→神＞というような敗兵になった自己の運命に対する疑問を重んじる『野火』と異なっていることがわかる。これも二作各々の基調をなしているといえる。

⁷¹ 同注 70。pp.13-14。

二、孤独な敗兵の矛盾した社会的感情

「西矢隊奮戦」では中隊長が「私」を含めた「二個分隊」を率いるという登場人物の設定に対し、『野火』では「私」一人だけで町に向かって進んでいくと設定されているのである。また、前者の町にある「町役場」が『野火』において「教会」に換えられた。この二箇所は二作の決定的な違いであり、似た情景の描写があるとはいえ、物語の主題は異なった方向に発展されていくのである。以下はまず「犬」と「屍体」を取り上げて検討する。

1・犬——人間への恐怖と国家への批判

「西矢隊奮戦」において「犬」に関する描写は下記の引用文だけで、『野火』の「一六 犬」と比べれば非常に少ない。

「犬が吠えていた。白い毛が首のまわりから房々と垂れた洋犬で、道の突当り、町役場前の広場で、伸び上るようにして吠え立てた。中隊長が進むにつれ、犬はその後姿に隠れ、それから横に走り出た。吠える声だけが続いていた。」（「西矢隊奮戦」 p.378）

引用文をみると、「西矢隊奮戦」では犬が吠えていることは、犬にかかわる描写の中心とされていることがわかる。「私」や僚友たちの「犬」に対する感想や反応などは少しも言及されていない。

ところが、『野火』では、犬が二匹登場して、「牙をむいて吠えた」と描かれた。それだけではなく、「犬」も「私の上体を窺っているように思われた」⁷²くらい、攻撃性を持っている。それらの「犬」に対して「私」の反応も述べられている。

「犬の声によって警告された人間の方が、懼るべきであった。／何も動かなかった。（中略）私は立ったまま銃で覗った。（中略）むしろ犬に攻撃され、発砲を強いられるのを、私の方が懼れた。私は遠くの丘に見た野火を意識した。銃声によってあそこにいる比島人を刺戟してはならぬ。」（「一六 犬」 p.72）

引用文のように吠えていた攻撃性のある「犬」を通して、「私」の「人間」の存在に対する「懼る」感情が強調される。「私」は、山中で十字架という「人間的映像」（「一二 象徴」）⁷³に惹かれたため、あえて「死」を早めにしてその十字架のある町へ行ったのである。しかし、こうして「人間」に近づけようと思っているにもかかわらず、「人間」の存在を常に警戒し恐れている。「私」の「人間」との関わりへの矛盾が見られると考えられる。

また、この場面において「私」は一匹を殺したという物語の設定もある。「敵を殺すために国家から与えられた凶器を、私が最初に使用したのが、獣を殺すためであったのは、何

⁷² 同注 70。 p.72。

⁷³ 同注 70。 p.58。

となく皮肉であった」(「一六 犬」)⁷⁴とあるように、『野火』では「私」は最初に武器を使って「敵」を殺した場面である。「国家から与えられた」武器、つまり、国家を代表してある意味で神聖なもので、獣を殺すという筋が立てられる。これを通して、国家を批判することが明白に読み取られる。つまり、国家に戦争を強制され、しかも軍隊に見捨てられたことを批判すると考えられる。この「武器」に関する描写も『野火』において、一つのキーワードである。これは後に「私」の人殺しをも暗示しているであろう。物語の後半では剣にかわり銃にかかわる描写は一つのキーワードとなる。「私」は「国家から与えられた」銃で「無辜の人」(「二〇 銃」)⁷⁵を殺してしまい、最後「永松が安田を撃った銃を、取りに行」(「三六 転身の頃」)⁷⁶き、「僚友を殺した」(「三七 狂人日記」)⁷⁷ことに繋がっているといえる。

「銃は月光に濡れて黒く光った。それは軍事教練のため学校へ払下げたのを回収した三八銃で、遊底蓋に菊花の紋が、バツテンで消してあった。私は嘔気を感じた。」(「二〇 銃」 p.85)

「私は私の手にある銃を眺めた。やはり学校から引き上げた三八銃で、菊花の紋がぼってんで刻んで、消してあった。私は手拭を出し、雨滴がぽつぽつについた遊底蓋を拭った。」(「三六 転身の頃」 p.161)

「獣」のみならず、こうした「無辜の人」さらに「僚友」までも殺したという悲惨きわまりの悲劇が呈している。その悲劇をなした原因である国家の「銃」は、しかし、「遊底蓋に菊花の紋が、バツテンで消してあった」とあるように、国家の象徴が消してあり、国家の不在或いは国家の無責任を告発しているのではないかと思われる。

2・屍体の描写——「人間」と「物体」

「西矢隊奮戦」では「帰途私は何気なくさっき後続の兵士が奇妙な顔をして眺めた垣内を覗いた。一つの屍体があった。」(p.379)というところから、「私」の「屍体」を見た経験を語り始める。

『野火』では、「臭気」(「一六 犬」)の描写即ち「屍体」のまわりから語り始め、「どこかに住民の遺棄した豚の残骸でもあるんだろう」(同)⁷⁸と「私」は推測している。そして、「数個の物」を見た「私」の行為と何故それを認知になかった原因に関する記述を経てから、ようやく「屍体」であることを打ち明ける。

⁷⁴ 同注 70。 p.73。

⁷⁵ 同注 70。 p.86。

⁷⁶ 同注 70。 p.160。

⁷⁷ 同注 70。 p.163。

⁷⁸ 同注 70。 pp.74-75。

「物」と私は書いたが、人によっては「人間」と呼ぶかも知れない。いかにもそれは或る意味では人間であったが、しかしもう人間であることを止めた物体、つまり屍体であった。」（「一七 物体」 p.76）

「西矢隊奮戦」では「臭気」と屍体を見た「私」の行為と何故それを認知になかった原因について、後に言及されている。『野火』の記述の順序と違っている。『野火』のこのような謎めいた書き方は、「屍体」を人間的な要素から切り離して「物体」そのものであることを強調しているとわかる。

そして、「屍体」の外観に関する描写の差異からも、作者は「屍体」或いは「物体」を「人間」と対比させる意図が窺える。「屍体」の外観は『野火』のほうがより詳しく細くなまなましく描かれている。

「死者は広場から遁れて垣内に入り、そこで射撃されたか、或いは力尽きて倒れたものと思われる。両腕は少々屈げて頭上に伸ばし、片足だけ直角に曲げていた。この姿勢は家を迂回しようとする彼の最後の意志を示すように思えたが、或いは単なる死の痙攣の結果であったかも知れない。

眼を転じると、道の反対側の一家の垣内にも同じような屍体があった。頭の傍に大きな薪割りが投げ出されてあった。その不動の横顔は何か考え込んでいるように見えた。」（「西矢隊奮戦」 p.379）

引用文からわかるように、「西矢隊奮戦」は「屍体」を描きながら、「～ように思えた」「～かも知れない」「～ように見えた」という書き方によって、その「屍体」の示しているポーズをただ淡々と説明している。しかし『野火』はこの書き方とは全く正反対である。

「殊に彼等は屍体であること既に永く、あらゆるその前身の形態を失っていた。彼等の穿った軍袴のみ、わずかに彼等の人間たりし時の痕跡であったが、屍汁と泥で変色し、最早人間の衣服の外観を止めていなかった。周囲の土と正確に同じ色をしていた。

（中略）まずそれを屍体と認めた眼は、既知の人間の形態を予期しつつ、その上を移動したが、眼は常に異様な変形によって裏切られたのである。

露出した腕と背中、皮膚の張力の許すかぎり、人体の比例を無視した大きさに膨脹し、赤銅色に輝いていた。（中略）頬はふくらみ、口は尖っていた。その不動な表情は、強いていえば「考える猫」に似ていた。」（「一七 物体」 pp.76-77）

「その前身の形態を失っていた」、「人間たりし時の痕跡」、「異様な変形」、「人体の比例を無視した」などの箇所から見ると、「私」は何回も繰り返して「屍体」と「人間」との関係性を消そうとしているとわかる。

こうした「屍体」に関する描写と「私」が「屍体」を見た感情は、「私」の人間への接近の考え方に失敗させるのである。もちろん、この部分は後にくる「孤独な敗兵の裏切られ

た社会的感情」の到達を用意されてあることが疑いない。

「その時私の感じたのは、一種荒涼たる寂寥感であった。孤独な敗兵の裏切られた社会的感情であった。この既に人間的形態を失った同胞の残骸で、最も私の心を傷ましめたのは、その曲げた片足、拵げた手等が示すらしい、人間の最後の意志であった。」
(同 p.77)

以上のように、人間の「屍体」が「物体」であることと、「屍体」の示している「人間の最後の意志」を強調することによって、「私」の「一種荒涼たる寂寥感」と「孤独な敗兵の裏切られた社会的感情」を呈している。前節で検討したように、「人間」に接近しようとしているにもかかわらず、「人間」の存在を恐れているという、「人間」に対して矛盾した感情を抱えている「孤独な敗兵」である「私」のイメージが作られている。このような「私」は「人間」の存在を期待しつつ、なおも神経質に見張っており警戒している。そして、結局「私」が直面したのは、フィリピン人が住んでいるはずの「無人」⁷⁹の町であり、「人間」ではなく「物体」そのものである同胞の見るに耐えない「屍体」である。こうして「孤独な敗兵」の「孤独」が一層深められ、「人間」との断絶も提示されている。

「我々はこの種のもをよく見得るものではない。私は絶えず眼をそらし、眼を帰してはまたそらしながら見たと記憶する。こうして私がこの傷ましい観物を見た時間は合計三十秒を出ないであろう。描いて数百字を並べることも可能であるが、人間が三十秒しか眺め得ない映像について、読者に数分の注意力を強いるのは間違いではあるまいか。」（「西矢隊奮戦」 pp.379-380）

「西矢隊奮戦」はこの引用文のように、「屍体」に対する記述をあえて抑え、過大な解釈や想像を禁じているとわかる。それに反して、『野火』で作者はむしろそういう「傷ましい観物」を生かして、主人公「私」をより深い孤独の淵まで導いていくのである。

「西矢隊奮戦」と『野火』との関連は以上のように二箇所を取り上げて検討してみた。前者は単なる「私」の見たことや感じたことを、「私」の経験談の風に記していると感じられる。後者は或いはそういう断片的な記述を生かして、「人間の方が、懼るべき」や「物体」などのような意味づけをすることによって、「孤独な敗兵」と「人間」との「人間的関係」（「一二 象徴」⁸⁰）或いは「社会的関係」（「二一 同胞」⁸¹）が挫折したことも示しているのである。

⁷⁹ 同注 70。 p.72。

⁸⁰ 同注 70。 p.57。

⁸¹ 同注 70。 p.92。

三、神と狂気

『野火』において前節で検討した「屍体」を見た場面に次いでくるのは「教会」のシーンである。教会の内部の描写については「サンホセの聖母」と『野火』では似たような描写がある。両者の相違について、池田純溢は【資料 C】の下線部を引用して以下の引用文のように考察している。

「この変化は、サンホセに於て作者の脳裏に焼き付いた<キリスト>のイメージが、『野火』のどこに移植されたかによってもたされたものだといえる。なぜなら、サンホセに於て教会を訪れた時は、まだ戦場に血は氾濫していない。大岡昇平が血を見たのは、露营地よりブララカオに下った時であって、その時目撃した海軍兵士の屍の様子は、『西矢隊始末記』『西矢隊奮戦』『野火』に描かれ、他のイメージと同様の過程を見出せる。(中略) この感覚は『野火』執筆時の作者のもので、ここにも実経験に内在する想像力の働きがあり、実際の体験を逆転させることによって、いままで遠い存在であったイエスを、たとえそれが死せる肉体であったとしても、身近なものと感じ取っている。そして第一八章〈デ・プロフンディス〉に於て、死せる肉体にすぎなかったイエスが、最終章〈死者の書〉で生命ある肉体と重なるところに最も顕著な『野火』に於ける作者の想像力の働きをみるのである。⁸²

「実際の体験を逆転させる」とは、作者の実体験では<教会に入る→屍体を見る>という順番であるが、『野火』ではそれが逆転され<屍体を見る→教会に入る>ということである。この逆転のため「よほど異った観念を抱いていた」(「サンホセの聖母」)は、「あまり遠くない感覚を持っていたに違いない」(『野火』)、つまり「身近なものと感じ取っている」と池田が指摘している。

【資料 C】の対照表からみると、キリスト像や受難図は『野火』のほうが詳細に描かれ、「重ねて釘づけられた足から滴った血」や「掌を貫いた二本の釘によって釣り下げられた人体」のように、「サンホセの聖母」の描写より「悪い写実」を示している。作者は教会内部のキリスト像や受難図の「悪い写実」の描写を、教会外にある屍体と呼応させ、「私」が十字架を見て少しも「感動を起さなかった」(「一六 犬」)⁸³ばかりか、屍体を見たときに感じた「一種荒涼たる寂寥感」と「孤独な敗兵の裏切られた社会的感情」をも一層深めていき、次の段階つまり幻聴を聞いた段階を用意しているのである。

そして、「サンホセの聖母」では、「生死について我々とはよほど異った観念を抱いていた」や「この時前線へ来た兵士であったため」という記述は、客観的に正確に自己を分析し原因を追究しているといえる。それに対して『野火』では、屍体を見ただけでまだ「人間の肉体の破壊」をしていない「私」が、却って「人間の肉体の破壊について、敗兵たる

⁸² 池田純溢「大岡昇平『野火』の研究——改稿を中心として——」亀井秀雄編『近代文学作品論集成 16 大岡昇平『野火』作品論集』クレス出版、2005。(初出『文学・語学』1972.9) pp.22-23。

⁸³ 同注 70。p.75。

私と、あまり遠くない感覚」と「何かが私の中で変っている」と描かれている。あえてこう描写しているのは、「私」が次第に「暴兵」（「一九 塩」）⁸⁴に変わっていくことを暗示するためののではないと思われる。同じ場面の描写において以上の二作の相違点から見れば、『野火』はかなり意識的な操作によって構成されたことがわかる。

すでに「無人」の町と同胞の「屍体」に裏切られている「私」は、ここで「人間の肉体の破壊」という前よりより深い状況に陥っている。「私」は人間との関係性が断絶されたのみならず、ここでさらに「万国的愛の象徴」の「十字架」（「一二 象徴」）⁸⁵を有している教会或いは神にも見捨てられるといえる。

「床の埃に伏して私は泣いた。十字架に曳かれて降りて来た敬虔なる私が、何故ただ同胞の惨死体と、下手な宗教画家の描いたイエスの刑死体だけを見なければならないのか。私をここに導いた運命が誤っているのか、私の心が誤っているのか、そのいずれかである。

「デ・プロフンディス」（中略）

今では知っている。それは昂奮した時の私自身の声だったのである。もし現在私が狂っているとすれば、それはこの時からである。

「われ深き淵より汝を呼べり。主よねがわくはわが声をきき……」

少年の時暗誦した旧約の詩句が頭の中で翻った。しかし会堂の天井に添って移行する私の眼に映る、比島の見すばらしい会堂の内部には、何も私の呼声に答えるものはなかった。

「われ山にむかいて目をあぐ、わが助けはいずこより来るや」

この時私は私自身と外界との関係が、きっぱりと断ち切られたのを意識した。地上で私の救いを呼ぶ声に答えるものは何もない。それは諦めねばならぬ、と思ひ定めた。」

（「一八 デ・プロフンディス」 p.79）

様々な要素を重ねて「私」は「狂っている」「私自身と外界との関係が、きっぱりと断ち切られた」という状態に達したのである。「神」が「私」を狂気に陥らせたというより、「神」が「私」を狂気に陥らせる諸々の原因の頂点だというほうがふさわしい。ここで「私」と「神」との関係は「生の氾濫」（二 道）を見た偶然と食糧のある「樂園」（「一〇 鶏鳴」）の発見と少年時代「私」の「神」への信仰（「一二 象徴」）を経て、もう一度提起されているのである。結局、この段階における「私」は「神ばかりではない、人とも交ることが出来ない体である。」（「一九 塩」）という窮地に置かれたことになる。

「私」と「神」との関係は続いて言及されるのは極度に飢えている状態で狂人の将校に出会い、彼の肉を食べたいと思ってからである。ここから見ると、「私」と「神」との関係あるいは「私」の狂気の状態はこの段階で一段落終わるといえる。

⁸⁴ 同注 70。p.83。

⁸⁵ 同注 70。p.57。

四、『俘虜記』との関連性の考察

『(合本) 俘虜記』の「あとがき」に作者は『西矢隊始末記』は旧『俘虜記』の附録としたものより短くなっている。同じ内容を敷衍して、別の一連の短編としたので、部隊行動の記録に限ったのである。⁸⁶と述べている。「附 西矢隊始末記」は西矢隊の結成するから最後潰れるまでの行動や出来事を部隊の日誌や公文書のように記している作品である。二作を対照してみると、「別に一連の短編」とは『サンホセの聖母』の12編をも含んでいることがわかる。具体的な例を挙げてみると、例えば輸送船の日蘭丸が魚雷に攻撃されて沈んでしまう場面について、「西矢隊始末記」と「海上にて」とも描かれている。

「十二日午後六時二十分、後ニ航行中ノ日蘭丸ノ船尾ヨリ黒煙上ル。全員退船準備、魚雷ジャナイ失火ダソウダ、「ワレ船尾ニ魚雷ヲ受ケタルモ航行ニ差支エナシ」ト無電ガアッタ、ナド流言飛ブウチニ、同船ハ僚船一ト共ニ次第ニ後レル。数分ノ後、同船ハ突如船首ヲ高ク水平線上ニ掲ゲ、瞬時ニシテ没シ去ル。米潜水艦ピランハノ雷撃ニヨルモノデアッタ。生存者千名弱、搭載人員ノ六分ノ一デアッタ。」(「西矢隊始末記」⁸⁷ (注：ここでの下線は原作による))

明らかに「西矢隊始末記」は軍隊の日誌風で簡潔に綴られている。それに対して、「海上にて」はより詳しく物語的風に描いている。前者は「十二日午後六時二十分」や「米潜水艦ピランハノ雷撃」といった情報を詳しく提示しているが、後者は場面の描写に重点を置く。「海上にて」の記述が多いため、最後の船が沈む場面だけ引用して比較してみる。

「スコールが来た。水平線の一角を暗くした雨脚は音を立てて迫り、平行する船列を霞ませた。その間日蘭丸が僚船一と共に次第に遅れて行く様が見える。

スコールは兵の被服を軽く濡らしただけで過ぎた。日蘭丸は依然として遠ざかりつつある。「ほんとに失火なのかも知れない。やられたんならもう沈むころだ」と私は思った。暫く或いは見えるかも知れない雷跡を探して水面を見凝めた後、何気なく顧みた。

スコールが過ぎた後の、さわやかに黝い雲の色であった。そのきらきらした空を背景に、日蘭丸の船体が舳を高くあげていた。半ばを水平線の下に隠した形全体が、青く霞むほど遠かった。影絵は引き込まれるように、するすると水平線下に消えて行った。」(「海上にて」 p.434)

「海上にて」では「スコール」の描写は一つのポイントとなってくる。そして、「さわやかに黝い雲の色」や「きらきらした空」で海上の風景を描き、「青く霞むほど遠かった」「影絵は引き込まれるように」などの描写で、沈船の場面を絵のように静かに美しく鮮明に表

⁸⁶ 『俘虜記』新潮文庫(新潮社、1967.8.10 発行、1995.3.5 四十八刷)。p.472。

⁸⁷ 同注 38。pp.327-328。

わしている。

以上のように似たような例が多い。まさに「西矢隊始末記」を「敷衍」した作品である。そもそもこの二作は文体が明らかに異なっているため、同じ出来事を描いても、書き方が違う。そして「西矢隊始末記」は「部隊行動の記録に限った」という「部隊」の全体を視点として書かれたものに対し、『サンホセの聖母』12編は「私」個人の体験と戦場において「私」の見たもの・感じ取ったものを描いた作品であろう。



五、結び

このように同じ材料や元素を同時に違った作品で使うのは、大岡昇平の戦争小説の一つの特色であろう。或いは一つの体験を何回も違った作品で描くということは、作家大岡昇平の小説の書き方であろう。重複が多く、読者が飽きてしまうかもしれないだろうと思われるが、作品に即して読めば、描いた内容が互いに補足できる部分もあるし、相違点を見詰めれば作者の意図も理解できる効果がある。『サンホセの聖母』はやはり前の章で検討してきたとおり、断片化されて作者の問いかける内容が描写の重点である。『野火』と比べて、「私」の感情や誇張の記述や過大な解釈などが抑えられている。リアルに作者の体験を語ろうとしている。そして『野火』は『サンホセの聖母』で使われた題材やモチーフを生かし、もう一つの「私」の戦争体験を築き上げている。『野火』は他の作品と重なっている描写があるにもかかわらず、作者の構成力と意識的な操作によってお城のような堅固で完成度の高い作品として成功したともいえる。

言い換えれば、大岡昇平は自分の体験した戦争の様々な出来事を創作の原材料として戦争小説を創作した。しかし、同じ戦争体験という素材といっても、大岡は違った創作方法で質の異なった作品を作り上げたのである。即ち、創作の方向性の違いである。『俘虜記』や『野火』のような一つ完結した長編小説があり、或いは『野火』のような虚構された世界もあり、さらに『サンホセの聖母』12編のようなシンプルで実体験をできるだけ忠実に記して、過去の経験を再現しよとする短編もある。大岡昇平の創作方法或いは執筆態度はここで窺えると思われる。さらに言えば、『サンホセの聖母』12編のような作家が自身の過去の体験を再現しよとする短編が、大岡の創作営為の背後にあったからこそ、『野火』や『俘虜記』のような完成度の高くて文学的な価値も高い作品が出来上がるのではないかと考えられる。

終章

一、『サンホセの聖母』という作者の問いかけの世界

1、問いかけの内実

第二章で作者の問いかけについて述べた。『サンホセの聖母』は12編の短編からなるが、各短編が作者の様々な疑問や問題意識を孕んでいる。もう一回それらの問いかけをまとめると、まず<死、緊張、恐怖、不安>という心理・感覚・感情の捉えである。「私」の内面と周りの雰囲気を実際に描き出し、執拗に捉えていく箇所が「出征」「海上にて」「比島に着いた補充兵」「襲撃」「西矢隊奮戦」などが見られる。次は、人間の内部の捉えの延長として、外部環境を解釈し分析することによって<事実、現実、環境、状況>はどう人間に影響を及ぼしているのかを見抜いていることである。政治→万事と人間の感情、軍隊組織→悪知恵、戦闘→非人間的な状態、事実→心理、というような影響関係の描写は、「サンホセの聖母」「暗号手」「襲撃」「靴の話」などにおいて検討されている。

上述の人間の内部と外部の捉えは、恐らく『サンホセの聖母』12編が創作されたときに底流とされているものであろう。そして、三つ目の問いかけは<人間>である。それに、作品中で戦争における人間の幸福の存在と人間の真実が提起されることから見ると、ここでの<人間>に対する問いかけとは、決して人間への懐疑や不信といったマイナス的な問いではないとわかる。いかに弱い、醜い、臆病な兵士でも、確実にまじめに生きていたことが描かれることから、作者は<人間>の生や人間性を肯定しているといえる。こうした発想で、作者は戦争に強いられた兵士たちや民間人の幸福と人間の真実のありかを追究している。と同時に一人一人の兵士や住民の姿にこだわって描いていくのである。人間の描写にこだわっているのは、必ずしもそれを正確に捉えようとする意図があるとはかぎらない。もちろん、兵士そのものを謳歌することではない。過去があり将来もあるはずの、かけがえのない一人一人の<人間>を大事に捉えようとするといえる。これによって「不自然な死」（「八月十日」）に強制して人間のあるはずの生と将来を奪った戦争に、その理不尽や非情や非人間性などの非を訴えている。

そういう底流のもう一つの面をいうと、それは戦争に曝されて「不自然な死」「戦場の偶然」（「八月十日」）といった、生と死の必然と偶然への問いかけである。作品中「私」が常に自分の死と僚友の死を見詰めている。のみならず、「私」は死を意識していると同時に、すでに「生還」している意識も強い。この問いかけは結局「偶然」や「運」しか説明できない。最後は戦争に対し、戦争を起こした国家に対し、戦争に反抗せずに兵士として加わった自分に対し、どう向き合えばいいのか、という問いかけである。『サンホセの聖母』において、「私」の非情な自己認識と自己の立場の確認という箇所が見られる。それを出発点として、批判の対象を軍隊内部や軍部や国家まで延ばしていく。

2、大岡昇平の創作の本質

以上のような様々な問いかけは『サンホセの聖母』の多種多様の性格、または異種の集合体という性質をもたらしたのである。そしてこれらの問いかけは作家自身の問題であり、作家の創作の本質ともいえる。つまり、人間の内部の描写、その内部と外部との関わり方、戦争に強いられた人間の幸福と生死、戦争への批判というモチーフは、作家大岡昇平が戦争小説を書くときの課題であろう。

『サンホセの聖母』12編の初出から単行本へ、単行本から全集への変化をみると、大岡の改稿の方向は彼自身の創作の問題と呼応しているとわかる。これらの改稿はただ単なる表現を工夫し洗練しようとするためだけではなく、作者が〈人間〉に関わる心理描写と人物描写へのこだわりが見られる。また人物が幸福であるかどうかという見方と、情報と批判の内容の精確さも重視されている。大岡は改稿を頻繁に行う作家である。最も大幅に改稿されたのは『野火』だと言われている。改稿による作品の方向や主題の改変は最も検討すべきテーマであるが、一方些細な改変でも時には重要なヒントが与えてくれると考えられる。『サンホセの聖母』における改稿はもちろん『野火』のような作品の方向や主題という大きな改変がない。しかし、表現の工夫や精確さへの追究という作家の創作の姿勢はここから見られる。短編集『サンホセの聖母』が『俘虜記』『武蔵野夫人』『野火』のように当時既に名作にはなっていないにもかかわらず、大岡は依然として煩を厭わずに労を惜しまずに作品に最善を尽くそうとしていたことがわかる。

二、『サンホセの聖母』の位置づけ——特殊性と重要性

1、書き手としての大岡昇平の姿

大岡昇平の初期作品において、『俘虜記』『野火』『武蔵野夫人』という作品にひきかえ、『サンホセの聖母』は出版側や購読側や評論家側にそれほど重視されていなかった。しかし、それらのような一つ完結した長編小説と異なり、『サンホセの聖母』は作者がかつての戦争体験において何かを認識し、その体験した出来事や認識したことを書き記した断片的でリアリズムのある短編の集合である。つまり、様々な問いかけを内包し多種多様の性格と断片化された性質を有している『サンホセの聖母』は、大岡の戦争小説の中で極めて異色であるといえる。また<幸福>に対する関心が強いという点も他の作品には見られない独特である。それだけではなく、大岡の創作方法においても他の作品と違い、独自の方法を持っているのである。それは第三章で検討したように、実体験を切り取って一つのモチーフに集約して純化していく、より完成度の高い長編小説を書き上げるのではなく、誇張や感情の氾濫を避けながらよりリアルに過去の体験を再現していくという書き方である。

そのほか、かつての体験や自己の認識したものを書き記したため、こうした短編を収録した『サンホセの聖母』は結局長編小説や連作にはならず、短編集に止まっている。ところが、かつての自己認識を書き記したという原因で、この短編集もまた単なる行き当たりばったりの或いはでっち上げた短編集ではないという性質を有しているのである。簡単に言えば、『サンホセの聖母』は長編小説または連作作品集と、一般的な短編集の間に位置づけられる<短編集>である。要するに、『サンホセの聖母』は独自の性格や特色を持っている作品であり、以上のような点はまさにその特殊性を示していると考えられる。

一方、第一章で検討したように、帰還後の大岡は強い表現欲求に憑かれている。こうした表現欲求が『サンホセの聖母』に反映したところは、数多くの問いかけであり、大岡自身のもやもやした胸のうちを言ってしまう、或いは言い尽くしたいという点である。

「わが賢明なる友人中村光夫の説によると、作者がむやみに自分の作品の「意図」とか「成立」とかを発表するのは賢明ではないということです。(中略) 僕が自分で一番果さなかったことが多いと思っている作品『野火』について、これまで何も書かなかったのは、右の中村の忠告に従ったわけですが、僕はこれから一年外国へ行って来る予定です。(中略) 未練のある今のうちに、『野火』を書きながら考えたことその他を、すっかり吐き出してしまいたいと思います。」⁸⁸

上記の引用文は1953年大岡昇平が外国に行く前に発表した『野火』の意図であるが、大岡の創作の姿勢が窺えるのではないかと思われる。つまり、大岡にとって作品を書くこと、精確に言うと戦争小説の創作は、単なる遊びや自己満足のためではなく、自分の考え方を読者に理解してもらいたい、自分の言いたいことを読者に正確に伝えたいための媒介

⁸⁸ 同注20。p.173。

であるといえよう。こういう創作動機も大岡自身の改稿の癖に繋がっていると思われる。

『サンホセの聖母』における改稿の経緯から見た作者の単行本の編集意図や、モチーフの表現への執着は、大岡にとってこの短編集の重要性を物語っている。しかも、同短編集の独自の方法が大岡の戦争小説の創作営為の一面を示している点からみても、『サンホセの聖母』は疑いなくかけがえのない重要な作品である。

さらに、この作品における創作本質である〈問いかけ〉は実は他の作品を結び付けるきっかけではないかと考えられる。『俘虜記』における囚人の墮落の描写も大岡の〈人間〉に対する関心から来るものであろう。或いは、『野火』における極限まで迫られている人間の精神状態と人間性の探求にも関わっている。また、『武蔵野夫人』の恋愛物語や復員者の物語と性質的に違っているが、帰還後の戦後社会への視線という点で少し関係があるかもしれない。或いは、『サンホセの聖母』において僚友の死を偶然と運でしか説明できないということに納得できない作者の姿も窺える。何故なら、1971年出版された『レイテ戦記』はより巨視的な視点で戦争の全体を見、そこで兵士の死がただ偶然ではなく、作戦のため必然なものだと物語っている。『レイテ戦記』の献辞である「死んだ兵士たちに」とあるように、大岡は僚友の死に対する執着が戦争小説の中で一貫していると窺える。

要するに、大岡昇平の初期作品または戦争小説における『サンホセの聖母』の重要性は、作家の創作動機と方法と、他の作品との関係性と、問いかけや自己認識という作家自身の創作原点という点にあるとわかる。

2、大岡昇平の戦争批判の意味

〈戦争批判〉とは字面の通り戦争を批判するということであるが、その批判の位相は一つの問題とされている。『サンホセの聖母』からみる大岡昇平の戦争批判はある種の複雑な心情や言いがたいものがあると思われる。戦争に強いられた主人公「私」は、出征者として決められてから〈幸不幸〉への関心があり、戦地に着いたら〈幸福感〉を感じ、そして日本の降伏を知ったら〈身の不幸〉を思っている。こうした戦争に強制されたことに対する考え方は、「私」の意識の変化というより、むしろ「私」の自身に内包している矛盾があるといえる。戦争と死を前にして〈幸福〉を見つけ出そうとしたが、戦争が終わって生還できる時却って〈身の不幸〉を意識した。と同時に、以下の引用文のように、戦争中「敗れた祖国はどうせ生き永らえるに値しない」と「私」は思っていながらも、敗戦後「どうしてもその日本に生きねばならぬ」と思うようになった。

「当時私の自棄っぱちの気持では、敗れた祖国はどうせ生き永らえるに値しないのであった。」（「出征」 p.456）

「国を出る時私は死を覚悟し、敗けた日本はどうせ生き永らえるに値しないと思っていた。しかし私は今虜囚として生を得、どうしてもその日本に生きねばならぬ。」（「八月十日」 pp.253-254）

不自然と不合理に集約された国家の起こした戦争と、一人間として生や幸福を求める自然的本能との相克は克明に描かれている。そうした矛盾した内面は恐らく大岡が戦争批判をしたとき常に抱えていた感情であろう。

大岡昇平の戦争批判の内実は第二章で検討したように、まず内省的自己批判と非情な自己認識に基づいている。そして、兵士であった自分がかつて軍隊で経験したことも批判の対象となっている。と同時に、人間に注目することによって戦争そのものの悪を掲げている。ところが、真に戦争を起こした軍部や国家に対する批判は、「生物学的感情」という限定しか成り立たないのである。こうした様々な面からなる批判の内実は或いは大岡自身の矛盾に関わっているかもしれない。つまり、「圧制者」（「サンホセの聖母」「俘虜逃亡）」と「占領軍」（「サンホセの聖母」）としての立場を自覚しており、加害者と被害者という全く正反対の立場に同時に立っていることを、恐らく大岡は意識しているのであろう。また、軍備している戦時中の政府が批判すべき反抗すべきものだを知りつつも、反抗しなかったという自分の行為を「愚劣」に「痛感」（「出征」）している。一方、「確実な死に向って歩み寄る必然性は当時私の生活のどこにもなかった。」（「出征」）とあるように、「じっとしていれば」生き延びることができ、生を食っていた自分をも否定しない。

こうして戦争批判の困難さと一言で簡単に言えない事実を大岡は明瞭に認識して、しかもいつも意識していると思われる。それに認識や意識に止まらず、困難さを知りつつも、大江健三郎と山城三郎の指摘の通り、批判を生涯貫かれたのである。一兵士として直接に戦争に参加したことがあるかどうか、軍備中戦時中でどのような生活したかどうか、などの個人的な差があるため、戦争批判の様相も様々となっている。これも大岡昇平は他の戦争小説を書いた作家と違っている原因の一つだと考えられる。

「戦争は厳粛な事実であります。（中略）戦争の真実に目をつぶって平和国家が建設出来ると思うのは、多分永久に欺されることにほかならないでしょう。」⁸⁹

一方、上記の引用文のように、戦争を「厳粛な事実」として扱い、真面目な態度で「戦争の真実」を見極めようとする大岡の戦争に対する基本的なスタンスが見られる。大岡のように作家としての出発時の『俘虜記』『野火』から、『ミンドロ島ふたたび』を経て『レイテ戦記』として戦争物を集大成した、というような戦争に対する関心及び戦争批判の姿勢を生涯崩さずに持ち続けている作家は稀であろう。

それに、第二章で検討したように大岡昇平の批判は単なる戦争そのものに止まらない。二度と戦争を起こさないように、大岡は時代の警鐘を鳴らしているように常に様々な現象に対して批判を加えていた。以上のように、戦争にかかわる批判を生涯貫かれた大岡昇平は評価されるべきではなかろうか。

⁸⁹ 大岡昇平「記録文学について」（初出『夕刊新大阪』第1405号から第1406号まで、1949.12.20-21）『全集』第十四巻。p.41。

三、今後の課題

今回の『サンホセの聖母』に関する考察は大岡昇平文学においてごく一部で、まだ多くの課題が残っている。今後の課題として以下のようにまとめる。まず、戦後小説を考察したとはいえ、<戦後>の時代背景を考察には至らなかった。特に『サンホセの聖母』が出版された1950年前後の時代の雰囲気はきわめて希薄である。そのため、文学史的のほか社会や思想的な面から時代背景を明確にするのが重要な課題の一つである。こうして大岡昇平という作家の文学史的な位置づけもより説得力を持つようになると思われる。そして、大岡の戦場物の研究をいうと、『サンホセの聖母』という短編集にこだわらず、同じようにほぼ同時期であり、のち『ある補充兵の戦い』で収録された「敗走紀行」「山中露營」「歩哨の眼について」「忘れ得ぬ人々」「女中の子」などの戦場物をも考察の対象とすべきである。その上『俘虜記』や『野火』との関連性の考察をさらに深めていき、大岡の戦後初期創作がトータルに把握できると思われる。これは共時的検討であるが、山城三郎の指摘のように「一兵士に徹した生涯」を抱えている大岡のため、通時的検討も必要である。つまり、『証言その時々』(筑摩書房、1987)を代表とする大岡の戦争についての言説をも考察範囲に入れて、それから『ミンドロ島ふたたび』(中央公論社、1969)やのち集大成の『レイテ戦記』(中央公論社、1971)という作品を検討しなければならない。そうしたら、より明瞭な大岡昇平の<戦争>が提示できるのであろう。

戦争小説の考察を離れて、創作方法やヒントなどの考察も重要である。何故なら、文学者になる前に大岡はすでにスタンダール文学の研究と翻訳に従事しており、スタンダリアンとして知られていた。スタンダールを基底にした大岡文学の内実を探求するのも一つの課題でもある。

『パルムの僧院』にはえらく感心しちゃったんですけども、あの中には戦争があり、十九世紀初頭のイタリア、反動時代のいろんな政治的な文があるわけです。ま、ファブリスという非情に純情な主人公が、そういう世界でどのように幸福を見出すかっていう話なんですけども、その間にパルムという小公国の政治がマキャヴェリスティクに分析されてる。ぼくはまあ、そういう個人の生き方と政治が両方もうまく書いてあるというようなことにびっくりしちゃったんですね。／ま、ぼくがそういうところに魅かれたというのも、結局、当時の世の中がだんだん騒がしくなってきたということからですよ。」⁹⁰

長い引用文であるが、それは大岡がスタンダールの『パルムの僧院』を読んで感じた感動や衝撃を物語っている。そして、「どのように幸福を見出すか」と「個人の生き方と政治」の関係に対する関心は、『サンホセの聖母』の主題と呼応しているといえる。戦争に関して大岡のは実は『パルムの僧院』から大きな啓示を得たのではないかと考えられる。この点からいうと、大岡文学におけるスタンダールないしフランス文学の受容を検討する必要も

⁹⁰ 同注14。p.29。

ある。

或いはさらに大岡文学の研究の中心から離れて、より広い範疇から大岡文学を捉える考察も必要である。即ち、戦後派・戦争小説という大きなスケールにおいて、例えば野間宏（1915－1991）『真空地帯』（1952）や梅崎春生（1915－1965）「桜島」（1946）『日の果て』（1947）や竹山道雄（1903－1984）『ビルマの豎琴』（1948）、島尾敏雄（1917－1986）『出孤島記』（1949）などの戦争小説と比較することによって、大岡昇平の文学活動及びその戦争小説の特色を明らかにする。或いは外国文学の戦争小説を比較対象として、比較する可能もある。例えば大岡の読んだアメリカの作家ノーマン・メイラー（1923－2007）の『裸者と死者』（The Naked and the Dead、1948）が挙げられる。それも同じ第二次大戦に参加した作者が、自分の体験をモデルにして書かれた小説である。その他、筆者の論文中間発表のときに審査委員の指摘したように、台湾人によって書かれた太平洋戦争を主題とする小説との比較も可能ではないかと思われる。例えば陳千武（1922－）の『獵女犯』（1984）⁹¹、李喬（1934－）『寒夜三部曲』の第三部『孤燈』（1981）などはいずれ太平洋戦争しかも南洋従軍を背景にした物語である。こうした外国の戦争小説との比較を通して、日本の戦争小説の特殊性或いは独自性が窺えると思われる。

以上のように、まだ多くの課題があり、それらを今後の研究テーマとして考えたい。



⁹¹ 『獵女犯』（熱點文化事業出版、1984）は短編集である。のち『活著回來』（晨星出版社、1999）という題名で再版。日本語に訳され、保坂登志子訳『獵女犯—元台湾特別志願兵の追想—』（洛西書院、2000）である。

参考文献

一、テキスト

- 大岡昇平『大岡昇平全集』第二巻、筑摩書房、1994.10.20。
大岡昇平『大岡昇平全集』第十四巻、筑摩書房、1996.3.25。
大岡昇平『大岡昇平全集』第二十三巻、筑摩書房、2003.8。
大岡昇平『大岡昇平全集』別巻、筑摩書房、1996.8.22。
大岡昇平『野火』（新潮文庫）新潮社、2005.6 九十五刷（1954.4 発行、1987.5 六十三刷改版）。
大岡昇平『（語りおろし）戦争』（岩波文庫）岩波書店、2007.7（1970 年大光社刊行、1978 年九芸出版再刊）。
大岡昇平『証言その時々』筑摩書房、1987.7.30。
大岡昇平『ミンドロ島ふたたび』（中公文庫）中央公論社、1996.5 七版（1976.6 初版）。

二、単行本

- 野田康文『大岡昇平の創作方法—『俘虜記』『野火』『武蔵野夫人』』笠間書院、2006.4。
花崎育代『大岡昇平研究』双文社、2003.10。
中野孝次編『大岡昇平の仕事』岩波書店、1997.3。
神奈川県文学振興会編『大岡昇平展』県立神奈川近代文学館、1996.10。
松元寛『小説家 大岡昇平—敗戦という十字架を背負って—』東京創元社、1994.10。
樋口覚『一九四六年の大岡昇平』新潮社、1993.11。
日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書 大岡昇平・福永武彦』有精堂、1990.8 四版（1978.3 初版）。
大江健三郎他『大岡昇平の世界』岩波書店、1989.9。
中井正義『大岡昇平ノート』沖積社、1989.8。
亀井秀雄『個我の集合性 大岡昇平論』講談社、1977.5。
中野孝次『絶対零度の文学』集英社、1976.4。

三、雑誌論文

- 尹慶一「生還者のエクリチュール—大岡昇平「西矢隊始末記」と『サンホセの聖母』の文体分析」『言語態 10』2010。
立尾真士「「死者は生きている」—大岡昇平『野火』論」『日本近代文学 77』2007.11。
花崎育代「「核戦争の危機を訴える文学者の声明」と大岡昇平」『日本文学』55-11、2006.11。
花崎育代「日本近代文学のアジア（8） 大岡昇平におけるフィリピン」『アジア遊学』54、2003.8。

- 佐藤洋一「大岡昇平・初期作品論(下)『襲撃』の構造と文体をめぐって」『言語と文芸』117、2000.11。
- 佐藤洋一「大岡昇平・初期作品論(上)『襲撃』の構造と文体をめぐって(特集 文学と言葉の間)」『言語と文芸』116、1999.11。
- 佐藤洋一「大岡昇平『暗号手』の方法 —初期作品の系譜・〈死者〉という分身—」『国語国文学報』7、1999.3。
- 小森陽一「第九章 死者と生者の間で——大岡昇平の戦後」『<ゆらぎ>の日本文学』日本放送出版協会、1998.9。
- 関塚誠「大岡昇平『出征』論——戦争、共犯の意識——」『群系』11、1998.9。
- 佐藤洋一「大岡昇平『出征』の文体 —初期作品の系譜と方法—」『愛知教育大学大学院国語研究』6、1998.3。
- 佐藤洋一「大岡昇平『靴の話』の言語技術 —メタフィクション構造の文体—」『愛知教育大学大学院国語研究』5、1997.3。
- 金川正浩「「俘虜記」(「捉まるまで」)校異表」『日本文学論叢』14、1984.12。
- 堀井正子「作品の小説性と記録について——「俘虜記」の場合——」『言語と文芸』95、1984.6。
- 大江健三郎「特集 戦後世界につらぬく批評性」『解釈と鑑賞』44-4、1979.4。
- 亀井秀雄「特集 大岡昇平の戦後文学における位置」『解釈と鑑賞』44-4、1979.4。
- 大岡昇平・石原吉郎(対談)「極限の死と日常の死」(「終末から」1974年6月号)『対談集 海への思想』花神社、1977.8。
- 池田純溢「大岡昇平と比島戦線」『解釈と鑑賞』40-6、1975.5。
- 大岡昇平・池島信平(対談)「戦争はあれもこれも辛かった」(初出1972.1.13)文芸春秋出版部編『文学よもやも話 下』文芸春秋、1974.2。
- 大岡昇平・大橋巨泉(対談)「死地へ向わせたもの」への怒り」(『週刊朝日』77-6、1972.2.11。原題は「事実」にうたわせた兵隊の戦史)大橋巨泉、週刊朝日編『巨泉の真言勝負 大橋巨泉対談集』朝日新聞社、1973.5。
- 池田純溢「大岡昇平『野火』の研究——成立過程における「文体」稿の位置」『日本文芸研究』23(1/2)、1971.4。
- 河盛好蔵「鮮やかな志賀氏の作品・文芸時評」『朝日新聞』1950.1.21、4版。
- 中村光夫「自己を凝視する大岡昇平(新鋭三人集のための小論・井上靖・大岡昇平・由起しげ子)」『文学界』4-3、1950.3。
- 中島健蔵「大岡昇平「出征」——新潮新年号所載〔作品暦〕——」『人間』5-3、1950.3。
- 神西清「(書評)「俘虜記」」『文学界』三月号、1949.3。

四、その他

- 日本近代文学館編『日本近代文学大事典』日本近代文学館、1977.11-1978.3。
 新村出編『広辞苑 第六版』岩波書店、2008.1。

付録 1 改稿対照表

注記：

- ・ここでは、『サンホセの聖母』12編の初出（表1参照）、単行本の『サンホセの聖母』（作品社、1950.6）、テキストとして使われた全集の『大岡昇平全集』第二巻（筑摩書房、1994.10）について対照した。
- ・対照表を簡潔にするため、単行本の内容と同じ場合は「同左」で示した。また、「……」で文章を省略した。
- ・仮名遣いや漢字などの表記、句読点、改行は今回の改稿対照表において考察を省いた。

【資料 1-1】 題名

* 「靴と食慾」（初出『小説界』一・二月合併号 2-1、1949.2.1）

初出	単行本	全集
「靴と食慾」（〔靴の話〕〔食慾の話〕）	「靴の話」「食慾について」	同左

* 「サンホセの聖母」（初出『文学会議』第8輯 1949.12.30）

初出	単行本	全集
サンホセの聖母→麻逸国	麻逸国→サンホセの聖母	同左
音楽家	音楽会	同左

* 「ミンドロ島誌」（初出『東北文学』十月号 1949.10）

初出	単行本	全集
「麻逸国」	再び「麻逸国」について	「麻逸国」について
砂糖会社と教会と	再び砂糖会社と教会について	砂糖会社と教会について

【資料 1-2】 「比島に着いた補充兵」の冒頭

* 「比島に着いた補充兵」（『世界の動き』十月第二号 1949.10.15）

初出	単行本
<p>真黒な船が真黒な水の上を疾駆していた。墨まで隠れた空からさす光はかすかに舷側近くの水だけを光らしている。水は物すごい早さで後へ走り去る。輸送船は今その航路最後の魔所、コレヒドール島の側を全速力で通過しつつあるところである。</p> <p>遂に船がとまった。この時の安堵と喜びの甘い感覚は戦争末期潜水艦の脅威におびえつつ、航海したものでないとわかるまい。甲板に出ると夜は既に明けかかっていた。真紅の朝焼がちよつぱりマニラを取巻く山嶺の後からのぞき始めていた。岸にはこう</p>	<p>遂に船がとまった。この時の甘い安堵と喜びの感覚は、戦争末期潜水艦の脅威におびえつつ、航海したものでないとわからない。甲板に出ると夜は既に明けかかっていた。真紅の朝焼がちよつぱりマニラを取り巻く山嶺の後からのぞき始めてみた。岸に</p>

<p>こうたる灯火が連なっていた。幾年か内地の遮光した電灯を見馴れた眼に、この水に映る美しい灯火の列は、何か郷愁めいた気持を起こさせた。</p> <p>昭和十九年七月十五日であつた。我々東京の補充兵一個大隊等数千名を載せた輸送船第二玉津丸は門司出航後十六日の航海を経て、漸く目的地にたどり着いたのである。船は鐘を鳴らしながら、しずしずと岸壁に近づいた。日は既に高く、さん橋の印象は一口にいえば雑色であつた。比島人が色とりどりの衣服を着て動いていた。</p>	<p>は<u>明るい</u>灯火が連なつてゐた。幾年か内地の遮光した電灯を見馴れた眼に、この水に映る美しい灯火の列は、何か郷愁めいた気持を起こさせた。</p> <p>次第に<u>明るくなつて</u>行く朝の光の中を、船は鐘を鳴らしながら、静かに岸壁に近づいた。<u>栈橋</u>の印象は一口にいへば雑色である。<u>黄と橙</u>を主調とした建物や荷の間を、赤と空色の衣服を着た比島人が動いてゐた。</p>
--	---

注:波線部は単行本で削除され、下線部は改めた箇所である。全集は単行本の内容と同じである。

【資料 2-1-1-1】 日付・時間

* 「サンホセの聖母」(初出『文学会議』第8輯 1949.12.30)

初出	単行本	全集
「諸蕃志」は一二四五年宋の趙汝适の撰に係り、……	「諸蕃志」は一二四五年宋の趙汝适の撰に係る。……	『諸蕃志』は一二二五年宋の趙汝适の撰に係る。……

* 「西矢隊奮戦」(初出『文学界』八月号 1949.8.1)

初出	単行本	全集
翌日 <u>厳重に警戒しつゝ午前を過ぎ</u> た後、我々は町長の息子を唯一の収穫として帰途についた。	<u>厳重に警戒しつゝ午前九時まで待</u> つた後、我々は町長の息子を唯一の収穫として帰途についた。	<u>厳重に警戒しつゝ午後三時まで待</u> つた後、……

* 「比島に着いた補充兵」(初出『世界の動き』十月第二号 1949.10.15)

初出	単行本	全集
我々は結局この小学校に <u>約五日</u> 宿営したが、……	我々は結局この小学校に <u>五日</u> 宿営したが、……	同左
パルアン警備の小隊は <u>廿五日</u> ごろの夜半出発して行つた。そして、我々サン・ホセ警備隊、及びブララカオ警備隊は <u>廿七日</u> 朝船に乗つた。	パルアン警備の小隊は <u>廿五日</u> の夜半出発して行つた。そして、我々サンホセ警備隊、及びブララカオ警備隊は <u>廿七日</u> 朝出発した。	パルアン警備の小隊は <u>二十七日</u> の夜半出発して行つた。そして、我々サンホセ警備隊、及びブララカオ警備隊は <u>二十八日</u> 朝出発した。
我々は二、三日ここに泊り、前任部隊の出発を待つて、……	我々は <u>二、三日</u> ここに泊り、前任部隊の出発を待つて、……	我々は <u>二日</u> ここに泊り、前任部隊の出発を待つて、……

【資料 2-1-1-2】 数字

* 「食慾について」(初出『小説界』一・二月合併号 1949.2.1)

初出	単行本	全集
船中 <u>十日分</u> の甘味品の半分を送つた。	船中 <u>二十日分</u> の甘味品の半分を送つた。	同左

* 「比島に着いた補充兵」(初出『世界の動き』十月第二号 1949.10.15)

初出	単行本	全集
この時ルソン島に残った者は <u>五名中三名</u> が生還している。ミンドロ島に渡った二個中隊約三百五十名のうち帰った者は約 <u>廿名</u> である。	同左	この時ルソン島に残った者は <u>五名中二名</u> が生還している。ミンドロ島に渡った二個中隊約三百五十名のうち帰った者は約 <u>六十名</u> である。
……、別に中隊本部を乗せた一隻と共に都合 <u>三隻</u> 九時出港した。	……、別に中隊本部を乗せた一隻と共に都合 <u>四隻</u> 九時出港した。	……、別に中隊本部を乗せた一隻と共に都合 <u>三隻</u> 九時出港した。

* 「海上にて」(初出『文芸』十二月号 1949.12.1)

初出	単行本	全集
我々東京の補充兵約千名の <u>ほか</u> 、各地の兵約五千を乗せた輸送船第二玉津丸は、……	我々東京の補充兵約千名など、各地の兵約 <u>五千</u> を乗せた輸送船第二玉津丸は、……	我々東京の補充兵約千名の <u>ほか</u> 、各地の兵約 <u>四千</u> を乗せた輸送船第二玉津丸は、……

* 「八月十日」(初出『文学界』三月号 1950.3.1)

初出	単行本	全集
「えらい力やさうやで。一発で <u>二十哩</u> 四方一ぺんやさうや」	「えらい力やさうやで。一発で <u>二十四哩</u> 四方一ぺんやさうや」	「えらい力やさうやで。一発で <u>十マイル</u> 四方一ぺんやさうや」
<u>二十哩</u> 四方といへば殆ど広島全市を蔽ふ広さである。	同左	<u>十マイル</u> 四方といへば殆ど広島全市を蔽う広さである。
しかし一発で <u>二十哩</u> 四方やらうと、 <u>三十哩</u> 四方やらうと、……	同左	しかし一発で <u>十マイル</u> 四方やらうと、 <u>二十マイル</u> 四方やらうと、……
……、一発で TNT 十噸に匹敵すると自慢した時も、……	……、一発で TNT <u>十噸</u> に匹敵すると自慢した時も……	……一発で TNT <u>十キロトン</u> に匹敵する自慢した時も、……
「もつとも例へば B29 <u>三十台</u> が一台で間に合へば、……」	同左	「もつとも例へば B29 <u>五十台</u> が一台で間に合えば、……」
……、一瞬にして <u>二十哩</u> 四方が廢墟と化したことを告げ、……	同左	……、一瞬にして <u>十マイル</u> 四方が廢墟と化したことを告げ、……

【資料 2-1-2-1】 地理・距離・方位など

* 「俘虜逃亡」(初出『週刊朝日』「夏季増刊小説と読物」1949.7.1)

初出	単行本	全集
位置はサンタクルーズ <u>南方</u> より約四キロ入った山腹にある。	位置はサンタクルーズより <u>東南</u> へ約四キロ入った山腹にある。	同左

* 「西矢隊奮戦」(初出『文学界』八月号 1949.8.1)

初出	単行本	全集
……、三日の後 <u>東南岸</u> ブララカオ背後の五一七高地で、同地警備の田中小隊と合流した。	……、三日の後 <u>東海岸</u> ブララカオ背後の <u>五一七</u> 高地で、同地警備の田中小隊と合流した。	……、三日の後 <u>東海岸</u> ブララカオ背後の <u>七二一</u> 高地で、……
我々の到着の翌日直ちに下士官一兵二より成る斥候が出て、サンホセを見晴らす五一三高地に登った。	我々の到着の翌日直ちに下士官一兵二より成る斥候が出て、 <u>西方十五</u> 軒、サンホセを見晴らす <u>五一三</u> 高地に登った。	……、 <u>西南方四</u> 軒、サンホセを見晴らす <u>五一七</u> 高地に登った。
斥候は米軍のテントが多数サンホセ背後の谷間にも浸透、マンガリン湾の水面に <u>機外艇</u> の縦横する様を眺めた。	斥候は米軍のテントが多数サンホセ背後の谷間に浸透、マンガリン湾の水面に <u>内火艇</u> の縦横する様を眺めた。	同左
十二月中に田中小隊は <u>十五</u> 軒西方の五一三高地に移つて分哨となり、……	十二月中に田中小隊は <u>五一三</u> 高地に移つて分哨となり、……	…… <u>五一七</u> 高地に移つて分哨となり、……
五一三高地から田中小隊が毎日伝へる情報も、 <u>次第</u> に「員数」化した形跡がある。	<u>五一三</u> 高地から田中小隊が毎日伝へる情報も <u>次第</u> に「員数」化した形跡がある。	<u>五一七</u> 高地から田中小隊が毎日伝へる情報……

* 「比島に着いた補充兵」(『世界の動き』十月第二号 1949.10.15)

初出	単行本	全集
<u>サン・ホセ</u> まであと四キロ鉄路をガソリン・カーが通う由である。	<u>サンホセ</u> まであと <u>四</u> キロ、鉄路……	<u>サンホセ</u> まであと <u>十</u> キロ、鉄路をガソリン・カーが通う由である。

* 「襲撃」(初出『新小説』五月号 1950.5.1)

初出	単行本	全集
各 <u>四</u> 軒、この二本の鉄路と海岸線に挟まれた三角の地帯は一面の沼沢地で、所々部落が点在してゐるだけである。	同左	各々 <u>十</u> 軒、 <u>八</u> 軒、この二本の鉄路と海岸線に挟まれた三角の地帯は一面の沼沢地で、所々部落が点在しているだけである。
低い生垣の向うは草原が続き、 <u>西方</u> を限つたそこを小川が斜めに横切つてゐる。	同左	低い生垣の向うは草原が続き、そこを小川が斜めに横切つてゐる。
私の背後、つまり兵舎正面も開いた野であるが <u>東</u> 側に迂廻すれば林が百米ぐらゐまで迫つてゐて隠れて近づける。	私の背後、つまり兵舎正面も開いた野であるが、 <u>東</u> 側に迂廻すれば……	私の背後、つまり兵舎正面も開いた野であるが、 <u>西</u> 側に迂廻すれば……。

【資料 2-1-2-2】地名

* 「比島に着いた補充兵」(『世界の動き』十月第二号 1949.10.15)

初出	単行本	全集
……トラックは、 <u>最初波止場</u> からここへ来たコースを逆にたどり、広場を左へ切れて海岸に沿って走った。	……トラックは、波止場からこゝへ来たコースを逆にたどり、 <u>ルネタ・パーク側</u> の広場を左へ切れて海岸に沿って走った。	<u>ルネタ・パーク側</u> の広場……
左方、海の反対側に水が現われた。水面は煙り、……	同左	左方、海の反対側に水が現れた。 <u>ラグナ湖</u> だった。水面は煙り、……

* 「海上にて」(初出『文芸』十二月号 1949.12.1)

初出	単行本	全集
「…… <u>マニラ湾口</u> は敵潜水艦の最も跳梁する場所である。……」	「…… <u>コレヒドール島沖</u> は敵潜水艦の最も跳梁する場所である。……」	同左

* 「サンホセの聖母」(初出『文学会議』第8輯 1949.12.30)

初出	単行本	全集
ミンドロ島はルソン島西南に位置し縦百三十 キロ 、 <u>幅七十キロ</u> 、……	ミンドロ島はルソン島西南に位置し縦百三十 キロ 、 <u>幅最も広いところで七十キロ</u> 、比島群島中 <u>ルソン</u> 、 <u>ミンダナオ</u> に次ぐ大島であるが、……	……、比島群島中 <u>パナイ</u> に次ぐ <u>七番目</u> の大島であるが、……

【資料 2-1-3-1】固有名詞とその他

* 「食慾について」(初出『小説界』一・二月合併号 1949.2.1)

初出	単行本	全集
……監視班、消火班、 <u>整理班</u> などを設けたが、もう一つどう呼んだか忘れてしまったが、 <u>戦闘準備</u> をして甲板へ出る班があった。	……監視班、消火班、 <u>整理班</u> 、 <u>戦闘班</u> などを設けたが、この最後の班は警報と共に <u>戦闘準備</u> をして甲板へ出て、潜水艦と戦ふのを任務とする。	同左

* 「比島に着いた補充兵」(初出『世界の動き』十月第二号 1949.10.15)

初出	単行本	全集
戦前米軍一個小隊が駐屯していたが、……	戦前米軍一個小隊が駐屯して <u>ゐたが</u> 、……	戦前米軍一個 <u>大隊</u> が駐屯、……

* 「海上にて」(初出『文芸』十二月号 1949.12.1)

初出	単行本	全集
…… <u>日新丸</u> の船尾から、細い黒煙が上つてゐる。	同左	…… <u>日蘭丸</u> の船尾から、細い黒煙が上つている。
その間 <u>日新丸</u> が僚船一と共に次第に遅れて行く様が見える。	同左	その間 <u>日蘭丸</u> が僚船一と共に次第に遅れて行く様が見える。

日新丸は依然として遠ざかりつゝある。	同左	日蘭丸は依然として遠ざかりつつある。
……、日新丸の船体が舳を高くあげてみた。	同左	……、日蘭丸の船体が舳を高くあげていた。
輸送船と駆逐艦各一が日新丸の沈んだ水平線にいつまでも見られた。	同左	輸送船と駆逐艦各一が日蘭丸の沈んだ水平線にいつまでも見られた。

* 「暗号手」(初出『風雪』二月号 1950.2.1)

初出	単行本	全集
彼は二十七歳の幹候上りの応召将校で、おとなしい山梨の織物屋の息子である。	同左	彼は二十七歳の幹候上りの応召将校で、おとなしい山梨の農家の息子である。

* 「西矢隊奮戦」(初出『文学界』八月号 1949.8.1)

初出	単行本	全集
見下ろすブララカオの町に人影を見ない。沖を渡る米機外艇の音響く。	……沖を渡る米内火艇の音のみ響く。	同左

【資料 2-1-3-2】資料への渴望

* 「西矢隊奮戦」(初出『文学界』八月号 1949.8.1)

初出	単行本	全集
五十名の歩行可能者が叢林を潜つて遁れ去つた。もしこゝで接戦があつたとすれば、歩行不能の四十人の病人が戦つただけであるが、一人も生存者がいないから、米軍側の記録でも調べないと状況はわからない。しかし仮にその手段ありとして、 <u>歴大な米参謀本部の書類の中からかゝる小戦闘に関する記録を探し出すのは大変であらう。</u>	五十名の歩行可能者が叢林を潜つて遁れ去つた。もしこゝで接戦があつたとすれば、歩行不能の四十人の病人が戦つただけであるが、一人も生存者がいないから、米軍側の記録でも調べないと状況はわからない。×	同左

* 「ミンドロ島誌」(初出『東北文学』十月号 1949.10)

初出	単行本	全集
一兵卒として比島に行き、直ちに未開のミンドロ島の警備に廻された私にとって、現地で比島を研究する手段はなかつた。	同左	一兵卒として比島に行き、未開のミンドロ島の警備に廻された私にとって、現地で比島に関する知識を得る手段はなかつた。

【資料 2-2-1】池田

* 「食慾について」(初出『小説界』一・二月合併号 1949.2.1)

初出	単行本	全集
我々が門司で民家に分宿して船を待つてみた一週間、私は偶然彼と同じ室に起居して、彼の美しい人柄に感銘したが、たゞ食物に関しては、これは到底事を共にす	我々が門司で民家に分宿して船を待つてみた一週間、私は偶然彼と同じ室に起居して、彼の美しい人柄に感じ入つたが、たゞ食物に関しては、これは	食慾行為については、読者も既に諸方面にお

<p>る人物ではないと思つた。彼の示した^{ママ}貧慾な行為については、読者も既に諸方面において豊富な例に立会つてをられることゝ思ふから詳細に語るのは省くが、要するにほかのことについてはあれほど謙譲な彼が、食物のことゝなると人が変つたやうに誅斂苛酷になり、<u>自己欲望</u>を露骨に表はして恥ぢないのである。</p>	<p>到底事を共にする人物ではないと思つた。<u>彼の示した貪慾な行為</u>については、読者も既に諸方面において豊富な例に立会つてをられることゝ思ふから詳細に語るのは省くが、要するにほかのことについてはあれほど謙譲な彼が、食物のことゝなると人が変つたやうに誅斂苛酷になり、<u>自分の欲望</u>を露骨に主張して恥ぢないのである。</p>	<p>いて豊富な例に立会つておられることと思ふから<u>彼の示した行為の詳細</u>に語るのは省くが、……</p>
<p>私はあきらさまに「君はいゝ人だが食事だけは君とはつき合はない」といつた。<u>彼は「ふん、どうもねえ」と淋しさうに笑つた。その様子はやはり憎めない。</u></p>	<p>私は遂にあからさまに「君はいい人だが食事だけは君とはつき合はない」といつた。×</p>	<p>……「君はいい人だが食事だけはつき合はない」……</p>
<p>バシー海峡で僚船一が沈められた。我々は無論<u>完全武装</u>して部署についたが、廣い海面に、船のためといふよりはむしろ<u>私自身のために</u>、あまり有効でない<u>眼前の監視</u>を放ちながら、私はふと隣の池田が始終口を動かしてゐるのに気がついた。……、彼の喰べてゐるのが甘納豆であることを知つた時、私は感嘆した。</p>	<p>バシー海峡で僚船一が沈められた。我々は無論武装して部署についたが、廣い海面に、船のためといふよりはむしろ我々自身のために、あまり有効でない<u>監視の眼</u>を放ちながら、私は隣の池田が始終口を動かしてゐるのに気がついた。……、彼の喰べてゐるのが甘納豆であることを知つた。</p>	<p>同左</p>
<p><u>以来私は彼を尊敬した。</u></p>	<p><u>私は感服してしまつた。</u></p>	<p>同左</p>
<p>しかし任地に着いて前述のやうに食糧が十分でなかつた時の彼の行動は、あまり<u>尊敬</u>すべきものではなかつた。</p>	<p>しかし任地に着いて、前述のやうに食糧が十分でなかつた時の彼の行動は、あまり<u>感服</u>すべきものではなかつた。</p>	<p>同左</p>
<p>玉蜀黍を混用して食糧が十分になると彼は「<u>残飯屋</u>」と呼ばれた。……彼の方でも<u>自らを卑しめる申し出</u>をしなくてもよかつたと思ふ。</p>	<p>玉蜀黍を混用して食糧が十分になると、彼は<u>班内の残飯を一手に引き受け</u>「<u>残飯屋</u>」と呼ばれた。……彼の方でも<u>自らを卑しめて余計な代行の申し出</u>をしなくてもよかつたと思ふ。</p>	<p>同左</p>
<p>私の隣に寝てみた池田の行動を私は漠然と意識してみた。彼も私と同様まづ近くの様々な持物と一諸に帯剣を懸けてある壁に走つたのである。しかしふと見ると、彼は<u>開け放たれた戸口からさす星明り</u>でいつまでもそこにはりついたやうに立つたまゝである。それは見様によつては異</p>	<p>私の隣に寝てみた池田の行動を私は漠然と意識してみた。彼も私と同様まづ近くの、様々な持物と一緒に帯剣を懸けてある壁に走つたのである。しかし<u>伏せながら</u>ふと見ると、彼はいつまでもそこにはりついたやうに立つたまゝである。それは見様によつては、</p>	<p>それは見様によつては、仰天して戸惑ひしたとも見られる頗る哀れな姿であ</p>

変に仰天して戸惑ひしたとも見られる頗る哀れな姿であった。	異様に仰天して戸惑ひしたとも見られる頗る哀れな姿であった。	った。
話は翌朝無益な搜索から帰つて、一同仮眠の許可を得て班内に横になつた時、私が昨夜の彼の <u>だらしない</u> 行動と「うゝ」と答へた変な声を思ひ出したところから再び始まる。	話は翌朝無益な搜索から帰つて、一同仮眠の許可を得て班内に横になつた時、私が昨夜の彼の <u>奇妙な</u> 行動と「うゝ」と答へた変な声を思ひ出したところから再び始まる。	同左
……、彼は第一回の潜伏斥候に選ばれて風邪を得て帰り、 <u>一週間</u> で死んだ。	……、彼は第一回の潜伏斥候に選ばれて風邪を得て帰り、 <u>五日</u> で死んだ。	同左

【資料 2-2-2】 松本

* 「靴の話」(初出『小説界』一・二月合併号 1949.2.1)

初出	単行本	全集
全体として彼の顔は警察官らしい堅実冷酷な不断の注意力と <u>結びついた激しい肉体的エネルギー</u> を現はしてゐた。	全体として彼の顔は警察官らしい堅実冷酷な不断の注意力と <u>強い肉体的エネルギー</u> の結合を示してゐた。	同左
<u>係</u> へ行つてみると、彼は仰向けに寝て強い日光の中で <u>ぎらぎら</u> 眼を見開いてゐた。その強い生命力が死と闘つてゐる <u>さま</u> が手に取るやうに見てとられたが、同時死も着々と彼の体の中で進行してゐる <u>のも</u> 明らかであつた。こめかみの皮膚が <u>びつたり</u> と骨にひつつき、奇妙な窪みをつくつてゐた。	<u>私</u> が <u>傍</u> へ行つてみると、彼は仰向けに寝て、強い日光の中で眼を見開いてゐた。その強い生命力が死と闘つてゐる <u>のは</u> <u>そのぎらぎらした眼の中に</u> 見てとられたが、同時に死も着々と彼の体の中で進行してゐる <u>のは</u> 明らかであつた。こめかみの皮膚が <u>びつたり</u> 頬骨にひつつき、奇妙な窪みをつくつてゐた。	同左

【資料 2-2-3】 山口正太郎

* 「西矢隊奮戦」(初出『文学界』八月号 1949.8.1)

初出	単行本	全集
彼は……、勤務もその職業に似合はず勤勉正確であつたが、上官の受けは <u>あまり</u> よくなかつた。 <u>その</u> あまりにも歯切れのよい科白に、上官は軽蔑されたやうに思つたのである。	彼は……、勤務もその職業に似合はず勤勉正確であつたが、 <u>その割に</u> 上官の受けはよくなかつた。 <u>彼の</u> あまりにも歯切れのよい科白に、上官は軽蔑されたやうに思つたのである。	同左
帽子は彼の端正な顔とよく似合ひ、 <u>昔</u> のカーボーイのやうであつた。 <u>これは</u> 咎められなかつた。	帽子は彼の端正な顔とよく似合ひ、 <u>米</u> 国映画の <u>カーボーイ</u> のやうであつた。 <u>このダンディズム</u> は咎められなかつた。	……、米映画の <u>カウボーイ</u> のやうであつた。 ……
私は早速彼に「一つ玉の正太郎」の異	私は早速彼に「一つ玉の正太郎」の異	同左

名を呈上し、この名は流行した。彼は遂に帰還してゐない。彼の最後は敗軍の混乱の裡に確認出来なかつた。	名を呈上し、 <u>綽名は流行したが</u> 、彼は遂に帰還してゐない。×	
---	---------------------------------------	--

【資料 2-2-4】 中山

* 「暗号手」(初出『風雪』二月号 1950.2.1)

初出	単行本	全集
丈は低く体軀も貧弱であるが、額が広く目が大きく、……	体軀は貧弱であるが、額が広く目が大きく、……	同左
さういふ陰性なエネルギーが彼自身にとつても社会にとつても、 <u>何の益するはずはない</u> といふことだけを、彼は気がつかなかつたわけである。	さういふ陰性なエネルギーが彼自身にとつても社会にとつても、 <u>何も益するものではない</u> といふことだけを、彼は気がつかなかつたわけである。	同左
「そりやなんていつたつて、君が俺を助け出してくれたことを感謝してるからな」と彼はやつぱり真面目に答へた。	「 <u>そんなわけぢやない</u> 。君が俺を助け出してくれたことを感謝してるからな」と彼はやつぱり真面目に答へた。	「そんなわけじゃない。君が俺を助け出してくれたことを感謝してるからさ」……
この二度目の答へは滑稽であつたが、要するに <u>彼は軍人共に自分が課長であつたといふことを印象させ得れば充分だと思つてゐたのである。</u>	この二度目の答へは滑稽であつたが、要するに <u>彼が軍人共に印象させたいと思つてゐたのは自分が課長であつたといふ一事だけだつたのである。</u>	同左
彼は鼻下に髭を貯へ一段と落ち着き払つて <u>傲慢になつた</u> 。	彼は鼻下に髭を貯へ一段と落ち着き払つてきた。	同左
「おい、君はさうやつてうまく立ち廻らうとしてゐるが、実はつまんないんだぜ。レイテはどうやら負け戦だし、どうせ俺達は助からないんだ。さうやつて株を上げると却つて身体を使はなきやならねえのは、会社と同じさ。……」	「おい、君はさうやつてうまく立ち廻る気らしいが、実はつまんないんだぜ。レイテはどうやら負け戦だし、どうせ俺達は助からないんだ。株を上げると却つて身体を使はなきやならねえのは、 <u>会社と同じさ</u> 。……」	「……株を上げると却つて身体を使はなきやならねえのは、 <u>会社も軍隊も同じこと</u> さ。……」
彼は依然として何かの犠牲者である。	彼は依然として何かの犠牲者であることはかほりない。	同左
状勢が絶望的になつて出世の条件がなくなると、不意に私に優しくなつたのがその証拠である。要するにこれは一個のおとなしい	状勢が絶望になると、不意に私に優しくなつたのがその証拠である。 <u>軍隊で出世しようなぞと思つたのも、単なる防禦にすぎなかつた。</u> 要	……軍隊で出世しようと思つたのも、単なる防禦にすぎなかつた。……

男であつた。	するにこれは一個のおとなしい男であつた。	
--------	----------------------	--

【資料 2-2-5】 他の僚友の例

* 「西矢隊奮戦」(初出『文学界』八月号 1949.8.1)

初出	単行本	全集
……、それもあり得ない事ではなかつたが、私の見たところを <u>少しも説明しない</u> 。	……、それもあり得ない事ではなかつたが、私の見たところとあまり符合しない。	同左
一体彼は <u>どうしてこの忙しい中にすぐばれる嘘をいふ</u> 気になつたか、不明であるが、かういふのを虚談症といふのかも知れない。	一体わが交替兵が <u>どうしてこの忙しい中にすぐばれる嘘を披露する</u> 気になつたか、不明であるが、かういふのを虚談症といふのかも知れない。	同左

* 「比島に着いた補充兵」(『世界の動き』十月第二号 1949.10.15)

初出	単行本	全集
搜索の結果 <u>曉方彼が庭の隅の古井戸の中で昏倒しているのが発見された</u> 。原因は不明であつた。	搜索の結果 <u>曉方庭の隅の古井戸の中で昏倒してゐるのが発見された</u> 。原因は不明である。	搜索の結果、 <u>曉方庭の隅の古井戸の中で昏倒しているのが発見された</u> 。原因は不明であるが、 <u>出発の場に居合さなければ、死に向つて積み出されずにすむと速断したものであろう</u> 。
七月分 <u>廿一ペソの給料のほかに、所持金全部を換える</u> 由であるが、 <u>私は門司で金残らず使ってしまったので</u> (私は輸送船が無事比島に着くとは思つていながつた) <u>換えるべきものがなく、用意周到なる僚友と比べて相対的貧乏におちいつた</u> 。	七月分 <u>廿一ペソの給料のほかに、希望によつて所持金全部も換える</u> 由であるが、 <u>門司で金残らず使ってしまった私には、換えるべきものがなく、周到なる僚友と比べて相対的貧乏に陥つた</u> 。	七月分 <u>二十一ペソの給料のほかに、希望によつて所持金全部も換える</u> 由であるが、 <u>門司で金残らず使ってしまった私には、換えるべきものがなく、慎重なる僚友と比べて相対的貧乏に陥つた</u> 。

* 「海上にて」(初出『文芸』十二月号 1949.12.1)

初出	単行本	全集
しかし輸送船の中では彼の朝まら談義は <u>人を笑はせる</u> というだけでも効果があつた。	しかし輸送船の中では、 <u>彼の朝まら談義は我々を笑はせてくれる</u> といふだけでも効果があつた。	同左

【資料 2-2-6】 兵隊全員

* 「比島に着いた補充兵」(初出『世界の動き』十月第二号 1949.10.15)

初出	単行本	全集
交換は <u>時々下士官によつて禁止</u> され	交換は下士官によつて禁止されたが、	外出が許されな

<p>たが、……、外出も許されない我々の<u>現状</u>を憐んでか形式的に止つた。外出が許されないのは、<u>我々のような弱兵が到着したことを</u>、なるべくマニラ市民に知られたくないためださうである。我々の二等兵の階級章も下船に際して取除かれた。</p>	<p>……、外出も許されない我々の<u>状態</u>を憐んで形式的に止つた。外出が許されないのは、<u>到着したのが我々のやうな弱兵であることを</u>、なるべくマニラ市民に知られたくないためださうである。我々の二等兵の階級章も下船に際しては<u>ずさゝれた</u>。</p>	<p>いのは、到着したのが我々のやうな弱兵であることを、マニラ市民に知られたくないためださうである。</p>
<p>(端的に言えば彼等は我々のやうな<u>装備訓練の劣つた</u>兵隊は要らないといつた由である)。</p>	<p>(彼等は我々のやうな<u>装備訓練の劣等な</u>兵隊は要らないといつた由である)。</p>	<p>同左</p>

* 「サンホセの聖母」(初出『文学会議』第8輯 1949.12.30)

初出	単行本	全集
<p>我々は外出の時、よくさういふ家に入つて饗応を受けた。……我々に特に<u>安く売られる砂糖</u>を与へたり、マラリヤ予防に一日一個支給されるキニーネ剤を<u>貯へて</u>持つて行つたりするのである。</p>	<p>我々は外出の時、よくさういふ家に入つて饗応を受けた。……我々に特に<u>安く売られる砂糖</u>を<u>与へたり</u>、マラリヤ予防に一日一個支給されるキニーネ剤を<u>秘かに貯へて</u>、持つて行つたりするのである。</p>	<p>我々は外出の時、よくさういふ<u>農家</u>に入つて饗応を受けた。……我々に特に<u>安く売られる砂糖</u>や、マラリヤ予防に一日一個支給されるキニーネ剤を<u>秘かに貯へて</u>、……</p>
<p><u>患者</u>は十九年十二月十四日の朝死んだ。</p>	<p><u>犠牲者</u>は十九年十二月十四日の朝死んだ。</p>	<p>同左</p>
<p>帰りの<u>門口</u>で<u>社長の秘書</u>は我々二人に一個づつコヽナツツを油でいためた菓子_を渡した。まるで子供である。実際、<u>三ヶ月の教育</u>後すぐ比島へ連れて来られた我々は、<u>戦闘</u>においても<u>軍隊の日常</u>においても、<u>殆んど</u>子供であつた。</p>	<p>帰りに<u>砂糖会社の社長秘書</u>は我々に一個づつコヽナツツを油でいためた菓子_を渡した。まるで子供である。実際<u>三ヶ月の教育</u>後すぐ比島へ連れて来られた我々は、<u>戦闘</u>においても日常においても、<u>殆んど</u>子供であつた。</p>	<p>同左</p>
<p>一日違ひで死地に着いた兵士と、一日違ひで死地を脱する<u>機会を失した</u>兵士は共に山に入り、共に死んだが、二人共あまり自分の不運を<u>嘆いて</u>はゐなかつた。</p>	<p>一日違ひで死地に着いた兵士と、一日違ひで死地を脱する<u>機会を失つた</u>兵士は<u>共に</u>山に入り、<u>共に</u>死んだが、二人共あまり自分の不運を<u>嘆く様子も</u>なかつた。</p>	<p>……兵士は<u>一緒に</u>山に入り、<u>一緒に</u>死んだ。</p>

【資料 2-3-1】 フィリピン人住民

* 「比島に着いた補充兵」(初出『世界の動き』十月第二号 1949.10.15)

初出	単行本	全集
日は既に高く、さん橋の印象は一口に いえば雑色であつた。比島人が色とり どりの衣服を着て動いていた。	栈橋の印象は一口にいへば雑色である。黄と 橙を主調とした建物や荷の間を、赤と空色の 衣服を着た比島人が動いてゐた。	同左

* 「ミンドロ島誌」(初出『東北文学』十月号 1949.10)

初出	単行本	全集
比島の土民はその畠で採つた甘蔗 をここに納入するのであらう。	同左	比島の住民はその畠で採つた甘 蔗をここに集めるのである。
住民は終日賭博に耽つてゐたが、信 心深かつた。	住民は信心深かつた。	同左

* 「サンホセの聖母」(初出『文学会議』第8輯 1949.12.30)

初出	単行本	全集
比島に布教した創業時代のジェズ イットは住民に信頼されたやうで ある。	比島に布教した創業時代のジェズ イットはいへば仕事をしてみたらし い。	比島に布教した創業 時代のカトリック僧 侶は……
かうした血の色の氾濫の中で礼拝 し得た古人は、明らかに生死につ いて我々とはよほど異つた観念を抱 いてゐた。	同左	かうした血の色の氾 濫の中で礼拝し得た 西欧の中世人とフィ リピン人は、明らか に生死について我々 とはよほど異つた観 念を抱いていた。
比島の女の地位は我々と比べて著 しく高い。	比島の女の地位は日本の女のそれ と比べて著しく高い。	同左
……、蒼黒い皮膚は到るところ不快 な影を作る。	……、蒼黒い皮膚は顔の彫刻的細 部に到るところ不快な影を作つて ゐる。	同左
その歩き振りもゆつくり落ちつい て節度あり、……	その歩き振りは病後らしい倦怠の 中に落ちついた節度あり、ダンス の好きな雑貨店の売子など足許に も及ばぬ威厳があつた。	同左
全体として頑健な肉体と知性との 原始的な結合を示してゐる。	全体として頑健な肉体と着実な知 性との原始的な結合を示してゐ る。	同左
衛生兵一人しか持たなかつた我々 はよく彼の診察を受けた。彼は代償	衛生兵一人しか持たなかつた我々 もよく彼の診察を受けた。彼は代	同左

<p>としては専らキニーネ剤を要求した。</p>	<p>償として要求したのは専らキニーネ剤であつた。</p>	
<p>これは顔中皺だらけの四十過ぎた男で、汚い家に七人の家族と共に住み、音楽家らしく始終黒服を着てゐた。</p>	<p>顔中皺だらけの四十男で、汚い家に七人の家族と共に住み、音楽家らしく始終黒服を着てゐた。</p>	<p>……、汚い家で七人の家族と共に住み、……</p>
<p>マニラ、バタンガスで夕方川岸に涼みに出る彼等の様子は、むしろ甚だ感傷的に見えた。北緯十五度の恋と赤道直下の恋との間にはかなりの逕庭があると考へて差支へない。</p>	<p>マニラやバタンガスで夕涼みに出る彼等の様子は、むしろ甚だ感傷的に見えた。北緯十五度の恋と赤道直下の恋との間には、かなりの逕庭があると見て差支へない。</p>	<p>……、かなり逕庭があると見て差支えない。</p>
<p>彼女達はその美にあまりふさはしくない古い家に母親と三人で暮らしてゐる。</p>	<p>彼女達はその美にあまりふさはしくない古い汚い家に母親と三人で暮らしてゐる。</p>	<p>同左</p>
<p>あなたがお母さんに孝行し、イザベラを可愛がつてゐるのは、はた目にも美しい、……</p>	<p>あなたがお母さんに仕へ、イザベラをかばつて家をおさめて行くのは、はた目にも美しい。</p>	<p>同左</p>
<p>我々是一種の気取りから、好んで土民の使ふ呼称を用ひてゐたが、やがてブルンタリオが義勇軍を意味する一種の美称であることが判明するに及んで、中隊長は我々にそれを用ひるのを禁じた。</p>	<p>我々是一種の気取りから、好んでこの現地の呼称を用ひてゐたが、やがてブルンタリオが義勇兵を意味する一種の美称であることが判明するに及んで、……</p>	<p>同左</p>
<p>会話は途切れ勝であつたが、やがて彼女は「……」といつて去つた。その方は渡廊下で繋いだ離れになつてをり、彼女の寝室らしかつた。やがてそこからミシンの音が聞え出した。この時彼女がいつた excuse me は私が英語で聞いた最も侮辱的な調子を含んでゐた。やがて彼女と同居してゐる親類の娘が米の粉から作つた菓子を持つて来た。</p>	<p>会話は途切れ勝であつたが、やがて彼女は「……」といつて去つた。この時彼女が使つた excuse me は私が英語で聞いた最も侮辱的な調子を含んでゐた。その方は渡廊下で繋いだ離れになつてをり、寝室らしかつた。やがてそこからミシンの音が聞え、彼女と同居してゐる親類の娘が米の粉から作つた菓子を持つて来た。</p>	<p>同左</p>
<p>しかしこれにはまづ女がそれほど容易にその正式の夫を裏切るものであるといふ陰惨な假定、及び一般スパイ小説的状況に対する軽信を要する。</p>	<p>しかしこれにはまづ女がそれほど容易に正式の夫を裏切るものであるといふ陰惨な假定、及び一般スパイ小説に対する軽信を要する。</p>	<p>……という陰惨な假定、或いは彼女が夫の命によって逆のまた逆の間諜を務めていくというスパイ小説</p>

		的軽信を要する。
--	--	----------

* 「暗号手」(初出『風雪』二月号 1950.2.1)

初出	単行本	全集
<u>土民の訊問</u> などのため、部隊に一人タカログ語を知つてゐる者が要るのは事実であつた。	同左	<u>住民の訊問</u> などのため、…

【資料 2-3-2】兵士と住民との交流

* 「ミンドロ島誌」(初出『東北文学』十月号 1949.10)

初出	単行本	全集
工場は休転し、会社は <u>ただなお二万俵あつたストックを日本兵に随時安く巻き上げられ、住民には配給制を取り、またマニラへ闇で売つていた。</u>	工場は休転し、 <u>会社はなお二万俵あつたストックを住民に配給制を取つていたが、日本軍には随時公定価格で巻き上げられていた。それでも会社は秘かにマニラへ闇で売る機会を見つけていた。</u>	工場は休転し、 <u>なお二万俵あつたストックを住民に配給制を取つていたが、……</u>

* 「比島に着いた補充兵」(初出『世界の動き』十月第二号 1949.10.15)

初出	単行本	全集
金網の垣の <u>木に隠れた個所</u> には、比島の子供達が群れていた。手にバナナ、 <u>飴、椰子の実を砂糖でかためた菓子パン</u> 等を携へ、「チェンジ、チェンジ」と叫んでいる。……、 <u>あるいは菓子五個</u> であつたが、私物の豊富な兵隊の <u>気前</u> によつて次第に高騰した。有利な取引をすると、子供は「グッド・ジャパニーズ」と叫んで駆け出して <u>行つた</u> 。	金網の垣の <u>外には比島の子供達</u> が群れてゐた。手にバナナ、 <u>飴、椰子の実を砂糖でかためた菓子、パン</u> 等を携へ「チェンジ、チェンジ」と叫んでゐる。……、 <u>或ひは菓子五個</u> であつたが、私物の豊富な兵隊の <u>気前</u> によつて次第に高騰した。有利な取引をすると、子供は <u>嘲るやうに「グッド・ジャパニーズ</u> 」と叫んで駆け出して <u>行く</u> 。	……、私物の豊富な兵隊の <u>気前のよさ</u> によつて次第に高騰した。
住民の眼はマニラ市民のそれよりも <u>悪意に満ちていた</u> 。町がかつて砲撃を受けたからであろう。	住民の眼がマニラ市民のそれよりも <u>悪意に満ちてゐたのは、町</u> がかつて砲撃を受けたからであろう。	同左
事実米軍は二月初め小部隊をもつて上陸したが、撤退するに際して行つた日本兵の残虐は、マニラの <u>それにも劣らぬもの</u> と伝えられている。	同左	事実米軍は二月初め小部隊をもつて上陸したが、撤退するに際して行つた日本兵の残虐は、マニラの <u>それと劣らぬもの</u> の <u>だったという</u> 。

* 「サンホセの聖母」(初出『文学会議』第8輯 1949.12.30)

初出	単行本	全集
我々はみなその年始めて召集された補充兵で、住民からものを取りあげたり、饗応を強制することが <u>少ない</u> ので評判がよかつた。町の少年の一人は、 <u>残飯を貰ふという報酬で隊の炊事を手伝つたが</u> 、兵士等と彼との間の愛情は随分感傷的になつた。	我々はみなその年始めて召集された補充兵で、住民からものを取りあげたり、饗応を強制する <u>習慣がなかつた</u> ので評判がよかつた。 <u>マンガリン湾口のカミトウエ分哨では、町の少年の一人を残飯を報酬に炊事を手伝はせたが</u> 、兵士等と彼との間の愛情は随分感傷的になつた。	同左
しかし或る日彼は突然 <u>姿を消して</u> しまった。	しかし或る日彼は突然 <u>イリン島に逃げて行つて</u> しまった。	同左
政治は万物を支配する。人間の感情さへも。	同左	政治は <u>万事を決定する</u> 。人間の感情さへも。
我々は政治は語らなかつた。	<u>しかし我々は政治は語らなかつた</u> 。	しかし我々は <u>あまり政治を語らなかつた</u> 。
軍曹は例の日本流の色男の技巧で、殊更ルイザを無視するやうな態度を取り、時々 <u>思ひ出したやうに</u> 眼を据ゑて彼女を睨んだ。	軍曹は例の日本流の色男の技巧で、殊更ルイザを無視するやうな態度を取り、時々 <u>忽然と</u> 眼を据ゑて彼女を睨んだ。	同左
私は彼女がこんな見えすいた媚態に惹かれることはあるまいと確信してゐたが、 <u>女の心は実ははかり難い</u> 。	同左	私は彼女がこんな見えすいた媚態に惹かれることはあるまいと確信し、 <u>希望していた</u> 。

【資料 2-3-3-1】 フィリピンの風景描写

* 「比島に着いた補充兵」(初出『世界の動き』十月第二号 1949.10.15)

初出	単行本	全集
全体の感じが何となく別荘風であるが玩具のような美しさがあり、東京郊外洋風住宅とは <u>どこか違い、整つたものがあつた</u> 。戦前は恐らく米人か、または米化した比島のブルジョアの住居であつたらう。	全体の感じは <u>何となく別荘風であるが</u> 、玩具のような美しさがあり、東京郊外の洋風住宅とは <u>どこか違ふ</u> 。戦前は恐らく米人か、または米化した比島のブルジョアの住居であつたらう。	同左
葉むらが完全な一つの円をなした街路樹が、道の左右に交互に並び、トラック中に <u>立てる兵士の耳をかすむ</u> 。楠に似た形と色	葉むらが完全な一つの円を <u>作つた</u> 街路樹が、道の左右に交互に並び、トラック中に <u>立つた兵士の耳をかすめる</u> 。楠に似	完全な成長が完全な

<p>沢を持つた葉、<u>円形は恐らく刈込によるものであつたろうが、私は何故かこの時葉が南に偏向しないのは真上から照る熱帯の太陽のためであらう、と空想した。完全なる成長が完全な円になるという幻影。</u></p>	<p>た形と色沢を持つた葉。<u>円は無論刈込によるものであらうが、私は何故かこの時真上から照る熱帯の太陽による自然の成長と空想した。完全な成長が完全な円になるという幻影。</u></p>	<p>球体になるという幻影。</p>
<p><u>しかしこういう私の鑑賞の対照が主として教会であつたことには、会堂建築の特異な視覚的効果だけではなく、別に原因があつたようである。</u></p>	<p>かういふ私の鑑賞の<u>対象</u>が主として教会であつたのは比島に移植されてみた視覚的「<u>西欧</u>」が主として教会であつたといふ<u>事実のほかに</u>、別に原因があつたやうである。</p>	<p>同左</p>

* 「サンホセの聖母」(初出『文学会議』第8輯 1949.12.30)

初出	単行本	全集
<p><u>比島にサンホセといふ地名は無数にある。こゝにいふサンホセは米軍がレイテの次に上陸したミンドロ島のサンホセである。島の西南、海岸から四軒入り、中央山地の序曲をなす丘陵を背負つた小さな町で、砂糖工場がある。我々はこゝに一ヶ小隊をもつて警備してみた。</u></p>	<p>×</p> 	<p>同左</p>
<p>町で一番大きな建物は無論工場であるが、戦争以来操業を停止してゐるので、蒸溜装置とおぼしき巨大な機械が、薄気味悪く埃を貯めてゐる。屋上に我々は展望哨を設けた。<u>そこから見晴らす山と海の眺めは美しく、その勤務は私の最も楽しい時間であつた。</u></p>	<p>サンホセの町で一番大きな建物は無論工場であるが、戦争以来操業を停止してゐるので、蒸溜装置とおぼしき巨大な機械が、薄気味悪く埃を貯めてゐる。<u>その機械の間を怪しげな鉄階で登る屋上に我々は展望哨を設けた。見晴らす山と海の眺めは美しく、その勤務は私の最も楽しい時間の一つであつた。</u></p>	<p>……、蒸溜装置らしい巨大な機械が、薄気味悪く埃を貯めている。その機械の間を怪しげな鉄階で登つた屋上に我々は展望哨を設けた。……</p>
<p>建物は木造、屋根は赤のトタン葺いてある。このトタンの赤がサンホセの支配的色彩である。</p>	<p>建物は木造、屋根は例の赤トタン葺いてある。このトタンの赤が<u>要するに</u>サンホセの支配的色彩である。</p>	<p>同左</p>

* 「海上にて」(初出『文芸』十二月号 1949.12.1)

初出	単行本	全集
<p>ゆるやかに曲つた砂浜の後に低い雑木林が連り、ちよつと房州の海岸を思はず海岸である。<u>孤立した小屋が長い砂浜に遠く離れて二つだけある。</u></p>	<p>……、ちよつと房州の海岸を思はせる。<u>小屋が長い砂浜に遠く離れて二つ孤立してゐる</u></p>	<p>同左</p>

【資料 2-3-3-2】 灯火

* 「比島に着いて補充兵」(初出『世界の動き』十月第二号 1949.10.15)

初出	単行本	全集
<p>海岸の<u>方向</u>に無数のあかりのついた建物は兵舎に使われているらしく、やがて消灯ラッパが鳴り響いた。内地の兵營で聞いた音とは違い何となく前線の兵士の淋しさをしのばすような感傷的な吹き方であった。雨が降つて来た。私は芝におかれた僚友の装具をテントで覆い自分は雨外套を着て芝にうずくまつた。広場の街灯の光が芝を斜めに照らしていた。身内に溢れる幸福感はまだ続いていた。</p>	<p>海岸の<u>方</u>に無数のあかりをつけた建物は、兵舎に使われているらしく、やがて消灯ラッパが鳴り響いた。内地の兵營で聞いた音とは違ひ、何となく前線の兵士の淋しい心をしのばすやうな、感傷的な吹き方であった。／雨が降つて来た。私は芝におかれた僚友の装具をテントで覆ひ雨外套を着て芝にうずくまつた。広場の街灯の光が芝に斜めにとどいてゐた。身内に溢れる幸福感は続いてゐた。</p>	同左
<p>行く手の木の間にこうこうたる灯火のゆるい弧を描いて連なるを見た。近づくと<u>運転休止中の街路電車</u>が十数台単線上に並んでゐた。</p>	<p>行く手の木の間に煌々たる灯火が、ゆるい弧を描いて連なるを見た。近づくと街路電車が十数台単線上に休んでゐた。</p>	同左
<p>鉄橋を渡る途中、先発して宿営した僚友が飯ごうに飯を提げて来るのに会つた。らん干の下に坐つて食べた。河はかなり広く、水はよどみ、どんより岸の低い家の灯を反射していた。</p>	<p>鉄橋を渡る途中、先発して宿営してゐた僚友が、飯盒に飯を入れて来るのに会つた。欄干の下に坐つて食べた。河はかなり広く、水は濺み、どんより岸の低い家の灯を反射してゐた。</p>	<p>……、飯盒に飯を入れて迎えに来るのに会う。欄干の下に坐つて食べた。河はかなり広く、水は下の方で濺み、どんより岸の低い家の灯を反射していた。</p>
<p>出迎えの僚友に先導されて出発。戸を閉ざし灯火を消した映画館の立ち並ぶ繁華街と覚しき中を暫く行つて右折、細い舗装してない道を約十五分歩いて漸く目的の宿舎に着いた。</p>	<p>出迎への僚友に先導されて、灯火を消した映画館の立ち並ぶ繁華街と覚しき中を暫く行つて右折、細い土の道を約十五分歩いて漸く目的の宿舎に着いた。</p>	同左
<p>暗い道を少し行くと、左手に窓々に電氣をつけた建物があり、放歌の音が聞こえる。</p>	<p>暗い道を少し行くと、左手に窓々に気灯をつけた建物があり、……</p>	<p>暗い道を少し行くと、左手に窓々にヤシ油灯をつけた建物があり、……</p>

【資料 3-1-1】戦争批判

* 「八月十日」(初出『文学界』三月号 1950.3.1)

初出	単行本	全集
レマルクは砲弾によつて頭を飛ばされ、首から血を噴きながら三歩歩いた人間を物珍し気に描き、メイラーもなほ首なし死体を克明に写してゐるが、かういふ光景を凄惨と感じるのは観者の眼の感傷である。戦争の悲惨は人間が不自然に死なねばならぬといふことであり、その方法は問題ではない。	……戦争の悲惨は人間が不自然に死なねばならぬといふ一事に尽き、その死に方は問題ではない。	……、こういう戦場の光景を凄惨と感じるのは観者の眼の感傷である。……

* 「襲撃」(初出『新小説』五月号 1950.5.1)

初出	単行本	全集
たゞ戦争といふ行為を止めることを考へればよい。	同左	ただ戦争という行為を止めるほかはない。

【資料 3-1-2】国家・軍部への批判

* 「襲撃」(初出『新小説』五月号 1950.5.1)

初出	単行本	全集
小林衛生兵の中で政府の欺瞞が真実となつたについては、この若者には別に孝行とか勤勉とかいふ道德律があつて、それが天皇崇拝といふ頂点を必要としたのであらう。	小林衛生兵の中で政府の欺瞞が真実となつたについては、この若者は別に孝行とか勤勉とかいふ道德律があつて、それが天皇崇拝といふ頂点を必要としたのであらう。	小林衛生兵の中で政治の欺瞞が真実となつたについては、……

* 「出征」(初出『新潮』一月号 1950.1.1)

初出	単行本	全集
社会が腐敗してゐる以上、学生だけを腐敗から守らうとするのは出来ない相談である。	社会が腐敗してゐる以上、学生だけを腐敗から守らうとしても出来ない相談である。	同左
学資はなくとも身についた知識を得ることが出来れば、学生の集团的腐敗より免かれ得るだけでも利益であらう。	私の子供が私の死によつて学資を失ふのはたしかに一種の不幸であるが、そのため却つて学生の集团的腐敗より免かれ得るならば、これは望外の倖せかも知れない。	同左
しかし同時に今はもう遅い、といふことをも感じた。民間で権力に抗ふのが民衆が欺かされてゐる以上無意味であるのにもまして、軍隊内で軍に反抗するのは、軍が合法的に反抗者を粉砕することが出来る以上、無意味であつた。	しかし同時に今はもう遅い、とも感じた。民間で権力に抗ふのが民衆が欺かされてゐる以上無意味であるのにもまして、軍隊内で軍に反抗するのは、軍が思ふままに反抗者を処理することが出来る以上、無意味であつた。	同左

* 「八月十日」(初出『文学界』三月号 1950.3.1)

初出	単行本	全集
彼等がこの戦争を始めた原因は色々あり、彼等の意のままにならぬものがあつたのはわかつてゐるが、この際無為に日を送つてゐるのは彼等の自己保存といふ生物学的本能の <u>させるわざ</u> である。	同左	彼等がこの戦争を始めた原因は色々あり、彼等の意のままにならぬものがあつたのはわかつてゐるが、この際無為に日を送つてゐるのは、 <u>彼等の自己保存</u> という生物学的本能の <u>ほかはな</u> <u>い</u> 。
「我々は日本政府が早く回答することを望むね」	「我々は日本政府が <u>一日も</u> 早く回答することを望むね」	同左
人間天皇の笑顔とか <u>生物学上の業績</u> とかいふ高遠な問題は私にはわからないが、俘虜の生物学的感情から推せば、八月十一日から十四日まで四日間に、無意味に死んだ人達の霊にかけて、天皇の存在は有害である。	<u>天皇制の経済的基礎</u> とか、人間天皇の笑顔とかいふ高遠な問題は私にはわからないが、俘虜の生物学的感情から推せば、八月十一日から十四日まで四日間に、無意味に死んだ人達の霊にかけて <u>も</u> 、天皇の存在は有害である。	同左
十五日の正午イマモロとオラは玉音放送を聞くために米軍の事務所へ行つたが、ちつとも聞き取れなかつたといつて <u>帰つて来た</u> 。	<u>十五日</u> の正午イマモロとオラは玉音放送を聞くために米軍の事務所へ行つたが、ちつとも聞き取れなかつたといつて <u>ゐた</u> 。	<u>翌日</u> の正午イマモロとオラは玉音放送を聞くために米軍の事務所へ行つたが、……。
しかし原子爆弾につき、「延テ人類文明ヲモ破却スベシ」といふ文句を挿んだのは <u>虚栄心</u> の怪我の功名であると思はれる。	しかし原子爆弾につき、「延テ人類文明ヲモ破却スベシ」といふ文句を挿んだのは <u>負け惜しみ</u> の怪我の功名であると思はれる。	同左

【資料 3-2-1】 軍隊への批判

* 「暗号手」(初出『風雪』二月号 1950.2.1)

初出	単行本	全集
しかしそれを兵士の間から養成するといふことは軍隊の <u>性質上</u> 出来ないのである。	しかしそれを兵士の間から養成するといふことは <u>日本の軍隊の組織</u> では出来ないのである。	同左
「…… <u>さうやつて株を上げると却つて</u> 身体を使はなきやならねえのは、会社と同じさ。……」	「…… <u>株を上げると却つて</u> 身体を使はなきやならねえのは、 <u>会社</u> と同じさ。……」	「…… <u>株を上げると却つて</u> 身体を使わなきやならねえのは、 <u>会社も軍隊も同</u>

		じことさ。」
--	--	--------

* 「比島に着いた補充兵」(初出『世界の動き』十月第二号 1949.10.15)

初出	単行本	全集
住民の眼はマニラ市民のそれよりも悪意に満ちていた。町がかつて砲撃を受けたからであろう。	住民の眼がマニラ市民のそれよりも悪意に満ちてゐたのは、町がかつて砲撃を受けたからであろう。	同左
事実米軍は二月初め小部隊をもつて上陸したが、撤退するに際して行つた日本兵の残虐は、マニラのそれにも劣らぬものと伝えられている。	同左	事実米軍は二月初め小部隊をもつて上陸したが、撤退するに際して行つた日本兵の残虐は、マニラの <u>それと劣らぬもの</u> だったという。

【資料 3-2-2】 下士官

* 「靴の話」(初出『小説界』一・二月合併号 1949.2.1)

初出誌	単行本	全集
彼等が <u>いかに</u> わが分隊長にからかわれ罵られ追ひ帰されたかはここに記すに <u>忍びない</u> 。彼等の分隊長は既にマラリヤで死んでゐたので、兵隊ばかりでは対抗出来なかつた。	彼等がわが分隊長に……、追ひ帰された <u>だけであつたのは</u> いふまでもない。……死んでゐたので、 <u>要するに</u> 兵隊ばかりでは <u>結局老練な下士官に</u> 対抗出来なかつた。	……兵隊ばかりでは <u>老練な下士官に</u> 対抗出来なかつた。

* 「俘虜逃亡」(初出『週刊朝日』「夏季増刊小説と読物」1949.7.1)

初出	単行本	全集
この要領のいい下士官はしかし補充兵上りで臆病者であつた。後米軍の艦砲射撃を蒙つた時、兵器係たる彼が兵器の分配を棄て、一人この森まで突走つて中隊長に呼び戻された。	……、兵器係たる彼が兵器の分配を棄て、一人 <u>まつさき</u> にこの森まで突走つて、 <u>中隊長に</u> 呼び戻された。	同左

* 「襲撃」(初出『新小説』五月号 1950.5.1)

初出	単行本	全集
彼は大正の志願兵上りの少尉で、 <u>甚だ出来が悪い</u> のである。	同左	彼は大正の志願兵上りの少尉で、 <u>臆病な</u> のである。

【資料 3-2-3】 木下少尉

* 「食慾について」(初出『小説界』一・二月合併号 1949.2.1)

初出	単行本	全集
ところが木下少尉は単にその料理を全部食べるばかりではなく、何かの <u>調子</u> で残つた場合も蓄へて夜食等とした。	ところが木下少尉は単にその料理を全部食べるばかりではなく、何かの <u>加減</u> で残つた場合も <u>夜食のために</u> 蓄へた。	同左

彼より ^{ママ} 遙かに軍人であつた下士官が蔽ひ難い焦燥と不機嫌を示す中で、彼は平気であつた。	彼より遙かに軍人であつた下士官達が、蔽ひ難い焦燥と不機嫌を示す中で、彼は平気であつた。	同左
やがて各分隊にマラリヤ患者が増へて彼にバナナを <u>与へる</u> 余裕がなくなつた。	やがて各分隊にマラリヤ患者が増へて、彼にバナナを <u>振舞ふ</u> 余裕がなくなつた。	同左
米軍の討伐隊が附近海岸に上つた日、彼は下士官一兵二と共に將校斥候に出て <u>そのまま</u> 帰らなかつた。…… <u>祖國</u> の觀念が素朴で軍隊のシニスムで毒されてゐないからである。	米軍の討伐隊が附近海岸に上つた日、彼は下士官一兵二と共に、將校斥候に出て帰らなかつた。…… <u>愛國</u> の觀念が軍隊のシニスムで毒されてゐないからである。	同左

【資料 3-2-4】 将校

* 「比島に着いた補充兵」(初出『世界の動き』十月第二号 1949.10.15)

初出	単行本	全集
師団長 <u>寄贈</u> のビールはよく利いて、我々はすぐ寝てしまつた。	師団長のビールはよく利いて、我々はすぐ寝てしまつた。	師団長 <u>下賜</u> のビールはよく利いて、……

* 「海上にて」(初出『文芸』十二月号 1949.12.1)

初出	単行本	全集
或る時は応召将校らしい中年の将校が自分で起こしに <u>来たが</u> 、彼は「どうしてお前達はさうわからんのかな」といつて、我々を一人一人抱き起こした。	或る時は応召将校らしい中年の将校が自分で起こしに <u>来た</u> 。彼は「どうしてお前達はさうわからんのかな」と歎きながら、我々を <u>鄭寧</u> に一人一人抱き起こした。	同左

【資料 3-2-5】 日本兵の俘虜に対する扱い方

* 「俘虜逃亡」(初出『週刊朝日』「夏季増刊小説と読物」1949.7.1)

初出	単行本	全集
……、二十里以上を隔てた我々の部隊にとつてはいわばどつちでもいいことであつた。日本軍はこういう場合、よく俘虜を殺したらしいが、わが中隊長は <u>何故か漫然と</u> 彼等を抑留していた。	……、二十里以上を隔てた我々部隊にとつてはいはゞどつちでもいいことであつた。……、 <u>わが中隊長は漫然抑留</u> してゐた。	同左
「俘虜の上前をはねるとはひどい野郎だ」と我々は大いに笑つたが、まあこんな例はあまり多くない。	……と我々は大いに笑つたが、まあこんな <u>兵隊は</u> やたらにはゐない。	同左
我々の給与も保育米を維持するために一食百瓦を出なかつた。しかし <u>俘虜はその少ない一食分で二食であるから、私が多少残飯の量を増やしてやろうと思ふ理由はない</u> ことはない。	我々の給与も保育米を維持するために一食百瓦を出なかつた。しかし <u>それとこれとは全然別の問題</u> である。	同左

<p>俘虜達は前に縛られたままの手で飯をつまんで食べた。……、フォークを添えないことも別に<u>良心を咎めない</u>。</p>	<p>俘虜達は前方に縛られた手のまゝ飯をつまんで食べた。……、フォークを添へないことも別に<u>気の毒とは思はない</u>。</p>	同左
<p>「知らない」といえば一層正確であるが、<u>圧制者として、多少の思わせぶりを楽しんで</u>わけである。</p>	<p>「知らない」といへば一層正確であるが、私も多少<u>圧制者の思はせぶりを</u>楽しまずに<u>みられない</u>。</p>	同左
<p>寛大に扱うようにという隊長の特別な命令があつたにも拘らず、<u>衛兵の俘虜の取扱いは</u>変らなかつた。或る日私は彼が「飢じい。飢じい」と怒鳴つているのを<u>聞き</u>。逃亡した町長に比べてこの<u>書記が</u>いかにも<u>意気地がないように</u>思われ、<u>あまり好意が</u>持てなかつた。</p>	<p>しかし寛大に扱ふやうにと<u>いふ隊長の特別な命令</u>があつたにも拘らず衛兵の取扱ひは変らなかつた。或る日私は彼が「飢じい。飢じい」と<u>連呼して</u>ゐるのを<u>聞いた</u>。逃亡した町長に比べてこの<u>書記は</u>大分意気地がないやうである。</p>	……逃亡した町長に比べて、 <u>書記は</u> 大分意気地がないやうである。
<p>下士官が隊長の処置を不満として、殊更に彼を虐待しているのは<u>確実であつた</u>。</p>	<p>下士官は隊長の処置を不満として、殊更に彼を虐待して<u>ゐるらしい</u>。</p>	同左

【資料 3-3-1】日本兵俘虜

* 「靴の話」(初出『小説界』一・二月合併号 1949.2.1)

初出	単行本	全集
<p>レイテの俘虜は鮫皮の靴を珍しがり、争つて借りに来た。これは病院にある唯一の日本軍の軍備のはしくれであつた。</p>	<p><u>現役</u>の多いレイテの俘虜は鮫皮の靴を珍しがり、争つて借りに来た。これは<u>当時</u>病院にあつた唯一の日本軍の軍備のはしくれであつた。</p>	同左
<p>私は収容所では原則として自分の意見を<u>主張しない</u>ことにしてゐたが、この時は<u>むつと</u>してひ返した。</p>	<p>私は収容所では原則として自分の<u>本当</u>の意見は<u>はいはない</u>ことにしてゐたが、この時は<u>はい</u>ひ返した。</p>	同左

* 「八月十日」(初出『文学界』三月号 1950.3.1)

初出	単行本	全集
<p>中川は彼と直接連絡のある米軍の収容所事務所から入つた情報を、自慢しに来たのである。</p>	同左	中川は彼と直接連絡のある米軍の収容所事務所 <u>で得た</u> 情報を、自慢しに来たのである。
<p>(広田小隊長)「とにかく明日の外業は免除して貰はなあかん。とても働く気がせん」</p>	<p>(広田小隊長)「とにかく明日の外業は免除して貰はなあかん。とても働く気がせん」/<u>これは本音らしい</u>。</p>	同左
<p>朝の収容所内は静かであつた。俘虜達はやはり<u>ぐつたり</u>ベッ</p>	<p>朝の収容所内は静かであつた。俘虜達はやはり<u>ベッ</u>ドに横はつてゐる。</p>	朝の収容所内は静かであつた。俘虜達はベッ

ドに横はつてゐる。		に横たわっている。
集まる者は必ずしも全員ではなく、中に頭を下げずに聞く者があつた。	……、中に頭を <u>下げずに聞く者もある</u> 。	……、中に頭を <u>下げるのを忘れる者</u> もいる。

【資料 3-3-2】 内省的自己批判

* 「八月十日」（初出『文学界』三月号 1950.3.1）

初出	単行本	全集
祖国はいづれ敗れるであらう。 <u>これを俘虜であるために知る情報から信ぜさせられるのは</u> 苦痛であるが、これは広島市民の災厄の如何に拘わらず同じである。	祖国はいづれ敗れるであらう。俘虜であるために <u>知る情報からさう信ぜざるを得ないのは</u> 苦痛であるが、これは広島市民の災厄の如何に拘わらず同じである。	祖国はいづれ敗れるであらう。俘虜であるために <u>知らされる情報からさう信ぜざるを得ないのは</u> 苦痛であるが、……
しかもその人間は多く戦時或ひは国家が戦争準備中、そのため生活上の恩恵を受けてゐたものであり、 <u>正確にいへば</u> すべて身から出た錆なのである。	しかもその人間は多く戦時或ひは国家が戦争準備中、 <u>そのため生活の恩恵</u> を受けてゐたものであり、 <u>正しくいへば</u> 、すべて身から出た錆なのである。	しかもその人間は多く戦時或ひは国家が戦争準備中、 <u>喜んで</u> 恩恵を受けていたものであり、正しくいへば、すべて身から出た錆なのである。
例へば私は彼等の中で泣いた者が、極く少数の感傷家にすぎなかつたのを知つてゐる。	例へば私は彼等の中で泣いた者が、極く少数の感傷家にすぎなかつたのを知つてゐる。 <u>しかもそれさへ俘虜だからこそ泣く余裕があつたのである</u> 。	同左

【資料 4-1】 心理描写

* 「靴の話」（初出『小説界』一・二月合併号 2-1、1949.2.1）

初出誌	単行本	全集
「 <u>枕にした靴は火の塊となつて私の頭を炊くかと思はれた</u> 。私は何度も『靴はここにあるぞ』と叫んで、それを彼等の前に投げ出したい衝動に駆られたが、結局実行する勇気を欠いた。足腰の立たない病人として、私は分隊の支持を失ふのを、何よりも怖れなければならなかつたからである。」 と書けばこれは弁解であり、従つて誇張である。 「彼等の会話を聞こえぬふりをし、執拗に眼を閉じながら、私は心に一種陰惨な快感を感じていた。互	「私は何度も『靴はここにあるぞ』と叫んで、……、私は分隊の支持を失うのを、何よりも恐れなければならなかつたからである。 <u>こうして私が靴を持ち続ける以上、僚友は私に悪くはしないであろう</u> 」 …… 「彼等の会話を聞こえぬふりを	

<p>いに人のことはかまっていられないぎりぎりの生活の中で、私も人並みでゐられることを私はむしろ喜んでゐた。<u>私は死ぬかも知れないと懼れてゐたが、まだ全然この靴を穿く希望を捨てゝゐたわけではなかつた。そしてかうして私が靴を持ち續ける以上、僚友は私に悪くはしないであらう、と漠然と考へてゐた</u>」</p> <p>と書けばこれはシニシズムであり、やはり誇張である。</p> <p>事實は、分隊長の意識的な嘲笑的な口調、やはり意識した怒声、相手のおずおずした哀願、既に返事を予想したようなためらいが<u>ちの言葉</u>を聞きながら、私は何も考えていなかつたというのが正しい。私はたゞ<u>わくわくして</u>この苦しい瞬間が早くすぎ去つてくれゝばいゝと思つてゐた。<u>かうして周囲の者のなすがまゝに任せねばならぬ病人の悲哀があつただけである。</u></p> <p>しかしこう書いてもなお私はその時の私の心を正確に描いたとは感じない。</p> <p><u>かういふ情緒だけを分離した描寫では、この時私の枕にしてゐた靴はどこかへ行つてしまつてゐる。</u></p> <p>結局靴だけが「事實」である。こういう脆い靴で兵士に戦うことを強いた国家の弱点だけが「事實」である。それは必ずしもその兵士の心理に、こう思つた、ああ<u>思つた</u>という風に働きはしないが、根本においてそれを決定している。</p> <p><u>しかし私が私の経験を物語るならば、私はやはりかう思つた、あゝ思つたと書かねばならぬ。書かねば何も始まらないからである。心理は近代文學の負つた十字架である。その不正確を嘲るは易いが、心理なくて近代的人間はゐない。たゞ彼等はそれを誇つてはならない。</u></p>	<p>し、執拗に眼を閉じながら、私は心に一種陰惨な快感を感じてゐた。互いに人のことはかまっていられないぎりぎりの生活の中で、私も人並みでゐられることを私はむしろ喜んでゐた」</p> <p>……</p> <p>事實は、分隊長の意識的な嘲笑的な口調、やはり意識した怒声、相手のおずおずした哀願、既に返事を予想したようなためらいが<u>ちな言葉</u>を聞きながら、私は何も考えていなかつたというのが正しい。私はただこの苦しい瞬間が早くすぎ去つてくれればよいと思つてゐた。</p> <p>しかしこう書いてもなお私はその時の<u>私の心</u>を正確に描いたとは感じない。</p> <p>結局靴だけが「事實」である。こういう脆い靴で兵士に戦うことを強いた国家の弱点だけが「事實」である。それは必ずしもその兵士の心理に、私はこう思つた、ああ<u>感じた</u>という風に働きはしないが、根本においてそれを決定している。</p> <p>×</p>	<p>……「… …、私も人並みに<u>冷酷</u>でいられること……。」</p> <p>……</p> <p>……<u>私の心理</u>……</p>
---	---	---

【資料 4-2-1】不安と苦痛

* 「出征」(初出『新潮』一月号 1950.1.1)

初出	単行本	全集
一人の兵は倉庫係の下士官に、… …	<u>不安を感じた</u> 一人の兵は倉庫係の下士官に、……	同左

多くの者がその日の午後家族と共にすべき楽しい予定について語った。	多くの者がその日の午後家族と共にすべき楽しい予定について語った。 <u>彼等の様子を見て、朝の事件はやはり私の喉につかへたまゝであつた。</u>	同左
去つた者の被服や装具を種類別に卓子の上に積み上げるのが、 <u>我々</u> に課せられた最初の残酷な任務であつた。	去つた者の被服や装具を種類別に <u>卓上に</u> 積み上げるのが、 <u>残留者</u> に課せられた最初の残酷な任務であつた。	同左
彼等の地方人の服装を眺めるのは新しい苦痛であつた。三十分前まで <u>我々</u> もまた <u>彼等</u> と同じ服を着るつもりだつたのである。	彼等の地方人の服装を眺めるのは <u>我々</u> にとっては新しい苦痛であつた。三十分前まで <u>我々</u> だつてその <u>服</u> を着るつもりだつたのである。	彼等の地方人の服装を眺めるのは我々にとって新しい苦痛であつた。
私は自分が自分で運を切り開いて来た ^と と自惚れてゐたのである。	私は自分が <u>これまで自分一人</u> で運を切り開いて来た ^と と自惚れてゐたのである。	同左

* 「海上にて」(初出『文芸』十二月号 1949.12.1)

初出	単行本	全集
「自由なる人は海を愛する」とボードレルは歌つたが、孤独な兵士たる <u>私</u> には海の無限の運動はむしろ苦痛である。	「自由なる人は海を愛する」とボードレルは歌つたが、孤独な囚人、兵士たる <u>私</u> にとって、海の無限の運動はむしろ苦痛である。	同左
現代の海戦でかういふ精悍の価値はそれほど誇張して考へる <u>必要はないが</u> 、さういふ印象も頼もしく感ぜられるほど、輸送船は不安で頼りないのである。	現代の海戦でかういふ精悍の価値はそれほど誇張して考へる <u>必要はなさ</u> そうであるが、 <u>さういふ印象も頼も</u> しく感ぜられるほど、輸送船は不安なのである。	……、 <u>それすら頼も</u> しく感ぜられるほど、輸送船は不安なのである。
行楽の人を輸送船上から見る <u>我々の胸は痛んだ</u> 。	行楽の人を輸送船上から見る <u>のは辛い</u> 。	同左

* 「比島に着いて補充兵」(初出『世界の動き』十月第二号 1949.10.15)

初出	単行本	全集
海岸の <u>方向</u> に無数のあかりのついた建物は兵舎に使われているらしく、……。内地の兵營で聞いた音とは違ひ何となく前線の兵士の淋しさをしのぼすような感傷的な吹き方であつた。雨が降つて来た。私は芝におかれた僚友の装具をテントで覆い自分 ^は は雨外套を着て芝にうづくまつた。広場の街灯の光が芝	海岸の <u>方</u> に無数のあかりをつけた建物は、 <u>兵舎</u> に使われているらしく、……。内地の兵營で聞いた音とは違ひ、何となく前線の兵士の淋しい心をしのぼすやうな、感傷的な吹き方であつた。雨 ^が が降つて来た。私は芝におかれた僚友の装具をテントで覆ひ雨外套を着て芝にうづくまつた。広場の街灯の光が芝に斜め	同左

を斜めに照らしていた。身内に溢れる幸福感はまだ続いていた。	にとどいてみた。身内に溢れる幸福感は続いていた。	
-------------------------------	--------------------------	--

【資料 4-2-2】 死との対面

* 「出征」(初出『新潮』一月号 1950.1.1)

初出	単行本	全集
いつもある死の予感がさういふ欲望の <u>感じる</u> 余裕を与へないのである。	いつもある死の予感がさういふ欲望の <u>生じる</u> 余裕を与へないのである。	同左
殺される者が殺人者に直面して、遁れられない <u>ことを</u> 観念した時、或ひはかういふ感覚を味ふかも知れない。しかし私はこの時、 <u>前方から来る米軍に殺されるとは少しも感じ</u> なかつた。	殺される者が殺人者に直面して、 <u>どうしても遁れられないと</u> 観念した時、或ひはかういふ感覚を味ふかも知れない。しかし私はこの時、 <u>やがて前方から来るべき米軍に殺</u> されるとは少しも感じなかつた。	同左
しかし同時に今はもう遅い、 <u>といふ</u> <u>ことを</u> も感じた。……私はやはり <u>自分の無意味な死を甘受する</u> ほかはないのを納得しなければならなかつた。	しかし同時に今はもう遅い、 <u>とも</u> 感じた。……私はやはり「 <u>死ぬとは限らない</u> 」といふ <u>一縷の望みに</u> <u>すべてを賭ける</u> ほかはないのを納得しなければならなかつた。	同左
その時の私には死と戯れるほか、 <u>生きる道は</u> なかつた。そして死の関心は自然に私を自分の生涯に関する反省に導いた。……回想は専ら私の個人的幸不幸に関するものであつた <u>ことは否むわけに行かない</u> 。	その時の私には死と戯れるほか <u>することが</u> なかつた。そして死の関心は自然に私を自分の生涯に関する反省に導いた。……回想は専ら私の個人的幸不幸に関するものであつた。	同左
……、兎に角私は自分の <u>幼時からの</u> 思ひ出の繋がる土地の最後の一片から眼を離すことは出来なかつた。	……、兎に角私は自分の <u>生涯の</u> 思ひ出の繋がる土地の最後の一片から眼を離すことは出来なかつた。	同左
しかしその時の私の中の感情は、 <u>結局</u> 私が出征によつて、祖国の外へ、死へ向つて積み出されて行くといふ事実を蔽ふに足りない、と私は感じた。	同左	しかしその時の私の中の感情は、私が出征によつて、祖国の外へ、死へ向つて積み出されて行く……

* 「海上にて」(初出『文芸』十二月号 1949.12.1)

初出	単行本	全集
出港後直ちに見舞はれた玄海灘の激浪から、前途にかなりの覚悟をしてゐた <u>我々として</u> 、	出港後直ちに見舞はれた玄海灘の激浪から、前途にかなりの覚悟をしてゐた	同左

少しあつけないくらゐである。	我々としては、むしろあつけないくらゐである。	
割当てられたのは、 <u>下甲板と同一の階にある所謂「お蚕棚」の一つで、下甲板へ出る口は高さ六尺幅二尺の広さしかない。</u>	割当てられた「お蚕棚」は、 <u>甲板と同じ階にあり、比較的運のいゝ方であるが、甲板へ出る口は高さ六尺幅二尺しかない。</u>	同左
しかしいよいよ船が出てしまふと、 <u>ふと</u> 目前の危険に対して少しでも有利に身を処する <u>のを避けることは出来なかつた。</u>	しかしいよいよ船が出てしまふと、 <u>やはり</u> 目前の危険に対して、 <u>少しでも有利に身を処する気になつた。</u>	同左
山中を敗走中或る山頂で休んだ時、私があたりの <u>眺望を賞し、「こんな綺麗な景色を見た以上、死んでも本望だ」といふと、</u> 彼は私の顔をじつと見て「この人だけは帰してあげたいがね」といつた。	山中を敗走中或る山頂で休んだ時、私があたりの <u>眺望を賞すると、</u> 彼は私の顔をじつと見て、「この人だけは帰してあげたいがね」といつた。	同左
これまで沈没を免かれたのが天佑であるにせよ、 <u>ないにせよ、あと一晚といふところを迂闊にすごして、無意味に死んではつまらない。</u>	これまで沈没を免かれたのが天佑であるにせよ、 <u>ないにせよ、あと一晚といふところで迂闊に死んではつまらない。</u>	同左

* 「比島に着いて補充兵」(初出『世界の動き』十月第二号 1949.10.15)

初出	単行本	全集
私は中学を東京の <u>あるメソジストのミッション・スクールに</u> 過ごし、多少この宗教に <u>なれていたが、一兵士として「戦争の箒」にあなたこなたと追いやられる私に現われる外界は、戦闘に関しないかぎりすべて任意の外観を呈している。</u> 私の現在の思想は無神論である。しかも私がこうして宗教的事物に感銘を受けるのは、死を控えた兵士という状況の結果であつたらう。この無関心の結果たる <u>任意のうちに、却つて私の意識の深いところにあるものが映つていたのかも知れぬ。</u>	私は中学を東京の <u>或るメソジストのミッション・スクールに</u> 過ごし、多少この宗教に <u>馴れていたが、私の現在の思想は無神論である。</u> しかも私がこうして宗教的事物に感銘を受けるのは、死を控えた兵士といふ状況の結果であつたらう。 一兵士として「戦争の箒」にあ <u>なたこなた追ひやられる私に現はれる外界は、戦闘に関しないかぎり、すべて任意の外観を呈してゐる。</u> この無関心は却つて、 <u>普段私の意識の見棄てゝみたものを拾ひ上げるかも知れぬ。</u>	私は中学を東京の <u>或るメソジストのミッション・スクールに</u> 過ごし、多少この宗教に <u>馴れていた。</u> 私の現在の思想は無神論であるが、私がこうして宗教的事物に感銘を受けるのは、死を控えた兵士という状況の結果であつたらう。 ……この無関心は却つて、 <u>普段私の意識の見棄てていたものを拾ひ上げるのかも知れない。</u>

* 「サンホセの聖母」(初出『文学会議』第8輯 1949.12.30)

初出	単行本	全集
私は前線にあつて僚友の死に <u>感動した</u> ことはない。自分もまた死ぬ身であるとい	私は前線にあつて僚友の死に <u>動かさ</u> れたことはない。自分もまた死ぬ身で	同左

ふ判断、当然の結果が一つ起つたにすぎぬといふ判断が私の心を凍らせた。	あるといふ判断から、自分と同じ原因で死ぬ者に対して同情を失つた。
------------------------------------	----------------------------------

【資料 4-3-1】恐怖にかかわる改稿

* 「海上にて」(初出『文芸』十二月号 1949.12.1)

初出	単行本	全集
水柱はなかなか落ちず、駆逐艦からほゞ等距離に左右に立ち続ける。水平線下の見知らぬ敵から砲撃されてゐるのかも知れぬ、といふ懸念がふと私を捉へるが、明らかにこれは海戦の常識に反する。無論潜水艦を探知して爆雷を投じてゐるに違ひない。	水柱はなかなか落ちず、駆逐艦からほゞ等距離に左右に立ち続ける。無論潜水艦を探知して爆雷を投じてゐるに違ひないのだが、水平線下の見知らぬ敵から砲撃されてゐるのかも知れぬ、といふ考へがふと私を捉へるが、明らかに海戦の常識に反する。かういふ空想が浮ぶのが、そもそも潜水艦恐怖症の一症状であるが、実は水平線下に敵がゐる方がどれだけこわいかわからない。	……、水平線下の見知らぬ敵から砲撃されているのかも知れぬ、という考へがふと私を捉える。明らかに海戦の常識に反したかういふ空想が浮ぶのが、そもそも潜水艦恐怖症の一症状であるが、実は水平線下に敵がいる方がどれだけこわいかわからないのである。

* 「襲撃」(初出『新小説』五月号 1950.5.1)

初出	単行本	全集
私は油断なく川 <u>の向ふにある</u> 家や木の蔭から現はれるべき人影を見張つてゐた。	同左	私は油断なく川向う <u>の家や木の蔭から</u> いつ現われるかわからない人影を見張っていた。
恐怖から対象を認識し損つたには違ひない。	同左	無論恐怖から対象を認識し損つたには違ひない。
それは無論私の恐怖の反映であつたらうが、後に米兵を見た時の記憶には、さういふ感じがないところを見ると、或ひは <u>一瞬敵を予期しながら</u> 、私の眼に実際映つた映像はまさに日本兵だつたからではあるまいか。もしそれが予期したやうな比島人であつたなら、この無気味な感覚はなかつたのではないか、と思はれる。	同左	それは無論私の恐怖の反映であつたらうが、後に米兵を見た時の記憶には、さういふ感じがないところを見ると、或いは敵を予期した私の眼に実際映つた映像が、実は日本兵だつたからではあるまいか。もしそれが予期したやうな比島人であつたなら、この無気味な感覚はなかつたのではないかと思ふ。
或ひは対象なぞ誤知する必要もないかも知れない。目前で怪しく動くものがあつたらすぐ射つ、恐らくこれが正しい戦闘の方法であらう。	同左	或いは対象なぞ誤認する暇もないかも知れない。目前で動くものがあつたらすぐ射つ、恐らくこれが正しい戦闘の方法であらう。それであればこっちがやられてしまう。

【資料 4-3-2】討伐の場面の描写

* 「西矢隊奮戦」(初出『文学界』八月号 1949.8.1)

初出	単行本	全集
兵士が銃を下げ、腰をかざめ、おづおづと開いた庭に行くのは異様な眺めであつた。……中隊長は焦立たしげに <u>振り返り</u> 手を振つて急がした。	兵士が銃を下げ、腰をかざめ、おづおづと <u>一列</u> に開いた庭に行くのは異様な眺めであつた。……中隊長は <u>焦立たしげに振り返り、手を振つて兵を急</u> がした。	……中隊長は振り返り、 <u>焦立たしげに手を振つて兵を急</u> がした。
しかし二三人出ると次の兵士は門柱にしがみついて <u>出</u> なかつた。その又次の兵士も前者を迂廻することをせず止つたので、以下ずつと我々は <u>一列</u> に止まつてしまつた。後尾から低く「出ろ、出ろ」といふ声があした。	しかし二三人出ると次の兵士は門柱にしがみついて <u>止</u> つてしまつた。その又次の兵士も前者を迂廻することをせず止つたので、以下ずつと一列に止まつてしまつた。後尾から <u>下士官</u> が低く「出ろ、出ろ」といつた。	しかし <u>二、</u> 三人出ると……
道の <u>十</u> 間ばかり先をすたすと歩いて行く後姿が見えた。 <u>我々の危惧を踏みにじるやうな歩度</u> であつた。	道の <u>二十</u> 間ばかり先をすたすと歩いて行く後姿が見えた。×	同左
「こら、そこの二人何しとるか」／と中隊長が <u>呼</u> んだ。	「こら、そこの二人何しとるか」／と中隊長が <u>叫</u> んだ。	同左
「軒下へ入れ」／と <u>軍曹</u> が怒鳴つた。	「軒下へ入れ」と <u>分隊長</u> が怒鳴つた。	同左
「床下へ入れ」と中隊長はいつたが、 <u>到頭</u> 自分で駈け出して行つた。そして歩哨を連れて中へ入り、校舎の床下へもぐつたが暫くして笑ひながら帰つて来た。床下の向側に位置を指定し、特別守則をさづけて来たのであらう。	「床下へ入れ」と中隊長はいつたが、 <u>我慢出来ず</u> 自分で駈け出して行つた。そして歩哨を連れて中へ入り、 <u>一緒に</u> 校舎の床下へもぐつたが、 <u>暫くして</u> 笑ひながら帰つて来た。向側に位置を指定し、特別守則をさづけて来たのであらう。	同左
我々のやうな兵隊をまかせられた中隊長は全く気の毒であつた。 <u>彼は幹候上りの若い応召将校であつたが、ノモンハンを知つてゐた。</u>	我々のやうな兵隊をまかせられた中隊長は全く気の毒であつた。×	同左

【資料 4-3-3】屍体を見たことについて

* 「西矢隊奮戦」(初出『文学界』八月号 1949.8.1)

初出	単行本	全集
両腕は少々屈げて頭上に伸ばし、片足だけ直角に曲げて <u>あ</u> つた。この姿勢は	両腕は少々屈げて頭上に伸ばし、片足だけ直角に曲げて <u>ゐ</u> た。この	同左

家を迂廻せんとする彼の最後の直前の彼の意志を示すやうに見えたが、或ひは単なる死の痙攣の結果であつたかも知れぬ。	姿勢は家を迂廻しようとする彼の最後の意志を示すやうに思へたが、或ひは単なる死の痙攣の結果であつたかも知れない。	
彼等の肌も被服も土にまみれて地面の色とほとんど区別がつかなくなつたが、私の眼がこの大きな映像を逸したのは、それが私の既知の映像の何者とも似てゐなかつたため、また私の頭が専ら敵を見出すのに忙しかつたためと思はれる。	肌も被服も土にまみれて地面の色とほとんど区別がつかなくなつたが、私がこの大きな映像を逸したのは、それが私の既知の映像の何者とも似てゐなかつたため、また眼が専ら敵を見出すのに忙しかつたためと思はれる。	……、また眼が専ら敵を見出すのに忙しかつたためであらう。
私は絶えず眼をそらし、辛うじてそこに眼を返してはまたそらしながら見たと記憶する。	私は絶えず眼をそらし、眼を帰してはまたそらしながら見たと記憶する。	同左
描いて数千字を並べることも可能であるが、人間が三十秒しか眺め得ない映像について読者に数分の注意力を強ひるのは間違ひではあるまいか。 とまれこの屍体を見た私は二度と「海行かば」を歌わないであらう。	描いて数百字を並べることも可能であるが、人間が三十秒しか眺め得ない映像について、読者に数分の注意力を強ひるのは間違ひではあるまいか。 ×	同左
「撃つな、馬鹿」と中隊長が低く叱つた。私とても撃つつもりはない。銃声はなお町の周辺にいるかもしれない敵、或いは沖を往来する米艦船に警告を与える懼れがあつた。	同左	「撃つな、馬鹿」と中隊長が低く叱つた。銃声はなお町の周辺にいるかもしれない敵、……
彼等は、それぞれその横わつた位置の傍に穴を掘つて埋めた。彼等の或者は屍毒に当らずにはゐなかつたであらう。	彼等はそれぞれ屍体の横わつた位置の傍に穴を掘つて埋めた。或る者は屍毒に当らずにはゐなかつたであらう。	彼等はそれぞれ屍体の横わつた位置の傍に穴を掘つて埋めた。×

【資料 4-4】愛情表現

* 「出征」(初出『新潮』一月号 1950.1.1)

初出	単行本	全集
見るとそこには夢のやうに妻が立つて、ぢつとこつちを <u>見てゐた</u> 。	見るとそこには夢のやうに妻が立つて、ぢつとこつちを <u>を見詰めてゐた</u> 。	同左
髪と衣服の汚れと乱れは、十間以上 <u>離れたこゝからもよく見てとれた</u> 。	髪と衣服の汚れと乱れは、十間以上 <u>離れてもよく見てとれた</u> 。	同左
同時に妻の方では <u>私の姿に「死」</u> を見	同時に妻の方では <u>変り果てた私の姿に、</u>	同左

た、といつてゐる。 <u>私は機械的に立ち上り近づいた。</u>	「死」を見たといつてゐる。	
そこで妻はその人達に連れられて、 <u>こゝへ来たのである。</u>	そこで妻はその人達に連れられて、 <u>やつとこゝまで来たのである。</u>	同左
我々が会へたのは <u>殆ど偶然</u> であつた。	我々が会へたのは <u>全く偶然</u> であつた。	同左
たゞその愛情は彼女との六年の同棲の間、小説にあるやうな優しい言葉をかける必要を <u>認めない</u> 、さういふ種類の愛情だつたのである。	……、小説にあるやうな優しい言葉をかける必要を <u>感じない</u> 、さういふ種類の愛情だつたのである。	同左
この最後の別れの時に、私が小説の言葉をいはないからといつて、彼女を愛してゐないわけではない、といつてやりたかつた。 <u>私の愛情の種類について彼女に納得の行く言葉をひと言いつてやりたかつた。</u> しかしその言葉は、この瞬間にも、どうしても私の口から出て来ないのである。	この最後の別れの時に、私が小説の言葉をいはないからといつて、彼女を愛してゐないわけではない、といつてやりたかつた。 <u>或ひは嘘でもいゝから、彼女の納得の行く小説の言葉をひと言いつてやりたかつた。</u> しかしその言葉は、この瞬間にも、どうしても私の口から出て来ないのである。	同左
妻はおずおず千人針を出した。急に作られたものらしく、縫い目は半分も埋つていなかつた。私はかねてかういふ迷信を好かなかつたが、 <u>黙つて受け取つた。</u>	妻はおずおず千人針を出した。急に作られたものらしく、縫ひ目は半分も埋つてゐなかつたが、 <u>それでもよくこれだけ集められたものだと感心したが、彼女は上京の満員列車の女客を尽く煩はしたのである。</u> 私はかねてかういふ迷信を好かなかつたが <u>この時は黙つて受け取つた。</u>	……私はかねてこういう迷信を好かなかつたが黙つて受け取つた。
「きつと帰つて来るから、心配しないでもいいよ」と私はその時いつたさうであるが、 <u>私はそれを忘れてゐる。いつたとすればたゞ妻を慰めるためであつたし、妻も正しくさう取つた。</u> 彼女の見た私の姿で、 <u>とても私が生きて帰れようとは考へられなかつた、と彼女はいつてゐる。</u>	「きつと帰つて来るから、心配しないでもいいよ」と私はその時いつたさうである。 <u>私はそれを忘れてゐるが、恐らくそれは咄嗟の場合に狩り出された私の愛情の最後の表現であつた。</u> しかし妻は <u>たゞ自分を慰めるためと取つた。</u> 彼女の見た私の姿で、私が生きて帰れやうとは <u>思へなかつた、と彼女はいつてゐる。</u>	……彼女の見た私の姿で、私が生きて帰れようとはとても思えなかつた、と彼女はいつてゐる。
妻は最早私を見ず、 <u>少々仰向き加減に正面を向いて半ば駈けながら歩いてゐた。</u>	妻は最早私を見ず、 <u>渴く人が水を飲むやうに仰向き加減に正面を向き、半ば駈けながら歩いてゐた。</u>	同左

【資料 5-1】幸福の観点

* 「比島に着いて補充兵」(初出『世界の動き』十月第二号 1949.10.15)

初出	単行本	全集
門の説教するイエスの像が立っていた。	同左	門の祝福するイエスの像が立っていた。

* 「出征」(初出『新潮』一月号 1950.1.1)

初出	単行本	全集
<u>学資はなくとも身についた知識を得ることが出来れば、学生の集团的腐敗より免かれ得るだけでも利益であらう。</u>	私の子供が私の死によつて学資を失ふのはたしかに一種の不幸であるが、そのため却つて学生の集团的腐敗より免かれ得るならば、これは望外の俸せかも知れない。	同左

* 「食慾について」(初出『小説界』一・二月合併号 1949.2.1)

初出	単行本	全集
私は彼等が食慾のために他より幸福であつたらうと推測するのはただ私が彼等の幸福を願つてゐるからである。	私は彼等が食慾のために他より幸福であつたと推測するのは、私が彼等が幸福であつてくれればいゝと思つてゐるからである。	同左

* 「サンホセの聖母」(初出『文学会議』第 8 輯 1949.12.30)

初出	単行本	全集
……、その幸福の種類を実証する筆を私は持たないが、要するにそれは私の兵士の意識では眼を蔽ひたくなるやうな、 <u>日常的幸福の表出</u> があつた。 <u>かうした露骨な感情的表出の習慣はクリスチャニスムの結果であらう。</u> 私は日本の女にかういふ表情を見たことがない。	……、その幸福の種類を実証する筆を私は持たないが、要するにそこには私の兵士の意識では眼を蔽ひたくなるやうな <u>幸福の表</u> があつた。私は日本の女にかういふ表情を見たことがない。	……幸福の表出があつた。 ……

【資料 5-2】自分自身の幸福と不幸

* 「比島に着いて補充兵」(初出『世界の動き』十月第二号 1949.10.15)

初出	単行本	全集
この時の安堵と喜びの甘い感覚は戦争末期潜水艦の脅威におびえつつ、航海したものでないとわかるまい。	この時の甘い安堵と喜びの感覚は、戦争末期潜水艦の脅威におびえつゝ航海したものでないとわからない。	同左
すべてこれらの風物は、長い船旅に疲れた体の条件と相まつて、私を <u>歓喜に近い状態に導いた。</u> 私はこれが私の生涯の最も幸福な瞬間であると感じた。	すべてこれらの風物は、長い船旅に疲れた私の体を <u>歓喜に近い状態においた。</u> 私はこれが私の生涯の最も幸福な瞬間の一つであると感じた。	同左
……、不幸も堪へ忍び得る程度のものにすぎなかつたことを私は思い出した。これから比島の敗軍の中に死に果てねばならぬの	……、不幸も堪へ忍び得る程度のものにすぎなかつた。これから比島の敗軍の中に死に果てねばならぬのは、たしかに <u>遂</u>	……、 <u>それで</u> <u>よかつ</u>

はたしかに最大の不幸であるが、その避け難い死の前にこういう幸福の瞬間があるならば、 <u>それもいいかも知れない</u> 。前途に死がなかつたなら果して今私にこの幸福感があるかどうか疑問である。	<u>に決定的な不幸</u> であるが、その避け難い死の前にこういう幸福の瞬間があるならば、 <u>それもよかつたかも知れない</u> 。前途に死がなかつたなら、 <u>今私にこの幸福感</u> があるかどうか疑問である。	<u>たかも知れない</u> 。… …
<u>一種の幸福感</u> が続いていた。少年時……	<u>幸福の波</u> は続いてゐた。少年時……	同左

* 「出征」(初出『新潮』一月号 1950.1.1)

初出	単行本	全集
回想は専ら私の個人的幸不幸に関するものであつたことは否むわけに行かない。	回想は専ら私の個人的幸不幸に関するものであつた。	同左

* 「八月十日」(初出『文学界』三月号 1950.3.1)

初出	単行本	全集
私は人生の道の半ばで祖国の滅亡に遇はなければならない <u>身を不幸</u> としみじみと感じた。	私は人生の道の半ばで祖国の滅亡に遇はなければならない <u>身の不幸</u> をしみじみと感じた。	同左
明治十年代の偉人達は我々と比較にならぬ低い文化水準の中で、刻苦して自己を鍛えてゐた。これから我々がそこへ戻るのに何の <u>工合の悪い</u> ことがあらう。	……これから我々がそこへ戻るのに何の <u>差支へ</u> があらう。	同左

付録2 『サンホセの聖母』と『野火』との対照表

【資料A】海

「海上にて」	『野火』「二道」
<p>船は<u>単調なディーゼル・エンジンの音</u>を立て、<u>単調な水の上</u>を進んで行った。底の平らなお供餅のような断雲が、水面一定の高さに、ほぼ一定の間隔を保って一面に浮かんでいる。それが船の進むにつれ、水平線上の一点を中心として、扇を拡げるように廻って行く。眼を水面に落しても眩暈が残り、水も廻っている。(中略)</p> <p><u>こういう単調な海の音楽は私の胸をしめつける</u>。「自由なる人は海を愛する」とボードレルは歌ったが、<u>孤独な囚人</u>、兵士たる私にとって、海の無限の運動はむしろ<u>苦痛</u>である。</p>	<p>舷側をすぎて行く規則正しい波の音と、単調なディーゼルエンジンの音に伴奏されて、この規則正しい風景は、その時私に甚だ<u>奇怪に思われた</u>。／偶然安定した気圧の下に、太陽が平均した熱を海面に注ぎ、絶えず一定量の水蒸気を蒸発させる以上、一定の位置に、同形の雲を生じるのになんの不思議はなかった。そして機械によって一定した速度で進む船から眺める以上、風景が一樣の転移を見せるのも当然であった。私は即座にこう反省したにもかかわらず、私の昂奮はなかなか去らなかった。そこには<u>一種快い苦痛のニュアンス</u>があったのである。／もしこの時私が一遊覧客であったならば、帰国後自国の陸に繋がれた哀れな友人に、大洋の奇観を語る場面を空想したろう。私の昂奮と苦痛は多分、敗戦と死の予感に冒されていた私が、その奇怪な経験を人に伝えることを、予想出来ないことに基いていたろう。</p>

【資料B】熱帯風物

「比島に着いた補充兵」	『野火』「二道」
<p>(前略)</p> <p>すべてこれらの風物は、長い船旅に疲れた私の体を<u>歓喜に近い状態</u>においた。私はこれが私の生涯の最も<u>幸福な瞬間</u>の一つであると感じた。私は死ぬ前に<u>こういう幸福の時</u>を与えてくれた運命に感謝した。</p> <p><u>私の三十五年の生涯は必ずしも常に幸福ではなかったが、不幸も堪え忍び得る程度のもの</u>にすぎなかった。これから比島の敗軍の中に死に果てねばならぬのは、たしかに遂に<u>決定的な不幸</u>であるが、その避け難い死の前に<u>こういう幸福の瞬間</u>があるならば、それでよかったかも知れない。前途に死がなかったなら、今私にこの幸福感があるかどうか疑問である。</p>	<p><u>比島の熱帯の風物は私の感覚を快く揺った</u>。マニラ城外の柔らかい芝の感覚、スクールに洗われた火焰樹の、眼が覚めるような朱の梢、原色の朝焼けと夕焼け、紫に翳る火山、白浪をめぐらした珊瑚礁、水際に蔭を含む叢等々、<u>すべて私の心を恍惚に近い歓喜の状態</u>においた。こうして自然の中で絶えず増大して行く快感は、私の死が近づいた<u>確実なしるし</u>であると思われた。</p> <p>私は死の前に<u>こうして生の氾濫を見せてくれた偶然に感謝した</u>。これまでの私の半生に<u>少しも満足してはいなかったが</u>、実は私は運命に恵まれていたのではなかったか、という考えが閃いた。その時私に訪れた「運命」という言葉は、もし私が拒まないならば、容易に「神」とおき替え得るものであった。</p>

【資料 C】 会堂内部の描写

「サンホセの聖母」	『野火』「一八 デ・プロフンディス」
<p>或る日曜の午後、半日の外出を許された私は会堂の内部に踏み入った。荒れ果てた外観に似ず、内部は床も羽目板もよく磨かれて、気持のいい静けさが漂っている。これは私が内地を出て以来、初めて見る整頓されて「室内」であった。</p> <p>正面の仕切りの奥には十字架にかけられたキリストの像がある。私はこれまで二、三度日本の旧教の教会に入ったことがあるが、この種の像に感心したことはない。蠟細工らしい蒼白い肌が屍の色を、黒ずんだ赤が凝固した血を表わすとすれば、これは甚だ悪い写実主義である。</p> <p>三方の壁にはキリストの受難を描いた油絵が懸け並べられてあり、やはり夥しい血潮が、画面の主調をなしていた。絵はうまくもなし、まじくもなし、恐らく何百年来おどりの構図の描法によって製造されて来たものであろうが、それだけ中世のバーバリズムを保存しているかと思われた。<u>こうした血の色の氾濫の中で礼拝し得た西欧の中世人とフィリピン人は、明らかに生死について我々とはよほど異った観念を抱いていた。</u></p> <p>そして私がこうして特に血に感じたのは、この時前線へ来た兵士であったためである。</p>	<p>私は屍体の群を迂回し、会堂の階段を上った。内部は整頓されていた。両側の高い窓から差す光が快い調和を作って、木の床やベンチに積った埃を照し出していた。大きな帆立貝で作った聖水盤の水は干上っていた。</p> <p>窓の間の壁にはキリストの受難を表わした十四面の油絵がかけてあった。その画面にばらまかれた夥しい赤、つまり血の量が私を打った。</p> <p>鞭うたれるイエスの背は血にまみれ、重ねて釘づけられた足から滴った血は、木を伝って流れていた。平べったい画面は頗る平凡で、恐らく伝統の構図を画いたものにすぎないと思われたが、それだけに中世のバーバリズムを正確に伝えていると思われた。<u>かかる血の氾濫の中で礼拝し得た昔の人の心は、たしかに人間の肉体の破壊について、敗兵たる私と、あまり遠くない感覚を持っていたに違いない。</u></p> <p>祭壇には蠟細工の十字架像があった。この像も悪い写実を示していた。イエスの蒼白の裸体は屍色を現わし、血は赤黒く凝固しているらしかった。両手をきっちり四十五度に、横木の先端まで延ばした、このローマの植民地の義人の姿勢は、掌を貫いた二本の釘によって釣り下げられた人体に働く、重力しか表わしていなかった。</p> <p>これ等人には随分信心の対象となり得、事実私の少年時の憧憬の的であった映像に、私が血と屍体しか見得ないとすれば、何か私の中で変っているのではあるまいか。</p>

注：大岡昇平『野火』（新潮文庫、1954.4）を基にして両者を対照し、この対照表を作った。